
~ 竜と世界と少年と ~

ムジ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

〜竜と世界と少年と〜

【Nコード】

N3590R

【作者名】

ムジ

【あらすじ】

竜の国 竜国 を離れた少年【天城ハル】は、大都市 東京 に着いた。そこでハルは様々な人と出会い、闘い、成長していくのだった。

「プロローグ」(前書き)

自分の小説を一瞬でも読もうと思っていただいて、本当にありがとうございます。

筆者は語彙が少なく、文章力もないので、拙い文章になってしまおうと思われます。読者の皆様にその辺りをご教授してもらえたら、幸いです。

この物語はご都合主義の塊であり、物語になんの捻りもありませんので、ご了承ください。

それでは、本編をお楽しみください。

くプロローグ

太陽が徐々に顔を出し始めている、そんな早朝。

とある都市から数百キロ離れた森の中に、一匹の 竜 と一人の少年がいた。

「本当に大丈夫か？」

竜が、その大きな口から発せられた思えないような、不安そうな声で少年に尋ねる。

「大丈夫ですよ。心配しないで下さい」

少年は竜の不安を無くすように、努めて明るく答えた。

「しかし……やはり不安だな」

「向こうには『ミキさん』もいますし、万が一にも危ないことは起きませんよ」

その体躯とは正反対の、竜の心配癖に苦笑する少年。

「……本当に行くのか？」

「はい。『イングリッド』の皆には色々と迷惑をかけてしまいましたけど」

少年は申し訳なさそうに顔を伏せた。

「そんなこと、私達は全く気にしていない。元々、私達にお前を止める権利などないしな」

そう言つて、竜は頭を下げ、少年の顔を上げさせた。

「私もわがままを言うのは止めよう。お前はあの土地に縛られるような器でないことはわかっていた……自分の生きたいように生きる。……ただし、約束通り、半年に一度こっちに戻らなければ……全員を連れて会いに行くぞ」

「そ、それは、流石に困ります」

「だったら、必ず帰ってこい」

「……はい」

少年は笑顔で頷き、荷物を肩に担ぎ直した。

「皆によろしく言っておいてください」

「ああ。風邪ひくんじゃないぞ」

「はい！」

少年は竜に背を向けて走り出し、途中、一度だけ振り返り、手を振った。

それに対して、竜は身体を起こし、空に向かって咆哮した。

天と大地を震わせたその咆哮は、竜から少年への激励だ。

「……………」

竜が前を向いた時には、すでに少年の姿はなかった。

（行ったか。……………それにしても、この私が一人の人間のためにここまでするとはな）

最強　と言われている竜が、である。

しかも、今すぐにも彼を引き留めようとさえ、思っている。

（未練、か……………まるで人間のようだ）

そんなことを考えている自分を自嘲気味に笑い、翼を大きくはためかせた。

（だが……………悪くない）

そして、巨大な一匹の竜は、広大な大空の中に消えたのだった。

〈第1話〉

「よーやく着いた」

少年が 竜 と別れて、約一日と半分。彼はとある都市に着いていた。

「流石、世界でも有数の大都市、『東京』。スケールでかいなあ」
周囲にそびえ立つ、背の高い近代的な建物に少年は目を丸くする。
少年の名前は【天城ハル】。

ハルは、小さい頃から竜と一緒に暮らしてきた世界で唯一の人物だ。

何故普通の人間である彼が、竜などという存在に受け入れられたのか、実は彼自信もわからない。

そんな彼は伝説とまで言われている竜の国、つうごく 竜国 を飛び出して、現在に至っている。

（『イングリッド』の皆には止められたけど、いつまでも甘えるわけにはいかないからな）

イングリッド とは、ハルが住んでいた竜国の名前だ。

「さて、とりあえず『ミキさん』の所に行くか。道は……誰かに聞けばわかるか」

周りの建物への興味心を一旦抑え、ハルは疲れた身体に鞭打って歩き始めた。

その十五分後……。

「あ、甘かった」

ハルは道の端にぐったりと座り込んでいた。

「全員、この『雲月荘』うんげつじょう ってのを聞いたことないって……いきなり挫折しちゃったよ」

言いながら、途中でもらった東京の地図に目を向ける。もちろん、

そこにはハルの探している雲月荘という名前は、どこにも書かれていない。

「はあ、どうするかな……」

ため息をつき、前を行き来する人々の群れに目を向けた。

頭に獣耳を生やした 獣人 や、どこかの制服を身に付けた少年少女が、楽しそうに友達と喋りながら歩いている。

(俺も、あんな風になるのかな……はは、全く想像できない)

竜国には教育機関という物は存在しない。そこに住む全員が助け合いながら、子供たちを育てているのだ。

だから、同じような服を着て街を練り歩く少年少女の姿は、ハルにとってかなり新鮮だった。

「……さて、行く……ん？」

立ち上がりかけた時、周囲の雑音とは違う声が耳に入った。

(何だ？ ……嫌な感じだったな)

耳に意識を集中させると、よりはっきりその声が聞こえた。

「い……やめ……誰か……」

女性の物と思わしき声には、明らかな嫌悪と恐怖が含まれていた。

「……これは、無視できるような事態ではないよな」

声のする方に目を向ける。

そこは、建物と建物の間に来た、人を寄せ付けようとしないうす暗い路地裏だった。

「……仕方ない。まずは人助けからだな」

ハルは迷うことなく、その路地裏を目指した。

「やつ！ 止めて下さい！」

私は、肩を触ろうとしてきた男性の手を振り払う。

場所はどこかのうす暗い路地裏。ゴミと下水の入り混じったような嫌な臭いが鼻を刺激する。

ここで、私は四人の男性に囲まれている。

「いいじゃん。少し触るくらい」

そのうちの一人がなおも触ろうとしてきたので、私は後ろに下がった。

けれど、すぐに薄汚れた建物の壁にぶつかってしまった。

「無駄、無駄。周りは全部壁だし、逃げられないよ」

他の男性がニヤニヤ笑いながら言う。

「だから、諦めなつて」

「い、いや！ 誰かつ！」

私は力の限り叫ぶ。

それが、癪に障ったのだろう、

「ちっ！ おとなしくしろつて、言つてんだろ！」

「きゃ！」

私の頬を、しびれを切らした一人の男性が叩き、私はその衝撃で壁にぶつかってしまった。

「あ……うっ」

痛みと驚きで、涙がにじみ出た。

「あーあ、泣かせてやんの」

「でも、泣いた顔もいいねえー」

四人は、面白おかしく笑う

「おい、もういいだろ。さっさとやつちまおうぜ」

「そうだな……それじゃあ、楽しませてもらおうとするか」
八つの手が私に迫ってくる。

-. -. い、いや！ 助けて、お兄ちゃん！ -. -.

私は涙で濡れた目を堅く閉じた。
すると、

「おい！」

そんな声が、耳に入ってきた。

「え？」

私は、それを都合のいい幻聴だと思った。

「あん？」

けれど、実際に四人の手は止まっていた。

（もしかして……お兄ちゃん？）

動きを止めた男性達の間から声の方を覗くと、

「あ……」

思い描いていた人物とは違う、私と同年ぐらいの男の子と目が合ったのだった。

「い、いや！ 誰か！」

そんな声が路地裏の奥から聞こえたのと殆ど同時に、何かを打ったような乾いた音が、ハルの耳に入ってきた。

「っ！？」

ハルはすかさず奥へと駆けた。

一つ角を曲がった先には、四人の男、そして、男達に囲まれながら震えている誰かがいた。

「ちっ！ おい！」

舌打ちをして、ハルがすぐに声をかけると、今にも誰かに触れそうだった男達の手が止まった。

「あん？」

男達は不機嫌そうに振り向く。ハルはそんな男達には目も向けず、

その先の誰かを見た。

その誰かは、一人の少女だった。

「あ……」

少女は呆然とした面持ちで、ハルのことを見ている。その左手は赤くなつた頬に当てられ、目には涙も浮かんでいた。

「……………」

それを見ただけで、ハルがキレるのには十分だった。

「おい、坊主。邪魔すんじゃないやねえ、ぞおっ！」

男の一人が、壁に蹴り飛ばされた。蹴り飛ばしたのは、もちろんハルだ。

ハルは自分の荷物を落としたのと同時に距離を詰め、一番近くにいた男を蹴り飛ばしたのだ。

「ぐ……が」

蹴飛ばされた男は白目を剥いて動かなくなった。

「な……何だ！ てめえ！」

一瞬後に、一人の男は狼狽し、他の二人はハルに向かって動き出していた。この事態に、冷静に対応出来るあたり、この二人はそれなりの場数をふんでいるのだろう。

「つらあ！」

「死ね！」

一人は空中に飛び上がって 魔法攻撃 。もう一人はナイフで正面から切りつけようとしている。

「……………」

ハルはすぐさま空中の男の背後に回った。

「なっ！？ 速っ、があ！」

背中を蹴られた男は地面に叩きつけられ、そのまま動かなくなる。

「俺は」

「う、嘘だろ！？」

地上の男は急いでハルにナイフを向けた。

「あんた達みたいな」

空中で右の拳にありつただけの力を込めるハル。
「ぐ……く、くそがあー！！！」

「最低な奴らが、大っ嫌いなんだよっ！」

「っ！？ がっ！ はっ」

振り下ろされたハルの拳は男の胸元を直撃し、地面へと叩きつけた。

「……………」

ハルは立ち上がり、最後に残った男を睨みつける。

「ひっ！ ……く、来るな！」

「きゃ！」

男は指輪型の 武収器 からナイフを出現させ、少女の首に突き付けた。

武収器 とは、あらゆる武器を一つだけ収納でき、自由に出現させる 魔具 である。

「っ」

ハルは踏み出そうとした足を止めた。

「よ、よし。そ、そのままここから離れる！」

「……………」

「は、早くしろ！ ほ、本気だぞ！」

男がナイフを持つ手に力を込めると、少女の首から血が流れた。

「……離れる」

「な、何」

「その人から、離れる」

「ふ、ふざけんな！ 命令してるのは俺だ！」

男が声を荒げると、ハルは一度目を瞑り、開いて、呟いた。

「……………三」

「ひっ……………」

睨まれた男の身体が一瞬震える。

「……………」

「や、止める……………その目で俺を……………に……………睨むな」

男は全身を異常なまでに震わせている。カチカチと、男の歯が当たる音が辺りに響いた。

「……………」

「や、やめて……………やめて」

涙と鼻水を垂らし懇願する男。

もう彼には、ハルの目しか見えていない。

「……………ぜ」

「や、止めるぁー!!」

男は絶叫してナイフを落とし、後ろに倒れ込んだ。

「……………え? ……あれ?」

捕まっていた少女は、何が何だかわからずに混乱している。

「立てる?」

「え……………あ、はい」

ハルに手を差し伸べられた少女は、その手を取って立ち上がる。

「あの、この人に何が……………?」

少女は振り返って、泡を吹いて倒れている男に目を向けた。

「かなり怖がってたから、恐怖心を煽っただけ。そんなことより、

怪我はない? 頬は大丈夫?」

男の一人にぶたれた少女の頬は、少し赤くなっていた。

「あ、はい。まだ、ヒリヒリしますけど、大丈夫です」

「そう、良かった」

ほっと息をつくハル。

「あ、あの……………あなたは」

「おいっ! お前!」

「!? な、何? ……あの人は……?」

突然の怒声に驚いたハルが振り返った先には、ハルよりも幾つか年上に見える、短髪の青年がいた。

「お前……俺の……俺の」

青年は俯き、身体を震わせている。

「……お兄ちゃん」

「え?」

隣の少女の呟きに反応しようとした瞬間、

「俺の妹に、何してんだあー!」

地面を陥没させるほどの爆発的な脚力で、青年がハルに迫った。ほとんど一瞬で互いの距離がゼロになる。

「っ!?!」

青年の拳がハルの顔面を襲い、路地裏に大きな衝撃波が走った。

「!?! ほお……」

青年は目を見開いて驚いた。

「いつ……たあ」

自分の拳がハルの両掌に防がれていたからだ。

「俺の本気の一撃を真正面から受け止めるとは……中々やるじゃねーか」

「それは……どうも」

青年が後ろに跳んで距離をとると、ハルは手をぶんぶんと振り、熱くなった掌を冷ます。

(め、滅茶苦茶痛い。人間技じゃないだろ)

青年が放った拳の重さに驚愕するハル。その顔からは冷や汗が垂れている。

「お前が俺の妹に手をだしてなきゃ、名前でも聞くところだが……残念だ」

そう言って、青年は臨戦態勢をとった。

「え、いや、あの……」

ハルが困り顔で隣の少女を見ると、

「……………」

少女は黙ったまま俯き、身体を震わせていた。

「待ってるよ、蓮華。俺がすぐに助けてやるからな」

青年は、妹が怖がっているから震えているのだと思い込んでいる。
だから、

「お、お兄ちゃんの、馬鹿あゝ!!」

「……………へ？」

顔を真っ赤にした妹に怒られるとは、思いもしなかっただろう。

〜第2話〜

「本つ当に、スマン！」

ハルが路地裏で少女を助けてから、十五分後。

少女の兄を交えた三人は、近くのオープンカフェにいた。

「も、もう頭を上げてください」

ハルは何度目かわからない青年の謝罪に、正直困っていた。

誤解だとわかっただけでハルはよかったのだが、この青年にとっ
ては、そう簡単に行く出来事ではなかったらしい。

「いや！ 妹を助けてくれた恩人に拳を向けるなんて！ あと、百
回、いや、千回は頭を下げないと、気が済まない！」

「え、ええー」

ハルは本当に困っていた。

何より、都会のド真ん中でこんなことをされると、目立ってしよ
うがない。

「あの、お互いに怪我はなかったんですし、謝る必要ないですよ」

「しかし」

「もう！ お兄ちゃん、逆に迷惑だよ！」

なお喰い下がろうとする兄を、少女が窘めた。流石にしつこいと
思ったのだろう。

「け、けど」

「けど、じゃないよ！ ……ごめんなさい。お兄ちゃん、悪気はな
いんですけど……ちょっと暑苦しくて」

「い、いえ」

何と答えればよいかわからず、ハルは曖昧に笑った。

「むう……」

青年はしばらく悩み、ハルの目を真つすぐ見た。

「……わかった。もう謝るのは止めよう。……ただ、一つだけ」
「？」

「妹を助けてくれて、ありがとう」

首を傾げるハルに、青年はゆっくりと頭を下げた。

「本当に、ありがとうございました」

隣の少女も、兄に続いて恭しく頭を下げる。

「……そういう感謝の言葉なら、ありがたく受け取っておきます」

ハルは照れを隠すように頬をかいた。

青年と少女はほほえみ、ハルに向き直った。

「俺は【楠木健吾】くすのきけんご。で、こっちが、妹の」

「【楠木蓮華】くすのきれんげです」

兄の言葉を遮り、蓮華は軽く頭を下げた。

少しウェーブのかかった髪を肩甲骨辺りまで伸ばしている蓮華は、短髪でガタイのいい健吾とは正反対の、華奢で儂げな印象を与える少女である。

（こんな事思うのは失礼かもだけど……兄妹って、似ないものなんだな）

ハルがそう思っても仕方ないほど、二人は似ていなかった。

「俺は天城です。天城ハル」

「天城さん……。あの、私達のことは、ぜひ名前でご呼んでください」

「健吾さんに、蓮華さん？」

「はい！……天城、さん」

蓮華はハルの名前を、頬を紅くして呟いた。

「天城はこの外から来たのか？」

「あ、はい。わかりますか？」

「なんとなく。東京とうきょうは、外の者が集まる場所だし。……今の時期
にっしてことは、やっぱりどこかの学園に入るのか」

「一応、桜楼学園に入る予定です」

「え！？ 本当に！？」

目を丸くする蓮華。

「もしかして……二人も？」

「ああ。俺が桜楼の三年。蓮華が」

「私も今年から桜楼に入学するんです！ 凄い偶然ですね！」

「またも兄の言葉を遮った蓮華。普段の引つ込み思案な蓮華とは思えない、と健吾は思った。」

「まだ、予定だけだね」

「予定？ ……もしかして、『特別入学』か？」

「はい」

「え……『特入』じやくにゅうなんですか？」

「嬉しそうな表情から一転、蓮華の表情は不安げなものに変わった。？」

「なぜ蓮華がそんな顔になったのかわからないハルは、首を傾げた。」

「……『特入試験』は危険らしいから」

「蓮華がポツリと呟く。」

「そうなんですか？」

「まあ、そうだな」

「健吾は腕を組みながら頷いた。」

「お前は特入の実技だろう？ あれは実力が重視されるから、それなりに危険が付きまとうのは当たり前なんだ」

「当たり前前って……それで天城さんが大怪我したら……」

（あ、俺の心配してくれてるんだ）

「ここでようやく、蓮華の顔が暗い理由を、ハルは理解した。」

「ありがとう、蓮華さん。でも、大丈夫。俺は丈夫なのだけが取り柄だから」

「でも……」

「死ぬわけでもないですし……ですよ、健吾さん？」

「そうだな。今までの特入試験で、一応、死者はいない」

「……一応、ですか」

「顔を引きつらせるハル。」

「蓮華の不安を和らげるつもりだったが、逆に自分が不安になってしまった。」

「……うん、決めた！ 私、明日必ず天城さんの応援に行きますね」

！」

「え、あ、うん。あ、ありがとう、蓮華さん」

健吾の言葉が尾を引いているハルは、若干弱腰になっていた。

「頑張つて下さい！」

純真無垢な蓮華は、そんな事には全く気付いていないのだった。

そして、健吾はそんな妹を、横から驚いた目で見ていた。

(あの蓮華が男に気を許すとは……天城ハル、か。面白そうな奴だし、蓮華のためにも、是非とも桜楼に入ってもらいたいもんだ。……ん？ ……ちょっと待て……確か、特入試験の実技って……)

「明日だ！」

「「っ!?!」」

いきなり机を叩いて立ち上がった健吾に、他の二人は目を丸くする。

「ど、どうしたんですか、健吾さん？」

「どうした、じゃない！ 桜楼の特入・実技試験は明日だぞ！」

「え!?!? そ、そうなんですか、天城さん!?!?」

「そういえば……そうですね」

あせっている楠木兄妹に対して、本人のハルは至って普通だ。

「そうですね、って……準備とかしなくていいんですか？」

「準備って言っても……何か必要な物ってあるんですか？」

「いや……基本的に、自分の身と武器だな」

「じゃあ、明日は手ぶらですね」

「武器は使わないんですか？」

「使う時もあるけど……明日は使う予定はないよ」

(と言うか、持ってきてない)

ハルの持ち物は、足元に置いてある袋の中に入っている、最低限必要な物だけだった。

「ま、今さらジタバタしてもしょうがないですから」と言つて、ハルは紅茶を一気に飲み干した。

傍目から見たら、かなり余裕そうだが、

(明日は死なないように頑張ろう)

心中ではかなり弱気な事を考えていた。

「じゃあ、そろそろ行きますね。一応、明日に備えて」

「お前、東京は初めてだろう？ どこかあてはあるのか？」

「知り合いの家に住まわせてもらおうかと……雲月荘って名前なんですけど、知ってますか？」

「雲月荘か……いや、知らないな。蓮華は？」

「私も、聞いたことないです……ごめんなさい。役にたてなくて……」

「いえいえ、気にしないで下さい。散歩がてら、気楽に探しますから」

そう言って、紅茶の代金を机に置こうとしたハルを、健吾が制した。

「ここぐらいは、俺が払ってやるよ」

「でも、初対面の人に奢らせるわけには」

「そうか……じゃあ、天城が合格したら返してくれ。それまでは借しておく」

「……それは、ちょっと卑怯ですよ」

苦笑して、ハルは荷物を肩に担いだ。

「でも、わかりました。合格したら返しますね、健吾さん」

「おう」

(死なないようにするだけじゃなくて……合格しないと)

健吾なりのエールに、ハルは闘志を燃やしたのだった。

そうして、ハルが雑踏の中に姿を消した後、蓮華が不安そうに呟く。

「……天城さん、大丈夫かな？」

「なんとも言えないな……俺達も行くぞ」

「あ、待って、お兄ちゃん」

楠木兄妹も、ハルに続いてその場を後にした。

「よーやく着いた……つて、これ、東京に着いた時も言ったな」
今では珍しい、木造の建物を前にして、ハルは一人呟く。

塀に取り付けられた木の板には 雲月荘 と、達筆な文字で書か
れている。

「しらみつぶしに探して……だいたい、三時間か」

見上げた空はもう赤くなり始めていた。

「……さて、ミキさんはいるかな、つと」

敷地内に足を踏み入れたハルは、雲月荘が思っていたより大きい
ことに気付いた。

二階建ての雲月荘は中庭もあるので、少し古い豪邸に、見えなく
もない。

「つと……あつた、あつた」

玄関の横に取り付けられたインターホンを押すと、慎ましい音が
聞こえてきた。

「……あれ」

しかし、誰かが応答する気配はない。

(留守か? 参ったな)

「……ここに、何か用?」

「え……あ」

背後を振り返ったハルと、一人の少女の目が合った。

どこかの制服に身を包んだ少女は、無感情な目でハルを見据えて
いた。

「えっ、と……ここに住んでる方ですか?」

「……………」

黙ったまま頷く少女。

無表情なので、ハルは彼女の感情が読み取れないでいた。

警戒しているのか、怒っているのか、面倒くさがっているのか。

「俺、この家主の……東雲ミキさんの知り合いでして」

「……大家さんの？」

「はい。天城ハル、って言います」

「天城……ハル……」

少女はハルに近寄り、もう少しで鼻と鼻がぶつかってしまいそうな距離で、見上げてきた。

「……………」

「……………」

「……あの」

「……………」

（……まいったな）

ハルは少し頬を赤くしながら、同じように少女の容姿に目を向けた。

（わぁ……………）

サラサラの長い髪を持つこの少女が、とても整った顔立ちをしていることに、ハルはこの距離まで顔を寄せて初めて気付いた。

（俺より年上……健吾さんと同じくらいか。この制服、桜楼じゃないことは確かだよな……どこなんだろ？）

なんて、ハルが考えていると、

「わかった」

唐突に、少女が口を開いた。

「え？」

と、驚くハルの横を抜けて、少女は玄関のカギを開け始めた。

「……………入って」

少女は一言だけそう呟き、建物の中に入った。

「……………」

呆然と少女の背中を目で追うハル。

(わかった、って……俺の話を通じてくれたのか?)

だが、少女の様子に変化はなかった。まだ自分を警戒しているのかもわからない。

(……警戒してたら、こんな事しないか)

「……とりあえず、中に入るか」

いつまでもそこにいても仕方ないので、ハルは少女に続いて中に入った。

「はい」

「どうも」

ハルが通されたのは、一階にある大きな居間だった。

中央に大きなテーブルがあるだけのシンプルな畳張りの居間には、現在少女とハルしかない。

「いただきます」

手渡されたお茶を口に含むと、調度いい苦みが口内に染みわたった。

「美味しいですね、このお茶」

「そう」

少女は素っ気なく返し、ハルの隣に腰を下ろした。

「……」

「……」

「……」

「……あの」

「……何？」

「……この場合、普通正面に座るのでは？」

「……そう」

少女は静かに立ち上がり、ハルの正面に、テーブルを挟んで座りなおした。

(な、何考えてるんだ??)

少女は相変わらず無表情なので、今のが彼女なりの冗談なのか、本気なのか、全くわからない。

「……………【御柳千】」

「え?」

「私の名前」

「あ、ああ。……………御柳さん?」

「千でいい」

「……………千さん?」

「……………」

千は黙って頷き、ハルを指差す。

「……………ハル」

「あ、はい」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

またしても、沈黙。

(だ、駄目だ……………こっちから話を振らないと、一生このままな気がする)

ハルは心中で深呼吸をし、意を決して口を開いた。

「あの……………もしかして、ミキさんから俺のこと聞いてました?」

「……………聞いてない」

「そ、そうですか」

(つまり、知らない男を家に入れたのか……………それってやばくないか?)

「知らないけど、ハルが大丈夫なのはわかる」

「え?」

ハルの考えを見透かしたように、千が言った。

「何ですか？」

「目」

千はハルの目を指差した。

「ハルの目は、優しい目。私が見てきたなかで……一番」

今までと違って、感情の籠った言葉を紡ぐ千。本気でそう感じたのだろう。

「あ、ありがとうございます」

(そ、そんなに自信満々に言われたら……)

顔を紅くしたハルは、それを感じずかれないように、少し頭を下げたのだった。

それから数分後、

「ただいまー」

そんな声が、玄関から聞こえてきた。

(あれ……今の声って)

「……帰ってきた」

千が呟いた直後、居間の襖が開かれた。

「千ちゃん、誰か来てるの？ って、あら……」

両手に買い物袋を持った女性が、ハルを見て動きを止める。

長い髪を腰辺りで一つに結び、明らかにハル達より年上なのだが、未だに蓮華や千にも負けないほどの若さと美貌を保っている女性。

彼女こそが、この雲月荘の家主【東雲^{しののめ}ミキ】だ。

「お久しぶりです。ミキさん」

「……もしかして……ハル君？」

「はい」

と、ハルが頷いた瞬間、ミキは買い物袋を落としてハルに駆け寄った。

「ハル君！ 久しぶり〜！ 大きくなったわね〜！」

「わっ、ぶ」

大きくはないが、形のいい胸にハルは抱かれた。

「私、ハル君が来るの、ずっと待ってたんだから！」

「ん、ん……つぶは。それは……はあ、はあ……嬉しいです」

自力で拘束から抜け出したハルが荒く息をしながら言つと、ミキは改めてハルの顔をじっくり見て、再度抱きしめた。

「んっ!? んっ!」

「ハル君の抱き心地も久しぶり」

「……大家さん」

こんな状況を見ても無表情なままの千が、ミキの落とした買い物袋を机の上に置いた。

「あ、ごめんね、千ちゃん」

「気にしなくていい」

「んんっ……んっ、つぶは……はあ、二回目は、流石に……死ぬ」

ミキの拘束から抜け出したハルが、二人の間で息を荒くしていた。

「……凄い仲いい」

「私とハル君は、将来を約束したから」

「て、適当なこと言わないで下さい。ミキさんには昔お世話になったんですよ」

「昔……」

呟き、千はほんの少し驚いたような目をミキに向けた。

「そ、私が『竜国』にいたときからの仲よ」

その言葉に驚いたのはハルだった。

「え? そ、そんな簡単に話していいんですか?」

「? 何が?」

「ミキさんが『竜』だ、ってことですよ」

「んっ……まあ、ここに住んでる人にしか言っていないから、大丈夫よ」

「ほ、他の人にも言ってるんですね……」

竜が伝説の存在だったのは昔の話なんだな、とハルはしみじみ思

った。

「……ハルも、大家さんと同じ？」

「え、あ、いえ。俺は普通の人間ですよ」

「……本当？」

「はい」

「……」

ハルとミキの二人に目を向けて、千は首を傾げた。

珍しく、感情の起伏が動作として表れている。

「竜国にハル君がいたのが信じられないの？」

「……」

千は黙ったまま頷いた。

竜は基本的に他の種族を毛嫌いしているというのが、この世の常識。

人間社会に溶け込んでいるミキなどは、例外中の例外だ、と千は思っている。

「その考え方って実は古いのよね。まあ、ハル君は確かに特別だけどね」

「特別……」

「そ　千ちゃんもいずれわかるわよ……ハル君の魅力に」

意味深にはほほ笑み、ミキは立ち上がった。

「さ、ハルくんの歓迎会の準備をしましょ」

「俺の？」

「ええ。ハル君は座って待っていていいわよ。千ちゃん、手伝ってくれる？」

「……わかった」

千は、いずれわかるなら、とそれ以上考えるのを止め、ミキと一緒に、隣の台所に向かったのだった。

〈第3話〉

「えーっと。改めて、これから雲月荘に住ませてもらう、天城ハルです。東京に来たのは初めてなので、色々と迷惑をかけるかもしれませんが、よろしくお願いします」

そう言っつて、ハルが深く頭を下げると、ミキが盛大に、千が控えめに拍手した。

現在、ミキの提案によって開かれた、ハル君歓迎会 の真つ最中。大きなテーブルには、ミキと千が作った豪勢なおかずが載せられている。

「ハル、ここに住むんだ」

「すみません、千さんに言うの忘れてましたね。……やっぱり、迷惑でしたか？」

「別に。私は、ハルだったら構わない。……いただきます」

そう言っつて、千は箸を動かし始めた。本当に構わないと思っつてるのだろう。

「千ちゃんはマイペースねえ。……そう言えば、二人つてもう名前 で呼び合っつてるのね」

「あ、はい」

「ふーん……」

ミキは視線を一瞬だけ千に向け、すぐにハルに向き直つた。

「さ、ハル君もジャンジャン食べてね」

「はい。いただきます。……ん、美味しい。相変わらず料理美上手です、ミキさん」

「ありがとう」

ミキは嬉しそつに微笑んだ。

「あ、それ作つたのは千ちゃんよ」

「そつなんですか？……わあ、凄い美味しい」

千の作つたおかずを食べたハルの口内に、濃厚な味が広がつた。

「ありがとう」

照れて頬を赤くする、様子なんて全くなく、千はそのまま淡々と食事を続けている。

「千ちゃんは私の弟子一号なのよ」

「へえ」

「……無理やり覚えさせられた」

「……無理やり？」

ハルが首を傾げながらミキを見ると、ミキは気まずそうに頬をかいた。

「他の住人が壊滅的に料理下手だから、千ちゃんに覚えてもらおうしかなかったのよ」

「他の住人……そう言えば、ここって何人住んでるんですか？」

「ハル君を入れて、五人よ」

「じゃあ、あと二人いるんですね」

「そ　で、その内の一人は獣人よ。物珍しい目で見ないようにね」
「見ませんよ」

(……ミキさん、自分が竜だって事忘れてるんじゃないのか?)

彼女のほうが、獣人の何千倍も珍しい存在だ。

「ちなみに、男性は？」

「ハル君一人よ」

「……マジですか？」

「マジ　だからって、変なことしたら駄目よ。私にだったらいいけど」

「ミキさんにも、千さんにも、他の人にも、絶対対しません」

「……そんなきつぱり言われると、傷つく」

「え。……ご、ごめんなさい」

困ったように頭を下げるハルは、今のがかなりの冗談だと気付いていない。

(ハル君も千ちゃんも天然なのよね)

苦笑するミキは、同時に驚いていた。

(それにしても、千ちゃんが自分から冗談言うなんて)

料理を作ってる時から、千の様子は普段と少し違っていた。いつもより楽しそうに料理をしていたのだ。

(さつきは、いずれわかる、って言ったけど……これは、私が思ってるより早くその時がくるかしら)

その時 に、千はどんな反応を見せるのか、ミキはそれを見るのが楽しみで仕方なかった。

「その二人は？」

自分の冗談が通じなかったことの羞恥をおくびにも出さず、千がミキに尋ねる。

「仕事が忙しいから今日は帰れない、って電話があったわ。だから、ハル君との挨拶は持ち越しね」

「相変わらず、忙しそう」

「そうね。最近は頻繁に事件が起きてるからとくに」

「その二人は何の仕事？」

「『騎士団』よ。しかも、二人とも滅茶苦茶偉いのよ」

「へえ。騎士団ってことは、あのでっかい建物に？」

ハルは、東京の中央にそびえ立つ建物を頭に思い浮かべた。

「そう。『王塔』ね」

この都市を治めている 王族 が住む高層建造物、 王塔 。他

のどの建物よりも群を抜いて高いそれは、先端が雲に突き刺さるほどだ。

そして、東京を内と外の脅威から守る 蒼の騎士団 の本拠地も、王塔ロイヤルタワーになっている。

「明日になれば帰って来るでしょうし、その時にハル君に紹介するわね」

「はい。……明日と言えば、桜楼の特別入試も明日なんですよね」

「そうなんだ……じゃあ、応援に行く」

「来てくれるんですか？」

千の予想外の言葉に、ハルは少し驚く。

「あ、私も行くからね」

「ミキさんも？」

「私はハル君の保護者なんだから、もちろん行くわよ。それに、友達に会えるかもしれないし」

「友達、ですか？」

「そ。桜楼で先生やつてるのよ。……今日、連絡してみようかしら」
「はあ……」

(ミキさんの友達か……なんか、嫌な予感がする)

後に、この時の予感が見事に当たることになるのだが、今のハルにそんなことがわかるはずもなかった。

その後、会話が尽きることはないまま時間は過ぎていき、明日は早いし、と言うミキの言葉で、歓迎会はお開きとなった。

「ここがハル君の部屋よ」

雲月荘の二階は住人の部屋になっており、片側に五室、廊下を挟んでもう五室の、計十室ある。

ハルに宛がわれたのは、五部屋ずつ並んでいる中の丁度真ん中の部屋だった。

「トイレは各部屋についてるけど、お風呂は共同よ。適当に、誰も入ってない時に入ってね」

「そんなアバウトで本当にいいですか？」

「……大丈夫よ」

(……大丈夫じゃなさそうだなあ)

目を逸らすミキの態度に、一抹の不安を隠しきれないハルだった。

「今日は私と千ちゃんが先に入るから、出たら呼ぶわね」

「はい」

「……一緒に入る？」

「は、入るわけないでしょう」

「真面目ねえ、ハル君は」

「ミキさん……」

「冗談よ、冗談」

ミキは心底楽しそうに笑いながら、その場を後にした。

（変わらないよな、あの人も）

ハルは苦笑しながらドアを閉める。

（……思ってたより広いな）

家具も何もないハルにとって、部屋は少し広すぎた。

（まあ、広い分にはいいか）

「っと……ふう」

荷物を置き、壁に背中を預け、天井を仰ぐ。

（今日だけで……色々あったなあ）

一日目から波乱万丈だな、と苦笑する。

（で、色んな人に会った……蓮華さんに、健吾さんに、千さん……

ミキさんにも会えた）

今日会った人を頭に思い浮かべたハルは、静かに目を閉じた。

（……疲れたなあ。……二人が、出るまで……少し、だけ）

ハルはそのまま、静かに寝息を立て始めた。

「どうしよう……」

私、楠木蓮華はとても困っていた。

「うーん」

ベッドの上に並べた洋服を前に、頭を悩ませる。

明日の天城さんの応援に、どれを着て行けばいいのかわからない

のだ。

「これは……」

一着のワンピースを自分に重ねて、鏡の前に立って見る。

「……わ、わからない」

けれど、普段からファッションにあまり気を使っていない私は、これが似合っているのかもわからない。

ちなみに、ここに並んでいる殆ど全ての洋服はお母さんが買ってきてくれた物だ。だから、余計にわからない。

「うう、こんな事なら雑誌でも買ってあげばよかったよ」

このままでは、無駄に洋服をぐちゃぐちゃにただけになってしまいそうだ。

「……」

そこで、ふと思いついた。

何で、私はこんなに必死になっているのか……今日初めて会った男の子のために。

「……わからない……」

呟き、枕を抱く。

本当にわからない。

何故、知らないうちにあの人の事を考えてしまうのか。そして、私の胸が高鳴る理由も。

その全てが初めてのことだから、わからない。

「……絵梨ちゃんに相談しようかな」

原点に帰った私は親友の顔を思い浮かべ、携帯を開いた。

彼女の番号をすぐに見つけ、少し迷ってから、ボタンを押した。今日は仕事休みって言うてたし、多分大丈夫だと思うけど……。

『……もしもし？ 蓮華？』

数回コールが鳴った後、絵梨ちゃんが出てくれた。

「うん。今、大丈夫？」

『大丈夫だけど……どうしたの？』

「実は……相談があつて」

「相談？ いいよ、何でも言って」
「……明日、桜楼の特入試験を見に行くんだけど」
「特入を？ 何でまた」
「え、つと。色々あって」
「ふーん。それで？」
「それで……どんな服を着ていけばいいかわからなくて」
「どんな、って……普通のいいんじゃないの？」
「うん。でも……それじゃあ、不安で」
「不安？」
「うん……男の人にどんな風に思われるのかわからないから」
「ぶふうー！！」
「ど、どうしたの、絵梨ちゃん？」
「ゲホッ！ ゲホッ！ い、いや。飲んでた牛乳吹いちゃっただけ。ゲホッ！」
「だ、大丈夫？」
「大丈夫、大丈夫。蓮華がいつの間にか、冗談を言うのが上手くなってることに驚いただけだから」
「じよ、冗談じゃないよお」
「……本気？」
「う、うん」
「……私としては、蓮華がそういうのに興味を持つのは感心しないんだけど」
「？ そういうの？」
「大胆な服着て、男の人を誑かそうとしてるんでしょ？」
「た、誑かっ！ ち、違！」
「確かに、蓮華ほど可愛ければ簡単にいくと思うけど、親友としては見過ごせないよ」
「だ、だから！ 違っって！」
私はその後、今日起きたことを話、今の心境を絵梨ちゃんに吐露した。

そして、十分後……

『……今すぐ蓮華の家に行く』

「え？」

『あんたを私が最高に可愛く仕立ててあげる！ その天城って人が、あんたに夢中になるように！』

「え？ え？」

『まさか、蓮華が……今から行くから、待ってて！』

「え、絵梨ちゃ……切れちゃった」

ツーツー、と携帯から虚しい音が聞こえてくる。

「……結果オーライ、なのかな？」

絵梨ちゃんは、私が羨むほど可愛い。アイドルとして仕事をいくつもこなしているから、当たり前かもしれないけど。だからこそ、絵梨ちゃんに安心して任せられる。

「……明日、楽しみだな」

私は、知らず知らずの内に、頬を緩めていたのだった。

第4話

「……あれ？」

見知らぬ天井が、ハルの目に映った。

「……………あ、そつか。ここ、東京だ」

たっぷり数秒使い、今の現状を理解する。

「時間は……七時。……時差ボケなんてものとは無縁だな、俺」

なんて一人で呟き、布団から出た。

「んっん〜……さて」

身体を解し、完全に目を覚ましたハルは意気揚々と身支度を始めた。

「おはようございます」

「おはよう、ハル君」

「おはよう」

居間にはすでにミキと千がいた。

「すぐに朝ごはん用意するから、座って待ってて」

「はい。ありがとうございます」

台所に向かうミキと入れ替わるように、ハルは千の対面に座った。

「二人とも、早いですね」

「別に、普通。……それより、試験はいつから」

「確か……九時に桜楼学園集合でした」

「そう」

相変わらず、無表情のままの千。

（朝も変わらないんだな、千さん）

「……………あ」

そこで、ハルはあることに気づいた。

(「そう言えば……………俺、桜楼学園の場所知らないじゃん」)

「……………何?」

「あ、いえ。……………ここから桜楼学園までの道を知らないな、ってことに気付いて」

「そう」

「まあ、地図を見ながら行けばいいんですけど」

「……………この辺りは、道が入り組んで……………地図を見ても迷うことがある」

「そ、そうなんですか」

千の言葉に段々と不安が募っていく。

「でも、私と大家さんも一緒に行く……………だから、大丈夫」

「あ、一緒に来てくれるんですか?」

「……………昨日、言った」

「そう、でしたね。ありがとうございます。千さん」

「ハルは、意外に抜けてる」

「……………返す言葉も無いですね」

「そう」

(あれ……………今)

ハルの目には、千が少しほほ笑んだように見えた。

しかし、今は無表情でお茶を飲んでいる。

「……………何?」

「あ、いえ……………」

本当に気のせいだったのかもしれないが、ハルの顔は自然と緩んだのだった。

東京には、桜楼を含め、五つの学園が存在する。

様々な例外はあるが、東京在住の少年少女は、その五学園に入る前に、ちゅうがくえん 中学園 と呼ばれる教育機関を卒業しなければいけない。楠木兄妹もそこを卒業してから、桜楼に入っている。

そして、東京の外の者は 特別入学試験 に合格したら、それぞれの学園に特別入学出来る。

ちなみに、桜楼の特別入学試験は、ずなうしけん 頭脳試験 と じつぎしけん 実技試験 に分かれており、ハルが受けるのは実技試験だ。

「わっ、多いですね〜」

ハルが驚きの声をあげる。

おおそよ数百人の入学希望者が、桜楼学園内にある施設 コロッセオ に集まっていた。その中には、ハルの倍以上はある図体を持つ獣人や、鎧を着込む者などもいる。

「仮装パーティーみたいね」

「……………」

付き添いに来たミキが可笑しそうに言い、千は興味なさそうにぼーっとしている。

(そう言えば……蓮華さんと健吾さんは来てくれたのかな)

ハルは辺りを見渡すが、人数が多すぎてよくわからない。

「どうしたの、ハル君？」

「ちよつと、人を」

探してまして、とハルが言おうとした瞬間、アナウンスが流れた。

『これより特別入学試験・実技を行います。御観覧をご希望の方は、お手数ですが、観覧席でお願いします』

コロッセオ という名前の通り、ここには闘うための空間 闘技場

と、それを丸く囲むように 観覧席 が設けられている。

「じゃあ、私達はそっちに行くから、頑張っつてね、ハル君」

「頑張っつて」

「はい」

ミキと千がその場を離れると、計ったように再度アナウンスが流れた。

『それでは、今年の試験内容を、現生徒会長【風谷里奈^{かせたにりな}】さんに説明していただきます』

アナウンスが終わると同時に、二階よりも高い位置に作られた、本来は王族が観覧するための場所に一人の少女が現れた。

荒々しい長い髪に獣耳、整った顔立ちながら鋭い眼をしていて、尖った八重歯が唇から覗いている。

そして、何よりも男の参加者の目を引いたのは、桜樓の学生服を押し上げている彼女の大きな胸だった。

「私が、生徒会長の風谷だ。時間もあまりないし、面倒な挨拶は抜きにして、手つとり早く説明させてもらおう」

言いながら、里奈は眼下にいる何百人もの入学希望者を見渡している。

「……今回は思っていたより人数が多かったから、特別に桜樓の先生方に協力を仰いでもらった」

途端に、闘技場がざわついた。

入学希望者も、嘘だろ、だの、最悪だ、と呟いているのだ。

(? 何だ?)

いまいち状況を理解していないハルが首を傾げていると、黒のスイーツに黒サングラスという、全身を黒づくめにした五人の男女が、闘技場に入ってきた。

「今回の試験内容は『鬼ごっこ』。先生方が、君たちを追う『鬼』だ」

(……なるほど。ざわつくわけだ)

里奈の言葉を耳に入れながら、ハルは黒スーツの教員達に目を向けた。

(流石、桜樓の先生方……全員、かなり強い)

今はただ立っているだけだが、五人から滲み出るオーラは明らか

に強者のそれだ。

（特に、あの二人）

ハルは両端の男女に目を向ける。一人はニコニコとほほ笑んでいる、恐らくかなりのイケメンの男性。もう一人は、腕を組み、何故か男物のスーツを着た、こちらも綺麗な女性。

（この二人は、レベルが違う。ひよつとしたら……ミキさんクラスかも）

と、ハルが考えていると、その女性とサングラス越しに目が合った、気がした。

「……ふ」

「っ！」

女性が口の端をつり上げた瞬間、ハルの背中を、何かが奔った。

（おいおい……マジかよ）

苦笑するハルの全身に、冷や汗が流れる。

（あの人とは……絶対にやりたくない）

もしかしたら、昨日の不安が現実のものになる可能性がある。死ぬかもしれない、という可能性だ。

「それから」

里奈が指を鳴らすと、空からハチマキが落ちてきた。

「全員に、それを頭に着けてもらう。そのハチマキが、君達の命だ。それを取られたら、そこでリタイア」

それぞれが頭にハチマキを着けている間、里奈の話は続く。

「ただし、この試験は過程が重んじられるから、リタイアしたら不合格、と言うわけではない。それと、公平を期するため、一応先生方にもハチマキを着けてもらった」

見ると、確かに、黒スーツの先生達も頭にハチマキを巻いていた。スーツ姿の大人がハチマキを着ける姿は、見ようによっては面白おかしい。だが、参加者がそれを笑う余裕は露ほどもなかった。

「……説明はこんな所か。それでは、お願いします！」

里奈が一際大きな声を出すと、観覧席にいた数人の術者が、闘技

場に手をかざした。

すると、闘技場の地面に大きな魔法陣が現れ、それ自体が淡く輝き始めた。

「今から君達には、とある場所に『転移』してもらおう。そこに着いた瞬間から、試験開始だ」

段々と輝きが増していき、全員が来るべき試験に向けて準備をしていると、里奈が、

「言い忘れていたが、合否判定の参考として、君達が互いに闘うことも許可しよう。最先端の医療技術と、『医術者』を用意したから、存分にやってくれ」

と言った。

(そんな事、言い忘れるなって！)

と、ハルが心中で突っ込んだ直後、入学希望者と五人の鬼が転移し、鬼ごっこが始まった。

〈第5話〉

コロッセオには、満員とまではいかないが、席がそこそこ埋まるほどの観客がいる。その中に、楠木兄妹の姿があった。

蓮華は、普段とは違う、大胆かつ清楚さを残したな格好をしている。

親友の絵梨いわく、『これで落ちない男はいない』らしい。しかし、ハルと会うことなく、試験が始まってしまったことがただ一つの誤算だった。

「天城さん……大丈夫かな」

「……正直、運次第だな」

「そうなの？」

「ああ……」

健吾は眉間に皺を寄せた。

(まさか、【神埼先生】と【ルーク先生】が参加するなんて)

「珍しいな、お前が特人を見に来るなんて」

「里奈……」

そんな健吾に、ついさつきまで試験内容を説明していた生徒会長の風谷里奈が親し気に話しかけた。

「お疲れ様です、里奈さん」

「ああ。……って……蓮華？」

健吾の隣に座る蓮華を見て、里奈は目を疑った。

「なんで蓮華がここに……」

三人は、小さい頃からの友達、幼馴染というやつだ。だから、蓮華がこんな殺伐とした特入試験を見に来たことに、里奈は心底驚いている。

「え、っと……色々あって」

顔を少し赤くして言葉を濁す蓮華は、益々もって、里奈の知らない蓮華だった。

「……おい、健吾。何があつたんだ？」

「色々あつたんだよ。そんな事より、あの二人も参加させるなんて、今年は実技の入学者をゼロにする気か？」

健吾が若干非難がましい目で里奈を見ると、当の里奈も困り顔で頬をかいた。

「私も神埼先生を参加させるつもりはなかったんだが……あの人の強い要望でな」

「要望？」

「ああ。気になる奴がいる、とか言つてな」

「気になる……」

(……そんな偶然はないか)

健吾はハルを頭に思い浮かべたが、すぐに首を振った。

「で、お前と蓮華はなんで？」

里奈は二人が来たことがどうしても気になっていた。

「こつちも……気になる奴がいてな」

「ほお」

と、里奈が目を見開いて驚いていると、闘技場の上空にいくつもの映像が映し出された。

『これらの映像は、参加者の状況を数百のカメラで映しています。』

参加者は向こうにバラバラに転移した状態で試験が始まりますので、いかに先生や他の参加者に見つからないようにするかが試験の鍵となつていきます、が……早速、動きがあつたようです』

アナウンスに同調して、一つの映像が大きく闘技場に映し出された。

そこに映っていた人物は、

「あ……天城、さん？」

「天城、だな」

紛れもなく、天城ハルその人だった。

「もしかして、あいつがお前達の気になる奴か？」

「ああ、まあ……」

「そうか……彼は恐らく脱落だな」

「？ 何を根拠に……っ！」

そこで、健吾は気付いた。

その映像の中に、ハル以外の人物が映っていることに。

「まさか……ルーク先生！？ 天城……なんて運の悪いやつなんだよ」

思わず頭を抱える健吾。

「お、お兄ちゃん？ どうしたの？」

兄の狼狽する姿に、現状をいまいち理解していない蓮華もアタフタする。

「……ルーク先生と神崎先生にだけは、会っちゃいけなかったんだ」
相変わらず頭を抱えたまま呟く健吾。

そして、そう考えていたのは、健吾だけでなく、ハル自身もだった。

「……おお」

目を開けたハルの目に飛び込んできたのは、背の高い木々に、鬱蒼と生い茂る草花だった。

ここは、世界のどこかの森の中らしい。

「他の人は……バラバラに転移したのか」

（まあ、そうじゃないと、転移直後に大乱闘になるか）

「さて……は？」

歩き出そうとしたハルは、思わず、自分の感覚を疑った。
すぐ近くに、いる。

確実に、いる。

（……冗談だろ）

ゆっくりと振り返ったその先に、

「君は、運が悪いね」

ニコニコと笑うイケメンの男が、いた。

巨木の、地面から突出した根の上に立っているその男こそ、ハルが絶対に会いたくないと思っていた人物の一人だった。

「……これって、全員バラバラに飛ばされるんでは？」

「そうだよ。僕達も、どこに転移されるかわからない。だから……君は運が悪い」

「自分でもそう思います」

(やっぱり…… 只者じゃないよなあ)

こうやって話している間にも、男の隙を窺っているハルだが、相手はそんな隙を全く見せない。

(…… しょうがない…… 腹を括るか)

深呼吸をし、覚悟を決めたハル。その目から、恐怖心や緊張は消え去った。

「へえ……いい目だね」

「それはどうも。悔ってたら、痛い目みますよ」

「そうかい？ それは面白そうだ、ね！」

瞬間、男は高速で移動し、ハルとの距離を詰め、空中から右足の蹴りを放った。

脳天直撃の一撃。

本気だったら、頭が粉碎されている。しかし、もちろん彼は加減しているのです、精々脳震盪を起こす程度だろう。

けれど、それが仇となった。

「っはあ！」

足が振り切られる前に、左手で男の太ももを掴んで蹴りの勢いを減速させたハルは、そこから右の拳を男の腹にぶちかました。

「!?!」

男の身体が数メートル飛ぶが、男は両足で難なく着地した。

（やっぱり、簡単には行かないか）

ハルの右拳は腹に当たる前に、男の両掌に防がれていたので、実質、ダメージはゼロだ。

「全く無駄のない動き……やるね」

しかし、男はハルの動きに正直驚いていた。

自分が油断していたのは確かだが、それを差し引いても、ハルの動きは称賛に値した。

「君、名前は？」

「天城ハルです」

「天城ハル君、か……確かに、君を侮ってたら、痛い目を見そうだ」
ほほ笑み、男は体勢を低くして構えた。

「僕の名前は、【ルーク・スカッター】」

「っ！？」

ハルは一も二もなく、後ろに跳ぶ。

直後、その場の地面がルークの拳で抉られた。

「以後、よろしく」

「っ！こちらこそ！」

着地したハルは飛び散った石を何個か掴み取り、ルークに向かって投げた。

「ふっ！」

ルークがそれらを片手で弾いている間に、ハルはルークの視界から消えた。

「……………」

左右を瞬時に確認したルークが、右の掌を頭の上に挙げた。
ズドン、と鈍い音が響く。

ハルのかかと落としが、ルークの掌に防がれたのだ。

（やばい！完全に読まれてた！）

「右と思わせて、左。しかし、その左も布石で、本命は上か。面白い方をするね」

ルークはそのままハルの右足を掴み、
「はあ！」

思いつきり、投げ飛ばした。

「ぐ、くっそ！」

ハルの身体はいくつもの木々をなぎ倒し、一際大きい木にぶつかって、ようやく止まった。

「はあ、はあ。っ!？」

「休ませない、よ！」

吹き飛んだハルを追う形で走りこんでいたルークが、ハルの腹部目掛けて、拳を振りぬいた。

その威力は、人間の数倍はあろうか、という巨木をなぎ倒すほどだ。

ルークの予想では、これで終わりだった。

しかし、

「もらい！」

その直後、ルークの顎はハルの右脚にかち上げられていた。

「なっ……」

脳を揺さぶられる中、ルークは状況を瞬時に把握した。

(僕の攻撃は……当たってなかったのか)

ルークの拳はハルの背後の木だけをなぎ倒し、ハル自身には少しも当たっていなかった。

(タイミングは完璧だったはず……なのに、紙一重でかわされた……)

…面白い)

ルークが今までと違う笑みを見せる。

相手の思いがけない反撃に、彼の闘争本能が燃え始めたのだ。

「まだま、がつ！」

ハルは更に攻撃を与えようとしたが、ルークの強烈な左足の蹴りを受け、数十メートル横まで吹き飛ばされてしまった。

「ぐ、が、いつ！」

何度か地面を転がり、ようやくハルは身体を止めた。

今の蹴りを防御したハルの右腕は、骨は折れていないが、ジンジンと痺れていた。

「っ、たぐ。……ちよっと調子に乗りすぎたな」

（それにしても、あの体勢からこの威力の蹴りか……冗談じゃないぜ）

ハルは全く勝てる気がしなかった。

「あんなにいいのを顔に食らったのは、久しぶりだよ」

ハルが右腕の調子を確かめっていると、ルークが顎をさすりながら歩いてきた。

「……そのイケメンを崩す勢いで蹴り上げたんですけど」

ルークの顎は少し赤くなってる程度だ。

「君が本気でやれば、もっとダメージを受けてただけだね」

ルークの言葉に、ハルはムツとして言い返した。

「それは嫌味ですか？ 俺は、十分本気ですよ」

「それこそ嘘だろう。遠慮はいらぬから、本気できなさい」

「いやいや。本気ですって」

「……………?」

「……………?」

話が、噛み合っていない。

ルークは違和感を口に出した。

「君、魔法は？」

「全く使えません」

「魔法は？」

「まだ、使えません」

「……『氣』や『魔力』の応用は？」

「それは……よくわかんないです」

「……………」

ルークは、平然とこんな事を言うハルに驚愕した。

（魔法が使えないのはいいとして……魔法や氣・魔力の応用が、出来ない？）

どちらも、この世界では、子供の頃に必ず教えられるものだ。

(嘘をついてる感じはしない……じゃあ、彼は氣や魔力を一切使わずに、僕の攻撃に耐えていたのか……無理だ。だったら、さっきの一撃で腕が折れている……無意識か？ いや、そんな事より……魔法や氣を自分の意思で一切使わずに、あの動き)

思わず、身体が震える。

(恐ろしいまでの、バトルセンス……天才、か)

「……面白い」

「？」

「面白いついでに、闘い方を変えてみよう。……」「サンダーボール

」
「ルークの周囲に、丸く、帯電している球が、いくつも出現する。

「俺が魔法使えないってわかった途端に、魔法ですか……意外に、性格悪いですね」

「闘いにおいては、卑怯なこともよしとされるんだよ」

「……………」

「さて、魔法や氣を使わずに、どこまで耐えられるかな」

〈第6話〉

楠木姉妹が座っている場所からそれほど遠くない位置に、ミキと千は座っている。

「どういこと?」

千の疑問は、さきほどのハルとルークの会話のことだ。

ハルが魔法を使えないことや、氣の応用が出来ないことは、千にとっても驚愕の一言に尽きた。

「ん〜……正直に言くと、私達のせいなのよね」

ミキは、ばつの悪い顔をしながら話を続ける。

「私達って、普通の人と根本的に身体の構造が違うから、そういうのは教えられなかったのよね」

「魔法も?」

「氣も魔法も、よ。空を飛ぶ鳥が地を駆ける獣に飛び方を教えるよ
うなもの、って言えばわかりやすいかしら」

翼を持たない獣が飛ぶことなど、絶対に出来ない。

「でも、あの子は天才だから、私達を見て闘い方を覚えたのよね」

「じゃあ……あれは全部、自己流?」

「ええ」

「……………」

「凄い、なんてものではない。まさしく、天才だ。」

「でも、驚くのはまだ早いわよ」

「?」

「ハル君が私達の闘いから学んだことは、まだあるのよ」

闘技場に映し出されたハル達が動き出したのは、丁度その時だった。

ルークの周囲を浮遊する球の一つから電撃が放たれる。

「っ！」

ハルがその場を跳び退いた直後、電撃は地面を削って消えた。

「まだまだ行くよ」

ルークが両手を動かすと、それに合わせて、全ての球が不規則に動く。

(おいおい……まさか、あれ全部!?)

と、思った瞬間に、全ての球から電撃が吐き出された。

「くっ、っ」と

ハルはそれらを驚異的な反射神経で避けていくが、体力には限界があるので、長くは続けられない。

(このままじゃ、じり貧だ……だったら)

ハルは足に力を込め、少々強引に前に跳んだ。

「っ！」

その際、肩に電撃がかかるが、気にせずに進む。

その先には、ルークが立っている。

「恐れずに突き進むその姿勢、見事だけど……若いね。「サンダー

ボール」

「!? やっ、ば！」

ルークの周囲に、新たな球が数十個出現し、その全てが雷を吹いた。

(っ上！)

ハルは唯一の逃げ道、空中に跳び、電撃を避けた。

しかし、

「甘いよ」

「っ！」

空中には、ルークが待ち構えていた。

「今度は、避けさせない！」

素早く振り抜かれたルークの右拳がハルに直撃し、嫌な音が鳴った。

「ぐっ！　があ！」

地面に急降下するハルは、そのまま受け身をとることも出来ずに巨木にぶつかつた。

砂埃が辺りに舞う。

「……………」

スツと地面に着地したルーク。彼の右腕の二の腕辺りは、服が破れ肌が赤くなっていた。

（避けられないと悟って、カウンターで僕の右腕を攻撃したのか…
…威力を殺して、狙いを崩すために）

事実、威力は多少軽減され、胸を狙つたルークの拳は、左肩の付け根にヒットする形になった。

（タイミングが一瞬でも違えば、全く意味のないカウンターなのに、よくやるよ……けど）

クリーンヒットはしたので、ハルへのダメージはでかい。

数秒後、ハルが左肩を抑えて、ルークの前に現れた。その抑えている手の隙間からは、血が流れている。

「流石、ですね。一撃で致命傷ですよ」

脂汗をかいているハル。言葉通り、傷は深いのだろう。

「あれ以上、無様な姿を見せるわけにはいかないからね。……降参したらどうだい？　恐らく、君はここでリタイアしても、合格だよ」

ルークの言っていることは事実だ。ハルの実力と才能は完全に合格ラインを超えていた。

「……悪いですけど……俺も、このまま無様な格好を見せられない人が観てるので、とことんやりますよ」

しかし、ハルはほほ笑みながらその誘いを断つた。そして、言葉とは裏腹に身体中の力を抜いてしまった。

「？　何の真似だい？」

ハルの行動を訝しむルーク。

今のハルは、あまりにもリラックスし過ぎていた。隙だらけなのだ。

「あなたの攻撃のお陰で、頭に登っていた血が抜けました……もう、あなたに勝ち目はありませんよ」

「へえ」

自信に充ち溢れたハルの言葉。ハツタリなどではない。

「じゃあ、君の自信がどこから来るのか」

ルークは両手を動かして、何十もの球を一息に操作し、
「見せてもらおうか！」

その全てから一斉に電撃を放った。

「……………」

先程とは比較にならない威力と数の電撃。
周囲を覆い尽くすほどの電撃。

その全てを、ハルは避けた。

「……………」

一瞬の出来事に、ルークは自分の目を疑った。

(まぐれ……じゃ、ない！)

立て続けに攻撃を仕掛けるが、その全てがことごとく避けられてしまう。

時には、他の電撃を利用し、大胆に、かつ、確実に、ハルは避け続ける。その動きに、無駄は一切ない。

(これは……さっきの)

顎を蹴り上げられた攻撃を思い出す。

あの時も、当たった、思った攻撃が、避けられていた。

(………凄い)

ルークは、自分の攻撃が全て避けられているにも関わらず、ハルに魅入っていた。

「素晴らしい……」

コロッセオにいる誰かが、呟く。

「……………」

千も、ハルの動きに目を奪われながら、その言葉に心から同意した。

「凄いでしょ？」

「うん」

ミキと千はハルから目を離さず、口を開いた。

「私も、ハル君の「桜舞^{おひぶ}」を見たのは久しぶりだけど……………相変わらず、綺麗ね」

「桜舞？」

「そ。舞い散る桜は儂げだけど、掴みどころがない……………あの動きを見た誰かが付けた名前よ」

「……………これが、ハルが大家さん達を見て……………」

「そう。ああなったハル君に攻撃を与えるのは、容易じゃないわよ」
竜族の闘いを見てハルが学んだことは、いかに相手の攻撃に当たらないか、である。

それは、一撃が必殺の威力を持っている竜族の力を間近で見ているからこそ学んだことなのだろう。

「でも、あれにも弱点があるのよね」

「……………?」

千がミキの方を向いた直後、コロッセオがざわめいた。

「……………」

休むことなく放たれていた電撃の雨が、急に止んだ。

もちろん、ルークがそうしたのだ。

「打ち止め……ってわけじゃないですよね」

「ああ……このままじゃ、君の動きにいつまでも見惚れてしまうからね」

「それ、男の人に言われても、全然嬉しくないですよ」

「そうか。それは残念だね」

ルークはほほ笑み、両手を合わせた。すると、周囲を漂っていた球が、お互いを吸収し始めた。

「少々無粋だけど、弱い所を突かせてもらおう」

やがて、今までのより何倍も大きな球が三つ出来あがった。

「その動き、線には強いが、面には弱いだろう」

「……さて、どうでしょうね」

不敵に笑うハル。

凶星なのか、そうでないのか、いまいちわからない。

「まあ、いいさ……行くよ。……」「サンダーボルト」！

ルークが手を前に突き出すと同時に、三つの球から今までの何十倍も大きな雷が放たれた。

それは、それぞれが明らかに本物の雷より強力な電撃だ。放たれた瞬間の衝撃波だけで、周囲の木々を根こそぎ吹き飛ばしている。

電撃の本体は地面を深く抉り、進行方向にある巨木を跡形もなく破壊しながらも、勢いが停滞する気配は全く無い。

人間の身体など、一瞬で塵にしてしまえる威力だ。

やがて、その三つの電撃は周囲に甚大な被害を及ぼし、ルークがいる場所から、おおよそ、数百m先を焼け野原にして、消えた。

（や……やりすぎた）

ルークは今さらになつて思った。

（これ……ひよっとして、死んだ子いるかも）

冷や汗をダラダラと垂らす。

この試験を受けるにあたって、参加者には生命の保障を問わない、

と誓約書に一応書かせているが、実際に死人が出たら大問題になる。
(……よ、よかった。一応、死んだ子はいない)

ホツと胸を撫で下ろすルーク。

これは、魔法を放ったルーク本人にはわかることだった。今までこの魔法で何人もの人を手にかけてきたからこそわかる、皮肉な特技だ。

五学園の教員はエリートが多いので、殆ど全員が、都市や 世界機構 からの依頼で、極悪犯罪人を相手にし、殺したこともある。もちろん、率先してではなく、やむを得ずという場合が殆どだ。殺らなければ、殺られる。そんな世界に彼等は生きているのだ。

(それでも…… 人殺しには変わらない)

ルークは自嘲気味に笑い、目の前のことに集中した。

ちなみに、死人は出ていないものの、この魔法の影響で脱落した者は、百人近くいる。

(さて、天城君はどうなったかな)

砂煙も晴れ、視界が段々良好になっていく。

もちろん、この時もルークは警戒を解いていないから、ハルが簡単に攻撃を仕掛けてくるとは思っていない。

(けど、このままじゃ彼に勝ち目はない……この大魔法の後に何か仕掛けてくるはず……って)

「うわぁ」

思わず、声をあげるルーク。

「サンダーボルト」を放った後の、平地となってしまった森林を改めて見たからだ。

(本当に人を殺しかねないな、これは)

魔法の使いどころをちゃんと考えよう。そう堅く誓ったルークだった。

(……それにしても)

来ない。

ハルの攻撃が、全くこない。

(何でだ？ まともには食らって動けないのか？)

ハル程度の者だったら、掠ただけで大怪我に繋がる。そんな魔法だから、十分にあり得る。

けれど、

(それにしても、気配が感じられない)

大怪我にしろ、気絶にしろ、ハルが何かしらの影響を受けていれば、呼吸の乱れは確実に感じられる。

(でも、そんなのは感じられない。って事は、気配を完全に消せるほどの余裕が……あ)

そこで、ルークはようやく思い至った。

(まさか……逃げた？)

周囲を見渡すが、やはりハルの気配は微塵も感じられない。

ルークはこれを、ハルが巧みに気配を消しているのだ、と思っていた。しかし、ハルは本当にこの場にいないのかもしれない。

(でも、こんなにあっさり逃げ……あ)

「……く……く……く……く……」

片手を顔に当てて笑いを堪えるルークだが、やがて、

「あっはははは!!」

大声で笑い始めた。

「く……く……く……く…… そうだよ、これは『鬼ごっこ』なんだ」

そう、これは鬼ごっこ。

真剣な一対一の勝負ではない。

「僕は鬼……彼は僕から逃げて当然だ……く……く」

普通の鬪いだっただなら、逃げたハルの負けで、ルークの勝ちとなる。

しかし、鬼ごっこの場合……

「逃げられた鬼の負けだ」

思えば、最初からハルは逃げるつもりだったのかもしれない。

『とことんやりますよ』

『もう、あなたに勝ち目はありません』

これらの言葉を布石にして。

(積極的に攻撃を仕掛け、最終的に、僕に大技を使わせるつもりだったのか)

違和感のないようにこの場を去るために。

「……あの自信満々な顔に騙されたな」

その時、相手に逃げられたにも関わらず、自分が嬉しそうに笑っていたことに、ルークは少しも違和感を感じなかった。

〜第7話〜

コロッセオは騒然とした雰囲気にもまれていた。

あいつは誰なんだ、そんな声が至る所から聞こえてくる。

「おい、健吾……あいつは何なんだ？」

そんな中、里奈はハルと接点をもっているらしい、健吾に尋ねる。しかし、健吾は首を横に振って答えた。

「俺も……詳しいことはわからん。わかるのは、天城ハルって名前だけだ」

ちなみに、健吾の隣に座っている蓮華は、現在放心状態。

色々と事が起こりすぎて、ついていけなかったのだ。

「天城か……あの話、どう思う？」

「魔法のことか？」

「そうだ」

健吾はしばらく考え、口を開いた。

「あいつの言ってることが本当だとしても、あり得ない話、ではないな。余程特殊な環境にいたんだろう」

「特殊な環境ね……面白い」

「……あいつ、合格か？」

「ふっ。そんなこと、私の立場から言えるわけないだろう」

そう言った里奈は、獲物を見つけた獣のようにほほ笑んだのだ。た。

『 』

「？」

ハルが去った後も、しばらくその場に突っ立っていたルークの携帯が鳴った。

「もしもし？」

ポケットをまさぐり、何の考えもなしに通話に応じたルークは、その行動を悔やむことになる。

『どういふことだい？ ルーク先生』

底冷えするような声が携帯から聞こえてきて、ルークは思わず身体を硬くした。

「せ、先ば……か、神崎先生」

電話の相手は、ルークが若い頃から最も尊敬する先生で、昔も現在も先輩・後輩の関係にあたる人物だった。

『今の衝撃、ルーク先生だろう？ この試験で教員が魔法を使うのは、禁じていたはずだが？』

「は、はい。その通りです。しかし、これには深いわけが」

『ほお……聞こうか』

「実は……あまりにも、闘いに白熱してしまいました」

『……………』

「……………あの？」

『……………ルーク先生』

「は、はい！」

『殺すぞ』

「ひ、ひい！ ち、違うんです！ その相手、天城君って子が驚くほど素晴らしい才能を」

『はあ、それ以上喋ったら、本当に殺……天城？ ……もしかして、天城ハルか？』

「は、はい！ ご存じでしたか？」

『まあな……そんなに強いのか？』

「ん、強いかって言うのと難しいんですね……総合的な強さなら、桜楼の二年生程度ですね。ただ、彼は発展途上ですから」

『そんなの、若い奴は全員そうだろう』

「まあ、そんなんですけど……彼の場合、才能の底が全く見えませんですよ……もしかしたら、彼の才能に底なんてないのかもしれない。何にせよ、彼の實力は実際に見てみないとわからないと思います」

『……ミキも同じ事を言ってたな』

「え？」

『いや、何でもない。もう切るぞ……ああ、それから』

「？」

『君は三ヶ月減俸だ』

「そ、そんな！……切れた」

ルークはその場でガツクリと肩を落としたのだった。

「はあ、はあ……はあ」

巨木の枝に座り込み、大きな幹に身体を預けるハル。服は汗でびしょびしょだ。

（つたく、なんだよあの威力……まともに相手出来るかつての）

ルークの「サンダーボルト」の威力を思い出し、身震いする。

上手くルークを欺いたハルだが、その実、逃げる時は死に物狂いだった。

（余裕ぶってたけど……かなりギリギリだったからなー）

今も、冷や汗が止まらない。

「だいぶ遠くまで逃げたっぽいけど……もう、大丈夫かな？」

ここからハル達が闘った場所まで、軽く数キロはある。その距離をたったの数分で移動した事に気付かないハルは、本当にルークの魔法を避けるのに必死だったのだろう。

（あの人を追って来てる様子は……ない）

「よかった……はあ」

ようやく緊張を解いたハルに、疲れがどっと押し寄せた。

「……ん？」

その時、ここから目で確認出来る距離で、闘いが繰り広げられていることに、ハルは気付いた。

（あれは……）

ハルの目に映ったのは、ポニーテールが特徴的な一人の少女と、彼女を囲む数人の男、そして、地面に転がる十数人の男達だった。（あの人達を倒したのは、女の人か？）

男達の実力はわからないが、仮にも桜楼の試験を受けているので、中途半端な強さではない。それを、彼女一人で倒したのだとしたら、間違いなく強者の部類に入る。

「はあ、はあ……クソ」

男の一人が、息も切れ切れに、呟いた。

他の男達も、肩を大きく上下させている。

「……………」

少女の手に握られているのは、一振りの 刀 のみ。

しかし、少女を取り巻く男達は、自分達が優位に立ってるとは、到底思えなかった。

「ぐ……ああー！」

一人の男が、意を決して、少女に攻撃を仕掛けた。

「おおー！」

それに釣られて、他の男も一斉に動き出す。

「……………」

刀を構えた直後、少女はその場から消えた。

「ぐっ」

「ああ」

その一瞬後、二人の男が倒れ込んだ。

二人の後ろには、刀を振り切った体勢の少女がいる。

そして、少女がまた消えた。

(おお……凄い)

思わず身を乗り出したハルには、男達の間を縫うように駆ける少女が、一迅の風のように見えた。

「くそ！ はええ！」

叫ぶ男も、数瞬後には少女の刀の餌食となっている。

そして、またたく間に、全ての男が地に伏したのだった。

「ふん……」

少女が鞘に刀を納めると、パチン、と小気味いい音が響いた。

(格好いいな……俺も、刀とかが使えないわけではないんだけど) 彼女のような扱いは出来ない。

(竜国では基礎しか教えてもらえなかったし、かといって、一人じや限界があるしな……お?)

そこで、ハルは気付いた。

「……………」

少女がこちらを睨んでいることに。

(ば、ばれてる)

気配は消していた。

しかし、それ以上に彼女の感覚が鋭かった。

(逃げ……られないか)

先程のルークの時と違って、相手は自分を視認している。ここで下手に背中を見せたら、頭のハチマキを一瞬で切り落とされるかもしれない。

(仕方ない)

ため息をつき、ハルは少女の元に向かった。

「どうも」

と、ハルは努めて余裕ぶって声をかける。実際はかなり焦っているのだが。

「覗き見とは、趣味がいいとは言えないな」

少女が切れ長の目を更に細める。

「返す言葉もありませんね」

苦笑気味に答えるハル。

「ふん」

少女はハルを一睨みし、鞘から刀を抜いた。

「やっぱり、やりますか？」

「そのために来たのだろうか？」

「……まあ」

（本当は闘いたくはないけど）

だが、そんな事を言っつて、この少女が見逃してくれるとは思わなかった。

（……肩、大丈夫かな）

応急処置だけしてある左肩が気掛かりだったが、闘いで泣き言は言っつていられない。

「行くぞ」

少女が構えると、辺りの空気が一気に張りつめた。

「……はあ！」

距離を詰めた少女の、左から右への一閃。

「つと」

それを、背後に跳んで避けるハル。

「ふっ！」

少女は勢いを殺さずに、連続で斬りかかった。

「ほっ、とと」

そのことごとくを避けるハル。

（確かに太刀筋が綺麗だけど……その分、読みやすい）

ルークとの闘いで身体は疲れているが、感覚が十分に研ぎ澄まされているハルにとって、少女の刀を紙一重で避けるのは、それほど難しいことではなかった。

「……ちっ」

舌打ちをした少女が足と腕に 氣 を集中させると、

（！？ いきなり、速く！）

少女の速度が何倍も増した。

(これが、氣の応用ってやつか!?)

「くっ……あ、やば」

「もらった!」

避けるタイミングをずらされたハルの頭上から、少女の刀が迫る。

「あっ、ぶな!」

ハルはその刀をギリギリの所で、両の掌を合わせるように防いだ。

「!? 真剣白刃取り、だと!？」

「成功、っと!」

「ぐっ!」

「もう一丁!」

少女の腹に蹴りを放ったハルが、再度蹴りを繰り返す。

「ちっ!」

ハルの二度目の蹴りを少女も脚で受け、二人の脚が交錯した。

この時、少女の身体を支えているのが右脚一本だけになり、土台が不安定になった少女の力が少し緩んだ。

(今だ!)

その瞬間、ハルは刀を挟んでいる両手を手前に引いた。

「っ!？」

自然と、少女の身体が前のめりになる。

そして、

「ごめんっ!」

ハルは前に突き出された少女の頭に、思いつきり頭突きをかました。

〈第8話〉

ガツン、と鈍い音が森の中に響く。

(どうだ！)

頭の痛みを我慢しながら、倒れこもつとする少女に目を向けるハル。

(頼むから、気絶しててくれよ)

心の底からそう願った。

しかし、

(っ！？)

少女は踏みとどまった。

つまり、意識は飛ばされていない。

(浅かったか！)

その瞬間、二人は同時に動いた。

ハルはすぐさま後ろに跳び、少女は右手の刀を振った。

「……………」

「……………」

ハルと少女の間に距離が生まれ、ほんの少しの間だけ、静寂が訪れた。

「……………やっぱり、そんなに上手くいくわけないか」

そう呟いたハルの腹から、血が噴き出す。

少女の刀を完璧には避けきれなかったのだ。

「はは……………やっぱり痛いな」

脂汗をかきながら腹を押さえるハル。

その横一筋の切り傷はそれほど深くはないが、無視できるレベルではない。

「……………痛み分けた」

顔を上げた少女の額からも、頭に巻いたハチマキが真っ赤に染まるほど、血が流れている。

意識こそ失わなかったが、十分なダメージは受けたようだ。

「……一つ、いいか？」

「？ 何ですか」

「何故、氣を使わない？」

低い声で問う少女。

その声色には苛立ちと怒りが含まれている。ハルが手を抜いていると思っっているのだろう。

「……俺、育った環境が少し特殊なんで、そういうのが出来ないんです」

そんな少女の心境を読み取ったハルが、慎重に言葉を選んで答える。

「出来ない？ ……手を抜いているわけではないと？」

「はい。誓って」

少女の目をまっすぐ見て、ハルは言う。

「……そうか。だったら、私はお前に謝らないといけないな」

「？ 何にですか？」

「お前が手を抜いていると思ったことに。それと」

(……空気が変わった)

ハルの背中を冷や汗が垂れる。

「私が手を抜いていたことをだ」

少女の氣が、辺りの空気を刺激して、パチパチと木々が震える。

「悪気はなかったのだが、すまなかったな」

「いえ……」

ハルの汗は、止まらない。

「私の名前は【冬樹五月】^{ふゆき さつき}。お前は？」

「……天城ハルです」

「天城か……これで、私達は対等になった」

ほほ笑みながら五月は刀を構えた。

「言っておくが、今の私は強いぞ」

「……でしょうね」

この緊張感では、ハルも軽口を叩くことが出来ない。

一迅の風が流れ、小さな枝が二人の中間に落ちた。

「ふっ！」

「っ！」

ハルは身体を引いた。瞬間、左肩から右のわき腹にかけて、一筋の切り傷が生まれ、血飛沫が飛んだ。

ハルの前には、刀を振り切った体勢の五月がいる。

（くそっ、避けきれなかった）

歯を噛み締めるハル。

五月の動きは確かに速かったが、見えなかったわけではない。腹の傷を差し引いても、避けられる攻撃だった。

だが、気圧されたのだ。

（気迫が違う……これが、冬樹さんの本気）

今の五月でも、ルークの半分の力もないだろう。しかし、ルークの半分の力と今の五月が同等か、と言えば、そうではない。絶対に勝つという気持ち、レベルを格段に上げるのだ。

（これは……一瞬でも気を抜いたら、やられる！）

幸い、今の一撃の傷口は浅いので、動きに支障はない。

五月の刀が、再度、ハルに迫る。

（落ち着け、無駄に昂ることなく、冷静に、自分を見極める）

「桜舞」

「!？」

五月の攻撃が、すんでの所で避けられる。

「ふっ！」

ハルの掌低が、五月の顎を襲う。

それを、顔をずらしたただけでかわした五月が、刀を横に薙ぐ。

しゃがんで五月の刀をやりすごすハル。

(攻撃が当たらない。あの傷でこの動きか……流石に、やるな)

(やばいな……腹だけじゃなくて、肩の傷も開きかけてる)

何度かそんな攻防が続き、二人は互いに距離を取った。

(普通の攻撃では駄目か……ならば!)

足に力を込め、ハルの頭上に跳んだ五月が、

「うけん雨剣」!

連続突きを放った。

「そういうのを避けるのは、得意ですよ」

焦ることなく、舞うようにそれらの突きを全てかわしていくハル。しかし、この攻撃が避けられることは、五月も百も承知だ。

「なら、これはどうだ!」

「!?!」

上を見上げたハルは、空中で、足に力を溜めている五月を見た。

(あれは、確か『くうほそく空歩速』だっけか。足に氣を溜めて空気の層を、つて……ヤバイ!)

「いっほんあめ一本雨」!

五月は、爆発的な脚力で空中を蹴り、自分の身体ごと、渾身の突きを放った。

(受け……絶対無理!)

ハルはその場をすぐさま離れた。

一瞬後、五月が轟音をたてて地面に激突する。

衝撃波が辺りに撒き散らされ、周囲の木々が大きく揺れた。

「ぐっ!」

衝撃の煽りを受けたハルが、巨木に身体を打ち付ける。

「はあ！」

五月は後を追う形で跳びあがり、刀をふるった。

「!?!」

足に力を込め、ハルは地面に向かって跳んだ。

直後、巨木が五月の刀で真つ二つにされた。

(よ、容赦無しだな……下手したら、死んでるぞ。って)

「またかよ！」

五月は、先程と同じように、空中で足に力を溜めている。

(しかも、こっちは空中で身動きがとれない！)

「終わりだ！」「一本雨」!

一つの巨大な矢と化した五月が、ハルを襲った。

(くそっ！……一か八か！)

ハルは目を閉じ、足に意識を集中させる。

そして、五月が一撃目と同じように、轟音をあげて地面に激突した。

「……………」

砂煙が立ち上る中、五月はゆっくりと立ち上がり、下を見る。

そこに、ハルはいない。

(まさか……)

「いって〜」

「!」

声のした方を向く。

その先には、木に身体をぶつけたハルがいた。

「……………空歩速が使えたのか？」

「いえ。前に何回か見たことはあったんですけど、やったのは初めてです。まあ、勢い余って木にぶつかっっちゃいましたけど」

ハルは苦笑しながら、地面に降りた。

(……………私の刀は確かに天城に当たった。だが、その瞬間、私が視認出来ない速さで、こいつは空を移動した。しかも、殆ど溜め無しで、だ。……一体、あの一瞬で、どれだけ爆発的な氣を使ったんだ)

刀を握り締める五月。その口元が緩む。

(面白い)

五月は構え直し、ハルに目を向けた。

「さあ、行く……?」

そこで、ハルが斜め上を向いていることに気付いた。

明らかに、よそ見をしている。

(なん、っ!?)

恐ろしいプレッシャーを感じ、すぐさまハルと同じ方に目を向けた五月が、その人物を見て、

「……最悪、だ」

と呟く。

(同感ですよ、冬樹さん)

先にその人物に気付いていたハルが、自分の運の悪さを呪いながら、五月の呟きに同意する。

「……………」

二人の目線の先では、最強の鬼が、口元に笑みを浮かべながら、二人を見下ろしていた。

〈第9話〉

(これは……マズイ。非常にマズイ)

黒スーツの女性を見上げているハルは、相手と自分の力量の差に改めて驚愕していた。

(あのルークって人が、優しく見える)

もちろん、ハルはルークにもどう足掻いても勝てないが、目の前の女性はそれ以上の化け物だった。

(……とんでもないな)

思わず、苦笑してしまうハル。こんなことを感じたのは、怒った竜を前にした時以来であった。

隣にいる五月も、ハルと同じ様なことを思っているのだろう、顔から汗が噴き出している。

そうして、三人のらみ合いがしばらく続いた。

誰も、動かない。

ハルと五月は、動けない。

「……さて」

唐突に、女性が呟き、二人は限界まで神経を研ぎ澄ました。はずなのだが、

「がっ！」

気付いた時には、ハルの隣にいた五月が吹き飛ばされていた。

そして、その場には、拳を振りぬいた状態の女性が立っている。

「っ!？」

ハルの全身に緊張が走るのと同時に、女性と目が合った。

(来る!)

直後、女性の右腕がハルの顔面を襲った。

「くっ！」

その豪速とでも言うべき攻撃を、ギリギリで避けるハル。顔の横を、突風が吹きぬけた。

(よく避けた、俺！)

そのまま、間を置かずに、ハルは右の拳をカウンターとして繰り出す。

すんなりとカウンターが出たのは、反射に似た行動だったのだらう。

しかし、今回はそれが災いした。

「甘い」

女性は、そつ、と左手をハルの右腕に添えて、簡単にその軌道を逸らせてみせた。

(っ！？ 完全に見切られてる！)

お互いの腕が交差し、再度目が合い、女性が呟いた。

「確かに……良い目をしている」

「っ！？」

女性は交錯した右腕を曲げ、ハルの右腕を自分の腕と肩で固定した。

(やばい！ 動きが！)

ハルは自由な左腕で女性の顔を狙った。

だが、やはり女性のほうが何枚も上手だった。

「腕に気を取られ過ぎだ」

単純な足払い。

「っ！ が！」

それだけで、ハルは簡単に倒されてしまった。

(馬鹿か俺は！)

自分の注意力の散漫さを悔いるが、もう遅い。

背中から倒されたハルの顔に、女性の左拳が迫る。

(っ！)

ハルは、ありつたけの気を左腕に集め、女性の腕を寸での所で掴んだ。

女性の攻撃が余りにも速かったので、ハルの顔を中心に突風が発生した。

「ほお」

少し驚いたような声をあげる女性。まさか、止められるとは思わなかったのだろう。

(と、止められた)

ハル自身もこれには驚いていた。

この時、素人と言ってもいいハルがかなりの密度の気を操れたのは、五月との闘いで 空歩速 が成功したこと、持ち前のバトルセンスがあったからだろうが、それだけではない。

「火事場の馬鹿力、と言うやつか」

窮地に陥った者が、普段では考えられない力を発揮する。潜在能力、という奴である。

今の動きは、殆ど無意識的にその潜在能力を行使した結果だった。だから、ハルも驚いている。

「……………」

自分の左腕と、女性の左腕を、ハルはじっと見た。この時のハルは、 違う意味 で驚き、困惑していた。

(今の……………?)

「ぐっ!」

そんなハルを、女性は無造作に蹴飛ばした。

「さっきのは、中々の集中力だったぞ。天城ハル」

「はあ、はあ……………俺の名前を……………」

「さっき、男の鬼とやり合っただろう」

ハルの頭にルークの顔が浮かんだ。

「それに、もう一人、お前の知り合いからな」

「……………ミキさん、ですね」

「そうだ。昨日、ミキがお前のことを楽しそうに話すから、私も興味が出てきてな」

(……………恨みますよ、ミキさん)

ため息をつくハル。しかし、その表情は、柔らかい。

「でも……………そうですね……………うん」

ハルは何かを納得し、頷いた。

「ミキさんの名前を聞いて、少し落ち着きました。やっぱり、今の俺にはあの人がいないと駄目みたいですよ」

自嘲気味に呟くハルだが、その雰囲気には恐怖や緊張は窺えない。

「落ち着いて……それで、どうするんだ？」

「変わりませんよ」

腕組みをしながら尋ねる女性に、ハルはほほ笑み、腰を少し落として答えた。

「やれるだけやる、です」

「……ふん……面白い」

女性は口を緩め、腕組みを解いた。

「【神埼玲奈^{かんざき れな}】。私の名前だ。とことん付き合っただけ……来い」
「行きます……ふっ！」

ハルは脚に氣を溜め、一息で玲奈に近付き、右脚の蹴りを放つ。自分の意思で氣を操ったハルの速さは、今までとは段違いだった。

（やっぱり、あの感覚が氣の応用だったんだ）

空歩速を使った時と、ついさつき無意識に氣を操った時で、ハルは氣の使い方を理解していた。

（これだったら！）

防御された蹴りに続いて、左手に氣を溜め、玲奈の腹目掛けて振り抜く。

しかし、いくら氣の応用を理解したとは言え、それが付け焼刃である事に変わりなかった。

「遅い」

「っ！？ がっ！」

ハルは玲奈の右拳を腹に受け、吹き飛ばされてしまう。

（明らかに、俺より出だしが遅かったのに！）

ハルは、一瞬前まで玲奈の右手が腰元にあったのを、確かに見ていた。しかし、ハルを遙かに上回る速さで、玲奈は拳を振り抜いて

いた。左肩の怪我を差し引いても、玲奈の速さには遠く及ばない。
着地し、口元を拭うハル。

(そもそも、根本的なレベルが違いすぎるんだから、やっぱり何か
考えないと)

しかし、玲奈はルークのように、魔法を使う気配もないし、「桜
舞」を使う隙も与えてくれない。

(桜舞は、大振りの攻撃と数の攻撃を避けるの専門だからな。だか
らと言って、逃げられるはずもないし……だったら)

ハルはゆっくりと息を整え、静かに、その場から 消えた。
「ほお」

音も、気配も消して移動するハルに、玲奈が驚く。

(氣の応用が素人とは思えないな……さて、どうするか)

一見、その場にいるのは玲奈だけに見える。だが、冷静に、息を
殺して、ハルは攻撃の機会を窺っていた。

「……………」
そして、玲奈が右手を横に突き出したのと同時に、パンと音が
鳴った。

ハルの攻撃が防がれた音だ。

「く、そ！」

ハルが右腕を突き出しながら歯を噛み締める。

「ルーク先生とミキが、お前を天才と言った理由がわかったよ」

だが、玲奈は意外にもハルを褒めた。

「今の一瞬で数十もの攻撃パターンを『私に予測させた』。中々出
来ることではない」

(やばっ！)

玲奈の左手が動いたのを見て、ハルがその場を跳び退こうとした
が、

「だが、まだまだ、だな」

「が、ああ！」

その前に、玲奈の拳が五発叩きこまれた。

(ま、全く見えなかった)

身体がよろけ、意識も飛びそうな中、ハルは玲奈の右拳に力が溜められているのを見た。

(あれを……食らってたまるか！)

歯を食いしばり、腹から、肩から出血するのもお構いなしに、ハルは右手に全ての力を込める。

「ああー！」

瞬間、ハルの右拳と玲奈の右拳が真つ向からぶつかった。

地面が陥没し、そこを中心に衝撃波が撒き散らされる。

「はあ、はあ」

「本当に……面白い奴だ」

今の玲奈の一撃は、かなり力を込めた、ハルでは絶対に耐えられない攻撃のはずだった。

しかし、ハルはその攻撃を真正面から迎え討ち、相殺した。

「……はあ、はあ」

息の荒いハル。もう限界をとくに超えているのだろうが、その目は未だに闘争心に燃えている。

「……いいだろう」

そこで、玲奈が口を開いた。

「お前の気概に敬意を表して、私の本気を見せてやる。ありがたく思え。こんな事をするのは、お前が初めてだ」

「？」

その言葉の意味をハルが理解した頃、彼は遙か上空にいた。

「……へ？」

思わず、間抜けな声が出てしまう。

目の前に広がるのは、大きな青空。地面に足がついていない。理解出来ない状況の中、感じるのは、背中 of 激しい痛み。

(……もしかして……吹き飛ばされたのか、俺)

玲奈が、ハルの感知できるレベルを遥かに超えた速さと力で、ハルを上空に吹き飛ばした。そうとしか思えなかった。

(だとしたら……本当に……化け物……だな)

疲れやら、痛みやら、今の状況やらで、段々とハルの意識が朦朧としてきた時、玲奈の声が聞こえた。

「安心しろ。殺しはしない……精々、半殺しだ」

(全然安心できない。それにしても、本当に……世界は広い)

ハルが心中でそんな事を思った瞬間、ハルは上空から一瞬で地面に叩きつけられ、意識を失った。

〜第10話〜

「あ、あの。し、東雲さん、少し落ち着いたほうが」

「いーえ！　これが落ち着けるもんですか！　玲奈ったら、ハル君にこんな事をして……絶対に許さない……ふふ……どうしてくれよう」

「うう……怖いよ、お兄ちゃん」

「あ、ああ。俺も、こんなビビったのは、里奈がマジギレした時以來だ」

(……何だ……?)

意識がハッキリとしないハルの耳に、覚えのある声が聞こえてくる。

(……俺、何してたんだっけ……)

目を開けることさえ、気だるい。だが、ハルは必死に記憶を手繰り寄せた。

(……東京に来て……不良から女の子を助けて……ミキさんに会って……桜楼の試験を……あ、桜楼の試験だ)

ようやく思い出し、今度は現状を確認する。

(地面がふかふか……ベッドに寝かされてるのか……節々が痛い……派手にやられたからな)

玲奈にやられた場面を思い返し、よく生きてたな、と心中で苦笑する。

「天城さん、起きませんね」

(この声は……蓮華さんか？　来てくれたんだ)

「大丈夫よ、蓮華ちゃん。あの医者さんの腕は確かだったから、もうすぐ目を覚ますわよ」

(ミキさんもいるのか……これは、二人にいつまでも心配かけるわけにはいかないな)

徐々に気だるさも薄れてきたので、ハルはゆっくりと目を開けた。

まず目に入ったのは、真っ白な天井と眩い光を放つ電灯だった。

「……眩し」

「お、気付いたみたいだぞ」

「え、あ……よかった」

蓮華は心底安堵したように息を吐いた。

「ハルく〜ん！」

光よりも速く、ミキはハルに抱きついた。

「いった！ 痛いですよ、ミキさん！」

「痛いのは生きてる証拠だよ〜！」

「それはそうですね……あー！ ちょっと離れて下さい！」

ミキを引きはがしながらハルが身体を起こすと、目を点にする楠木兄妹と目が会った。

「えっ、と……見苦しい物を見せてすみません」

「え、いや、そんな事はないけど……」

「今までと全然違うから……ちょっとな」

ハルが起きるまでのミキは、クールで少し恐いお姉さんだったが、
だが、今は、

「ハルく〜ん」

ハルに寄り添って甘える、ダメダメなお姉さんになっていた。

（ギャップが……）

（物凄い二面性だ……）

「あ、あはは……そ、そうだ！ 二人とも見に来てくれてたんですね」

分が悪いと思ったハルが、話題を変える。

「あ、うん。……昨日、約束したから」

頬を赤くする蓮華。モジモジと手を空中にさ迷わせている。

「あれ……蓮華さん、昨日と少し雰囲気違いますね」

「え！？ そ、そうかな？」

「はい……なんだか、凄く女の子っぽいと言っか……」

表現すべき言葉が見つからないハルが、蓮華をじーっと見つめる。

「……うう」

蓮華が顔を真っ赤にして俯くと、ハルが手を打った。

「あっ、服が違うんだ。今日のは、何か可愛いですね」

「か、可愛い！？ うっ、うっ」

蓮華はよろけながら近くの椅子に座り込んでしまった。

闘いの後で若干ハイな気分のハルは、今のようなことを恥ずかしがりもせずに、平気で言ってしまう。

「れ、蓮華さん？ 大丈夫ですか？」

「だ、大丈夫です……ただ、す、少し落ち着かせて下さい」

「は、はあ」

ハルは全く気付いていないが、俯いた蓮華の顔はこれでもかと言うほど真っ赤になっている。

絵梨に頼んだ甲斐があったというものだが、本当にそんなことを言われるとは思っていなかった。

「健吾さんも、ありがとうございます」

「気にするな。面白いものが見れたから、来てよかったと思ってるぐらいだ」

「面白い物、ですか？」

「ああ」

(主にお前のことだが)

とは、言葉に出さない。

「？ ……そう言えば、ここって？」

辺りを見渡したハルの目に映ったのは、白い壁と床、いくつも並べられたベッドにそれらを分けるカーテンだった。

「桜楼学園の保健室よ」

答えたのは、ほんの少し冷静さを取り戻したミキだった。

「桜楼……ここって桜楼の中だったんですね」

「ええ。ハル君が倒れてから、軽く数時間は経ってるのよ」

「そうですか……あれ」

そこで、ハルは気付いた。あと一人足りない事に。

「千さんは？」

「千ちゃんなら桜楼の生徒会長さんと話してるわよ」

「え？　なんで千さんが……？」

「あの二人、そこそこ仲いいからな」

ハルの疑問に健吾が答える。

「そうなんですか？」

「ああ。なんせ、桜楼学園と『天楼学園』てんろうの生徒会長同士だからな」

「天楼学園の……生徒会……ええ！？」

「久しぶりだな、千」

「久しぶり……里奈」

桜楼学園の屋上に、二人の少女の姿があつた。

一人は、桜楼学園の生徒会長、風谷里奈。

もう一人は、桜楼と同じ五学園の一つ　天楼学園　の生徒会長、

御柳千。

二人は互いの実力を認めあつたライバルであり、親友でもあつた。

「しかし、観覧席でお前を見た時は、正直目を疑つたぞ」

「……ハルの応援」

「ハル……天城ハル、ね」

里奈は二人が名前で呼び合う仲ということに驚いたが、顔には出さなかつた。

「あいつ、何者なんだ？」

「わからない」

「？　知り合いなんだろう？」

「うん……昨日、知り合った」

「き、昨日？ 昨日知り合っただけで、応援に？」

「……………」
頷く千。

「……まさか」

これには、流石に里奈も驚きを隠しきれなかった。

里奈の知る限り、千はとてどもドライな人物だった。何があっても
ローテンション。滅多なことでは、感情を面に出さない。

そんな千が、たったの一日で、男にここまで気を許している。

(……どんな心境の変化があったんだ？)

里奈がそう思っても、仕方がない。

「……里奈」

「ん？ 何だ？」

「ハルは、合格？」

「それは……まだわからない」

(十中八九、合格だろうけど)

「そう……もし、合格したら、ハルをよろしくね」

「あ、ああ」

苦笑気味の里奈。あまりにも、自分の知っている千と違いすぎた。
(蓮華にしろ、千にしろ……天城と関わったやつが全員変わっている)
それが良い傾向なのか、悪い傾向なのか、今の里奈では判断がつか
なかつた。

「そろそろ、ハルが起きる頃だから……行く」

そう告げ、千は屋上の出口へと歩き始めた。

「……千！」

「？」

そんな千の背中を見ていた里奈の心にある疑問が浮かんだ。

「天城が桜楼に合格したとしたら『お前と天城が闘う時』がおそらく来る……そうしたら、お前は どうする？」

この時、千が見当違いの答えを口に出したら、里奈は千の評価を改めようと思っていた。高慢な考え方だが、里奈にとって千は最高のライバルでなくてはいけなかった。

しかし、千は里奈の問いに ほぼ笑んで 答えた。

「楽しみ」

一言そう言って、千は屋上を後にした。

一人残った里奈は、

「……はは」

楽しそうな、本当に楽しそうな笑みを覗かせた。

（あいつは変わってない）

千の笑みは、優しさを含む、しかし同時に、背筋を凍らせるような、そんな笑みだった。

（あんな笑い顔を見たのは、久しぶりだな）

千は変わっていない。今も、自分が最高に楽しめる 闘い を求めている。

（本当に、天城との闘いを楽しみにしてるんだな……）

その時、里奈の心にある感情が生まれた。

千の笑みが自分に向けられなかったことに対しての、嫉妬だ。

（ふふ……面白い）

だが、里奈はそんな嫉妬の念さえ、楽しんでいた。

〜第11話〜

場所は再び保健室。

屋上のやり取りなど知る由もないハル達は、世間話に花を咲かせていた。

「いつ三人は知り合っただんですか？」

三人とは、楠木兄妹とミキのことだ。

「保健室だよ」

「天城さんが運び出された時に、バツタリ会って」

落ち付きを取り戻した蓮華も話に加わっているが、まだ頬は少し赤い。

「そうそう。でも、ハル君が東京に来てたったの一日で、こんな可愛い娘と仲良しになるなんてね」。このスケコマシさん」

「ス、スケコマシ？」

（死語だろ、それ）

と思った健吾だが、恐いので口には出さない。

「か、可愛いなんて……」

そして、蓮華はまた頬を赤くしていた。

「ああ〜可愛い〜」

どおうやら、それがミキのつぼにはまったらしい。頬に手を当ててほんわりしている。

「はあ……ミキさん、言っておきますけど」

「わかってるわよ、ハル君。蓮華ちゃんを助けてあげたのよね。流

石、私のハル君」

「誰がミキさんのですか」

抱きつこうとするミキを、ハルが押し留める。

「……………」

そんな二人やり取りを見て、蓮華はある思いを抱いた。

（何でだろう……二人のやり取りを見ると……胸が……痛い）

そんな蓮華の視線に気付いたミキが、ニツコリと笑った。

「大丈夫よ、蓮華ちゃん。私はハル君のものだけど、ハル君は誰のものでもないから」

「え……な、何言ってるんですか！」

アタフタする蓮華とクスクス笑うミキ。

実は、ミキは微妙に蓮華の心を深読みし過ぎていたのだが、『もの』という言葉に敏感に反応している蓮華は、そんな事には気付かなかった。

「ミキさんも誰のものでもないでしょうが」

ハルが呆れ気味に呟くと、保健室のドアが開いて、千が入ってきた。

「あ、千さん」

「ハル……もう、大丈夫？」

「はい。まだ節々は痛いですけど、どうってことありません」

「そう」

無表情の千だが、その言葉には安堵の色が窺えた。

「うちの会長は？」

「多分……上」

「そうか……こいつの結果を知ってると思ったんだが」
健吾がハルを指差す。

「そう言えば、どうなったんでしょうね？」

「そんな他人事みたいに」

「ミキが呆れていると、再度保健室のドアが開いた。

「結果なら、私が知ってるぞ」

「え？ あ」

保健室に入ってきた人物、神埼玲奈を見て、ハルが少し顔を青くする。どうやら、玲奈に対するトラウマが植え付けられてしまったようだ。

「なんだ、勢ぞろいだな」

玲奈は試験の時と変わらない、スーツ姿のままだ。疲れている様

子も、怪我をした風でもない。それどころか、スーツには傷一つついていない。

(……俺がこんなだったのに)

自分の身体の傷跡を見て、ハルはもう苦笑するしかなかった。

「ん……ほお、珍しいのもいるな」

千に気付いた玲奈が、少し驚いた顔を見せる。

「……………」

やはり無表情のまま、千は少し頭を下げた。

「……………」で、何でお前がいるんだ、楠木」

しかし、玲奈は千に何かを言うでもなく、健吾に話を振った。

「こいつとは、ちよつとした知り合いでして」

普段とは違う、恐縮した様子で、健吾が答える。

「そっちは？」

玲奈が健吾の隣の蓮華に目を向けると、蓮華は大慌てで頭を下げた。

「は、は、初めまして！ く、楠木蓮華と言います！ い、いつも兄がお世話になってましゅ！」

緊張やらで、自分が噛んだことすら気付いていない蓮華。しかし、そんな事はお構いなしに、顔は真っ赤だ。

「ああ、お前が……………」

玲奈が何かを納得し、珍しい物を見るような目を蓮華に向ける。

(？ 何だ？)

そんな玲奈に奇妙な違和感を感じたハル。

玲奈は全ての物事に達観しているイメージがあつたので、こんな風に、好奇心な視線を蓮華に向けることが、少しおかしかった。

「お前も桜楼に入るんだつたな。私は相手が誰で、どんな奴だろうと、桜楼の生徒なら特別扱いはしない。覚悟しておけ」

「は、はい！」

厳しい言葉を言われたはずの蓮華は、しかし、嬉しそうに返事をした。

(? ん〜?)

その蓮華の反応も含め、ハルが、なんなんだ、と首を傾げていたが、次の瞬間には、その疑問は記憶の奥底に追いやられた。

「よく、のうのうとハル君に会いに来れたわね、玲奈」

身体の芯が震える、地獄の底から響いたような声が、ハル達を硬直させた。

「ん？ 何だ、居たのか、ミキ」

そんな中、玲奈は普段と変わらない調子で、ミキに目をやった。

「ふ、ふふ……その口、今すぐ閉ざしてあげましょうか」

ミキは相も変わらず、低い声で言う。

俯いているので、ハル達は表情を窺えないが、恐らく、蓮華が見たら気絶してしまうだろう。

「？ 何怒ってるんだ？」

それでも、玲奈はいつも通りだ。

「ハル君に傷が残ったら……どうする気よ」

「……そういうことが」

玲奈はハルを見て、ようやくミキの怒っている理由がわかった。

「仕方ないだろう。そういう試験なのだから」

「だからって、最後のあれはなによ」

玲奈が本気を出して、ハルを叩きのめした事だ。

「ああ、あれは……なんとなく、だな」

その言葉で、ミキの堪忍袋の緒が切れた。

「なんとなくて……ハル君を傷つけるなー！」

「ちょ！ ミキさん！」

「……落ち着いて」

玲奈に飛びかかろうとするミキを、ハルと干がなんとか抑える。しかし、玲奈はほほ笑んで、ミキを挑発する。

「前の続きでもするか？ あの時決着がつかなかったしな」

「やってやるうじやない！」

「神埼先生も挑発しないで下さい！」

「……もう、無理」

いよいよハルと千ではミキを止められなくなってきた。

「まあ、冗談は置いといて。……暴れてもいいが、これがどうなっても知らないぞ」

玲奈が左手に持った紙をヒラヒラさせる。

「？ 何よそれ」

「天城の合格通知書だ」

「俺の……？」

目を凝らしたハルは、紙に自分の名前と合格の二文字が書かれていることに気付いた。

「本当だ……」

「や……やりましたね、天城さん！」

蓮華が自分の事のように喜ぶ。

「う、うん」

だが、今の状況であっさりと告げられたハルは、微妙に喜びきれなかった。

「審査員の満場一致だな。これは誇っていいぞ。……で、どうする、ミキ？ ここでお前と私がやり合ったら、この紙が消し炭になるかもしれないぞ？」

「うっ！ うう〜！ 卑怯よ、玲奈！」

「何とでも言え」

悔しそくに歯噛みするミキと、涼しい顔の玲奈。

この光景に、健吾とハルは心底驚いていた。

（あの神埼先生がこんな楽しんでそうに人をからかうなんて……）

（あのミキさんがやり込められるなんて……）

（（凄い物見たな））

「あの、ミキさん？」

「ちよつと待って、ハル君。今、どうやってあの紙を護りながら、玲奈を叩きのめすか考えてるから」

「叩きのめすって……俺は大丈夫ですから、落ち着いて下さい」「でも」

「怪我は治してもらいましたし……俺は、ミキさんがそこまで心配してくれたってだけで十分ですから」

「ハル君……」

ハルの笑顔を見て、ミキも冷静さを取り戻した。

「そう、ね……わかつたわ」

目を閉じて、息を整えたミキが、玲奈を睨む。

「今回はハル君に免じて許してあげるけど、学園でハル君をいじめたりしたら、今度こそ許さないからね」

「はいはい。肝に銘じておくよ」

クツクツと笑う玲奈。

「……なあ、東雲さんって何者なんだ？」

「それは……あはは」

何と答えてよいかわからず、曖昧にほほ笑むハル。

「さて……天城ハル」

今までと違う、厳かな声でハルを呼ぶ玲奈。

自然と、保健室が緊張に包まれる。

「お前を桜楼の特別入学生として迎える。努力を怠らず、才能を開花させて精進せよ」

「は、はい！」

玲奈から合格証を受け取ったハルの顔が綻ぶ。

周りを囲むミキ達も、そんなハルを温かい目で眺めている。

「始業は三日後だ。それまでしつかり休め」

「はい……あの、神埼先生、一ついいですか？」

「何だ？」

「あの……冬樹さんはどうなりました？」

「気になるのか？」

「ええ。まあ……初めて、正々堂々闘った人なんで」

ちなみに、ルークは実力が違いすぎるし、ハルは最初から逃げるつもりだったので、正々堂々とは言えなかった。

「本当は非公開情報なんだが、まあいいだろう。冬樹五月も合格だ。

……あいつも、生い立ちを考えたら当然の結果なんだがな」

「生い立ち？」

「……なんでもない」

玲奈は明らかに、言いすぎた、という顔をした。

「？」

「なににせよ……お前達には、特に、容赦しないから、覚悟しておけよ」

特に、を強調して蓮華とハルに告げて、玲奈は保健室を出た。

「嬉しいはずなのに……今の一言で凄い憂鬱になっちゃった」

「私もです」

ハルと蓮華は同時にため息をついたのだった。

〜第12話〜

「ただいまー」

「ただいま」

「た、ただいま」

ミキ、千、ハルがそれぞれ雲月荘に入る。

「……ハル、大丈夫？」

「は、はい。なんとか」

口ではそう言うが、今にも転びそうに廊下を歩くハル。

表面的な怪我は殆ど治ったが、内面的な、氣の応用の反動は流石に治らなかった。

(こ、こんなに身体がだるくて痛くなるなんて……明日、もっと酷くなりそうだ)

「肩、貸す？」

「い、いえ。雲月荘の中では大丈夫です」

「そう」

ここまで何度か千とミキに肩を貸してもらったハル。家の中でまで、二人の手を煩わせることは出来なかった。

身体を引きずりながら居間に入ったハルが、ゆっくりと腰を降ろす。

「ふう」

「ああ〜〜!!」

「!?!? な、何!?!?」

が、その叫び声を聞いて、すぐに跳び上がった。

「……? 何?」

部屋に戻っていた千も、その声を聞きつけて居間に入ってきた。

「台所から、ミキさんの叫び声」

ハルがそこまで言うのと、居間と台所を隔てる襖が開て、苦笑気味のミキが顔を覗かせた。

「ミキさん？ どうかしたんですか？」

「……食材が全く無い」

「食材……ああ」

千が納得して頷く。

「昨日、使いすぎた」

「昨日？ ……あ、もしかして、俺の歓迎会で？」

「……うん」

ばつの悪い顔をするミキ。ハルも同じような顔になっていた。

「……ごめんなさい」

「は、ハル君は悪くないのよ！ 私が張り切りすぎちゃっただけだから！」

「でも……俺、買ってきますよ」

「その身体で？」

「うっ」

千の言葉で身体の痛みを思い出し、ハルは膝から崩れ落ちてしまった。

「……私が行く」

千が、仕方ない、といった感じで居間を出ようとする。

「あ、私も行くわ、千ちゃん」

ミキも慌ててその後を追った。

「あの……俺はどうすれば？」

「ハル君はお風呂にでも入ってて。すぐに帰ってくるから」

「行ってきます」

「行って……らっしやい」

千とミキが慌ただしく居間を飛び出し、一人座りこむハル。

（な、情けない）

そうは思っても、ここから近くの店まで身体がもつとは思えなかった。

（それに、お店の場所も知らないし……はあ、本格的に情けない）
しばらくその場で俯いていたハルが、ゆっくりと慎重に腰を上げ

る。

「いつまでも沈んでるわけにはいかないし……ここは、お言葉に甘えて風呂に入るか」

そう言っつて、ハルは重い足取りで自分の部屋に向かったのだった。

「昨日も思っただけど……広いな」

板張りの風呂場は、軽く十人程入りそうなほど大きい。

しかし、雲月荘は元々どこかの学園の女子寮だったので、大浴場のここは大きくて当たり前なのだ。

「けど……一人で入るのはちよつと寂しいよな」

かと言っつて、ミキヤ千と入るのは論外だ。

「……ミキさん達が帰る前に終わらせちゃおう」

傷口が染みるのを、涙目で我慢しながら身体を洗い、十分に清潔にしてから、大きな浴槽に身を浸した。

「ああ……。滅茶苦茶染みて痛いけど、生き返る〜」

タオルを頭の上に載せ、ハルは浴槽の中で身体を投げ出した。それでも、やはり浴槽には十分なスペースが余っている。

「しかし、今日は疲れた」

ようやく人心地ついて、改めて疲れを実感していた。

「けど、学んだことも多かつたな」

右腕を上げ、氣を収束させてみる。

そうすると、自分の右腕に力が溢れていくのを、文字通り、肌で感じる事が出来た。

「……………」

試しに、ハルはその拳を、水面に叩き付けた。

パン！

甲高い音が風呂場に響き、浴槽の湯が弾け飛ぶ。

(……軽くやっただけで、これか)

浴槽に溜まっていた四分の一ほどの湯が、壁や天井に叩きつけられていた。

(使い方を間違えないようにしないと)

この力は、人を簡単殺すことも出来る。

(力に溺れないように……竜国にいた時によく言い聞かせられてたな……力に固執して『魔に墮ちるな』って)

この世界には、古来から 魔物 が存在している。

知性をもつものいれば、持たないものもいる。そのどちらにも共通しているのが、人間と、自然と、世界を脅かしていることだ。

そして、一〇二世紀前まで、 獣人 や 竜族 やその他の、人間以外の種族は、魔物の亜種だと思われていた。それが元になって、戦争に発展したこともある。

今ではそれが全くのデタラメだと解明出来て、事態も沈静化してきたが、その問題で根強い遺恨を残している地域もある。

そして、それに代わって今一番の問題になっているのが、人間や 獣人などの、 魔物化 である。この現象は、俗に、 魔墮ち と言われている。

詳しい原因はわかっていないが、心に負のエネルギーを抱え込んだ時や、大きな力を手に入れた時に、 墮ちる と言われている。

ごく稀に例外が発生するが、墮ちた者は二度と元に戻らず、破壊の限りを尽くし、誰かに 殺され なければ、止まることはない。

そして、個々の力だけで国を滅ぼせる竜族だからこそ、力に魅せられることは、 墮ちる ことを意味していた。

(魔墮ちか……)

目を閉じたハルが、苦い顔をする。

ハルは一度だけ魔墮ちの瞬間を見たことがある。

竜国にいたころ、自分の力を世界に誇示したい、と思った一匹の竜が墮ちたのだ。

(あんなのは……二度とゴメンだ)

墮ちた竜は理性を完全に無くし、周囲を無作為に破壊し始めた。

苦渋の決断の末、他の竜がその竜を殺し、最強の力を持った魔竜^{まじゅう}が世に放たれることはなくなった。

魔墮ちの厄介な所は、墮ちた者が莫大な力を持つ事と、魔墮ちが連鎖することだ。

魔墮ちした者が現れば人が死に、殺された者の親友が魔墮ちし、またその親友が魔墮ちしたりと、魔墮ちを繰り返す可能性が高い。

一人が魔墮ちしたことから、一国が滅びた事もある。

(……気をつけないとな……あれ)

そこで、ハルは自分の意識が遠ざかろうとしている事に気付いた。先程の一撃で、全ての体力を使ってしまったのだ。

(やば……風呂場で寝るのは……流石に……マズ……イ)

しかし、疲れきっていたハルに、眠気は物凄い勢いで迫ってくる。

(あつ、あつ……おや……すみ……なさい)

最後には抵抗することも諦め、ハルはその場で寝てしまったのだ。

〈第13話〉

「たっだいま」

「たっだいま」

「……はっ」

玄関の戸が開く音とその声で、ハルは目を覚ました。

「……………」
ボーっとする頭で周囲と自分の格好を見て、おぼろげながら状況を理解するハル。

(俺……風呂場で寝ちゃったんだ……早く出ないと)

完全にふやけ切った頭では、それしか考えられなかった。

浴槽から出て、フラフラとよろけながら出口を目指す。

(ううう、気持ち悪いし、頭痛いし、身体痛い)

手を頭に当て、青い顔をするハルは、全く気付かなかった。

『たっだいま』と言った声が、千とミキのどちらのものでもなかったこと。そして、その誰か達 が、帰ってすぐに風呂に入ろうとしていることに。

「遊佐、遅いぞ」

「お前が早いんだ」

(……ん？ ミキさん達の声……じゃないよな)

出口に手をかける直前で動きを止め、様々な可能性を頭に思い浮かべる。

そして、段々と頭が冴えてきたハルは、違う意味で顔を青くした。

(もしかして……こここの、住人？)

その時、ふいにミキの言葉が蘇った。

「男はハル君だけよ」

(っ！ やばい！)

と思った時には、遅い。

「もう先に入っちまうぞ〜」

浴室のドアが開き、一人の女性がハルの目の前に現れた。

「あ……………」

「ん？」

二人の男女の目が会う。それも、風呂場で。

「……………」

たっぷり数秒沈黙し、二人が今の状況を理解した。

そして、

「う、うわああー！！！」

ハルが悲鳴をあげ、身体を反転させ、水飛沫をあげて浴槽に飛び込んだ。

「あー、お湯がもつたいないぞ」

「ご、ごめんなさい……………じゃ、じゃなくて！　　ま、前を隠して下さいー！」

顔を真っ赤にしながら、ハルが叫ぶ。

女性は先程からその立派な肢体のどこも隠していない。それどころか、男に裸を見られているというのに、全く羞恥心を感じていない。

「隠せて言われても、タオルは遊佐が」

「シンキ」

「ん？　おお、サンキュ」

もう一人の　獣人　の女性がタオルを渡し、ようやく申し訳程度に身体を隠す。

「これでいいか？」

「わわ、わかりませんよ！」

ハルは女性達に背を向けているので、もちろんわからない。

(……………今気付いたけど……………この反応は男女が逆じゃないのか?)

一瞬だけ冷静になったハルがそんな事を思ったが、それに気付いても何の解決にもならないので、今は現状の整理に頭を使うことにした。

「で、彼は誰なんだ？」

「さあ」

「……痴漢か？」

「ちち、違います！ 俺は新しくここに住むことになった」

「あーその前に……私達も入っていいか？」

「は!？」

「何にも着てないから寒いんだよ」

「ななな」

（お、落ち着け、俺！ まず、俺がここから出ればいいんだ!）

「……わ、わかりました。まず俺が出ますから」

「そうか？ 温まったか？」

「じゅ、充分過ぎるほど!」

湯でダコのように顔を赤くしたハルが、目を瞑りながら浴槽を出ようとした瞬間、

「待て」

「っ!？」

一人の女性がハルの背後に回り、首に刃物を押し当てた。

「誰かわからない奴を、このまま帰すわけにはいかない」

女性が呟く。

（この声は、さっきタオルを渡した人か……全く気付かなかった）

気配も、女性が浴槽に入ったことさえわからなかった。

「答える。お前は誰だ？」

腕を捻る女性。ハルが少しでもおかしな動きをしたら、すぐに折れるようにしている。

ハルは落ち着いて、女性に不信感を与えないように答えようとする。

「俺は……」

そこで、気付いた。

「続ける」

「あああの」

女性の、ミキと同じぐらいの、形のいい胸が、背中に押し当てられていることに。

「むむむ」

「む？」

「胸……が」

「胸？」

女性が自分の胸元に目を向ける。

「それがどうした？」

と言つて、女性は腕に力を込めて、首に刃物を押し込んだ。

「っ！？」

それは、さらに女性の胸をハルに意識させることになった。しかも、目を瞑っているため、より形やら柔らかさを感じてしまう。

（わわわ！？ お、落ち着けて俺！）

男としての反応が表に出る前に、ハルの混乱は極致に達した。

（あ……やばい……また、意識が）

浴室の温度やら、沸騰寸前の頭やら、混乱やら、痛みがぶり返し、ハルの意識が再度遠のく。

（どうか……殺されませんように）

最後にそう願い、ハルは気絶した。

「ん？ おい……」

女性が頭を垂らしたハルに声をかけるが、返事はない。

「あゝあ、もしかして殺っちゃったか？」

「いや……気絶しただけだ」

拍子抜けした女性が クナイ をしまう。

「そんなに遊佐が恐かったのか？」

「いや、私に恐怖していた様子はなかった。逆に、途中までは私が感心するほど冷静だった」

「じゃあ、何で……？」

女性が首を傾げる。

「さあ」

獣人の女性も首を傾げた。

「ただいま」

「ただいま」

「お、ミキと千が帰って来た。あいつらに聞くか」

「そうだな」

二人は適当にハルを担ぎあげ、風呂場を出た。

その後、雲月荘にミキの悲鳴が響き渡った事は、言うまでもない。

「ん……あ」

ゆっくりと目を開くハル。この感覚を味わったのは、今日で三度目だった。

（俺、気絶してばかり）

情けなくなり、ハルは心中でため息をついた。

「起きたか？」

「え？ あ……あなたは」

仰向けで寝かされたハルの顔を覗き込んだのは、先程風呂場で会った獣人の女性だった。

「気分は？」

「あ、大丈夫、です」

「そうか」

「あの……ここは？」

「君の部屋だ。すまないが、勝手に入らせてもらった」

「それは、構いませんけど……もしかして、ずっと診てくれたんですか？」

「君が倒れたのは、私達のせいだからな。当然のことをしたまでだ。こんな事を言っているが、彼女がハルの倒れた原因を理解したのは、千とミキに散々説明されてからだった。」

女性はハルの額のタオルを持って立ち上がった。

「調子が戻ったら、下に来てくれ。そろそろ、夕食が出来てる頃だ」

「あ、もう大分回復しましたから、俺も一緒に行きます」
「無理しなくてもいいぞ」

「いえ、大丈夫です……それと、すみませんでした」
立ち上がったハルが深く頭を下げる。

「？ 何故君が謝る？」

「……色々、見ちゃいましたから。あつ、見たと言っても、ハッキリ見た訳ではないですよ！」

アタフタと言いつつ謝じみた事を言うハルの顔は赤い。

「その……すみませんでした」

ハルはもう一度深く頭を下げた。

「ふむ……まあ、別に気にしなくていいぞ。私もあいつも気にしてないからな」

「そう言っつて貰えると、ありがたいです」

あんまり気にし無さ過ぎるのもどうなんだ、とハルは思ったが、余計な事だったので黙っていた。

(ん……そう言えば、俺服着てる……)

その意味をじっくりと考え、ハルは赤面して俯き、

(……後で、もう一度謝ろう)

心の中でそう誓ったのだった。

「んじゃ、まずは自己紹介からしとくか」

夕飯の時間、ハルの正面に座る女性がそう言った。

「私は【シンキ・ローリング】。シンキでいいぞ。よろしくな」
明朗快活な笑顔を作るシンキ。最初に風呂場でハルと会った女性だ。

ちなみに、所々が外にハネた長い髪のシンキは、雲月荘で一番大きな胸をしている。なので、ミキからは若干非難がましい目で見られることがある。

「【暮月遊佐】だ。よろしく」

ハルを看病していた女性。ハルの気絶を後押しした女性でもある。遊佐は首元で長い髪を結び、獣人なので頭に獣耳を生やしており、千ほどではないが、口数の少ないクールな女性である。ミキと同じで、一点が目立っているわけではないが、モデルのような体型をしている。

二人は東京の治安を護る 蒼の騎士団 に所属しており、最強のダブルエースとして君臨している。彼女達に命令出来るのは、騎士団の総司令か、王族ぐらいだ。

更に二人はその容姿と強さから、全ての団員の羨望の的になっており、アプローチが後を絶たない。しかし、二人があまりにもなびかないので、もしかしたら、二人の関係は親友以上なのではないかと噂されたこともある。

もちろん、そんな事はないのだが。

「天城ハルです。女性だけだった所に男が住む事になって、不快な思いをするかもしれませんけど、よろしくお願いします」

「実際、さっきもそうだったしな」

「うつ……ごめんなさい」

顔を引き攣らせたハルが深く頭を下げる。

「あはは。ウソウソ。私達は全く気にしてないから。な、遊佐」

「ああ」

シンキに話を振られた遊佐が頷く。

「と言うより、あなた達が気をつけなさいよ」

シンキと遊佐を睨むミキ。

先程の風呂場での話を聞いてから、機嫌が悪い。

「何で、きちんと確かめもせずに入っちゃうのよ」

「いやー、疲れてたからな」

全く悪びれる様子のないシンキ。

この態度が更にミキの機嫌を悪くしていた。

「はあ……ハル君に変なの見せないでよ」

「変なのとは何だ。騎士団の中では、私のはダントツの人気らしいぞ」

言いながら、シンキは豊満な胸を持ちあげる。

「……………」

笑顔のまま凍りくミキ。

（お、思い出してしまった）

ハルは顔を真っ赤にして俯いた。おぼろげながら、風呂場での光景が蘇ってきたのだ。

「……ハル、顔真っ赤」

「そ、そうですかね」

「見たの？」

「み、見てないと言えば見てませんし、見たと言えば」

「……………」

「……見ました」

「そう」

千はハルから目を逸らし、お茶を一口飲んでから、呟いた。

「変態」

「ご、誤解ですよ！ 千さん！」

ハルは涙目で弁解を始めた。

その後も、騒がしい夕食が続き、色々あったが全員が快く自分を受け入れてくれたことに、ハルは心の底から安堵していたのだった。

〜幕間?〜

「しっかし、驚いたな〜」

夜中、雲月荘の庭に面した縁側に、シンキ・遊佐・ミキの姿があった。それぞれの傍らには、お酒が置かれている。

たまに開かれる、未成年のハルと千は参加出来ない、大人の飲み会の真っ最中だった。

「何が? …… って言うか、その格好ハル君の前では絶対にしないでよ」

シンキはタンクトップに短パンで下着も着けていないという、ハルのような青少年には目に毒な格好をしている。

「そのハルだよ、天城ハル」

ミキの言葉を無視して、シンキがズイッと身体を寄せた。

シンキの胸をこれ見よがしに押しつけられたミキは、こめかみに青筋を立てた。

「ハル君が、何?」

「あいつ、何者なんだ?」

「何者って……私の可愛い息子よ」

「……………」

ウインクをするミキを、シンキがジト目で見る。

「……はあ。で、どういう意味なの?」

「お前が竜国にいた時からの仲なんだから? 竜の世界に溶け込む人間なんて聞いたことがないぞ」

人の世界に溶け込む竜はいるが、とシンキは付け加えた。

「うーん……何者なのかしらね?」

「は?」

「私も……私達も、何でハル君にあんなに惹かれるのか、わからないのよ」

「あいつが何者かわからないのに、惹かれると?」

「ええ」

「ミキは酒を口に含み、ほう、と息を吐く。その様子は、普段と違って妙に艶めかしい。」

「理由なんて考える暇もないほど彼に夢中なのよ、私達は」
「……………」

シンキはミキの言葉の真偽を図る事が出来なかった。

冗談を言っている感じでもないが、到底信じられない話だからだ。

「千の機嫌がいいのも、天城がいるからか？」

「今まで静かに酒を飲んでいた遊佐が話に加わる。」

「あら、気付いてたの？」

「あそこまで饒舌な千は、初めて見たからな」

「ああ、それは私も気付いてたぞ……………何でだ？」

「ミキは顎に手を添え、うーん、と考える。」

「……………一目惚れじゃない？」

「冗談だろう？」

「あり得ない話ではないでしょう？」

「いや、あり得な」

「確かに、あり得ない話ではないな」

シンキの言葉の途中で、遊佐がミキに同意した。

「千も一人の女だし、そういう事もあるだろう」

「そんなもんか？ って……………遊佐、お前も微妙に機嫌よくないか？」

「ん、そうか？」

「ああ……………まさか、天城に一目惚れしたとか言うなよ」

「ちよつとした冗談。『そんなはずないだろう』、と遊佐は返す、

とシンキは思っていた。

だが、

「そうかもしれないな」

そんな言葉を遊佐は口にした。

「ぶふっ!!」

シンキとミキは同時に酒を吹き出す。

「お、お前!? ほ、本気か!？」

「ゆ、遊佐! あなた!」

二人が遊佐に詰め寄ると、くつく、と遊佐が笑う。

「冗談だ、冗談。ふむ……少し酔ったかな」

可笑しそうに言っつて、遊佐は酒を口に運んだ。

「ふう。まあ、機嫌がいいのは確かだけどな」

「……だろうな」

シンキが口元を拭いながら呟く。

(普段のお前はさつきみたいな冗談は言わない……本当に冗談かすら疑わしい)

「はあ、ミキ、千に続いて遊佐まで天城の影響を……なんか疎外感が」

「あら、寂しいの?」

シンキと同じく口を拭いていたミキがからかうように言う。

「まさか。これじゃあ、私がおかしいみたいだからだ。あーあ、こんな事だったら、玲奈のやつも誘えばよかったな」

「玲奈は忙しいから無理よ……それに、玲奈が来てもシンキは疎外感を感じると思っけど」

「……何だ、その意味深な発言は」

「さあーね」

「むう……今日はそれを教えるまで付き合ってもらっぞ!」

「ふふ。とことん付き合っつてあげるわよ」

ミキとシンキが騒ぐのを見て、遊佐は静かに呟いた。

「いつの間にか……私達全員、天城の影響を受けてるんだな」

不思議な奴だ、とほほ笑み、普段より美味しく感じる酒を堪能したのだった。

大人の飲み会は、まだまだ終わらない。

三人の話の中に出てきた神崎玲奈は、現在桜楼の 学園長室 にいた。

「以上が、特別入学試験の結果です」

「ほほ。御苦労じゃったの、神崎君」

玲奈が報告を終えると、椅子に座っている老人が立派な髭をなでながら、劳いの言葉をかけた。

この老人、桜楼の学園長【卜部左門介】うらべさもんすけは、昔は世界で活躍していた人物だが、今は第一線を退き、桜楼の学園長を務めながら隠居生活を楽しんでいる。

「しかし、今回は中々才能溢れる子が入学したのう」

左門介は手元の資料に目を向けながら言う。

「そうですね」

答える玲奈からは、普段の刺々しいオーラは感じられない。

「ふむ、神崎君、何かいいことでもあったのかのう？」

「……………どうして、その様に？」

玲奈が逆に尋ねると、左門介は、ほっほっほ、と笑った。

「何となくじゃよ。爺になると、妙に勘が冴え渡るのう」

「……………」

爺、という単語が、玲奈の昔の記憶を呼び起こした。

もう十年前前の話、玲奈がこの学生だった時もこの老人は 学園長 だった。そして、その時の老齢の先生も、自分がこの生徒だった時にも学園長は学園長だった、と話していた。

一体……………この人は何歳なのか。

そんな考えと懐かしい思い出を頭から取り除き、玲奈は口を開いた。

「確かに、普段より少し気分がいいです」

いつもだつたら絶対に口にしないことを簡単に言う玲奈に、左門介は一瞬目を丸くし、快活に笑った。

「ほっほっほ！ これは本当に機嫌がいいみたいじゃのう。ふむ…その理由は、この少年が関わっておるのかのう？」

左門介は一枚の写真を指差した。

それは、試験の最中に、カメラが自動的に撮ったハルの写真だった。

「それは答えかねますが……彼のこと、どう思いますか？」

「そうじゃのう……若い頃の君やスカッター君にそっくりじゃ」

「御冗談を……彼の才能は、私達『以上』ですよ」

「ほっほっほ。本当に……これから、面白いことが起こりそうじゃのう」

「……そうですね」

二人は顔を見合わせ、ほほ笑んだ。

この二人、そして雲月荘の三人は、天城ハルを中心に東京が、世界が大きく動く事を感じ取っていた。そして、その大変な事態を、楽しもう、とさえ思っている五人は、異常なものかもしれない。

く幕間？く（後書き）

ここまで読んで下さった読者の皆様には、心からお礼申し上げます。

ここで物語は一段落しました。

誤字脱字をなくし、物語の整合性をとるため、自分はある程度文を書いてから投稿する形をとることにしました。

自分の勝手な都合ではありますが、次回の更新の時にも、読んでもらえたら、とても嬉しいです。

自分の拙い文章にお付き合いいただいて、本当にありがとうございました。

〈第14話〉（前書き）

前回の更新より大分日が経ってしまいましたが、なんとか書き上げることが出来ました。

今回の話には色々と長つたらしい説明が多く、読者の皆様の気を煩わせることになってしまおうと思いますが、この物語にそれほど深い設定はありませんので、流し読むだけでも十分理解出来ます。

最後に、私の作品をお気に入り登録して頂いた方々、また、暇潰しに読もうと思って頂いた方々にも、最大限の謝辞を申し上げます。

拙い文章ですが楽しんでいただけたら幸いです。

〜第14話〜

「ん〜、こんな感じかな」

桜楼の特別入学試験から、三日経った。今日は桜楼学園の始業式である。

「変な所は……なし」

ミキから貰った姿見の前で身体を左右に捻るハル。その身は桜楼学園の制服に包まれている。

「よし、行くか」

身なりの確認を終え、ハルは鞆を持って意気揚々と部屋を出た。

「おはようございます」

「おはよう」

「おはよう、天城」

居間には、千と遊佐の姿があった。この光景をハルが見るのは、今日で三回目だ。

（二人、絶対に俺より早く起きてるからな）

ちなみに、シンキは遊佐が起こしに行かないと絶対に起きないらしい。

（あ、千さんも今日は学園に行くんだ）

いつも通り千の隣に座ったハルは、彼女の服がいつもの私服ではなく、初めて会った時に着ていた天楼学園の制服だと気付いた。

「ん……二人とも今日は学園か」

遊佐もハルと千の服がいつもと違うのに気付いたようで、お茶を飲みながら口を開いた。

「千は見慣れてるが、天城も似合ってるな」

「ありがとうございます」

「お前達は今は伸び盛りだからな。学園生活を存分に楽しむといいぞ」

「はい」

この三日で、ハルの遊佐に対する印象は大きく変わった。

最初があんなだったから仕方ないかもしれないが、ハルは遊佐にちよっとした恐怖の念を抱いていた。だが、遊佐は本当はとても優しい大人な女性だとわかったのだ。

(綺麗だし……羞恥心が足りないのが問題だけど)

遊佐とシンキには、女性としての意識が全くと言っていいほど、ない。

薄い寝間着姿で雲月荘をうろろろすることはもちろん、最初のような、風呂場での遭遇事件が何度も起こりそうになった。その度にミキが注意するのだが、改善される気配はない。

(いや、まあ、今まではそれで何の問題もなかったんだろうし、俺が調子を狂わせちゃったのは確かだけど……ちよっとでいいから意識して欲しい)

「ハル……何か、悩み？」

「え……俺、口に出してました？」

ハルの言葉に千は首を横に振った。

「そんな気がした」

「そ、そうですか……まあ、ちよっと贅沢な悩み、ですかね」

「そう……頑張ってる」

そう呟いて、千はお茶を飲んだ。深刻な悩みではなさそうなので大丈夫だろう、と思ったようだ。

(千さんとも一緒に生活してきたけど……俺、千さんのこと何も知らないんだよな)

知っている事と言えば、無表情で冷たそうなイメージだけど、実はとても優しいということだけ。

(あとは……)

「千さんって、天楼学園の生徒会長なんですよね？」

「……………」

千は黙って頷いた。

「やっぱり、大変なんですか？」

「別に、そんな事ない……シンキの相手をする方が、大変」

「あ、あはは」

苦笑するハル。千が酒癖の悪いシンキに絡まれるのを、この三日で何度も目にしていたからだ。

「さて、私はそのシンキを起こしに行くか」

二人の会話を聞いていた遊佐が立ち上がり、千に目を向けた。

「あいつも悪気があるわけではないから、大目に見てくれ。あいつ、千のことが可愛くて仕方ないんだ」

「わかってる。私も、シンキは嫌いじゃない」

「そうか。それはよかった」

遊佐はほほ笑み、居間を出た。

「……大人だなあ」

「何？」

「いえ……でも、もし俺が天楼学園の特入試験を受けて合格したら、千さんと一緒に学園に行けたんですね」

「……ハルは、桜楼に行くのを後悔してる？」

「凄く楽しみですよ。ただ、そういう可能性もあったのかな、って」

「そう……でも、それは無理。残念だけど」

「？ 天楼の特入試験ってそんなに難しいんですか」

千は首を横に振り、お茶を飲んで、言った。

「天楼は、『じょがくえん女学園』だから」

「……………それは、確かに無理ですね」

「……………女装、する？」

「しません」

お茶を飲み、やるせない気持ちってこういうことか、としみじみ感じたハルだった。

「じゃあ、行ってきます」

「行ってきます」

「はい 行ってらっしゃい」

雲月荘の玄関前には、ハルと千、そして、わざわざ二人を見送りに来たエプロン姿のミキがいた。

「あつ。ちよつと待って、ハル君」

「はい？」

足を止めて振り返ったハルの首元に、ミキが手を伸ばす。

「ネクタイ曲がってるわよ」

「あ、すみません」

「　　」

鼻歌を歌いながら、ハルのネクタイを直すミキ。えらく上機嫌である。

「何か、新婚さんみたいね」

「……何言ってるんですか」

呆れ気味にハルが呟く。

「　　。はい、完了 ……うん、やっぱり制服似合ってるわね、

ハル君 改めて惚れ直しちゃった」

「ど、どうも」

上機嫌すぎるミキに、ハルは少し引いている。

「ふふ それじゃあ、二人とも気をつけてね」

「はい」

「……………」

二人は頷き、一緒に雲月荘を出た。

始業式の間は五学園全て同じなので、折角だから一緒に行こう、ということになった。

「今日のミキさん、何であんなに機嫌よかったですかね？」

ハルは先程のミキを思い出し、首を傾げた。

「多分……ハルの制服姿を見たから」

「俺の、制服？」

ハルが目線を下に向けると、何の変哲もない桜楼の制服が目に入った。

「普通の服となにが違うんですか？」

「新しい制服は成長の証。ハルは大家さんの息子みたいなものだから、嬉しい」

「成長……息子……親心つてやつですか？」

「そう」

頷く千を横目に見て、ハルは頬を緩めた。

「親、か……」

ミキが自分のことを本当の息子のように思ってくれていることが、思いのほか嬉しかったのだ。

「今度、学園での話をしたらもっと喜んでくれますかね？」

「うん……きっと」

そう答えた千は、ほんの少し頬を緩めていた。

「じゃあ、学園を楽しまないいですね」

自分の話を嬉しそうに聞いてくれるミキの顔を思い浮かべ、

ハルはほほ笑んだ。

そうやってしばらく歩くと、二人は大きな十字路口に差し掛かった。

「私はこっち……一人で、行ける？」

「初めてじゃないんで、多分大丈夫です」

「そう。じゃあ、頑張って」

「はい。頑張ります」

ハルは千に一度だけ手を振って歩き出した。

「……………」

千はしばらくハルの背中を眺め、ハルとは反対の道へと歩き始めたのだった。

〈第15話〉

五学園はそれぞれが広大な敷地を持っており、その中に様々な施設を建てている。学園によって施設の種類は多少変わるが、少なくともその事に関して生徒が不自由することは殆どない。

施設や環境が殆ど同じ五学園が均等に生徒を取得出来る理由は、それぞれの教育方針が関わっている。

例えば、千の通っている天楼学園は主に 女学園 であることと エリート育成 を売りにしている。他の学園では、魔法を特化させていたり、体術や氣の使い方を率先して教える学園もある。

そんな中、桜楼学園は 生徒自身 に、自らに合った修練をさせている。放任的な教育方針ではあるが、手広く新入生を募っていることや教員が充実していることから、五学園の中ではそれなりに人氣が高い。

「人数多いなあ」

教員の案内に従ってハルが着いた場所は、大きな 講堂 だった。この始業式、兼、入学式には、新入生と少しの上級生しか参加しない。なので、席は四分の一程しか埋まっていないが、それでも大人数なのには変わりなかった。

「俺の席は……つと、あった」

入り口で受け取った番号札と同じ席に座り、息を吐いた。

(うう、緊張するなあ)

周りを見ると、ハルと同じ様にソワソワしている新入生が大勢いた。

(やっぱり、皆緊張してるんだ)

段々と落ち付きを取り戻したハルは、

「……ん？」

あらゆる視線が飛び交うこの講堂で、幾つかの視線が明らかに自

分だけに向けられていることに気付いた。

(……誰だ?)

その方向を見ると、何人かの上級生と目が合った。学年毎にタイの色が違っているので、相手が新入生でないことはすぐにわかる。

「……………」

その上級生達は特に何かアクションをとるわけでもなく、ただ好奇な目をハルに向けていた。

(い、居心地悪いなあ)

再び委縮し始めてしまったハル。

(やっぱり、特入試験だよな)

特入試験で一番目立っていたのは自分だった、ということ、ハルは後から聞いた。玲奈やルークと張り合ったのだから、当たり前と言えば当たり前なのだが。

上級生からしてみれば、希代の新入生、といったところなのだろう。

(って言っても、二人には全く歯が立たなかったわけだし。……は

あ、入学早々先輩に目をつけられるとは)

ハルは心中でため息をついて、うな垂れた。

つつがなく始業式も終わり、あとはそれぞれ割り振られたクラスで担任から話を聞くだけなのだが、

「この学園……広すぎだろ」

ハルは学園内で迷子になっていた。

(トイレなんて行くんじゃないかな)

始業式の最中も好奇の視線が止むことはなく、ずっと緊張しっぱなしだったハル。尿意を催すのも、無理はない。

「さて、本格的にどうするか」

このままでは、初日から遅刻という恥ずかしい思いをしてしまう。

(せめて、誰か人がいれば……お)

廊下の角を曲がった先に、一人の教員らしき男性がいた。

ハルはすぐさま声をかけた。

「あの」

「ん？」

その男性教員が振り返ると、

「うっ」

と、ハルは思わず呻いてしまった。

「あれ？ 天城君じゃないか」

その男性教員は、ハルと特入試験で闘った【ルーク・スカッター

ト】その人だった。

「ど、どうも」

挨拶をしながら彼の「サンダーボルト」を思い出し、ハルは密かに身体を震わせた。

「どうしてここに？ 今はクラスで待機じゃなかった？」

「ちよつと……道に迷いました」

一瞬、言おうかどうか迷ったが、今のままではどうにもならないので、正直に告白した。

「ああ、成程。ここに初めて来た人は絶対に迷うからね」

僕も君と同じ状況を味わったことがあるよ、とルークは優しくほほ笑んだ。

(物凄く優しい先生、なんだろうけど……)

いかんせん、最初のインパクトが強すぎた。

「それで、もしよかったら……道を教えてくれませんか？」

「もちろんいいよ。でも口で説明するのは難しいから、僕も一緒に行くよ」

「いいんですか？」

「うん。で、君は何クラスだい？」

「え、つと……Dですね」

ハルは講堂でもらった紙を見て答える。

「1-Dか……ん？ Dって確か……あいつ、何か細工したな」
「は？」

「ん、いや、何でもないよ。じゃあ、行こうか」

「？ はあ」

首を傾げながらハルはルークの後に続いた。

「ここが一年のクラス階だよ。ここから真つすぐ行って、四つ目の教室がDクラスだから」

「はい。わざわざありがとうございます。スカッター先生」

「気にしないでいいよ。それと、僕の話はルークでいいから。これから、ややこしくなると思うし」

「？ わかりました」

あれから数分後、ハルのクラスがある階には簡単に着いた。

(やっぱり、何年もここに通ってただけあるよな)

ルークは複雑に入り組んだ校舎内を、一度も迷うことなく歩き続けていた。

「それから、また道が分からなくなったら学生帳に詳しい地図が載ってるからそれを見るといいよ」

「はい」

「うん、それじゃ……あー、あと一つ」

「？」

「君、まだ魔法のこと全然わからないでしょ？」

「はい。まあ……」

「だったら、今日にでも保健室に行くといいよ。あそこで『魔法適

正』を検査してくれるから。民間だとお金かかるし、君の年である
ここに行くのはかなり勇気がいると思うから」

世界共通で、魔法適正検査 は物心ついた時に親同伴で行う。
ハルのような普通の学園生が一人で行ったら、あらゆる意味で赤面
すること間違いなしだった。

「何から何まで、ありがとございます」

「僕は勝手ながら君に期待を寄せてるからね。分からない事があつ
たらなんでも聞いていいよ」

「はい。その時はよろしくお願いします」

「うん。それじゃ、今度こそじゃあね」

ルークは爽やかな笑みを見せてその場を後にした。

(いい人だなあ、ルーク先生。変に恐がってた俺がバカみたいだ)

ハルは心中でそう呟き、自分の教室に向けて歩き出した。

〈第16話〉

「ふう」

自分の教室の前で息を吐くハル。ここが 1 - D であることは再三確認した。

廊下にはハル以外に誰の姿もないが、教室の中から生徒達の声が聞こえるので、まだ先生は来ていないようだった。

(……よし)

意を決してドアを開けると、その音で数人がハルに目を向けた。

後ろのドアだったので初めから先生とは思われなかったらしく、あまり注目はされなかった。教室がざわついていっているのも、それを助けたのだろう。

(……？ 何だ？)

ハルは首を傾げた。

自分が注目されなかったことではなく、教室のざわつきかたが少しおかしかったのだ。皆が同じことを話しているみたいで、全員
の視線がとある方向に向いていた。

(その視線が……段々と、こっちに)

と、ハルが思っていると、

「あ、天城さん！」

目の前に、見知った顔が現れた。

「蓮華さん」

桜楼の女子制服に身を包んだ楠木蓮華だ。

「天城さんも、こ、このクラスなんですか？」

「うん。蓮華さんも？」

「は、はい！ わ、私、天城さんと一緒のクラスになれて、す、凄
い嬉しいです！」

顔を真っ赤にし、一世一代の告白か、と思うほど身体を強張らせ
て言う蓮華。

「俺も知ってる人いないって思ってたから、蓮華さんが一緒に嬉し
いよ」

それに対して、ハルは逆に緊張から解き放たれた笑顔で言った。

「は、はい。ありがとう、ございます」

蓮華は顔を赤くし、照れくさを隠すために俯いた。

(う、嬉しいって言われちゃった……え、えへへ)

「……私の存在を忘れるなんて……本物だねえ」

「え……あ！ ご、ごめん、絵梨ちゃん！」

その声で我に返った蓮華はすぐに振り返った。

「いいよ、別に……私達の仲なんてそんなもんだよね……」

「ご、ごめん」

蓮華は泣きそうな顔で、ツインテールの 獣人 の少女に抱きつ
いた。

「？ あ、あの？」

「ん？」

困惑しているハルと、蓮華を抱きとめている獣人少女の目が合う。

「ん……あは」

獣人少女は、弾けんばかりの笑顔を見せた。

パッチリとした目に、長くてツヤのある髪をツインテールにし、

その横に可愛らしい 獣耳 が生えているこの少女の笑みは、全ての男を骨抜きにする程可愛らしいものだった。

「？ えっと、天城ハルっていいいます」

ハルはその笑みに若干の戸惑いを見せながらも、手を差し伸べて
握手を求めた。

「あ、うん……よろしく、ね」

ハルの握手に応えながら、獣人少女もう一度は最上級の笑顔を見せた。

その笑顔を間近で見せられたハルは、

「う、うん、よろしく」

やはり戸惑いながら同じように笑顔を返したのだった。

「むう……私のとびつきりの営業スマイルが効かないとは……流石、蓮華の心を奪っただけあるわね」

少女はブツブツと呟き、ハルに 自然な笑顔 を向けた。

「私は【堂島絵梨】^{どうじま えり}。試すようなこととしてごめんね」

「？ 別に、何もされてないと思うけど」

「そう言うと思った。まあ、あんまり気にしないで」

「はあ……あの、蓮華さんと堂島さんって」

「あ、あのー！」

「どん……な？」

関係なんですか、と続けようとしたハルの言葉を遮って、一人の男子生徒が絵梨に声をかけた。

「あ、あなたは、も、もしかして……あの、『エリ』さんですか？」

その男子生徒はかなり緊張しながら、絵梨にそんな事を尋ねた。

しかも、教室にいる殆どの生徒が、固唾を飲んでこちらを見守っていた。

「うん。多分、あなたの言う『エリ』で合ってると思う」

そして、絵梨が男子生徒の言葉を肯定した瞬間、おー、と教室の中が一気に沸き立った。

「お、俺、あなたの大ファンなんです！ あ、握手して下さい！」

「ぼ、僕もです！ サインして下さい！」

「わ、私も！ 一緒に写真撮ってください！」

今まで遠巻きに見守っていた生徒も、全員絵梨に詰め寄った。

「はあ。一応予想はしてたけど……こんな事するのは今日だけだからね」

当の絵梨は、手慣れた様子でそんな彼等を相手にしている。

「な、何？」

人の波に弾かれたハルが呆然としていて、心配そうに顔を曇らせた蓮華がハルの隣に立った。

「だ、大丈夫ですか、天城さん？」

「あ、うん……これの説明をしてもらえると助かるんだけど……」

「えっと……絵梨ちゃんは『アイドル』なんですよ」

「アイドル？」

「はい。主に歌手として活動してるんですけど……『エリ』って名前聞いた事ありませんでした？」

「いや……そういうのは詳しくないので」

「へえ、やっぱりあの『エリ』だったんだな」

「え、あ……ふ、冬樹さん!？」

ハル達の会話に入ったのは、特入試験でハルと一戦交えたポニテールの少女、冬樹五月だった。

「三日ぶりだな、天城。やっぱりお前も合格してたんだな」

「は、はい。冬樹さんもこのクラスなんですね」

五月が合格していたのは知っていたが、同じクラスになるとは思わなかったハルはかなり驚いている。

「ああ。これからよろしくな。そっちの人も」

「は、はい。く、楠木蓮華です」

「冬樹五月だ。よろしく」

蓮華と五月はそのまま話を始めた。

(……雰囲気が全然違う)

蓮華と話している五月の表情は柔らかく、どこからどう見ても普通の女生徒だった。

(闘ってる時はあんなにピリピリしてたのに)

「ん？ どうした、天城」

「あ、いえ。ちょっと雰囲気が違うな、って」

「そうか？ ……ああ。お前とは、闘いの時にしか会ってないから

な。普段の私は、かなりお喋りなほうなんだ」

「へ、へえ」

（あれか……闘いの時にスイッチを切り替えるタイプか……そっちの方がより集中出来るとかで）

竜の中にもそういうタイプはいたので、珍しくはない。

普段はとても温厚な者が、闘いでは残虐になる、など、ある意味二重人格のようなものであった。

「それにしても、あの『エリ』と同じクラスとはな」

「冬樹さんは堂島さんのことを？」

「ああ。私は東京に来て一ヶ月ほどになるが、街でもテレビでも、彼女のことを見ない日はなかったからな」

「そ、そんなに有名なんですか？」

ハルは東京に来て三日になるが、筋肉痛やらでまだ東京散策は出来ていないので、知らないのも無理はないかもしれない。

ちなみに、雲月荘にテレビはない。ミキ曰く、あってもなくても変わらないから、要望があれば買うし、なければ買わないらしい。

今のところ、要望はない。

「『エリ』を知らないって事は、天城は彼女の歌を聞いたことがないのか」

「多分、ないですね」

何かの音楽が耳に入ったことはあるが、それが エリ の歌であるかどうか、ハルにはわからない。

「一度聞いてみるといい。彼女、かなり上手いぞ。何と云うか……惹き込まれるものがある」

「惹き込まれる？」

「ああ。彼女の歌は他のものとは一味違う……一種の芸術作品とでも言うべきかな」

「芸術……」

ハルは、今も笑顔のままクラスメートの要望に応えている絵梨に目を向けた。

(本当に……凄いな)

非力なたった一人の 人が、力や魔法を使わずに人々を魅了する。

これもまた、竜国では見られないことだ。

「おらー、席に着けー。新入生共」

そんな中、教室に乱暴な言葉遣いの女性教員が入ってきた。

「あつ。じゃあ、またね、天城さん、冬樹さん」

真面目な蓮華はすぐに自分の席に向かった。

「『エリ』の歌、聞きたくなったら私がCD貸してやるぞ」

そんな事を言い残し、五月も席に戻った。

(しかし……冬樹さん、本当に全然違うな)

今のハルにとってはアイドルと一緒にクラスになったことより、そっちのほうが驚きだった。

〜第17話〜

生徒が全員座ったのを見て、女性教員は口を開いた。

「あたしがお前達の担任、【真里奈・スカッター】だ。よろしくな」

（ん？ スカッターって……もしかして）

「何人かピンと来てるやつもいると思うが、ここの教員の【ルーク・スカッター】はあたしの夫だ」

その言葉に、クラスが一気にながざわついた。

実際にルークと面識があるのはハルぐらいなのだが、彼の名前が余りにも有名だったからだ。

（マジかよ……あの人、既婚者だったんだ）

そんな中でも、なまじ顔見知りなだけに、ハルはそれなりに大きな衝撃を受けた。それと同時に、先程のルークのおかしな態度の理由を理解した。

（確かに、スカッターって呼んだらややこしくなるな）

「あー、はいはい。静まれ、静まれ。……って訳で、あたしやあいつにアプローチしても無駄だから止めておけよ。特に、この中であいつにアプローチした女子は容赦なくぶっ飛ばすから覚悟しておけ」
爽やかな笑顔で物騒な事を言う真里奈。

アプローチされるのが当たり前と思っっている辺り、大層な自信家なのだが、確かに真里奈はそれだけの美貌を持っていた。

男らしい口調に似合うショートカットだが、整った顔つきはとても女性らしく、出る所は出ていて、引込む所は引込んでいて健康的な美女、といったところである。

イケメンのルークと並び立てば、それはもう立派な絵になるだろう。

「さて、お前達の自己紹介は後にして、まずはこの学園のことだな。一回しか言わないから、耳をかつぽじってよく聞くように」

頷く生徒たちを見渡し、真里奈は話を続けた。

「知ってるやつもいると思うが、ここの授業体系は他の学園と少し変わってる。まず、午前是一般教養だけの授業を受け、午後から『魔法』や『体術』なんかの『特殊技能』を学ぶ。だが、その『特殊技能』はこのクラス単位でやるわけではなく、『教員』や『四年の先輩』の『グループ』に入ることになる」

この少し変わった体系は、桜楼の教育理念が深く関わっている。

桜楼は、何を学び、何を伸ばすのか、全て 生徒自身 に決めさせている。なので、クラス単位で体術や魔法の授業をするわけにはいかない。

そこで、学園の通常授業は午前で終わらせ、午後の全てを 特殊技能 に割り当てた。更に、自分と同じ 戦闘スタイル の先生や、魔法 の得意な先輩のグループに自由に入れるようにしたのだ。

「『一人を除いた』私達教員は全員グループを持つてる。それなりに人数は多いが、教え方は超一級だ。教員が『リーダー』のグループを『教員グループ』、四年の生徒がリーダーのグループを『生徒グループ』と言う」

ちなみに、四年生がグループを作る理由は、進路にかなり有利になるからだ。

「お前達は必ずどこかのグループに入らなければいけない、というわけではない。グループに入らなかった生徒は午前の授業が終わったら家に帰ってもいい。だが、戦闘は独学じゃ限界があるし、桜楼の施設を効率よく使いたいなら、誰かのグループに所属することをお薦めする。他にも、『世界機構』から学園への依頼を比較的簡単に受けられるしな」

東京の外で実際に魔物を相手にする 世界機構 の依頼では、実戦経験を積むことが出来る。

「最後に、私が今話したのはあくまで基本的なことだけだ。グループのことについては、私達教員も色々と口利きしてやる。それほど堅苦しく考えるなってことだ。」

このような制度を徹底してしまうと、裏で色々工作する者が必ず現れる。例えば、暴力で下級生を自分のグループに無理矢理引き込んでしまう、などだ。

その様な事態を避けるために、ある程度の自由は持たせてある。

「一番重要なのは、自分に合ったグループを見極めることだ。魔法を上達させたいのに、技術を優先させる教員や先輩のグループに入る、なんてことのないようにな」

そこまで話をして、真里奈は大きく息を吐いた。

「これで一応、授業体系の説明は終了だ。まあ、グループのことは時間をかけてゆっくりわかればいいさ。……あとは、ここの学則のことだが」

その後、十五分ほど真里奈の話が続き、それぞれ自己紹介した後、解散となった。

「ねえ、ねえ、天城君」

「？ 何、堂島さん？」

放課後、ルークの助言に従って保健室に行こうとしたハルを、絵梨が引きとめた。

「これから親睦会を開くんだけれど、天城君も来ない？」

「親睦会？」

「そう　今回は私と、蓮華と、冬樹さんと、天城君で」

「冬樹さんも？」

ハルが絵梨の背後を見ると、楽しそうに喋っている蓮華と五月の姿が目に入った。

「天城君、意外だ、って顔してる」

「まあ、実際に意外だったから」

「ふふ 私も最初は冬樹さんのこと堅い人なのかな、って思ってたんだけど、そんな事全然なかったの。何て言うか……包み込んでくれる優しさがあったんだ。頼れるお姉さん、みたいな感じかな」
「へえ」

「だから、人見知りする蓮華もあんなに気を許してるんだと思う」
蓮華と五月の話している姿は、確かに仲の良い姉妹のようであった。

（同じ年とは思えない……いや、同じ年かどうかなんてわかんないけど）

桜楼学園には 成人 を迎えていなければ誰でも入れる。

五月は特別入学生なので、彼女の年齢を知る者は恐らくこの場にはいないだろう。

（かと言って、女性に年を聞くのはな……）

「で、どうするの？」

「え、あー……今日はちょっと」

「そうなの？ 何か用事？」

「うん。まあ……」

曖昧な顔して頷くハル。

何となく、自分が魔法適正検査を受けていないことを知られたくはなかった。

「ふーん……それじゃあ、仕方ないね」

「ごめん。わざわざ誘ってくれたのに」

「気にしなくていいよ けど、次はちゃんと来てね。蓮華のためにも」

「？ うん」

何でここで蓮華の名前が出るのかわからなかったが、ハルはとりあえず頷いておいた。

「うん それじゃあ、また明日ね」

「また明日」

蓮華達の元に向かう絵梨の背中を見ながら、ハルはふと思った。

（堂島さんって人気アイドルなんだよな……もったいない事したかな？）

なんて事を今さら思っても仕方なく、ハルは頭をかいて教室を出た。

（次に誘われたら行こう）

そう決めたハルはポケットをまさぐって学生帳を取り出した。

（……しかし……。どれだけ広いんだよ、この学園。下手したらこれ見ても迷うぞ）

学生帳に書かれた地図を見ながらハルが辟易していると、

「天城」

と、またしても呼びとめられた。

「はい？」

何の心構えもせずに振り返ったハルが見たものは、誰かの 迫りくる拳 だった。

「っ！？」

ハルはそれを、本当に一瞬で拳だと認識出来た。玲奈と闘った時の感覚を身体が覚えていたため、あれレベルの速さでなければ、それなりに対応出来るようになっていた。

だが、不意打ちは不意打ち。この拳が避けられるかどうかは、話が別である。

（間に合うかっ！？）

ハルは顔を引きながら、左に回り込むようにその拳を避ける。

高速の拳が頬を掠ったが、相手の攻撃は避けきった。

（っよし！ 食らえ！）

ハルはそれと同時に、右の拳を思いっきり振り抜いた。

狙いは、誰か知らない相手の顔面。

全く容赦のない、つい最近覚えた氣の応用をフルに使った、今のハルが出せる最大威力の拳がカウンターとして相手に迫る。

パン！！

甲高い音が、桜楼の廊下に響き渡った。

「……全く手加減無しだな」

「っ!？」

ハルの渾身の一撃は、相手の左手に防がれていた。

「まあ、当然の反応か」

そして、ハルの拳を防いでいた、つまり、ハルにいきなり攻撃を仕掛けたのは、

「ま、真里奈先生!？」

ハルの担任、真里奈・スカートだった。

「な、何するんですか!？」

叫びながら、真里奈から距離をとるハル。当然ながら警戒は解いていない。

「そんなに警戒するな、天城」

対する真里奈の調子は軽い。

「しますよ! いきなり顔面狙われたんですよ!？ しかも、担任に!」

「それは謝る。この通り」

そう言って、真里奈は頭を下げた。

「う……」

簡単に頭を下げられてしまったハルは、逆に戸惑った。

「……説明してくれるんですよね?」

一応、ハルは警戒を解いたが、まだ距離はとっている。

「あたしの旦那と玲奈からお前の話を聞いてな、ちよっとお前の実力を直で見ってみたかったんだ」

「直で、って……これから幾らでも機会はあるでしょう。何で、今日急に」

「何て言うか……我慢できなかった」

「……はぁ」

ハルは怒りを通りこし、呆れてしまった。真里奈だけにではなく、

その理由にちよつと共感してしまった自分にも。

大抵の人の心の奥底には、強い相手と闘ってみたいとか、心ゆくまで戦闘を続けたいなど、闘いを楽しみたいという気持ちが少なからずある。犯罪者が罪を犯すのも、この気持ちが多少なりとも作用している。

真里奈とハルはそんな気持ちだが、犯罪者ほどはないが、一般人より顕著なのであろう。

(俺も含めて……そんなのただの戦闘狂なのに)
「はあ……」

ハルはもう一度大きなため息をついた。

「そんなに怒るなって天城。お詫びに飯でも奢るから」

「いえ、結構です……それで、満足して頂けたんですか？」

「ああ……十分過ぎるほど、な」

真里奈はほほ笑んで頷いた。

「そうですね。それじゃあ、これからはやらないで下さいよ。俺にも、他の人にも」

「ああ。分かってるよ」

「じゃあ、今回はこれでいいです。俺は保健室に行くんで、これで失礼しますね」

「保健室に何か用事か？」

「はい。ちよつと」

「そうか……気をつけて行けよ」

「あなたがそれを言いますか」

ハルはジト目で真里奈を睨み、ブツブツ文句を言いながらその場を離れた。

「……………」

この時、ハルが注意深く真里奈を見ていたら気付いたかもしれない。

彼女が会話の時に、一度も左手を動かしていなかったことに。

〈第18話〉

「はあ、本当に酷い目にあった」

階段を降りながらローテンション気味のハルは呟いた。

「あの夫婦は俺に恨みでもあるのか？」

ルークのは百歩譲って不可抗力だとしても、さっきの出来事はそう思っても仕方のないことだった。

「本当はいい先生なんだろうけど……どっちも滅茶苦茶強いし」
先程の一撃を思い返す。

（完璧だったんだけどな……自信なくすよなあ）

ハルと真里奈では天と地ほどの実力差があるとはいえ、ああも簡単に止められてしまったら、プライドなど簡単に砕け散る。

（まあ、これからだな……っと、ここか）

そんな事を考えている間に、ハルは目的地の保健室に着いていた。
「ここで、俺の魔法適正が……ふふ」

沈んでいた雰囲気から一転、ハルは顔を綻ばせた。

ルークの「サンダーボルト」の恐怖が、今は逆に作用している。

（あんな魔法も使えるようになるのかなあ）

沸き立つ心を押し留め、ハルは保健室のドアをノックした。

「開いてるわよ」

中から女性の声が聞こえ、ハルは少し緊張しながらドアを開けた。

「失礼します」

ハルが桜楼の保健室に入るのは今回で二回目。

（何か、妙に懐かしい）

あの時は色々あったので、余計にそう思うのかもしれない。

「始業式に怪我？ って、あら」

椅子に座っていた保健医が、ハルの顔を見て手を止めた。

それと同時に、とんでもないポリウームの胸に食べかけのせんべいが落ちた。

「？ 俺のことを？」

「ええ。三日前にあなたを治療したのは私だもの」

「あ、そうなんですか」

ハルは覚えていないが、ここに運ばれたということは保健医の彼女が治療したのだろう。

「その節はどうもありがとうございます。改めまして、天城ハルです」

「【リーナ・ルーズベルト】よ。仕事だから気にしないでいいわ。それで、あれから体調が悪くなったりは？」

「いえ。お陰さまで万全です」

「そう、それはよかったわ」

リーナはそう言つて、慈愛に満ち溢れた笑顔を見せた。

パーマのかかった長い髪に、ハルの同居人のシンキと殆ど同じ大きさの胸、そして、男子の心をくすぐる色気の漂う白衣という、見た目は魔性の女っぽいのが、その笑顔は聖母のようだった。

「それで、今回は先生に頼みがあ」

「魔法適正検査でしょ」

ハルの言葉を遮り、リーナはウィンクした。

「あ、はい。……何で？」

「ルーク先生が『この前の子がここに来ますから、魔法適正検査をしてあげて下さい』って言いに来たの」

「成程……じゃあ」

「ええ。もう準備は出来てるわよ。ただ、検査のためにはあなたの血が必要なのよ」

「血、ですか？ ……ちょっと待って下さい」

ハルはポケットに入れていたペンを取り出し、
「つと」

左手の中指に横線を描くように、一気に振り抜いた。

すると、数秒も経たない内に中指に血が浮きあがった。

「これで大丈夫ですか？」

「十分よ それにしても、思い切ったことするわね」
「そうですか？」

「男らしかったわよ。はい」
ハルの血を透明な容器に移し終えたリーナがポケットから絆創膏を取り出し、ハルに差し出した。

「あ、大丈夫です。このぐらいなら唾をつけとけば治りますから」
「そう？ ……ふふ」

ハルの血がついた容器を精密機械に入れながら、リーナは唐突に笑いだした。

「？ どうしたんですか？」

「いえ、ね。死なない限りどんな怪我でも治るって言われてる今の時代に、唾をつけておけば、つてのが少しおかしくて」

「……そんな事言うなら、絆創膏を渡す先生もおかしいですよ」

ハルが顔を少し赤くしながら言うつと、リーナは更に笑みを深めた。
「そうね、その通りだわ……つと、結果出たわよ」

「もうですか？ 早いですね」

「簡単だから さて、結果は……こ、これって!？」

「!？ ど、どうしたんですか!？」

目を丸くするリーナに、ハルは期待を膨らませた。

(もしかして、凄い結果が!?)

そして、手で口を押さえて驚愕しているリーナは、

「ま、全く才能がない!」

そんな言葉を発したのだった。

「……は？」

「ぎゃ、逆に凄いわ、これ。こんな才能の無さ……初めて見た」

「……あの？」

「あ、ご、ごめんなさいね。え……はい、これが検査結果よ」

「……な」

リーナに気まずそうに渡された検査結果が書かれた用紙を見て、ハルは絶句した。

魔法適正検査では、魔法の源となる魔力量と、全ての魔法の基本となる火、水、雷、氷、土、風、光、闇の八属性のどれが自分に合っているのか、つまり才能があるのか、を調べることが出来る。

この用紙には、八属性が0～100までの棒グラフで表示される。つまり、普通の人ならば、八つのグラフが凸凹に記されることとなる。

だが、ハルの場合は全てのグラフが同じ数値で綺麗に並んでいた。

「全部……『1』？」

全てが1という結果で。

つまり、ハルに魔法の才能は、皆無だった。

超初心者級の魔法を使うかすら、怪しいのである。

「……これ、冗談ですよね？」

「本当に冗談みたいな結果よね。なんなら、もう一回やる？ 多分、更に落ち込むと思うけど」

「……………」

「ある程度の才能を持ってたら、努力でもどうにでもなるけど……それじゃあ……無理、ね」

「……………」

その言葉は、ハルの夢と希望を打ち壊すのに十分すぎる威力を持っていた。

「その……何て言うか……元気出して？」

「……………」

保健室に気まずい沈黙が流れていると、

「ルーズベルト先生、この前のことなんだ……が」

タイミングが良いのか悪いのか、神崎玲奈が入ってきた。

玲奈はこの異様な雰囲気にも包まれた保健室の空気に、
「……何なんだ」
と言うしかなかったのだった。

「ははははは！！」

諸々の事情を聞いた玲奈は、腹を抱えて大笑いした。

「こ、この状況で笑いますか！？ あ、悪魔め！」

「お、落ち着きなさい、天城君！ 神崎先生もそれはあんまりよ！」
涙目で玲奈に跳びかかろうとするハルを、リーナが必死になだめる。

「い、いや、スマン。つい、な……ふふ」

謝りながらも、玲奈はハルの適正検査の紙を見て笑いを堪えていた。

「う、うう〜！」

羞恥と悔しさで顔を真っ赤にしたハルが地団太を踏む。

「しかし……こんな事があるんだな」

少し冷静になった玲奈が、リーナに話を振る。

「私もこんな数値を見たのは初めてなのよ……それと、もう一つおかしい事があるの」

「？」

「……この魔力量の結果、まだ天城君には見せてないんだけど」

リーナがハルに注意を向けながら、もう一枚用紙を玲奈に渡した。

「？ ……っ」

それを見て玲奈は息を飲み、ハルに目を向けて、

「……はあ」

思いつきりため息をついた。

「な、何ですか、そのため息は！ あっ！？ そ、その用紙にも悲惨なことが書かれてるんですね！ も、もういいですよー！」

ハルは自暴自棄気味に叫び、リーナと玲奈から顔を逸らした。

「あ、天城君」

「……はあ」

リーナは頬に手を当てて苦笑し、玲奈はもう一度ため息をついた。

（逆だ、馬鹿が）

玲奈はもう一度ハルの魔力量が書かれている用紙に目を落とし、ある 文字 を読んだ。

（魔力量が『測定不能』だなんて……どこまでデタラメなんだ）

魔力量は数字で記されるのだが、ハルの魔力は計れる数値を完全に振り切っていた。

それでいて、魔法の才能は皆無なのだ。

（これで才能があつたら、この世が終わるまでこいつの名前が残つただろうな……呆れを通り越して、哀れだよ）

「もう一度適正検査やったほうがいいかしら？」

「いや、多分結果は変わらない。こいつの傷を抉るだけだ」

「そう……勿体ないわねえ」

リーナも頬に手を添えたままため息をついた。

一方、完全に不貞腐れたハルは足を投げ出し、保健室の天井を見ながら呟いた。

「はあ、これからは氣の応用一筋でやっていくしかないのか」

「……!?」

その言葉で、リーナと玲奈はある事を思い出した。

当たり前すぎて忘れていた、魔法の原点である言葉を。

「ルーズベルト先生、『あれ』なら……」

「ええ……『あれ』なら、魔法の才能は必要ないし……この魔力量なら……上手くいけば凄いことになるかも」

リーナは思わず身体を震わせた。

「ふん……決まりだな」

玲奈はほほ笑み、ハルに目を向けた。

「天城！」

「！？ は、はい！？」

いきなり名前を呼ばれたハルが飛び上がる。

「付いてこい」

「へ？ え、あ！ ちょ、ちよつと！ 神崎先生！？」

玲奈はハルの返事を待たずに保健室を出た。

「……な、何？」

「早く行ったほうがいいわよ、天城君。このチャンスを逃したら、多分次はないわ」

「は、はあ。じゃあ、行きますね。あんまり良い結果じゃなかったですけど、ありがとございました」

ハルはリーナに頭を下げ、玲奈の後を追った。

「……ふふ。あんなに楽しそうな神崎先生、初めて見たわね。……」

天城君……面白い子」

そう言ってほほ笑み、リーナは煎餅を食べたのだった。

〈第19話〉

「あの……ここは？」

ハルが玲奈の後を追って着いた場所は、何もなただの大きな部屋だった。

「この部屋に特別名前はない。リラックスしたい時や一人で集中する時に使われるだけだ。まあ、実際に使ってるやつは、数人しかないがな」

「はあ……じゃあ、これから何か派手なことをやるわけではないと？」

「ああ」

「そうですね」

ほっ、と安堵するハル。

(特入試験みたいな事だったら、流石にな……)

「お前、魔法を発動させるやり方は知ってるよな？」

「あ、はい。確か、体内にある魔力を交換させて、『ことだま言霊』を言うんですよね」

ルークの「サンダーボール」や「サンダーボルト」なんかが、言霊に当たり、この言霊を口から発することによって、魔法が発動する。

ただ、言霊の名前自体に深い意味はなく、地域や人種によって、同じ魔法でも言霊が違う場合がある。

「そうだ。それと、使用する魔法を一から百まで理解しなければ百%の力は発揮されない」

「そうなんですか？」

「ああ。それにプラス使用者の精神状態が作用されるんだが……まあ、これは魔法の才能が無いお前は知らなくていい知識だ。忘れる」「じゃあ言わないで下さいよ」

ハルが口を尖らせるが、玲奈は無視して話を続けた。

「だが、その小難しい魔法の理論を理解する必要も、言霊も必要ない魔法がある……これだ」

玲奈が右手を前に出すと、その掌から光り輝くオーラが現れた。

「おお」

ハルが驚いている間に、そのオーラは段々と大きくなって形を変え、数秒も経たないうちに一振りの 剣 になった。

何の装飾もされていない、ただ剣の形をしているだけの、シンプルな淡く輝く剣。

「これは……」

「これが『魔力の応用』を使って、魔力だけで作った『魔力剣』ってところか」

「魔力剣……魔力って目に見えるものなんですね」

「普通は見えなが、こんな風に『圧縮』させると目で見えるようになるし、物質化もする。そして、この魔力剣の最大の特徴が、これだ」

壁に手が付く位置まで近付いた玲奈は、魔力剣を突き込むように構えた。

「？」

ハルが首を傾げていると、

「ふっ！」

玲奈はそのまま壁に魔力剣を突き出した。

結果、魔力剣は壁を 貫通 した。

「なっ!？」

その光景にハルは目を見張る。

普通ならば、弾かれるか、下手をしたら剣のほう折れてしまう。どちらにせよ、硬い壁を貫くなど絶対に出来ない。

だが、魔力剣はいとも簡単に壁を貫いたのだ。

「この壁、厚さ三十センチはあったかな」

そのまま、玲奈は剣を横に薙ぐ。

魔力剣は壁を何の抵抗も受けずに切り裂いた。

「……凄い」

力任せに破壊していたり、焼き切っているわけでもない。

玲奈は殆ど力を込めずに、魔力剣を振っていたのだ。

それ故に、壁を貫いた時も、斬り裂いた時も、全くの無音だった。

「恐ろしいまでの切れ味、だろ」

「はい……」

ハルは壁の斬り傷に手を触れながら頷いた。

(全くひび割れてない……本当に豆腐でも斬ったみたいだ)

「魔力は圧縮すればするほど、より鋭く、堅くなる。ダイヤモンドの加工に使われる『ウォーターカッター』なんかと一緒にだ。それと、もう一つ」

玲奈が右手の魔力剣を手放すと、魔力剣は地面に落ちず空中に浮遊した。

「おお」

「今、私は周りに魔力を張り巡らせている。魔力剣が魔力の圧縮なら、これは魔力の『拡張』だな。『魔力フィールド』などと言われている。この魔力フィールドを広げるとこんな事も出来る」

浮遊していた魔法剣が空中で何回転もし、その後、物凄い勢いで射出され、反対側の壁に深く突き刺さった。

「こうやって操るのにはコツがいるが、中々便利だろう」

「な、中々どころじゃありませんよ。滅茶苦茶便利じゃないですか、これ」

遠近どちらにも対応出来る、理想の魔法といった所である。

「だが、今ではこれを使ってる奴は全くいない」

「? 何ですか?」

「魔力の消費が他の魔法の比ではないからだ。そうだな……この魔力剣に圧縮されている魔力は、普通の魔法百回分だ」

「ひゃ、百回!?!」

と、驚いてみせたものの、それが多いのか少ないのか、イマイチ判断がついていないハルだった。

「私はそれなりに魔力が多いほうだが、これが作れるのは一日に十ぐらいだな」

「十……って少ないんですか？」

「……はあ」

ハルの的外れな疑問に、玲奈は呆れてため息をついた。

「上級の魔法使いが一日に発動できる魔法は『百』。つまり、この剣を作っただけで魔力はスツカラカンになる」

ちなみに、氣は体力を、魔力は精神力をそれぞれ消費する。なので、氣を使いすぎるといつぞやのハルのように身体が動かなくなり、魔力を使いすぎると意識が朦朧となり、いずれ氣を失ってしまう。

「つまり……神崎先生は上級の魔法使い十人以上の魔力を持つてると？」

「……今の話の着目はそこじゃないだろうが」

(それに、お前はその何十倍もの魔力を持つてる)

「じよ、冗談です」

玲奈が怒ったと思ったハルは慌てて頭を下げ、話を戻した。

「そ、それで、何故そんな魔法を俺に見せたんです？」

「決まってるだろう。お前に教えてやる」

「教えるって……何でいきなり」

「……お前の魔力はそこそこ多い。だが、魔法の才能は皆無。そんなお前が少し哀れに思えてな」

「……その話を聞いている限りだと確かに凄い哀れですね」

(軽く帰りたくなってきた)

自分の魔力が多いことは初耳だったが、逆にその事実がよりハルの心に深い傷を負わせた。

「それに……もう一度だけ懸けてみようと思った」

「……？」

ハルはその言葉をどう受け取っていいかわからず、首を傾げた。

「で、どうする？ お前が体術一筋に絞るなら無理強いはいらないが？」

「……………」

ハルは悩んだ。

この魔力の応用は便利だが、とてつもなく燃費が悪い。体術だけを率先して学んだほうが幾らも効率がよいだろう。

(でも、やっぱり……………)

「……………やります。やらせて下さい！」

魔法は小さい頃からの憧れだったので、簡単に諦められなかった。「いいだろう……………ただし、条件として私の『グループ』に入ってもらおう。私の指導は厳しいから覚悟しろよ」

「は、はい！」

力強く頷くハル。

この時のハルは、玲奈のグループに入る、という事の意味を知らなかった。

〈第20話〉

場所は引き続き、玲奈とハルがいる大部屋。

「魔力の応用はそれほど難しくもない。寧ろ、簡単だと言っていい。

『魔法理論』を覚える必要がないからな。やり方さえわかれば子供でも出来るが、成功するかどうかは話が別だ」

「そのやり方とは？」

「……お前の場合、氣と魔力を身体の中で分けることから始めないとだな」

「氣と魔力を分ける？」

「ああ。目を閉じて、身体の中に意識を集中させる」

「はい」

言われた通り、目を閉じて意識を集中させるハル。

「氣の流れはわかるだろう？」

「……はい」

「だったら、わかるはずだ。それとは違う流れがあることに」

「……………」

（……………これか）

氣とは違う流れが、確かにあった。

「それが、お前に流れる魔力だ。まず、その魔力を右手に集める」

「はい」

目を閉じながらハルは頷き、身体に流れる魔力を操作する。

（……………氣の時とは、また違った感覚だな）

氣は力の奔流、魔力は精神の奔流、と言われている。

同じ身体の中を流れる物だが、根本的には違うものなので、ハルが戸惑うのも無理ないことである。

「……………終わりました……………どう、ですか？」

そう告げたハルの顔には汗が浮かんでいつる。

集中力を使うので、そこそこ辛いのだ。

「ふむ……いいだろう」

玲奈の言葉が耳に入ると、ハルはホッと息を吐いた。

「気を抜くな。これからが本番だ」

「は、はい」

「まず、剣でもいいし、刀でもいい、自分のイメージしやすいものを思い浮かべろ」

「……………」

「そのイメージを右手の魔力に集中させろ」

「……………」

この時点で、ハルの様子が少しおかしくなった。

顔から出る汗の量が、尋常でなく増えてきたのだ。

「そこから、右手の魔力はイメージ通りに圧縮。他の魔力は身体の内側から外に向けて拡張だ。集中しないと絶対に出来ないぞ」

「……………」

ハルの顎から、汗が垂れる。

（何だ、これ……滅茶苦茶、キツイ！　って言うか、圧縮と拡張を同時に、って……難しすぎる）

相反する行動を、右手と身体全身とでやらなければいけない。

（くっ……そっ！）

ハルの右手に段々と輝くオーラが集まり、形を変えようか、という瞬間、

「っ……………！　ぶはっ！」

ハルは大きく息を吐き出し、床に膝をついてしまった。

もちろん、圧縮と拡張していた魔力は全て消え去った。

「はぁ、はぁ……………はぁ〜」

「感想は？」

「はぁ……………何て言うか……………意識が持ってかれそうでした」

時間が経つことに思考が狭まり、集中することすら難しくなるのだ。

「魔力を直接引き出そうとしているから精神のバランスが崩れるの

は当たり前だな……さて」

玲奈は腕時計を見て、ハルに背を向けた。

「私は少し用事があるから席を外す。お前は どうする？」

「俺は……」

ハルは調子を確かめるように手を開いては閉じ、立ち上がった。

「まだ、やります」

「そうか。なら、一時間後にまた来る。それまで頑張るんだな。それと、最初は圧縮と拡張のどちらかに絞れ。いきなりどっちも成功させるのは絶対に無理だ」

「あ、はい」

玲奈はそう言い残して部屋を去り、ハル一人が残った。

「……よし」

ハルはもう一度目を閉じ、右手を前に出した。

（集中だ……集中）

魔力を操作し、右手に集める。

（まずは圧縮から……力むな……ただ、静かに……）

全ての力を抜いたハルの顔から、汗が浮かぶことはなくなっていた。

「天城」

「あ、神崎先生」

玲奈が戻ってきたのは、きっかり一時間後だった。

「どうやら……魔力の応用は成功したようだな」

玲奈はハルの両側頭部に目を向けた。

「はい」

そこには、それぞれ一刀ずつ、計二刀の魔法剣が浮遊していた。

「……それを作るのに使った時間は？」

「え、つと。確か、右が三十分ぐらいかかって、左は十分ぐらいでした。魔力の拡張はついさつき成功しました」

ちなみに、一度魔力の圧縮に成功すれば、それを維持することは簡単である。その圧縮された魔力の塊は、完全に一つの物体として存在することになるからだ。

ただ、時間が経てばやがて消えるし、その魔力の所有者ならば自由に消すことも出来る。

「……全然遅いな」

「え？」

「最低でも」

玲奈は厳しい目でハルは睨みつけ、一瞬で魔法剣を二つ精製し、ハルの首元に突き付けた。

「このぐらいの速さでなければ、何の役にもたたないぞ」

「は……はい」

あっという間の出来事に、ハルそう返すのがやっとだった。

「……まあ、最初にしては上出来だ」

言いながら、玲奈は魔法剣を消した。

「あ、ありがとうございます」

（や、やっぱり怖い、この人）

ほんのちよつとだけ親しくなつたかな、と思っていた自分を殴りたい気持ちに駆られたハルだった。

「ふん……今日はここまでだ。もう帰っていいぞ」

「は、はい。そ、それじゃあ、失礼します」

ハルは逃げるように部屋を出て行った。

かと思つたら、すぐに戻って来て玲奈に頭を下げた。

「あ、明日もよろしく願います！」

「……ああ」

玲奈の返事を聞いたハルは、今度こそ走ってこの場を離れた。

「……………」

玲奈はそのまま天井を仰いで、目を閉じた。

(……そうか、この感情は)

そうして、ふと、ほほ笑んだのだった。

「玲奈、ちょっといいか？」

その声で、玲奈は再度入り口に目を向けた。

「真里奈、学園の中では神埼先生と呼べ」

「もう放課後なんだ、硬い事言うな。それに、お前も真里奈って言うてるぞ」

「……そんな事言ったか？」

驚くことに、玲奈とぼけてみせた。

「……気味が悪いほど機嫌がいいな」

同僚であり、学生時代からの旧友の機嫌のよさに、真里奈は若干引いている。

「つい一瞬前までは、誰かを殺してやりたいほど不機嫌だったがな」

「それはおつかないな。で、何で急に機嫌が良くなったんだ？」

タイミングが違ってたら、自分はその機嫌の悪い玲奈のはけ口にされていたのかも、なんて考えながら真里奈は尋ねた。

「私にも、人間らしい感情があるんだと知ってたな」

「人間らしい感情？」

「ああ……嫉妬だ」

「……それはまた、お前という存在には一番遠い言葉だな」

玲奈は学生の頃から、天才、神童、神の子 などと言われていた。学園の成績はもちろん全て一番。その時の教員ですら、彼女には勝てなかったのだ。

そんな玲奈が、誰かに嫉妬したと言っただから、真里奈が驚かないわけなかった。

「ある生徒の才能の一端を垣間見た私は、気が付けばそいつに八つ当たりしていたよ」

玲奈は自嘲気味にほほ笑みながら、話を続ける。

「最初はその感情が理解できなくてイライラしていたが……それが

嫉妬だとわかった時には、正直嬉しかった」

一転、嬉しそうに玲奈は笑った。

「あいつには、本当に感謝しないとな」

感情の揺らぎは、一種の刺激であり、嫉妬はその刺激の中でも、一番心を揺さぶるものである。

玲奈はうんざりしていたのだ。天才だの最強だのと言われている日常に。

だが、そこに自分以上の天才が現れ、驚くことに玲奈は嫉妬した。それは彼女にとって最高の刺激だった。

「……そのある生徒って、天城だろ？」

「何だ、知ってたのか」

「あたしはあいつの担任だし、ここには元々お前と天城に会いに来たんだ。それに、さっき逃げるようにここを出ていく天城をみかけたしな」

「そうか。少し、悪い事をしたかな……で、その左手はどうした？」

真里奈の左手には包帯が巻かれていた。

「ん、ああ。これは……どこぞの天才にやられたよ」

「ほお」

「一発もらっただけなんだが……予想以上だったな」

軽く左手を振る真里奈。

「リーナに診てもらって殆ど治ったんだが、どうやら、骨にひびが入ってたらしい。痛かったからなあ」

隠すのが大変だった、と言つて真里奈は笑った。

「油断するからそうなるんだ」

「八つ当たりするお前に言われたくない」

真里奈がジト目で玲奈を睨む。

「ふん……所で、お前、私が魔力の応用を成功させた時のこと覚えてるか？」

「もちろん。お前があれこれ言われ始めたのも、それからだかな」

「その時、私がどのくらいの速さで成功したか知ってるか？」

「え〜つと……確か、『三日』だったよな。どんなに早くても『三ヶ月』はかかるのに、って先生方も騒いでたし」

「そう……私でも、『三日』だ」

玲奈はほほ笑んだ。

本当に嬉しそうにはほ笑んだのだった。

〈第21話〉

「お、おはよう、天城さん」

始業式、兼、入学式の翌日の朝。

「ぼー、っと席に座っていたハルに、蓮華が若干強張った声で話しかけた。

「おはよう、蓮華さん……何か、顔赤いけど、大丈夫？」

「は、はい。大丈夫です」

「なら、いいけど……堂島さんは一緒じゃないんだね？」

「お仕事があるから、今日は学園には来れないらしいです」

「仕事か……よくわからないけど……アイドルって大変なんだね」

ハルの言葉に、蓮華は、クス、と笑った。

「絵梨ちゃんはどうな仕事も楽しいって言ってますから、あんまり大変とは思ってないみたいです」

「へえ」

「でも、残念とは思ってるかもしれませんが。絵梨ちゃん、このクラスの皆と喋るの楽しみにしてましたから。もちろん、天城さんとも」

「そうなの？」

「はい。絵梨ちゃんは、何て言うか……」

「根っからのお喋りなんだよ。お祭り気質とも言っていていいけどな」

耳にピアスを開けた長身の美系少年が、二人の話に割って入った。

「おはよ、アベル」

「お、おはよう、エンレンス君」

「おう。おはようさん、ハル、楠木」

少年は二人に爽やかな笑みを向けた。

少年の名前は【アベル・エンレンス】。長い髪に不良っぽい外見だが整った顔立ちの、気さくなクラスメイトである。

席はハルの丁度後ろ。なので、初日もハルと少し話をしており、お互いにコミュニケーションが得意だったこともあって馬が合い、ハルの男友達一人目になった。

ちなみに、蓮華の兄の健吾は先輩なので友達とは言えない。

「アベルは二人と同じ中学園だったっけ？」

「おう。それも、三年間同じクラスだ」

鞆を床に置き、ハルの後ろの席に腰掛けるアベル。机に足を乗っけたり、尊大な座り方をするわけではない。見た目に反して、実は行儀はいいのである。

「堂島は中学園にいた時から何かと騒がしいやつだったからな」

「へえ……昨日は？」

「昨日は初日だったから少し抑え気味だったけど、結構はしゃいでたぞ。初対面の奴にあそこまで干渉するような奴ではないんだけどな」

「干渉？ 誰に？」

「お前だよ」

ビシツ、とハルは指差された。

「お、俺？」

「あと、冬樹五月だな。二人とも、東京の外から来たんだろ？ 外に興味でもあるんかね、あいつは」

「多分、天城さんと五月さんが気の許せる人達だって感じ取ったんだと思います」

「そんなもん、か……」

「座れー、HR始めるぞー」

そこで、昨日と同じ様に担任の真里奈が教室に入った。

「じゃあ、私はこれで失礼します」

蓮華は軽く頭を下げ、自分の席に戻った。

「……あいつも変わったな」

「？ 誰が変わったって？」

「楠木だよ。あいつ、中学園の時は男子に対して滅茶苦茶人見知りだったんだ」

「……まあ、想像は出来る」

蓮華が顔を赤くして男子と話している姿を、ハルは簡単に思い浮かべることが出来た。

「それなのに、さっきのお前との会話はなんだよ。普通の男女の談笑と全く変わらないじゃねーかよ……中学園を卒業してから桜楼に入るまでに何かあったのかね」

「俺はよくわからないな。初めて会った時から蓮華さんとは普通に喋れてたし」

「……そう言えば、お前楠木のこと下の名前で呼んでんだな」

「アベルはじーっとハルを見る。」

「そもそも、何で外から来たお前と楠木がそんなに仲がいいんだよ？」

「話せば長くなるから、また後でな」

「いや、今話せ！ そうしないと、お前の首を限界まで絞める」

「だから」

ハルが嘆息してアベルを落ち着かせようとした瞬間、

ヒュッ！

何かがハルの頬を掠めた。

そして、バキィ、という音とともに、一本の チョーク がアベルの机に深々と突き刺さった。

「……………」

アベルは恐る恐る顔を上げ、ハルもゆっくりと振り向いた。

「あたしのお話を邪魔したら、こうなる……わかったな？」

一見、真里奈はクラス全員に語りかけているように見える。しかし、その鋭い視線は明らかにハルとアベルに向けられていた。

「……」

二人は無言のまま何度も頷く。周囲の生徒も、同様に汗を浮かべながら頷いていた。

「ふん……では、話を続ける。今日から授業が本格的に始まる。午前の授業は特に言うことはないが、重要なのは午後の『グループ』だ。一度入ったら一年間そのグループから抜けることが難しくなるから、グループの活動をよく見て考えるように……それと、天城！」

「っ！ は、はい？」

突然名前を呼ばれたハルは姿勢を正した。

「お前の場合、色々なグループから誘われるだろうから、覚悟しておけよ」

「？ ……あ」

一瞬、何の事か理解できなかったハルだが、始業式での視線を思い出して思わず手を打った。

（そっか。あの視線はそういう意味もあったんだ）

有能な新入生をグループに加えるには様々な理由がある。

例えば、桜楼学園で行われる様々な行事の殆どはグループ単位での参加になるので、この行事で良い成績を収めてグループの評価を上げるため、というものがある。

ちなみに、クラスで行う行事もちろんあるが、それでもやはり戦闘に関する行事ではグループで動くことが多いのだ。

それに加え、世界機構の依頼を効率的に多くこなしたいため、などの理由もある。

「真里奈先生。グループって二つ以上入ってもいいんですか？」

「基本的に互いのグループのリーダーが認めればオーケーだ。だが、その分だけ自分の負担が大きくなることを忘れるなよ。他に質問があるやつはいるか？」

手を挙げる生徒はいなかった。

「なら、今日はこれまでだ。個人的に相談のあるやつはあたしのところまで来い……授業サボるなよ」

真里奈はそう言い残し、教室を出た。

「……俺の机はどうすればいいの？」

アベルの呟きに答える者はいなかった。

〈第22話〉

桜楼の学食はとても広い。生徒全員がここで食事をしたとしても席は余る。だが、昼時に賑やかになるのは他と一緒にであった。

そんな喧騒に包まれた学食で、ハル達は昼食を食べていた。

メンバーはハル、アベル、蓮華、五月の四人。

午前の普通授業が終わった後、蓮華がハルに話があるということとで、どうせなら一緒に学食に行こうということになり、この四人が集まった。

「生徒会長が俺に会いたいですか？」

「はい」

ハルは対面に座る蓮華の話を聞いて、首を傾げた。

(あの生徒会長が、ねえ……)

ハルは特入試験の時の生徒会長【風谷里奈】を思い出していた。勝ち気な目に他を圧倒するオーラ。どう考えても、ハルの得意とする人ではなさそうである。

「里奈さんがどうしても天城さんに会いたいそうなんです」

蓮華の言葉にハルは益々首を傾げた。

「色々聞きたいことはあるけど……二人ってどういう関係なの？」

「私達、幼馴染なんです」

「え……そうなの？」

ハルは思わず箸を止め、話を聞いていた他の二人も同様に驚いていた。

(そういえば……特入試験の日に健吾さんが保健室で生徒会長のこ
と聞いてたような……)

「それで、『私は色々と手が離せないから、悪いがお前が来てくれ』
とのことですよ」

「はあ……別にそれは構いませんけど」

「『その代わりと言ってはなんだが、他のグループのお前への勧誘

を制限させた』とも言っていました」

「ああ。だからこいつに声をかける先輩方があんなに消極的だったのか」

合点がいった、という感じでアベルが頷いた。

ハル達が教室を出てから学食に着くまで、ハルは何度か先輩に声をかけられたが、全て軽い挨拶程度だった。そうだったのは里奈の計らいのお陰、というわけである。

「私はそのとばっちりを受けたがな」

五月が嘆息しながら呟く。

ハルの代わり、というわけではないだろうが、五月はかなり多くの上級生から勧誘を受けた。ただ、特入試験で五月もそれなりに目立っていたため、それも当然なのかもしれない。

「それで、どうでしょう？」

「会うだけなら大丈夫だと思う……ちなみに、理由は聞いてる？」

「詳しいことはなにも……でも、多分天城さんを生徒会にお誘いするんだと思います」

「生徒会に？」

「はい。生徒会も一つのグループなので。私も里奈さんに誘われて生徒会に入りますし」

「へえ」

その横で、アベルが呟く。

「しかし、他のグループの勧誘を制限させて、自分のグループに誘うのか……あの生徒会長やることがえげつないな」

「お前は学生帳を読んでないのか」

その呟きに、五月が呆れた声を出した。

「……学生帳をきっちり読んでる奴いるのか？」

「はあ……『生徒会は生徒グループの最上位に位置し、その他のグループの行動を制限出来る』と書いてある。生徒会が他のグループの勧誘を制限することは別に卑怯なことでもなんでもない。教員グループは元々勧誘などしないし……若干、反則っぽくはあるが」

「自分の気にいったものはどんな事を使ってでも手に入れる、って小さい頃からずっと言ってきましたから、里奈さん」

蓮華が苦笑しながら言う。強く言えないのは、自分も今回はフオローできる状況ではないと思ったからだ。

「でも、俺もう他のグループに入っちゃってますから、ちょっと難しいかもしれないです」

「……え……そう、なんですか……？」

「はい」

「……………」

蓮華はシヨックを受けた。

里奈のやり方は少し強引だと思っていたが、ハルと一緒に生徒会に入れるなら、とも思っていたからだ。

（本当はいけない事なのに……天城さんと一緒に生徒会の活動して……ことを考えたら……でも……）

何度目かわからない葛藤を始めてしまった蓮華。自分の恋心に気付いていないことも、この混乱に拍車をかけているのだろう。

「参考までに、冬樹さんはどのグループに入るか決めてますか？」

「いや、まだだ。真里奈先生の言う通り、ちゃんと全てのグループ活動を自分の目で見てから決めるつもりだ。まあ、剣技の鍛練を中心とするグループに入るのは確実だがな」

「アベルは？」

「俺は中学園の時の先輩の伝手があるから、そのグループに入るつもりだ。信頼も出来るしな」

「成程ね……でも、全部のグループを見るのって大変そうですね」

「そうか？ たかだが百前後で、教員グループを除けば五十にも満たない。全然だろう」

「へえ、四年の先輩ってそんなにグループ作ってないんですね」

「は？ もちろん全員作ってるに決まっ……天城、お前もしかして四年の数が一・二・三年と同じだと思ってるだろう？」

「え？ 違うんですか？」

「……はあ」

ハルの台詞に、五月と、アベルまでもが大きなため息をついた。

「悪かった、エンレンス。学生帳を読む読まない以前の奴がいた」

「いや。これは流石の俺も呆れる」

そう言つて、二人はハルにとことん呆れた目を向けた。

「な、何でそんな目をすんだよ、二人とも。俺何か変な事言つたか？」

「言つた。お前、学園案内読んでないのか？」

「い、色々忙しくて……」

（忘れてただけだ）

更に呆れられそうなので、もちろん口には出さない。

「はあ……この学園は他の学園と同じで、三年になつたら殆ど卒業するんだよ」

アベルが、仕方ない、といった感じで説明を始める。

「桜楼は特殊な制度があるから、希望者には卒業した後もう一年だけこの学園に通うことと、グループを作ることを許される。主な理由としては、進路の幅を広げるためだな」

「じゃあ、三年で卒業した人は何を？」

「そこまで大きな団体や企業に入るつもりがないか、故郷に帰つてその騎士団に入るかの、どっちかな。まあ、殆どが後者らしいし、俺も多分そうなる」

ハルや五月のように、東京の外から来ていきなり五学園に特別入学するのは、実は珍しい部類に入る。小さい頃から東京に来て、試験の簡単な中学園に通つてから五学園に入学するのが殆どなのだ。

「つまり、今四年にいる先輩は、生まれも育ちも東京か、もう東京から離れるつもりのない人だ。桜楼に三年通つた、つてだけで、地方の町なんかではかなり優遇されるから、四年まで進む必要もないしな」

「あゝ、成程」

「……言つておくが、これは一般常識だぞ」

五月が冷たく言い放つ。

「つてなわけで、グループはそんなに多くないんだ。冬樹の言つた数程度だな」

そう締めくくり、アベルは一気にお茶を飲み干して一息ついた。

「まさか、こんな中学園に入りたてのやつでも知ってることを今さら説明するとはな」

「あ、あはは……あ、ありがとう、アベル」

苦笑しながら、ハルは頬をかく。

「あの、天城さん」

そこで、今まで黙っていた蓮華が口を開いた。

「天城さんが入ってるグループって……誰がリーダーなんですか？」

「あ、それは俺も気になってた」

「と言うより、何時の間にグループに入ったんだ？」

蓮華の言葉を皮切りに、他の二人も興味津津に身を乗り出した。

「ああ。リーダーは神ざ」

『1-Dの天城ハル。至急、一階の職員室まで来なさい。繰り返す』

……』

ハルの言葉を遮り、学内放送が流れた。

「……俺だ」

「お前、何かしたのか？」

「いや、別に……でも、早く行かないと嫌な予感がする。蓮華さん、生徒会長に会うのって今日じゃないと駄目かな？」

「い、いえ。多分、天城さんがお暇な時で大丈夫だと思いますよ」

「そっか。じゃあ、時間が出来たら伺いますって伝えてもらってもいいかな？」

「……」

「蓮華さん？」

「は、はい。わかりました」

「？ じゃあ、よろしくね」

ハルは急いで皿を片づけ、席を立った。

「あ、おい。リーダーの名前は？」

「今度言うよ。皆、また明日」

そう言って、ハルは慌ただしくその場を後にしたのだった。

〈第23話〉

「遅い」

職員室に着いたハルに、玲奈は開口一番こう言った。

「す、すみませんでした」

大人しく頭を下げるハル。逆らうような真似は絶対にしない。

「ふん……着いてこい」

職員室を出た玲奈の後をハルは急いで追った。

「昼は食べたか？」

「あ、はい。ここの学食って美味しいですね」

「なら、その美味しい学食を戻さないように気をつける」

「え……それは……吐くほど厳しいことをするって意味ですか？」

「さあな」

「……………」

ハルは自分の顔が青くなるのを如実に感じる事が出来た。

「そ、そう言えば、神崎先生のグループって他に何人いるんですか？」

露骨に話題を逸らすハル。それでこれから行われることが変更されるわけではないが、今の精神状況で沈黙はきつかった。

「お前だけだ」

「へえ、俺だけ……え？俺だけ？」

「私はグループを作るのが嫌いだからな」

「そ、そうなんですか」

（そう言えば、真里奈先生が『一人を除いて、教員は全員グループを作ってる』って言ってたな。あの一人って神崎先生だったんだ）

「それで、何故私のグループ状況を聞いた？まさか……抜けたいとでも？」

「い、いえ！滅相もないです！俺、どうやらここの生徒会長に気に入られたみたいで、呼び出しを受けたんですよ」

「ふむ……風谷か」

「はい。それで、もし生徒会に誘われたらどうしよう、って思いまして……どうしましょう?」

「そうだな……その件はとりあえず保留だ。私も風谷と話しておく……着いたぞ」

『教員を同伴していない生徒の入室を禁じる』と書かれた札のかけられた扉の前で、玲奈は立ち止った。

「……『第10転移室』?」

扉の上に付けられたプレートをそのまま読み上げたハルが首を傾げる。

「入るぞ」

「あ、はい」

玲奈の後に続いて入ったハルの目に飛び込んできたのは、

「……何にも無い」

机や椅子どころか、窓すらない、真っ白な部屋だった。

「天城、部屋の中央に立て」

「は、はい」

言われるままに、ハルは真っ白な部屋の中央に立つ。

ちなみに、この部屋の大きさは教室の半分ほどである。

「力を抜け」

そう言う玲奈はハルから少し離れた場所で片膝をつき、右手を床に当てている。

「……」

玲奈がブツブツと言葉を紡ぎ始めると、真っ白だった部屋の床が輝きだした。

(あ、これって……特入試験の時の)

ハルがそう思った瞬間、床が一気に輝き、二人はその部屋から姿を消した。

「っ……あ」

目を開けたハルの目に入ったのは、生い茂る草花と大きな木々だった。

(この感覚を味わうのは二回目だな)

「天城」

「あ、はい」

前回と違うのは、今回は一人ではなく、教師同伴ということだった。

「これからお前には 魔物 との実践経験を積んでもらう」

「は、はあ」

「そんな気の抜けた返事で大丈夫か？ 下手したら、死ぬぞ？」

「死ぬ……え、死ぬんですか？」

「ああ。お前が死ぬ気でやらなければ、死ぬ」

「あ、あのですね」

事もなげに言う玲奈にハルが苦笑していると、

「っ!？」

鳥肌がたつ程の恐ろしい気配を全身で感じ取った。

「な、何だ!？」

慌てて背後を振り返るハル。

目の前に広がるのは何の変哲もない森林だが、ハル達の近くに、先程の気配を感じさせた何かが確実にいる。

「『第10転移室』は、ここ 混沌の森 に繋がっている。どういうわけか、この森には子供でも倒せるものから、桜楼の教員が苦戦するものまで、様々な魔物共存している」

そんな中でも、玲奈は平然と話を続けている。

「昔、私は気まぐれでグループを作ってみたことがある。一・二年のみならず、三年の希望者まで殺到したから、この森で腕試しをさせてみたんだが……その日を境に私の元に来る奴はいなくなった」

「……………」
周囲の探索に全ての神経を集中させているハルの頭に、何故か玲奈の声はすんなりと入った。

「心底失望したね。エリートだとか言われてる奴らもこんなもんかと」

玲奈は、自分以上の天才が現れるのを心のどこかで期待していたのだ。

「それ以来、私はグループは絶対に作らないと自分の心に誓った」
無駄な希望を持つのを止めたのだろう。

「だが、お前は私にその誓いを破らせた……期待しているぞ」
最後の言葉は、玲奈が滅多に使うことのない激励の言葉だった。

そして、玲奈の話が終わるのを待っていたかのように、一体の巨大な魔物が二人の前に現れた。

「>レイグレスくか。やはり、お前は運が悪いな」

太い二本足で二足歩行し、大きな口と身体に反比例して、両腕は割合小さい。しかし、>レイグレスくの最大の身体的特徴は、身体を覆うゴツゴツした皮膚と、長い尻尾だろう。

「……………」

しかし、ハルはそんな特徴など意にも介していない。今まで一緒に暮らしてきた竜のほうが何十倍も巨大だからだ。

>レイグレスくは確かに人からみたら巨大だが、竜にとってはその辺の岩と大差ない。

なので、ハルが>レイグレスくにこんなにも戦々恐々しているのには、他の理由がある。

(…………この殺気)

>レイグレスくの殺気は確実に二人に向いている。>レイグレスくがハル達のことを、抵抗する食糧 と思っっているのだから当然

である。

(これが、本当の殺気……)

ハルは今まで、死と隣り合わせの闘い、というものをしたことがなかった。

竜国にいた時に魔物と闘ったことなどなかったし、仮に魔物と遭遇したとしても竜が我先にとハルを護ろうとするので、危険なものとは皆無。東京に来てからは、一人で色々な者と闘ってきたが、お互いに相手を殺そうとは、もちろん思っていなかった。

自分を 必殺 しようと思っっている相手と出会わなかったのだ。

(…… 凄い、な)

ハルは思わずほほ笑んだ。

恐い、けど、ハルはこの状況を待ち望んでいたのだ。

(ようやく…… スタートラインに立てたか)

懂れていたミキ達と並び立つためのスタートラインである。

「覚悟は出来たか？」

「覚悟は……正直、出来てないかもしれませんが、神埼先生の期待には応えてみますよ」

「ふん。その言葉、忘れないぞ」

そう言っつて、玲奈はその場から消えた。

邪魔にならない場所で、この闘いを見学するつもりなのだろう。

(助けは無い、と考えなきゃな)

元々、ハルは助けを求める気はなかったが。

『グウ……』

> レイグレスくは消えた玲奈の探知を早々に諦め、ハルだけに意識を集中させた。

それによって、ハルに更なるプレッシャーがのしかかった。

(これが、命の重みか……面白い)

ハルはより一層笑みを深めた。

「やってやるよー!」

こうして、ハルの最初の 死闘 が始まった。

〈第24話〉

「ふん……まずは、合格か」

ハルがいる場所から遠く離れた崖の上で、玲奈は適当に座りながら呟いた。

（あいつとミキの話聞いた限り、天城はこういう状況は初めてのはずだ）

実際、魔物と目を合わせた時のハルは、完全に 蛇に睨まれた蛙状態だった。

（あのプレッシャーで心が折れてもおかしくはないが……そんなタマではないか）

もう一度、遙か遠くのハル達に目を向ける。

ハルの緊張は解けており、今は闘う気満々であった。

（完全に乗り越えたか……だが）

「>レイグレス<は心構えが出来ただけで勝てるほど甘い相手ではないぞ……今のお前では、な」

恐らく、>レイグレス<に勝てる桜楼の二年はいない。三年でも一部の者だけが勝てるだけであろう。

少なくとも、新入生が相手にするような魔物ではなかった。

（で、こいつとの闘い方をどうするか、だよな……）

現状は、睨みあい。お互いに隙を窺っている。

（隙だらけ、と言えばそうだけど……あの岩みたいな皮膚は半端な攻撃じゃ傷一つ付けられないよな）

覚えたての氣の応用を使って攻撃しても、明確なダメージを与え

られるかわからない。

(となると……やっぱり魔力の応用だよな)

こちらはつい先日覚えたばかりだが、高密度の魔力を圧縮させた魔力剣を精製すれば氣の応用よりかは武器になる。

(問題は……集中する時間を与えてくれるかどうか)

魔力剣を精製している間、ハルは完全に無防備になる。幾らなんでも、魔物の目の前でそれをする勇氣はない。

「どうするか」

つい、声に出してしまう。

この時のハルはとある可能性を見過ごしてをしていた。視覚の情報と固定観念にとらわれて、その可能性を思い浮かべていなかったのだ。

この巨大で、岩のような皮膚を持つ>レイグレスくが、実は物凄く素早い という可能性を。

「っ!?! く、はっ!」

一瞬、本当に一瞬で、ハルは吹き飛ばされてしまった。

(は、はっ!)

両者の距離は軽く十メートルはあった。その距離を>レイグレスくは一瞬で縮め、ハルに体当たりをかましたのだ。

「く、つと!」

ハルは木の幹を掴み、どこまでも飛ばされてしまいそうだった自身の身体を強引に止めた。

そのまま巨木の枝に着地し、両腕を軽く動かす。腕はプルプルと震えていたが、やがてそれも治まった。

(体当たりはなんとか腕をクロスさせて防いだけど……あの魔物、やってくれる)

お互いの距離は三十メートルほど開けた。

そして、両者は相手を視界に捉えている。

こっぴなつてしまつては、牽制や相手のすきを窺うなんてことは無意味に等しい。

『グオオオー!!!』

雄叫びをあげて、>レイグレス<はハルに向けて突進を始めた。スピードは先程の体当たりより若干遅め。威力を重視して、全身に力を籠めているのだろう。

「……………」

その動きに注意を向けていたハルの頭にとある推測が浮かんだ。

（あいつの皮膚、本当に堅いのか？）

自分の速さを隠すためのハリボテなのではないか、という考えだ。（事実、俺はあいつの皮膚が岩みたいだから動きは遅いだろう、っと思ってたわけだし……やってみる価値はある）

そう結論づけて、ハルは両脚に氣を溜めた。

（狙いは、額！）

足場にしていた巨木の枝が粉々に砕け散るほどの勢いで、ハルは>レイグレス<目掛けて跳んだ。

そのスピードは、最初の>レイグレス<の体当たりより速い。

『グ、グガオ!』

>レイグレス<が気付いた時には、ハルの右の膝蹴りは見事に額のど真ん中に直撃していた。

ズガンッ!!!

という音が響く。

>レイグレス<のスピードと、ハルのスピードが合わさったその蹴りの威力は、想像を絶するものだった。

ハルは勢いのままに>レイグレス<の背後まで飛ばされ、>レイグレス<もあまりの勢いに大きな顔を上空に向けた。

そして、結果は、

「いつ、てえ!!!」

ハルの右膝が負傷しただけに終わった。

(め、滅茶苦茶痛い！ あの皮膚、どれだけ堅いんだよ！)

>レイグレス<の額は全くの無傷だった。

皮膚がハリボテ、などという考えは、結局安易なものだったのだ。

(くそっ！ だったら、打つ手が、っ！？)

空中で考えを巡らせていたハルに黒い影が落ちる。

「尻尾か！」

ハルは>レイグレス<の尻尾に器用に吹き飛ばされてしまった。

「ぐっ、ああー！ ぐあっ！」

何本もの木々をなぎ倒し、地面に叩き付けらるハル。

「はあ、はあ。いくら直前で防御出来てても、これじゃあ身体がもたない」

すでに満身創痍に近かったハルは、

(……あ)

と、突然閃いた。

(あそこなら……)

『ガアーー！！』

「っ！？」

何時の間にかハルとの距離を縮めた>レイグレス<は、そのまま尻尾を思いつきり上から叩きつけた。

地面がへこみ、亀裂が走る。

『ゲガア』

>レイグレス<はこれで終わったと思ったのだろう、尻尾をゆっくりと動かした。

しかし、

「ふう」

獲物であるハルは凹んだ地面の真横で息を吐いていた。見るからに、余裕綽々である。

『グッ！ ゲオオーー！！』

イラついた>レイグレス<はヤケクソ気味に何度も尻尾を地面に

叩きつけた。

「桜舞」

ハルは、それらを華麗に避ける。

「今、お前の弱点をようやく見つけた」

そう呟き、ハルは>レイグレス<の尻尾攻撃を避け続けた。

『グウー！ ガアーー！！』

やがて、痺れを切らせた>レイグレス<が尻尾を地面と平行に、横に振った。

「よっ」

ハルはそれを軽くジャンプしただけで避け、そのまま脚に氣を溜めた。

「っ！ はあ！」

そして、空歩速で空気の層を蹴り、>レイグレス<の顔面に向けて跳んだ。

「痛いだろうけど、悪いな！」

そう言つて、拳を突き出した先は、>レイグレス<の右目だった。

『グッ、グガアーー！！』

ハルの拳が、>レイグレス<の右目に突き刺さり、>レイグレス<は甲高い雄叫びをあげた。

「くっ」

その雄叫びと右手の感触に顔をしかめたハルは、空中で何回転かして地面に着地した。

「はあ、はあ……魔物の血も赤いのか」

右手には、人と似通った赤い液体が付着していた。

ハルがより顔をしかめていると、

「……あ」

その赤い液体はやがて塵になり、あっという間に空中に飛び散った。

「何で……?」

『グウー、グウー』

荒い息の>レイグレスくがハルを片目で睨みつけている。

その右目からは、大量の赤い液体が流れている。だが、その液体も地面に落ちて数秒経ったあとには、塵になっていた。

「……お前達は、俺達と同じ存在なのか？ それとも、違うのか？」

『グガアアアア！』

もちろん、そんな問いに答えるわけはなく、>レイグレスくは憎々しげにハルを睨むばかりだった。

「……愚問だったな」

ハルは一度だけ首を横に振り、構え直した。

『グ、アアアア！』

「お互いの命を懸けたやり取りにそんな事は関係ない、か」

ハルは一度だけほほ笑み、次の瞬間にはあらゆる雑念を捨て去った。

〈第25話〉

『ガアーー!!』

>レイグレスくが尻尾を振りまわす度に、木々がなぎ倒される。
「っ、とっ」

空から落ちてくる巨木の破片と尻尾を何とか避けるハル。

(しかし、状況は悪くなったな)

避けながら、頭をフル回転させている。

(警戒してるから左目を狙うのは不可能だし。あと、口の中も弱点かと思っただけ……流石にあそこ跳び込む勇氣はない)

打つ手なし、という状況だ。

(結構本気でマズいな……)

『グ、オオアーー!!』

「? つ!?」

>レイグレスくの尻尾攻撃が止んだ、と思っただ瞬間、相手は素早い動きでハルとの距離を詰めた。

「ちっ!」

舌打ちをし、バックステップで木々の間を縫うようにして>レイグレスくとの距離をとるハル。

だが、>レイグレスくは執拗にハルを追った。

(くそっ! こいつ意外に冷静だ!)

相手が自分に攻撃出来ないかと気付き、自らの身体を壁のように動かしてハルの動きを制限しているのだ。

(いやらしい手を使ってくるな)

なんてハルが苦笑出来ていたのも、その時までだった。

『オオアーー!!』

>レイグレスくはハルが着地する寸前、自分の全体重を載せた右足を、勢いよく地面に叩きつけた。

周囲の地面が大きく揺れ動く。

「っ！」

それによつて、着地した時の衝撃吸収が上手く出来なくなり、ハルは身体をよろけさせた。

『グガアー！！』

間を置かずに、>レイグレスくは自らの尻尾を動かした。

(来るかつ！)

ハルは懸命にバランスをとりながら次の攻撃に備えた。

しかし、>レイグレスくの尻尾攻撃はハルには当たらず、その周囲の地面を大きく抉っただけに終わった。

その結果、

「くっ！ 目がっ！」

舞い上げられた大量の砂と土がハルを襲った。

(目くらましか！ こいつ、狙ってやったな！)

相手の攻撃に意識を集中させ、目を見開いていたことが、仇となつたのだ。

目を瞑ってしまったハルは、とにかくこの場から離れようと、大きくバックステップした。

そして、この行動も結果として後手に回ってしまった。

「あ」

ドン、という音が聞こえ、背中に痛みが発せられた瞬間、ハルは理解した。

背中から思いつきり巨木にぶつかってしまった、という事を。

(やつ、ば！)

焦りすぎて、背後に巨木があることを確認せずにバックステップしてしまったのだ。

この時、すでにハルは目を開けることが出来ていたが、それでもピンチには変わりなかった。

『グオオアー！！』

>レイグレスくがこの機を逃すはずもなく、すでに巨大な右脚でハルを踏みつぶそうとしていたのだ。

「っ、そ！」

避ける暇もないので、ハルはありったけの氣を両手足に溜め、
「はあぁー！」

真っ向から、>レイグレス<の脚を受け止めた。

ズンッ！！

という音とともに、ハルの両足が地面に深くめり込んだ。それでも、なんとか潰されずには済んでいる。

「く……っそ」

だが、ハルの全身にかかっている重力は計り知れない。

一瞬でも氣を抜けば、すぐにペシャンコにされてしまっただろう。

『グガアー！！』

そして、最悪な状況は連鎖するものであった。

「ぐ、ぐ……っ!？」

ハルは自分の右手側から最悪なものが来ていることに気付いた。

>レイグレス<の尻尾だ。

(おいおい！ マジかよっ！)

隙だらけの土手っ腹をフルスイングで叩こうという魂胆だろう。

踏みつぶされるよりいいが、今のハルがこの攻撃を食らったら間違いなく全身の骨という骨が粉々にされる。それでは、死ぬことと
なんら変わらない。

「ちっ！……一か、八かだぁ！」

ハルは意を決して、尻尾が自分に当たる直前に右脚でそれを正面
から防いだ。

こちらにも鈍い音が響いたが、なんとか尻尾が直撃することは免れた。

だが、事態はより深刻になっていた。

「これ、は……もう、ヤバイ」

右脚を尻尾の防御に使ったため、左脚一本で身体にかかる全ての

重力に耐えているのだ。

いつ潰されてもおかしくない。と言うより、今の状況で潰されていないことが殆ど奇跡に近い。

(でも、あと三秒もたな……あれは)

ギリギリの死線をさまよっている中、ハルは視界の端の木に目をつけた。

その木は途中からおかしな方向に幹を伸ばしているのだ。恐らく太陽の光をより浴びるために成長の過程でそうなったのだろう。

(……やるしか、ない！)

藁をも掴む心境だった。成功する確証はないが、やらないよりましだ、と思ったのだ。

ハルはすぐに魔力の応用を使って一本の魔力剣を作り、同時に拡張を行って、魔力のフィールドも作った。

全く集中していないし、この様な状況なので、おそらくこの魔力剣はそこのナマクラより切れ味は劣る。だが、それでも勢いよく射出すれば、それなりの威力は発揮するだろう。

「いつ、けえ！」

ハルは作った魔力剣を即座に射出させた。狙いは、先程のおかしな成長をした木の幹。

魔力剣は一秒も経たずにその木に直撃し、なんとか幹を両断することに成功した。

その結果、木は重力に従って落下する。真つすぐ上を向いて成長していないため、どこに落下するかは、一目瞭然だった。

その落下先には、今にもハルを押しつぶさんとする>レイグレス<がいるのだ。

『グ、グオオ！』

その木が落ちた衝撃なんぞ、巨体で堅い皮膚をもつ>レイグレス<にしてみればなんてことはなかっただろう。人も、集中している時に背後から木の枝が落ちてきても死ぬことや怪我をすることは絶対がない。

だがその事によつて、本当に一瞬だけ気が削がれるのは人も魔物も同じだった。

「よしっ！」

>レイグレス<の脚と尻尾の力が弱まった瞬間、ハルは全ての氣を脚に集中させ、その場を一瞬で離れた。

その数瞬後、>レイグレス<の脚が地面に大きな凹みを作った。

(多分、チャンスは今しか、ない！)

>レイグレス<は今も背中に当たった木を鬱陶しがっているため、ハルにあまり注意を向けていなかった。

ハルはそのまま空中で脚に氣を溜めようとした。

(っ！？ いった！)

しかし、ハルの左脚の筋肉がズタズタに切れていたため、信じられない激痛が走った。

あれだけの重みを数秒間片足だけで耐えしのいだのだから、当たり前である。

(……構うもんか！)

左脚に流れる激痛に齒を食いしぼり、氣を溜めることを続けるハル。

「く、らええー！」

溜めに溜めたな氣を爆発させ、>レイグレス<に空歩速で迫った。狙いは、>レイグレス<の横っ腹。

前のような膝蹴りではなく、全身を使った体当たりだ。

「グ、ガアー……！」

木に氣を取られていた>レイグレス<は、その攻撃をモロに受けた。

いくら体重が重く、身体が巨大でも、ハルの全身全靈のタックルを受けては、流星の>レイグレス<も倒れざるを得なかった。

「まだ、まだっ！」

身体全体に受ける痛みを我慢しながらハルは空中で魔力劍を五本作った。五本が、ハルが一息で作れる魔力劍の数の限界だ。もちろ

ん、どれも切れ味は悪い。

それらを、すかさず射出させる。>レイグレスくにはなく、その周囲の木々に。

切れ味が悪くとも、勢いよく射出すれば木程度なら斬れることは、先程実証済みだった。

『グ、グガアー！！』

倒れこんだ>レイグレスくに木々が覆いかぶさる。

「ふう……」

地面に着地したハルは目を閉じ、全身の力を抜いた。

高密度の魔力を圧縮させた魔力剣を精製するためだ。木を倒したのもその時間稼ぎでしかない。

（あいつがすぐに起き上がるかもしれないけど……）

恐らくこの機会を逃したら、ハルは>レイグレスくに勝てない。

（集中だ……）

やがて、ハルの右手に今までとは比較にならない輝きを発しているオーラが生まれた。

（素早く、それでいて、鋭く……全ての魔力を圧縮させる）

そのオーラは段々と大きくなり、形を変え、一本の剣となった。

「ふう……まだまだ遅いな」

出来あがった魔力剣を掲げ、自嘲気味に呟く。

「でも、出来は今までで最高だ」

『グ、ガアー！！』

>レイグレスくは木々を払いのけ、ハルを睨みつけた。その左目は怒りで血走っている。

「……惜しかったな。もう少し早かったらお前の勝ちだったよ」

『ガアー！！』

>レイグレスくは勢いよく尻尾をハルに向けて振った。

「……………」

ハルが尻尾に合わせて魔力剣を振ると、

『グ、オオアー！？』

簡単に尻尾は両断された。

(……空気を斬ったみたいだ)

ハルの率直な感想だった。

力を込めずにただ相手に合わせて振っただけだったが、>レイグレス<の尻尾を何の抵抗も受けずに両断した。

(あんなに堅い皮膚だったのに……凄いと云うより、恐いな)
これも、率直な感想だった。

『ガアー!!』

尻尾を斬られた>レイグレス<が狂ったような雄叫びをあげる。

「今、楽にしてやる」

ハルは魔力フィールドを広げ、魔力剣を浮遊させて、

「……じゃあな」

最後にそう呟いて、魔力剣を射出させた。

『ガアー! ツグ……ガア』

魔力剣は真つすぐに>レイグレス<の喉を無音で貫き、一瞬後に後頭部からまたも無音で飛び出ても勢いが軽減した様子はなく、そのまま背後の木を何本も斬り裂いた。

『ガ……』

>レイグレス<はゆっくり力なく倒れ、やがて全身が段々と塵になり、数秒も経たないうちに跡形もなく消え去ってしまった。

「……………」

その場には、勝者であるハルだけが一人残ったのだった。

〈第26話〉

「はあ、私も暇じゃないんだけど？」

「す、すみません」

呆れ顔の保健医のリーナに、ハルは申し訳なさそうに頭を下げた。昨日の魔力検査に引き続き、今日もまたハルは保健室に来ていた。もちろん、>レイグレスくとの闘いで負った傷を治すためである。

「まあ、仕事だからいいけど」

そう言つて、リーナは再度ハルの傷に目を向けた。

「どうでしょう？」

「うーん……所々骨がひび割れてたり、皮膚がバツサリ切れてるとこもあるけど、やっぱり一番は左脚ね」

「やっぱりですか」

今も、筋肉がズタズタになっているハルの左脚には激痛が走っている。

「表面的な傷とか、再生力の高い骨とかだったらどうとでもなるけど、筋肉は治すのにそれなりの時間が必要になるわよ」

「時間って……どのくらいですか？」

「そうねえ……完治まで三日、ってところかしら」

「三日……」

長くもないし短くもない、微妙な日数であった。

「普通だったら一週間かかるでしょうけど、あなた自己治癒能力高そうだから……これも、魔力量が関係してるのかしらね」

「？ 何です？」

「何でもないわ。治療するから左脚この椅子に載せて」

「？ はい」

首を傾げながらも言われるままにハルは左脚を椅子に載せた。

「痛々しいわねえ」

なんて呟いたリーナが両手をかざすと、傷口が淡く輝きだした。

(おお……なんかぬるま湯に脚を突っ込んでるみたいな……気持ちいい)

「……あなた、『医術魔法』受けたことないでしょ？」

「はい。直接見るのは初めてです」

特入試験の時は気絶していたため、治療されていた記憶は当然ない。

「顔、緩みつぱなしよ」

「えっ……そ、それは失礼しました」

あまりの気持ちよさに、つい表情を和らげすぎていたハルだった。「気持ちはわからないでもないけどね」

そう言つて、リーナは治療に専念し始めた。

医術魔法 は、他の魔法とは少し毛色が違う。

八属性 などの適正が個人の才能に左右されるのに対し、医術魔法は先祖代々受け継がれていく 遺伝的 な性質を持っている。

もちろん、 医術者 の家系でないものが医術魔法の才能をもって生まれることもあるが、やはりそれはかなり珍しい。

なので、医術魔法を使える 医術者 は少なく、全世界でかなり重宝されている。

ちなみに、魔法を使わない科学的な医療技術もかなり進化しているので、切り傷や骨折などの 怪我 は医術魔法で、風邪や癌などの 病気 は科学的医療で、それぞれ分担している。

「今気付いたんですけど……俺もかしたら医術魔法の才能があるんじゃないですか？ 昨日のあれに医術魔法の適正は書かれてませんでしたよね？」

と、一縷の望みをかけて言うが、

「無理よ」

一刀両断されてしまった。

「……ですか……ちなみに、理由は？」

「私達医術者は例外なく八属性の適正が全て『50』を超えてるのよ。つまり、魔法の才能がないと医術魔法も使えない……全部『1』

のあなたじゃ天地がひっくり返っても無理ね」

「……………」

涙がこぼれないようにハルが上を向いていると、

「天城、新しい制服を持ってきてやったぞ」

今まで姿が見えなかつた玲奈が保健室に入ってきた。

「あ……………ありがとうございます。神崎先生」

「……………お前、何で泣きそうなんだ？」

「……………気のせいです」

「？……………まあいいか。ほら」

玲奈はハルに袋詰めにした制服を渡した。

「ありがとうございます」

失礼のないように受け取り、ハルは頭を下げた。

制服が>ボロボロになったので、玲奈がハルの治療の間に取りに行つてたのだ。

鍛練や 世界機構 の依頼には、ちよつとした防護服の機能も備えている桜楼の制服で行うので、頼めば無償で制服が支給される。

「それで、怪我の状態は？」

「左脚がやつぱり一番酷いみたいです。完治まで三日はかかると」

「三日か……………軟弱な脚だな」

「す、すみません」

頭を下げたハルは、ずっと気になっていたことを尋ねることにした。

「神崎先生……………俺は、先生の期待には応えられたのでしょうか？」

「……………」

玲奈とハルの視線が交錯し、数秒だけ沈黙が訪れた。

「……………あの程度の魔物に苦戦しているようでは、全然だな」

玲奈は、真剣な面持ちでそう言った。

「そう……………ですか」

予想していた言葉だった。

あんなギリギリの闘い、一歩間違えれば死んでいたのはハルだっ

たかもしれない闘いで、玲奈の期待に応えられたとは思っていなかったからだ。

(予想はしてたけど……)

けれども、シヨックは大きかった。

これで玲奈に見限られたとしても、ハルにはまだまだ道がある。それこそ、生徒会に入ることだって出来る。

しかし、そうなるとハルの心に 神埼玲奈という一人の人間に認められなかった という事実が、いつまでも付きまとうことになる。(……悔しいなあ)

それは、今までのハルに芽生えたことのない感情だった。

玲奈は明らかに落ち込むハルを横目で見て、言った。

「『次に』あんな無様な闘いをしたら、その程度の怪我ではすまないほど痛めつけてやるから覚悟しておけ」

「……え」

ハルは自分の耳を疑い、丸くした目を玲奈に向けた。

「次、つて……まだ俺のこと指導してくれるんですか？」

こんなに怪我したのに、というハルの言葉に、玲奈は呆れ気味にため息をついた。

「新入生のお前にそこまで高望みするはずないだろうが……それとも、やはり私のグループを抜きたいのか？」

「い、いえ！……こ、これからもよろしくお願いします！」

「ああ……また明日、私の所に来い」

玲奈は頭を下げたハルの頭を一度だけ、ポン、と叩き、保健室を出た。

「……………」

ハルが照れくさそうに叩かれた頭をなでていると、

「はい。終わったわ」

治療を終えたりーラが声をかけた。いつの間にか、包帯も巻き終

えている。

「ありがとうございます」

慎重に左脚を動かすハル。

まだ痛みはあるが、大分楽になっていた。

「まだ筋肉が回復しきっていないから、激しい運動は控えるように。」

それと、あと三日は保健室に通い続けなさい」

「はい」

左脚に負担をかけないように立って身体の各部位を軽く動かしたハルは、左脚以外の傷もいつの間にか治っていることに気付いた。

(やっぱり腕いいんだな)

特入試験と今回で、ハルはリーナをかなり腕利きの医術者であると確信した。

「松葉杖でも貸しましょうか？」

「いえ。そこまで辛くはないので大丈夫です」

ハルはゆっくりと屈伸し、うん、と頷いた。

「大丈夫そうね」

「はい。本当にありがとうございます……また、よろしくお願ひします」

ハルの言葉にリーナは可笑しそうにほほ笑んだ。

「確かに、あなたこれからも保健室こくけんにいつぱいお世話になるでしょうね。さっきは暇じゃない、なんて言ったけど、あなたがいれば退屈しなくて済むわね」

「あ、あはは」

半分冗談のつもりだったのだが、なんだかリーナの言う通りになりそうだ、と思ったハルは頬をかいて苦笑した。

「そ、それじゃあ、失礼します」

「ええ。頑張りなさい、天城君」

「はい！」

ハルは力強く頷き、片足ケンケンでその場を後にした。

〜第27話〜

「成程なあ、だから天城はそんな包帯巻いてるのか」

目のやり場に困るラフな格好をしたシンキが、おかずを口に運びながら頷いた。

雲月荘での夕食時。ハルは今日あったことを同居人に話していた。今日は 騎士団 務めのシンキと遊佐も早めに帰宅しているため、五人が居間のテーブルを囲んでいる。

「玲奈……あれほどハル君に無茶させるなって言ったのに」

「ミキ、落ちつけ」

手に持った箸をバキィと折ってしまいそうなミキを、遊佐が宥める。

「怪我、大丈夫？」

ハルの隣に座っている千が、目線をハルの足に向けながら尋ねた。「はい。桜楼の保健医さんの腕が凄いいいのもう痛みはありません。ただ、完治するまで時間はかかるそうですけど」

「そう……無理、しないで」

千の表情にほんの少し憂いの色が見えた。

「……善処します」

はつきり、はい、と言えないのは、これから玲奈の指導がさらに厳しくなりそうだからだった。

(皆に心配かけないように早く強くならないとな)

「ところで、どんな魔物と闘ったんだ？」

「神崎先生は>レイグレスくって言ってました。堅い皮膚で意外に動きが素早い」

「>レイグレスく!? それをお前一人で!？」

「は、はい」

予想以上に驚愕するシンキに、ハルはそれ以上に驚いてしまった。ふと周りを見ると、他の同居人も一様に驚いていた。

「>レイグレスくを、ハル君一人で……」
ミキに至っては虚ろな目でそう呟き、

バキイ！

と、ついに箸を折ってしまった。

「……新しいお箸持つてくる」

ミキは低い声で言いながら音もなく立ち、居間を出た。

(こ……恐っ！ あ、あんなミキさん初めて見た！)

烈火のように怒っているわけではないが、それが逆に恐かった。

「まあ、ミキがああなるのも無理はない」

遊佐はそう言いながらミキの折った箸の後始末をしている。

「だな。まだ学園に入りたての天城と>レイグレスくをやらせたんだし……恐るべきは玲奈のスパルタ指導か」

「ハルが死ななくてよかった」

「は、はあ」

(そ、そんなにやばい魔物だったんだ……確かに強かったしな)

魔力の応用をハルが覚えていなかったら、勝てる可能性は皆無だった。

「でも、>レイグレスくをどうやって倒したんだ？ あいつの皮膚、生半可な攻撃じゃ傷一つつけられないだろ？」

「はい。俺の全力の攻撃も全く効きませんでした」

「じゃあ、どうして？」

千が軽く首を傾げる。

「昨日神崎先生に教えてもらった魔力の応用でなんとかかりました。あれがなかったら、絶対に勝てませんでしたね」

「……っ!?!?」「」

軽い調子で言ったハルの言葉に、三人は表情にこそ表わさなかつ

たが、驚愕していた。

(魔力の応用で>レイグレスくを……まさか……)

「天城」

「なんですか、暮月さん？」

「その魔力の応用、私達に見せてくれないか？」

「？ 別に、構いませんけど……」

遊佐の真剣な眼差しにハルが若干気後れしていると、

「ふう。玲奈の携帯に呪いの言葉を吹き込んだら少し気が楽になった」

なんて言いながら、雰囲気柔らかくなったミキが居間にやってきた。

「ミキ。悪いが、大根を一つ持ってきてくれないか？」

「？ 何で？」

「頼む」

「??？」

こちらも遊佐の真剣な頼みに首を傾げながら、台所に向かい、すぐに戻ってきた。

「これでいいの？」

「ああ。ありがとう」

遊佐はミキから大根を受け取ると、横に持って前に突き出した。

「天城、これを魔力の応用……圧縮した魔力で斬ってみてくれ」

「でも、時間かかりますよ？」

「構わない。今のお前に出来る最高のを精製してくれ」

「わ、わかりました」

(ど、どうしたんだ、皆)

遊佐だけでなく、千もシンキも真剣な眼つきをしていることに戸惑いながらハルは立ち上がり、目を閉じた。

(……何となく手を抜くのは駄目な気がする……集中しよう)

ハルが右手を前に出すと、その手に>レイグレスくの時と同じか、それ以上の輝きを放つオーラの塊が現れた。

「これって……」

驚いたようなミキの声も、ハルの耳には入ってこなかった。

(段々と、身体が魔力の応用を理解し始めたのか…… 嘘みたいにするムーズに出来る)

死と隣り合わせの状況を経験したことも、ハルのレベルを格段に上げた要因の一つだろう。

「……出来ました」

それから十秒も経たない内に、ハルは輝く魔力剣を精製した。

「……やってくれ」

遊佐は更に目を細めて手に持った大根を差し出した。

「じゃ、じゃあ、いきますよ」

「ああ」

ハルは若干戸惑いながらも魔力剣を構え、

「ふっ！」

上から下へ、一息に振り抜いた。

ハルの魔力剣は大根を真っ二つに両断し、片方が、ゴト、と床に落ちる。

「ふむ……」

遊佐は手に残った大根の切り口をなぞった。

一方のハルは奇妙な感覚に戸惑っていた。

(何だ、今の…… 空気が邪魔した?)

レイグレスの尻尾でさえ簡単に斬り裂いた魔力剣が、大根を斬る前に 何か の抵抗を受けていたのだ。

結果として大根は斬れたが、下手をしたら途中でその 何か に阻まれて斬れなかったかもしれない。

(俺の勘違いじゃないとしたら…… どんだけ堅いんだよ)

何か は、少なくとも>レイグレス<の皮膚より強固ということになる。

「どうした、天城？」

「い、いえ…… あの、これってなんの意味が？」

「ちょっとした実験だ」

「実験？ 何の」

実験ですか、という言葉は、

「ハルくん」

「うわっ！ ミ、ミキさん!？」

ハルの背中に抱きついたミキによつて遮られた。

「凄いよ、ハル君！ いつの間にこんなことが出来るようになったの!？」

「こ、こんなことつて、大根斬っただけじゃないですか」

「私達が護らなくてもいいほどハル君が成長するのは寂しいけど…

…それ以上に嬉しい!」

そう言つて、ミキはより力を籠めてハルに抱きついた。

「あーもー！ 離れて下さいよ!」

「やーだー」

こうしてミキと戯れている間に、今の 実験 のことはうやむやになつていたのだった。

〜幕間?〜

桜楼学園の生徒会室に、男女二人の姿があつた。

一人は、見ようによつては動物のたてがみに見える荒々しい長髪の獣人の女生徒。もう一人は、短髪で爽やかな印象を与える男子生徒。

獣人の女生徒の名前は【風谷里奈】。桜楼学園の四年生で生徒会長でもあり、実質桜楼学園で一番権力を持つている生徒である。

短髪の男子生徒の名前は【楠木健吾】。里奈の一つ下の三年で、生徒会に所属している。彼には【蓮華】という妹がおり、現在桜楼の一年である。

「ふーん……成程な」

机に肉付きのいい足を大胆に載せた里奈が、携帯をいじりながら呟いた。

「机に足を載せるな」

そんな里奈を書き物をしながら注意する健吾。

後輩にあるまじき言葉使いだが、二人は子供の頃からの仲なので、そんな事はどちらも気にしていない。

ちなみに、健吾の妹の蓮華も幼馴染の一人であり、この二人は自分と他人には厳しいが、蓮華にはとことん甘い。

「何だ、私の生足が見たくないのか？」

里奈はニヤニヤと笑いながら片方の足を健吾に向けた。

角度によつては、完全にスカートの中が見えているだろう。

「馬鹿か」

だが、健吾は里奈の足には全く目もくれずに書類にペンを走らせている。今さら幼馴染の足におかしな気持ちを抱くなんてことはなかった。

「……つまらん」

そう言つて、机から足を降ろす里奈。このままでは健吾が煩そう

なので、一応従ったのだ。

この二人の力関係はとても微妙だった。

「それで、何が成程なんだ？」

「……ついさつき天城ハルと神崎玲奈が『第10転移室』を使った
そうだ」

「……何？」

その言葉に、健吾は初めて顔を上げた。

「『第10転移室』って、確か『混沌の森』に繋がってるよな？」

「ああ。私でもあまり行きたい場所ではないな」

「……その情報、本当なのか？」

「【彩夏】の情報だ。まず間違いない」

「……」

健吾は、何故だ、と本気で思っていた。

混沌の森 は新入生のハルが気軽に行っていい場所ではない。

あそこの森林には危険すぎる魔物が多くいるからだ。

（あの人、何考えてるんだ）

ハルは妹の蓮華の恩人なので、あまり危険な目にあってほしくは
なかった。

（蓮華が悲しむ姿だけは見たくない）

「……言っておくが、私が気になっているのは天城ハルが無事かど
うかではないからな」

深刻な顔をする健吾に里奈は嘆息して言った。

「あの神崎玲奈が一緒なんだ。万が一にも死ぬことはない」

「？ じゃあ、他に何が？」

「神崎玲奈がたった一人の生徒のために動いたってことだ。これは
もう、天城ハルがグループに入ったと考えるべきだろう」

「けど、神崎先生はここ数年自分のグループを持ってないぞ」

「作ったんだろ。天城ハルだけのために」

里奈は携帯をしまい、天井を仰いだ。

「あいつを生徒会に入れようとしたが……相手が神崎玲奈じゃ……」

敵しいな」

「天城を生徒会に入れるってことは初耳なんだが……両方のグループに入らせればいいんじゃないか？」

「神崎玲奈がそんなどっちつかずな状態を許すとは思えないな」

目を瞑った里奈はしばらく考えを巡らせた。

(……これは、逆に面白いことになるかもしれない)

グループの最高位に位置する生徒会と桜楼で最強と呼ばれている神崎玲奈が、一人の新入生を取り合う。

(そんな事態、二度と起きないだろうな……面白い)

里奈はついさっきまでの憂いなどなかったかのように、白く鋭い犬歯を見せて笑った。

健吾はその笑みを見て、またろくでもない事を考えてるな、と深いため息をついたのだった。

ハルが自室で寝息をたてているであろう夜中。

「……………」
小さな明かりが点いているだけの居間に、暮月遊佐の姿があった。その手には、夕食の時にハルが斬った大根が握られている。

知らぬ者が見れば面白おかしい光景だが、遊佐の目は真剣そのものだった。

「なんだ、まだ寝てなかったのか？」

そんな遊佐に声をかけたのは、彼女の同僚のシンキだ。その格好は夕食の時よりもラフな、殆ど下着だけの格好だった。

「ああ……寝付けなくてな」

ミキに見つかっただらこいつ殺されるな、なんて思いながら遊佐は返す。

「私も中々寝れなくてな……まあ、お前に聞きたいこともあったから丁度いいな」

シンキは遊佐の隣に座り、綺麗に両断された大根の片方を受け取った。

「見事に斬れてるな」

「そうだな」

シンキはじっくりと大根の切断面を観察しながら口を開く。

「で、『魔法障壁』はいくつ張ったんだ？」

「……『五』だ」

「遊佐の障壁五個を斬り裂いたか……本当に未恐ろしいやつだな」

ハルが大根を斬った時に感じた違和感の正体は、遊佐が密かに張った魔法障壁だった。

魔法障壁とは、名前の通り魔法の壁である。普通の魔法障壁はもちろん目に見えるが、遊佐はとある方法で魔法障壁を透明にしたのだが、その説明は今は割愛する。

「あの魔力剣、どのくらいの圧縮率だと思う？」

「詳しくはわからないが……魔法の百や二百では足りないのは確かだ」

「そつか……それをあの速さで、しかも、あいつに疲れた様子はなかった、と……確か、天城が玲奈に魔力の応用を教えてもらったのは昨日って言うってたな……」

デタラメだな、とシンキは呟き、遊佐もそれに同意している。

だが、もう二人は驚いたりはいはしない。

天城ハルという人物には、どんな常識も通用しないとわかったからだ。

「私と遊佐が眠れないのも、血が騒いだからだろうな」

「血か……そうだな」

シンキの言葉に遊佐頷いた。

「あんな才能を見せたら本能が奮い立って当然だ……お前もその口だろ、干」

シンキは廊下に声をかけた。

「……………」
返事はしなかったが、千は確かに廊下で二人の話を聞いていた。

「……ハル」

廊下から見える月を見上げながら呟く千の口元は緩められていた。
何を思っただけで彼女がほほ笑んだのか、誰にもわからない。

〜幕間?〜 (後書き)

私の物語をここまで読んで下さった方にお礼申し上げます。

次回の更新がいつになるかわかりませんが、四月から新しい生活も始まりますので、なるべく早く更新したいと思っています。

それでは、読者の皆様も健康を害さないように気をつけて下さい。

〈第28話〉（前書き）

今回の物語はいつもより話数が少ないので、少し早く更新出来ました。次回からこの程度の話数になると思います。

この話はともご都合主義な部分がありますが、今回は特に顕著になってしまいました。気をつけてはいますが、読者の皆様の気分が悪くならないことを祈るばかりです。

それでは、本編のほうをお楽しみください。

〈第28話〉

「もう足は大丈夫なんですか？」

「うん。全然痛くないし、普通に動かせるよ」

「それは良かったです」

蓮華は満面の笑顔を見せて言った。

ハルが 混沌の森 で魔物>レイグレスくを倒してから一週間と数日後の午後。

他の生徒がグループ活動している中、蓮華とハルは桜楼学園の生徒会室に向かっていた。目的は、生徒会長の【風谷里奈】と会うため。

「でも、どうして今日なんですか？」

ハルと一緒に学園生活を送ってきた蓮華に、最初の硬さはもうない。だが、それはハルが相手の場合のみで、他の男子生徒の前では殆ど必ず緊張している。

「神崎先生に、今日風谷に会いに行け、って言われて」

そう言っ、ハルは少し憂鬱になった。

>レイグレスくとの死闘から一週間が経った辺り、今日から数えると数日前、とある二つの噂が桜楼学園に流れた。

一つは、 神崎玲奈が新入生のためにグループを作った。もう一つは、 生徒会が新しい人員を確保しようとしている。とういうものである。

後者はまだどこにでもある類の噂だが、前者は紛う事なき真実なので、すぐにただの噂ではないと知れ渡った。

(そのせいで神崎先生の機嫌が悪くなったし……はあ)

心中で深いため息をつくハル。

真相を確かめようとしたのか、玲奈のグループに入ろうと思ったのか、多くの一・二年がこの数日でハル達のグループ活動を見に来た。結局、グループに入りたい、と言った者はいなかったが、そん

な日は何日も続いたのだ。

玲奈はそのうるさい生徒達にイラつき、そんな彼女のストレスのはけ口となったのがハルである。

(あの無言のプレッシャーは……思い出しただけで……)

必要最低限のことしか話さないで指導を行う玲奈は、ただそこに
いるだけでハルの寿命を一年ほど縮めていた。

「あ、天城さん？ 顔色が凄く悪いですど、大丈夫ですか？」

蓮華に顔を覗きまれたハルは苦笑した。

「ちよつとね……生徒会のほうはどう？ 噂で何か変わったことはある？」

「そうですね……お兄ちゃんと里奈さんはとくに何も言ってますけど、毎日何人かの人達が、生徒会に入りたい、と志願しに来るのは見ました」

新入生の蓮華は、所謂 新しい人員、として生徒会に所属しているが、それはすでに桜楼の生徒ならば誰もが知っている、周知の事実である。なので、それから一週間も経った今に、生徒会が新しい人員を確保しようとしている、と噂されるのは少しおかしい。「この噂って……やっぱり俺のことだよな？」

「多分……そうですね」

蓮華は悪いと思いながらも頷いた。

生徒会が新しい人員を確保しようとしている という噂は、実はただの噂ではない。ここにいる天城ハルがその当事者である。ハルのことを気にいったらしい 里奈が、ハルを生徒会に入れようとしているらしいのだ。

今、蓮華と一緒に生徒会室に向かっているのも、その話をするためである。

「その噂を流した人は、どこで話を聞いたんでしょう？」

ハルが生徒会に誘われている、ということを知っているのは、ハルと生徒会の面々、そして、ハルのクラスメートの冬樹五月とアベル・エンレンス、ぐらいである。

「特に口止めしていたわけではないから、別に漏れてもおかしなことではないんだけど……」

五月とアベルがそんなことを他人に話す可能性は低い、とハルは思っている。一週間以上も同じ教室で学園生活を送っていれば、その程度のことはわかる。

「生徒会の皆さんもそんなことをするはずがありませんし……」

「まあ、人の口に戸は立てられないし……誰かがうっかり喋っちゃったのかもね」

「そう、ですね」

頷く蓮華の横で、それにしても、とハルは考える。

(二つの噂の中心が俺なんだよなあ)

ただの偶然かもしれないが、そうではないかもしれない。

(なんか、引つかかる)

二つの噂が流れた時期も、少しおかしい。

ハルが生徒会に誘われたのも玲奈のグループに入ったのも、一週間以上前のことだが、広まったのは今である。しかも、そんな噂がその前に流れていたわけでもないのに、広まる時は一瞬で広まった。(人為的なものか？ でも、そんなこととして何の意味が？ ……うん?)

「あの、天城さん」

思考を巡らせていたハルに、蓮華が先程までと違う緊張した面持ちで声をかけた。

「ん、何？」

「天城さんは……やっぱり生徒会には入らないんですか？」

それは、蓮華がここ一週間で最も尋ねたかったことであった。

一つのグループに入っていたとしても、もう一つ他のグループに入っても問題ない。だが、その分だけその生徒の負担が大きくなる。もちろん、ハルに無理強いさせることは出来ないが、蓮華はまだ諦めきれずにいた。

ハルが生徒会に入ることを。

ハルと一緒に生徒会の活動をするのを。

「そうだね……個人的には、生徒会に入ってみたいと思ってるよ」
だから、ハルの言葉に蓮華は心の底から喜んだ。

「ほ、本当ですか!？」

「うん……でも、多分その願いは叶わないと思う」

「え……何で、ですか？」

「神崎先生は俺を二つのグループに入らせることを許さないと思う。
そういう、どっちつかず、を一番嫌う人だから……多分」

最後は自信なさそうに言い、苦笑するハル。

「それに、そういう中途半端なのは生徒会にも悪い影響も与えかねない。誇りをもって活動している人達の邪魔をする気はないよ」

「邪魔だなんて……」

「まあ、詳しいことは生徒会長の話聞いてからだね。ここでしょ？」

ハルが指差したのは、他の教室の扉より一回り大きな扉。その扉の上には 生徒会室 と書かれたプレートが付けられている。

「あ、はい」

頷き、蓮華はまだ何となくやりきれない気持ちのまま、扉をノックした。

「入っていいぞ」

中からそんな声が聞こえる。ハルも何度か聞いたことがある里奈の声だった。

「失礼します」

蓮華は扉を開けて中に入り、ハルもその後が続いた。

生徒会室は普通の教室より少し小さく、中央にドでかいテーブルが置かれているだけで他に変わった物は特にない。

「お疲れ、蓮華。大丈夫か？」

机を挟んだ真正面の椅子に座っている里奈は、まず蓮華に声をかけた。その声色は驚くほど優しい。

「大丈夫か、って、教室からここに来ただけじゃないですか」

蓮華は呆れ気味にそう言った。こちらの声色も普段と少し違う。

「蓮華は昔から方向音痴だったからな。子供の時なんて私が迎えに行かないと」

「里奈さん」

「……すまん」

蓮華に睨まれた里奈はかなり真面目なトーンで謝る。

(……冬樹さんといい、この人といい)

最初の印象が百八十度変わる人が多すぎる、とハルは思わずにはいられなかった。

「久しぶりだな、天城」

「あ、お久しぶりです、健吾さん」

蓮華の兄の健吾に声をかけられたハルは頭を下げ、声を抑えて口を開く。

「風谷会長の態度が……イメージとちよつと違うんですけど」

「ん、ああ。あいつ、蓮華を溺愛してるからな。蓮華の前ではいつもあんな感じだぞ」

なんて、健吾が言っている傍で、

「一週間経ったけど……慣れないわねえ」

「そうですね」

と、ハルの左手側に座る生徒会役員の女生徒二人が呟いた。

「……まあ、俺はあいつと幼馴染だから違和感ないんだが、学園でしか会ってないやつは、そうはいかないみたいだな」

「みたいですね」

幼馴染の健吾にとってはあの里奈が普通なのだろう。

苦笑するハルに、里奈は一つ咳払いして目を向けた。

「お前とは初めまして、だよな。天城ハル」

「そうですね。風谷会長のことは何度も見かけましたけど」

「そうか。じゃあ、私と健吾の自己紹介はいららないな」

里奈が自分の右手側に座る女生徒に目配せすると、二人の内里奈に近いほうが立ち上がってハルに身体を向けた。

「私は【サティ・ライナ】。健吾君と同じ三年で生徒会の副会長よ。以後、よろしくね」

恭しく頭を下げるサティ。その姿は学生とは思えないほど様になつていた。

「天城ハルです」

ハルは若干その雰囲気呑まれながらも、丁寧に頭を下げた。

二人が殆ど同時に顔を上げると、サティは気品のある笑みを浮かべた。

（大人っぽいな）

蓮華と里奈の中間ほどの長髪に、落ちついた雰囲気と言葉使い、容姿端麗な顔立ちのサティ。名家のお嬢様と言えれば誰もが信じるだろう。

サティが座ると、その隣の女生徒が腰を上げた。

「【桐野宮彩夏きりのみや あやか】、二年で会計です。よろしくお願いします」

こちらも礼儀正しく頭を下げる。とは言え、サティほど柔らかではなく、どちらかと言えば事務的な仕草だった。

肩口で切り揃えられた髪型で、丸眼鏡をかけた少しツリ目の彩夏は、見た目通りと言うべきか、真面目な人種なのだろう。

「よろしくお願いします」

ハルが頭を下げると、彩夏は一度頷いて腰を下ろした。

「ん……じゃ、本題に入るか。適当に座ってくれ」

里奈の対面に机を挟んで座るハル。若干身体が強張っている。

「単刀直入に言うと、私はお前をこの生徒会に入りたいと思ってる。お前はどうか？ この生徒会に入りたいのか？」

本当に単刀直入である。

「どうだ、と言われても……ご存じかと思えますけど、俺はもう神埼先生のグループに入ってますので。多分」

「今はお前の意思だけを聞いている。とりあえず、生徒会に入りたいか、入りたくないかだけ答える」

「？ それは……入ってみたいですけど」

「そうか。なら、オーケーだ」

「??？」

意味が分からず首を傾げるハルに、里奈が告げる。

「三日後、お前には私と闘って貰う」

「……は？」

相手が目上だということも忘れ、つい素の声を発してしまうハルだった。

〜第29話〜

生徒会室で会長の里奈と相對しているハルは目を丸くしたまま動かない。

（俺が……この生徒会長と闘う？）

先程の里奈の言葉を心中で反復するハル。

対する里奈は顎に手を添えて、ふむ、と呟く。

「正確には、私・お前・その他の生徒達の三つ巴か。まあ、どっちにしろ最後はお前と私の闘いになりそうだがな」

「え……い、いや。何言ってるんですか？ 何で、俺が生徒会長や他の人達と闘うんですか？」

「ん？ ん……私が説明するのも面倒くさいな。サティ、よろしく」

「……はあ」

深いため息をつくサティ。いきなり説明を放棄した里奈に呆れたのだろう。彼女の方が後輩のはずだが、そんなことは関係ない、と言わんばかりにジト目で里奈を睨んでいる。

「あ、あの？」

混乱するハルの視線はサティに向いている。

「……はあ、仕方ないわね。最初から説明してあげる、天城君。まず、あなた達が闘う理由は二つあるの。まず一つは、さつき会長が言っていた通り、あなたを生徒会に入れるため。もう一つが噂のせいで『生徒会と神崎先生のグループに殺到している学園生を抑制するため』よ。この『イベント』でその生徒達を、一網打尽、と言ったら語弊があるけど、私達のグループに入るのを諦めさせるの」

「ちよ、ちよつと待って下さい」

ハルは必死に考えを巡らせながらサティの話を遮る。

「そんなことしなくても、普通に断ればいいじゃないですか？」

「それでもいいんだけど……この生徒会と神崎先生は桜楼学園生の

憧れの存在でもあるのよ。だから、口で言われても諦めない人が多くてね。だから、『ある条件』をクリアしたらグループに入れる、って形にすれば後腐れなく諦めてくれるでしょ」

その ある条件 をクリアするために生徒達は努力し、それでもその条件を叶えることが出来なければ諦めもつく。実現不可能な条件でなければ、少なくとも口で、駄目だ、と言われるよりかは希望者も納得がいく。

もし、誰かがその条件をクリアしたとしても、それだけの実力者が手に入る、ということなので損はしない。

「理屈はわかりますけど……」

「でも、それはただの口実。もちろん、抑制させる意味もあるけど、本当の目的は、学園の施設を使ってあなたと会長に闘って貰うためよ」

「??？」

だが、ここがわからない。

何故自分と会長が闘わなければいけないのか、とハルが考えていると、里奈が横から口を挟んだ。

「そのイベント……『グループ試験』とでも言うておくか。その最中に私とお前が闘って、私が勝ったらお前は生徒会に入ってもらう。もちろん、神崎先生のグループを抜けて、な」

「……ちよつと待って下さい。俺が生徒会長と闘って負けたら、生徒会に入るんですか？」

「ああ」

「勝てるわけじゃないじゃないですか！」

これは、ハルも即答出来る。

里奈の実力を目にしたわけではないが、この桜楼学園の全生徒の頂点に立っているのだから、強くないわけがない。いくら、ハルがそこそこ成長しているとはいえ、敵うはずがないのだ。

「私もそう思う」

「う……そうキツパリ言われると、逆に、やってやるう、って気に

なりますね……そもそも、こんな事を神崎先生が許すとは思えないんですけど?」

「そもそも、この条件を出したのは神崎先生だ」

「……………」

(な、何考えてんだよ、あの人……)

イライラしすぎて俺を痛めつけられるなら何でもいいのでは、とハルは勘ぐってしまう。

「あの人、わざわざ私を指名したからな。しかも、殺す気でやら、とまで言われた」

「……………そうですか」

生気のない声で返事をするハル。仮に、この闘いで自分が生徒会長に勝ったとしても、その先に輝ける未来が待っているとは思えなかった。

「それと、もう一つ……天城に生徒会に入りたいという意思があるか確認しろ、って条件を出された。天城にその気がなかったらこの話はなしだ、とも言われたから、私としてはそれが一番の関門だったな」

遠回しに、このイベントで自分が負けることはない、と言っている。

ハルは玲奈の条件について冷静に考えた。

(俺の意思を確認……一応、俺のことを考えてはくれてるのかな?)
何か裏があるかもしれないが、今はそう思いたかった。

「で、どうする? お前はこの闘いを受けるか? それとも、逃げるか?」

里奈の軽い挑発。

「……………」

ハル挑発を右から左へと受け流し、考える。

(どうするか……って、考えるまでもないか)

相手は桜楼の全生徒の頂点。新入生のハルでは絶対に勝てない。

だが、

(逃げるわけにはいかない)

どんな理由があるかわからないが、その殆ど実現不可能な条件を出した玲奈のためにも、何より、自分のプライドのためにも、この闘いを受けない、なんて選択肢は元からなかった。

「やります……受けて立ちますよ、風谷会長」

「だろうな。それじゃ、『表向き』の名目『グループ試験』の説明を軽くしてくれ、彩夏」

「はい」

今まで黙って話を聞いていた彩夏が、手元の資料を見て口を開く。「参加者は、一年の天城ハル君、四年の風谷里奈会長、神崎玲奈先生の教員グループ、また、生徒会グループの志望者、合計百人ほど。こちらは学年問いませんが、殆どが一・二年になるでしょう。戦闘方式は特別入学試験と同じ『自由乱闘型』。そして、志望者がグループに入るための条件ですが」

彩夏は一度言葉を区切り、ハルと里奈に目を向けて話を続けた。

「『両グループの代表者に致命傷を負わせる、または戦闘不能にした者』とします。致命傷の定義はその場で判断しますが、基本は今後の戦闘に大きな支障を与える程度の致命傷と考えて下さい。その他の詳しいルールは、明日全生徒に配られる冊子を確認して下さい(もうそんな物まで用意してるのか……俺が逃げないことも織り込み済み、ってことか)」

まんまと乗せられたかな、とハルは苦笑する。だが、後悔はしていない。

「彩夏はこのイベントでは中立だ。こちらは不正しないから安心しろ」

「そんなことは心配してませんよ……一つ質問なんですけど、俺が他の生徒にやられた場合、会長との闘いはどうなるんですか？」

「その場合は無しだ。そもそも、私以外の生徒にやられるような奴、この生徒会にはいない」

「手厳しいんですね」

「それだけお前に期待してるんだ。他に質問は？」

「……いえ、特に」

「そうか。なら、話は終わりだ。もう帰っていいぞ」

「はい」

ハルは椅子から立ち、

「蓮華さん、また明日ね」

右手側に座っている蓮華にそう声をかけた。

「は、はい。また明日です、天城さん」

蓮華は若干びっくりしながらも、律儀に立ちあがって頭を軽く下げた。

「それでは、失礼します」

ハルは生徒会室のドアに手をかけて部屋を出ようとしたが、一つだけ聞いていない事に気付いて振り向いた。

「風谷会長、もう一ついいですか？」

「何だ？」

「俺があなたに勝った場合、どうするんですか？」

「……………」

里奈はハルを訝しげに見る。冗談かと思ったからだ。

だが、ハルは冗談でもなんでもなく、本当にどうするのか、と尋ねているようだった。

「……神崎先生は何も言っていないかったな」

「そうですか。それじゃ、何もないんでしょうね」

ハルはあっさりとそんな事を言い、生徒会室を出ようとする。

「待て」

「？」

里奈がハルの背中に声をかけると、ハルはもう一度振り返った。

「お前、私に勝てると思ってるのか？」

今度は直接的に、お前では私には勝てない、との意味を込めて里奈は聞いた。

それに対してハルは苦笑気味に、

「一応ですよ、一応」

と答え、今度こそ生徒会室を出た。

「……自信があるのか、ないのか……よくわからない子ね」
いつものメンバーになった生徒会室で、サティが呟く。

（私に勝てるとは思っていないだろうが……それとは全く逆の気持ちもあるのか）

何をしても勝つ、という気持ちだ。

（……そんな覚悟で来られたら……）
里奈は目を細めて笑った。

（殺してしまうかもしれないじゃないか）

「……………」

その、残酷な、と捉えることも出来る笑みを幾度も見てきた健吾は、心中に一物の不安を抱えたのだった。

〈第30話〉

あつという間に時は進み、ハルが生徒会室に訪れてから三日が経った。

「ふう」

懐かしの コロッセオ の闘技場で、息を吐くハル。

今は開始の合図を待っている状況なので、『グループ試験』参加者の殆どが、この場に集まっている。そして、皆が遠巻きにハルと隣に立つ玲奈にチラチラと目を向けていた。

「百五十つてところか。まあまあ、だな」

玲奈が参加者に目を向けながら呟く。

その数は、当初の推測参加人数より若干多い。大々的に告知したため、今まで半歩引いていた生徒も参加を決めたのだろう。それとグループに入るための条件が比較的簡単なのもそれを後押ししている。

「致命傷を受けたら負けか……この人数だし、体力保てるかなあ」

「保ってもらわなければ困る。こんな奴らを指導するのは面倒だ」

「う……頑張りますけど……最終目標の『あの人』に勝つのは、流石に無理があると思いますよ？」

『あの人』とは、もちろん生徒会長の風谷里奈のことである。

「やろうと思えばやれる」

「はあ……」

相変わらずの言葉に、ハルは思わずため息をついた。

ハルはこの二日間で、何故あんな無茶な条件にしたのか、と何度も玲奈に尋ねたが、その答えの全てが、この やろうと思えばやれる だった。

（そりゃあ、やろうと思えばやれるのかもしれないけど……殆ど奇跡に近いだろう）

里奈に勝たなければ、ハルは生徒会に半強制的に入れられてしま

う。それはハルも玲奈も望んでいないはずである。

ただ、この参加者の半数近くが生徒会に入ること为目标としているので、実はハルはとても優遇されている。

(普通に考えればどっちに転んでもいいんだけど……)
横目で隣にいる玲奈に目を向ける。

「……………」

玲奈は無表情のまま、じっと前を見据えている。

(俺はこの人の指導を受けるって決めたんだし)
それを曲げることは、出来ない。

(それに、ここで生徒会に入ったら、あの>レイグレス<との闘いは何だったんだ、って話になる……頑張ろう)

と、ハルが心中で決意を新たにしていると、

「ああ、そうだ」

玲奈が唐突に口を開いた。

「天城、この闘いで魔力の応用を極力使うな」

「……………」

ハルが目を丸くするのも無理ない。魔力の応用はハルの唯一と云っていい取り柄だからだ。

「絶対に使うな、というわけではない。ただ、お前より実力が下の奴が相手の時は使うな」

「で、でも。参加者には先輩方もたくさんいるんですから、俺より実力が上の人なんていっぱい」

「ここで一年以上過ぎて、まだ自分の目指す道がわからずにグループを変える奴は、どう考えても今のお前より弱い。どちらかと言えば、一年のほうがお前にとっては厄介な相手になる」

心構えが違うからな、と玲奈はそこそこの大声で言う。

「そ、そういう事はもうちょっと声を落として言っして下さい!」

ハルは自分達に向けられる視線が鋭くなったことに気付かないフリをしながら、小声で話を続ける。

「参加者には三年の先輩もいましたよ? パツと見ただけですけど

……あの人は明らかに俺より上でした」

しかも、全員が強面で態度が悪かった。所謂、不良と呼ばれる者達だ。真面目に学園生活を送っているとは思えないが、腐っても三年。ハルより場数を踏んでいるし、技術的にも上だろう。

ちなみに、エリート育成を教育方針としている、ハルの同居人の千が通う 天楼学園 以外の学園には、少なからず不良がいる。学園もその事を認知しているが、更生の余地がない者でも余程のことがない限り 退学 にはならない。その理由としては、学園の面子云々より、 普段の学園生活に刺激を与える などの中々シビアな理由だ。

やられたら、やりかえす ぐらいの気持ちがあれば、この世界では生きていけない。やられた相手が不良で、多人数に襲われた場合でも、である。

「だから、そいつらが相手の時は魔力の応用を使っている。それに、そいつらの目的はどう考えてもお前じゃないから、運が悪くなければ闘うことはない」

「……でも、俺の運の悪さは折り紙つきですよ？」

「……そうだったな」

「……」

二人の間にも何とも言えない沈黙が流れていると、

『これより、生徒会主導の臨時イベント『グループ試験』を開始します。参加者の生徒は闘技場に集まって下さい』

と、放送が流れ、コロッセオの緊張が段々と高まり始めた。

「まあ、頑張りますね……今度こそ、先生の期待に応えられるように」

「そうだな。期待、してるぞ」

二人は顔を見合わせて一瞬だけほほ笑み、行きます、と言ってハルは闘技場の中央に向かって歩き出した。

「……天城」

その背中に声をかけた玲奈は続けて、

「『覚悟』を決める」

と呟き、背中を向けてハルの歩く先とは反対の方向へと歩を進めた。

(『覚悟』?)

それが何を意味するのかわからずにハルは心中で首を傾げるが、深く考える前に放送が流れた。

『それでは、基本ルールの確認をします。一年の天城ハル、四年の風谷里奈、このどちらかに致命傷を与えた者が、両者が所属するグループに入ることが出来ます。時間は三時間。戦闘場所は公平を期するため、転移するまで誰もわからないようにしています。それと、参加者同士の戦闘も許可します』

(ありだとは思ってたけど……あんまり期待できないな)

特入試験と違い、参加者同士で争ってもいいことは一つもない。無駄な闘いをするぐらいならば、無視するか、下手したら結託してしまう可能性がある。

唯一の救いが、この条件でグループに入れる者が一人ずつということである。

(でも……どちらにせよ、俺にはとことん不利なルールだ)

百人以上が敵で、なおかつ、勝てる見込みがゼロに近い相手と絶対に闘わなければいけない。これだけでも、精神的にかなり負担がかかる。

ちなみに、時間切れで里奈と闘えなくなった場合、生徒会に入れないどころか、破門する、と玲奈に言い渡されている。なので、逃げ続けるという選択肢は一番避けなければいけない。

(……理不尽じゃね?)

と、ハルは今さらながら思ってしまった。

(はあ……新入生にこんなことやらせるなよ)

と、ハルがもつともな理由で弱気になっている間に、その時が来た。

「それと、万が一を想定して、転移場所には数人の教員が待機しています。それでは、時間もありませんので、早速参加者の方には戦闘場所に転移してもらいます。先生方、お願いします」

特入試験の時と同じように、観覧席にいる教員数人が闘技場に手をかざした。

(あー、成程。あの『第10転移室』の時は、神崎先生が一人でやってたけど、やっぱりこの人数と大きさを転移させるには、それなりの人員と魔力が必要なんだ)

なんて、ハルが若干現実逃避気味に納得している間に、闘技場の地面の輝きが強くなり、

「健闘を祈ります」

との言葉が最後に耳に入り、ハル、里奈、参加者百五十人近くが、その場から姿を消した。

観覧席の一角に、ハルのクラスメイト達の姿があった。

「遂に始まったなあ」

アベルが楽しげに呟くと、隣の座る絵梨もウキウキしながら同意する。

「わざわざスケジュール調整したんだし、頑張つてよね、天城君」

「お前、そんなに天城の闘い見たかったのか？」

「もちろん！色々噂になつてるじゃない。前代未聞の新入生、と

か。私はあんまりそういうの興味ないんだけど、あんなに言われてたら気になるのは当然でしょ？」

アベルと絵梨は同じ中学園だったので、そこそこ仲がいい。そのため、絵梨の喋り方も、他と比べると遠慮がない。

「まあ、初日から神埼先生のグループに入ったぐらいだし……正直言うと、俺もかなり見たかった」

「でしょ　でも……私達に比べて、この子は……」

絵梨は自分の右隣に座る蓮華に目を向けた。

「う、う……天城さん……」

蓮華は絵梨やアベルとは正反対の青白い顔でそわそわしている。

「……はあ」

そんな蓮華に絵梨はため息をつき、肩に手を置いた。

「ひゃ、ひゃわー！」

蓮華は、ビクツ、と震え、

「え、絵梨ちゃん……」

絵梨に泣きそうな顔を向けた。

「ほら、そんな顔しない……何で蓮華がそんなに緊張してるのよ？」

絵梨が蓮華の頬をプニプニしながら尋ねると、蓮華は不安いっぱいの目を伏せて呟いた。

「里奈さんがあの笑い方をすると……絶対によくないことが起こるんだもん」

「え？」

蓮華の言葉に思わず絵梨が手の動きを止めると、闘技場に大きなモニターが現れた。これも特入試験の時と一緒だが、違うのは、二人の生徒がピックアップされていることだった。

彼等はこの闘いで見知ることになる。自分達のクラスメイトがどれだけ特別で異常な存在なのか、ということに。

〈第31話〉

ハルが一瞬の浮遊感を感じた後、地面に足が着いた。

(この浮遊感は仕方ないとして、転移する時目を瞑ってしまったのはどうにかならないのか?)

今度サングラスでも着けてみよう、なんて考えながら、目を開けるハル。

これまでなら、鬱蒼と生い茂る草花が目に入った。だが、今回は違った。

「…………街？」

ハルの周囲には、大きな建物が建ち並んでいたのだ。東京にも多くある、高層のビル群だ。

(でも…………全部壊れてる)

その建物の殆ど全てに大きな亀裂が入っており、どれもが古臭かった。中には、完全に破壊されている建物もある。だが、ここが街だとわかる程度には原型を留めているので、廃墟群の一步手前のような状況である。

(…………さて、どうするか)

だが、ここがどこなのか、何てことは今のハルには関係ない。もうすでに闘いは始まっているのだから。

(とりあえず…………俺のことを視認しているのは少なくとも五人)

現在、元は道路だったであろう場所の中央にハルは立っているが、その左右の建物から敵意剥きだしの視線が五つ注がれていた。始まってすぐに五人の参加者にみつかるとハルは、やはり中々運が悪い。

(気配が完全に消し切れていない…………新入生だろうな)

そのまま気付いていないフリをしてハルが道なりに歩き始めると、その五つの視線も同じように移動を始めた。

(慎重だな…………乱闘になったらドサクサに紛れて攻撃するつもりだな、多分)

ハルが歩みを止めると、当然の如く、五つの視線も止まる。

「……ふう」

ハルは一度その場で息を吐き、

「……………」

スツ、と、何の前触れもなく姿を消した。

「なっ!?!」

もちろん、五つの視線の主は焦った。

「ど、どこに!?! っ!?! がっ……………」

その一瞬後に、建物と建物の上に隠れていた一人がハルの手刀を延髄に受け、倒れた。

「俺が言えることじゃないけど、もつと冷静にね」

そう言い残し、ハルはその場を離れた。あとの四人を倒すためではなく、逃げるために。

(全員を倒す必要はない…………… さつさと生徒会長を探そう)

この闘いに勝つためには自分で生徒会長を見つけるしかない。もちろん、乗り気ではない。自分から死地に赴くようなものだから。

「まあ、いい経験だと思えば、なんとか乗り越え、っ!?!」

建物を壁沿いに歩いていたハルは、すぐさま横に跳んだ。

直後、その建物の壁から轟音とともに巨大な斧が現れ、ついさっきまでハルが歩いていた場所を薙ぎ払った。

「あっ、ぶな」

と、口では言うが、斧はハルに掠ってもいない。

「ふん。完全な不意打ちだったんだがな…………… 中々いい反応をする」

建物の中から、想像通りの屈強な角刈りの男が斧を持って現れる。そのタイの色で、二年の先輩だということはすぐにわかった。

「あなたが斧を振る直前、気配を感じましたから」

言いながら、ハルは構えた。先程の新生と違って相手は一年を桜楼で過ごしているので、余裕綽綽には出来ない。

「真っ向から俺とやるのか? この体格差だぞ?」

男はハルを見下せるほどの巨体である。正面からぶつかっては確

かにハルが不利だが、それでもハルは笑みを浮かべる。

「ええ。それも、すぐに終わらせませす」

「てめえ……」

男はハルを睨みつけ、斧を両手に持って構えた。

「……………」

二人が沈黙し、静寂が訪れる。

お互いに隙を窺い、

「ぜあぁー！！」

角刈りの男が先に動いた。

そして、雄叫びをあげた男は 高速 で、ハルの背後に回った。

（もらった！）

完全にハルの背後をとった男は勝利を確信する。

この男の戦法はこの巨体を活かした、だまし討ち、のようなものだった。

巨体でしかも巨大な斧を持っているこの男が俊敏だとは誰も思わない、という心理を逆手にとったものだ。ただ、この闘い方を男が編み出したのには、かなりの努力が必要だったことは言うまでもない。

「はぁー！！」

もう一度叫び、斧を横薙ぎに振るう。刃の部分を向けていないのは、彼なりの配慮だった。

だが、そんな配慮は全くの無駄になる。

「よっ、と」

ハルが後ろを見もせず、その攻撃を跳んで避けたからだ。

「……………」

男は信じられないものを見たかのように目を大きくする。実際、彼にとっては信じられない光景だった。タイミングは完璧、相手の意表も突いた、何一つ避けられる要素がなかったのだから。

（ば、馬鹿な……避けられ……た）

「ぶっ」

斧を跳んで避けたハルはそのまま右に身体を回転させ、未だに目を見開いている男の顎を左の回し蹴りで横に打った。

ガコンツ！！

という音が鳴り、ハルの蹴りは直撃した男の顎は横にずらし、同時に脳を大きく揺さぶった。

「あ……」

と、男は叫ぶ暇もなく、前のめりに倒れ込んだ。

「ふう……」

男の横に着地したハルは、失礼と思いつつも脚先で男の身体を揺すり、気絶しているかを確認する。

「よし。ちゃんとクリーンヒットしたな」

男がピクリとも動かないことに安堵したハルは続けて呟いた。

「しかし……>レイグレス<との闘いがこんな形で役に立つとは
男のだまし討ちがハルに効かなかった理由はこれに尽きた。

つい二週間近く前に>レイグレス<と闘ったばかりのハルにとつて、巨体だが実は素早い、という戦法は二番煎じ以外の何物でもなかったのだ。

「この人、かなり驚いてたな……ちょっと可哀そうだ」

哀れ、この男はピエロとなったのだった。

「さて……そろそろ行く」

ハルがその男に同情しながらも一歩進んだ瞬間、

パン！！

という音が遠くで鳴り、

「っ！？」

ハルは狙撃された。

ハルと男が闘った場所から五十メートルほど離れた場所に建つビルの屋上に、狙撃手はいた。

「よし！」

その二年の男は愛用の 魔法銃 のスコープから目を離し、ガッツポーズを作った。

魔法銃 とは、自らの魔力を打ち出すことの出来る 魔具 の総称である。種類が多く、改造も出来るのでそれなりに人気がある。自分の魔力を直接使う、という点では魔力の応用と同じである。

ただ、ハルがやるような圧縮や拡張ほど難しくはなく、魔法銃に適切な量の魔力を込めれば、自動的に圧縮してくれるので、簡易版魔力の応用 とも呼ばれている。

威力は低く、普通の魔法銃では直撃しても人を気絶させることしか出来ないが、それだけで十分だと思える者が殆どである。

ちなみに、人気はあるがこの魔法銃を 魔物 との闘いで使う者は少ない。上級の魔物に攻撃を加えるためには当然相当量の魔力が必要になるし、そもそもそんな量の魔力に何発も耐えられる魔法銃は世界に数えるほどしか存在しないからだ。

「これで、俺がああ神崎玲奈のグループに……後世まで自慢できるな」

男はそういう ステイタス が欲しいだけだった。本気で玲奈の指導を受けよう、という気は彼には全くない。

神崎玲奈の唯一の教え子だった、というだけで様々な団体や企業から引く手数多なのだ。

「さて、あの一年坊主の気絶っぷりを拝見しておくか」

鼻歌でも歌ってしまいそうだった男が再度スコープを覗き込んで見たものは、巨体の男 だけ 倒れている光景だった。

「なっ！？ あの野郎、どこに！」

一瞬の隙をついて放った一撃が避けられたわけがない、と思う気持と裏腹に男は周囲を探索する。

すると、

「次から次へと……先輩方は後輩を虐めるのがそんなに楽しいんですか？」

男の背後からそんな声が聞こえたのだった。

「う、後ろ！？ つ！」

男が銃を後ろに突き付けた瞬間、ハルの容赦ない一撃が男の腹に深く決まった。

「があ！？」

ハルの一撃は屋上の壁をぶち壊し、口から血を吐く男は階下へと落下した。

「ふん……後世まで自慢出来なくて残念でしたね」

瓦礫と共に落ちる男を一瞥し、ハルはそんなことを呟いた。

〈第32話〉

「す、すごい！ 天城君、一気に先輩を二人も倒しちゃった！」
「た、確かにすげえ。強い、強いとは聞いてたが、ここまでとは」

絵梨とアベルが興奮気味に騒ぐ中、蓮華はホッと息を吐いていた。

(天城さん……)

だが、蓮華の不安はまだ拭いきれていない。

「でも、何で天城君無事だったのかな？ 私、てっきりあの魔法銃
でやられちゃったと思ったんだけど……」

「さあ。俺も見えなかったし」

「使えないわね。天城君を見習いなさいよ」

「う、うるせえ！ 俺はこんなナリだけど、闘いはからつきしなん
だよ！」

「何偉そうに言ってるのよ……」

絵梨はアベルをジト目で睨み、蓮華に目を向けた。

「蓮華はわかった？」

「え、う、ううん。私も全然見えなかったから」

「そっか。うう、気になる〜」

と、絵梨が唸っていると、

「あの距離からの弾丸なら、あいつは簡単に弾くことが出来るんだ
よ」

三人の背後からそう声がかかった。

「え、あ。健吾さん」

声をかけたのは蓮華の兄の健吾だった。

「久しぶり、絵梨ちゃん。あと……」

「あ、二人と同じクラスのアベル・エンレンスです」

「楠木健吾だ。いつも妹がお世話になってる」

「い、いえ」

先輩に頭を下げられて、アベルも慌てて頭を下げた。

「それで、健吾さん。弾くことが出来るって？」

三人の後ろに座った健吾に、絵梨が興奮を抑えきれない様子で尋ねる。そのせいか、両獣耳がピコピコと忙しなく動いている。

「あの二年と天城の距離はだいたい五十メートルって所だ。その距離だったら、発砲音と弾丸の到着まで数瞬だけタイムラグがある。その間に弾丸に反応して、急所に当たる前に腕で弾くことが出来るんだ」

「腕で、って……それ、大丈夫なんですか」

「魔法銃は威力が小さいから、腕を軽く振るうだけで殆ど無傷で済むんだ」

だが、これは健吾の視点であり、誰でも出来るわけではない。もし、同じような状況に陥って、ハルのように防ぐことの出来る。二年は恐らく両手で数えるくらいしかない。

「……お兄ちゃん」

と、今まで黙っていた蓮華が健吾の声をかけた。

「どうした、蓮華？ 何をそんなに心配してんだ？」

健吾も先程から蓮華の様子がおかしいことに気付いていたが、何が原因かは正確にはわからない。わかるのは天城について、ということだけである。

「里奈さん、大丈夫かな」

だが、蓮華の口から出たのは、意外にも里奈の名前だった。

「いや、里奈なら大丈夫だろ。あいつに勝てる奴なんて、この学園に」

「違うよ……三日前の里奈さんのあの笑い方……」

「っ……気付いてたのか？」

「うん……里奈さんがあの笑い方をすると……」

蓮華は青い顔でうな垂れた。

「大丈夫だ。あいつは滅多なことがない限り人に対して『暴走』しない。それは、お前が一番わかってるだろ？」

「……うん」

だが、健吾に諭されても蓮華の顔色は変わらなかった。

「あ、あの？ 何がなんだかわからないんですけど」

二人のシリアスな会話に、絵梨がおずおずと口を出す。

「いや。こつちの話だよ」

そんな絵梨に、健吾は微妙に憂いの残った顔でほほ笑みかけた。

「はあ……ところで、蓮華。五月さんは？ 最初、お花摘みにいつてるのかと思っただけど、来ないし……道に迷ってるのかな？」

「え、私も知らないよ。てっきり、絵梨ちゃんの言ってた通りなのかと……」

「……？」

二人して首を傾げると、アベルが横から何の気なしに口を開いた。「何だ、お前達知らないのか？ って、そう言えば、あいつ今日ギリギリで申請したから、知らないのも無理ないか。冬樹なら……ほら」

アベルが指差した先は、闘技場に表示されている巨大モニターだった。

「……で、何であなたがいるんですか」

狙撃手の二年を倒した場所から慎重に歩を進めたハルは、微妙に朽ちた大通りで出くわした人物を見て、額に青筋を立てている。

その人物は長い髪をポニーテールし、片手に一振りの刀を携えた、ハルが最近殆ど毎日顔を合わせている少女、

「冬樹さん！」

クラスメイトの冬樹五月だった。

「私がここにはいけない理由はないだろう?」

五月はハルの反応を面白がり、ニヤニヤ、と悪戯っぽく笑っている。

「それは! ……そうですけど……でも、冬樹さん生徒会とかに興味」

「全くないな」

ハルは思わずっこけそうになった。

「あ、あのですね」

頭に手を当て、このイベントがいかに自分にとって重要か、という話を話そうとするハル。だが、五月が刀を鞘から抜き始めると、その表情が一気に厳しいものになった。

「……やるんですか?」

「ああ。神崎先生のグループや生徒会グループには正直興味ないが……前にお前と闘った時の決着がついてなかったし、あの闘いを見ていた私の『師匠』が大変ご立腹してな」

五月が刀を抜きとると、数秒前までの微笑ましい空気が嘘のように、辺りが緊張に包まれた。

「師匠の機嫌をとるためにも、どちらが上か決めておこうと思ったんだ……希代の新入生」

「……はあ。あなたと闘っている場合ではないんですが」

そう言うハルは、もう全ての神経を五月に集中させている。彼女の前では、一瞬も油断することは出来ない。五月と初めて闘った時から、今この時まで様々な経験を積んだとしても、だ。

「そんなつれない事を言うな」

刹那、

ヒュン!!

と、ハルの胸部を真っ二つに斬り裂くように、五月が刀を左から右に振った。

「楽しもうじゃないか」

「こっちは命がけですよ！」

上体を後ろに逸らして一閃を避けたハルは、右手を地面につけて支点にし、左脚を五月の顔面に放った。

「ぶっ」

その蹴りを、先程の横一閃の勢いを殺さずに右回りに一回転して避けた五月は、そのまま遠心力を加えた回転斬りを、地面についているハルの右脚に向けて振り抜いた。

「っ!?!」

ハルは左手を地面につけてうつ伏せのような状態になり、

「っああー!」

その両手に溜めた気と力だけで強引に自分の身体を真上に持ちあげた。逆立ちのような格好になって五月の刀をやり過ぎたのだ。

「「水車斬り」」

だが、五月はそれすら見越していたかのように、もう一回転し始めた。

(マジかよ! ってか、速っ!)

合計三回転分の遠心力が合わさった刀の速さと威力は、今までとは比較にならない。空気すらその刀には追いつけず、五月の刀に奇妙な空気の唸り声が追従している。その姿はまるで台風のようなであった。

(くっそ!)

両腕に更に気を溜め、逆立ちから前転してその攻撃を躲そうとするハル。だが、元々無理があつた体勢のため、

「ぐっ!」

避けきれずに腹を斬られてしまい、さらに、

「はあー!」

「っ!?!」

「水車斬り」が引き起こした衝撃波のような突風に吹き飛ばされてしまった。

「くっ、そ！」

二十メートルほど瓦礫とともに飛ばされ、なんとか着地するハル。その腹からは血が流れている。

「まだ、致命傷とまではいかないか」

ハルとの距離を全速で詰めながら呟き、立て膝をついているハルに刀を振るう五月。

「くっ！」

腹の痛みには耐えながら、ハルはその刀を避けた。

だが、

「甘い！」

「っ！？」

もう一段階スピードを上げた五月に懐に入られ、柄頭でわき腹を打たれた。

「かっ！」

ハルが口から唾と血の混じった液体を吐き出す。

(くそ！……あーもー！ めんどくさい！)

その一撃でハルの中の何かがキレた。

「はあ！」

よろけたハルに容赦のない一閃を放つ五月。

それに対してハルは、

「っ、ふっ！」

今までの動きが嘘のような素早さで刀を避け、五月に蹴りを打ちこんだ。

「！？ ぐっ！」

五月はその蹴りをモロに腹に受け、その場から後ろに跳んだ。

「くっ……全く……やはりお前には油断できないな」

腹をさすりながら苦笑する五月。

ハルも腹の傷跡に手を当てながら口を開く。その表情は笑顔だが、

何とも言えない迫力があつた。

「もう、遠慮しません」

キレた、のだろう。

「あなたに対して、力を温存させよう、と思っていたのが馬鹿でしたよ」

（この人になら使っても怒りませんよね、神崎先生）

ハルは魔力の応用を使うことを決めた。

だが、この時のハルはまだ玲奈の言っていた 覚悟 の意味を知らなかった。

〈第33話〉

「ふう……暇だな」

そう呟くのは、生徒会長の風谷里奈。彼女はこの、荒廃した、とまでは言えない街に転移してから少しも動いてなかった。理由は色々あるが、主な理由は 面倒くさい から、だ。

「早く天城来ないかな」

そんな里奈が、今回のイベントで唯一の楽しみにしているのが、ハルとの闘いだった。それ以外はすべて暇潰し。ただの余興である。「こいつらじゃ暇潰しにもならないし」

そう言って、自分の周囲に目を向ける里奈。その周りには、彼女に挑んだ数十人の一・二年が気絶していた。彼らが一気に襲いかかっても、彼女の退屈を紛らわすことは出来なかった。

「時間切れになっちまうぞー」

ふと、里奈はその時のことを考えてみた。

時間切れになって、ハルが里奈と闘わずにこのイベントが終わった場合、ハルはこの生徒会にも、玲奈のグループにもいられなくなる。

本当にそれでいいのか、ということに彼女は考えてみたのだ。

(……考えるまでもないな)

答えは一瞬で出た。

そんな奴は生徒会にいらない、が彼女の答えだ。

(この程度の学生を相手にして、時間切れで私と闘えなくなる奴なんて、全然いらない)

彼女の辞書に、妥協、という言葉はない。自分が命令したことが出来ない者は、全く相手にしない。無遠慮、なのだ。

ただ、その無遠慮な分と同じくらい、彼女は優しい。その者が全力を振りしぼって成功する命令しか、絶対に出さない。

このイベントで自分とハルは闘う、と彼女は確信している。ハル

が全力を出せば、その程度のこととは可能だから。

(まあ、ゆつくり待つとするか)

そう思った里奈が、持参した 携帯ゲーム機 を取り出した所で、「ん?」

今までの若々しい気配とは違う、禍々しい気配が近付いていることに気付いた。

「……なんだ、あいつらか」

百メートルほど離れた場所に立っている四人の 三年生 の男達を見つけ、里奈はため息をついてその場から 超速 で離れた。

直後、

ズガァン!!

と、一瞬前まで里奈がいた場所の地面に、二人の男が拳を叩きつけた。地面に大きなクレーターが出来る威力で、だ。

その拳を振るった二人の男は、つい先程里奈が見た四人の内の二人だった。男達は、百メートル離れた場所からここまで、数瞬で移動したのだ。

「遅い、遅い。そんなんじゃ八工が止まるぞ」

だが、里奈はそんな二人の速さを超す速さで、移動していた。

「まず、氣の使い方がなっていない。お前達、三年間何を学んでたんだ?」

そんな事を、携帯ゲーム機の画面を見ながら言う里奈。焦りなどは一切見られない。

「てめえ」

もちろん、男二人が怒らないわけがなかったが、「さて」

と、スキンヘッドのリーダーと思われる男に言われ、今にも里奈に跳びかかりそうだった身体をなんとか制止させた。

「おい」

そのスキンヘッドの男が今もゲーム機に熱中している里奈にかけ
る。

「つくそ！ こいつ中々強い！ あっ！ あゝ」

だが、里奈はゲームに夢中で気付いていない。いや、気付いてい
るが、あえて無視している。そっちの方が、面白い展開になりそう
だから。

「この、クソアマ！」

男が強烈な蹴りを里奈の顔面に放つ。

だが、

「っ！？」

何をどうやったのか、里奈はその脚に乗ってしまった。

「あゝあ、負けた」

しかも、ゲームをやりながら。

「っ！」

いい加減堪忍袋の緒が切れた男が脚を横に振る。

「パーティー編成が悪かったか？」

その前に男の脚から降りていた里奈は、男達から数メートル離れ
た位置でゲーム機をいじっていた。そして、誰にともなく言う。

「それにしても、ここのボス強いなあ……どつかのクソ雑魚四人組
と違って」

『っ！！』

その言葉が思いのほか男達の神経を逆なでしたのか、男達の怒り
がもう限界まで達していたからどんな言葉でもキレていたのか、ど
ちらかわからないが、とにかくその言葉が引き金になり、四人の男
は一斉に里奈を襲った。

五月と距離を保ちながら、ハルは考える。

(どうすれば、この人を倒せるか)

いくら、キレた、と言っても、それはリミッターを外しただけで、怒り狂ったり、何の考えも無しに突っ込んだりはしない。

なので、根本的な目的を忘れてはしていない。

(俺の最終目標は生徒会長と闘って勝つこと。そのためには)

五月のような実力者は速攻で倒さなければいけない。

(……難しいな)

そう思うが、腹の傷も気になるので長期戦はなるべくしたくなかった。

(少しでも時間を作れば……魔力の応用でなんとかなる……多分)
頼りない考え方だったが、一応の指針は決まった。

五月もそれを悟ったのだろう、刀を構え直した。

「仕切り直しだな」

「そうですね」

直後、二人は同時に前に走りだした。

一瞬毎に距離が狭まる。

(まず、懐に潜り込む)

素手が刀と闘う上で、もっとも有効な手段だろう。その分だけ、危険は付きまとうが。

(そのためには……一撃目を確実に避ける)

ハルは五月の右手、つまり、刀の動きに神経を集中させた。今ならば、五月がどのように刀を動かしたとしても、反応出来るだろう。

(来い！)

ハルは身構えた。

だが、二人の距離がいくら縮まろうと、五月の右手が動く気配はない。

(? 何で)

と、ハルが思った瞬間、五月の手が動いた。
右手ではなく、左手が。

そして、左手には鞘が握られていた。今までは、左手の薬指に嵌めた 武収器 に収めていたのだろうが、もう一度出現させたのだ。「っ!?!?」

その、右の側頭部目掛けて振られた鞘を、頭を下げて避けるハル。その際、注視していた右手の刀から目を離してしまった。

「鞘は、刀をしまっただけの道具じゃない」

その隙を逃さずに、五月は右手の刀を一気に振り降ろした。刀は、ハルの左首、丁度頸動脈がある辺りに振られた。

殺す気はないだろうが、致命傷になるのは確実な一撃だ。

(っ! 行ける!)

そんな窮地にも関わらず、ハルは意外にも冷静に動いた。

ハルが曲芸師のように、身体全体を一息に右に捻りながら跳ぶと「なっ!?!?」

背中スレスレに、だが、少しも掠ることなく、五月の刀を避けることが出来たのだ。

「ふっ!」

そのまま、逆上がりのような体勢で、空中から五月の顔面に左足の蹴りを放つ。

「くっ!」

五月はその蹴りを顔をずらして避けるが、

「っ、しょ!?!」

「!?!?」

ハルは五月の後頭部に左の足首を引つ掛け、全身に力を入れて手前に引いた。

結果、五月は前方に引き倒さされ、ハルはその背後に入れ替わるように移動した。

「この!」

(こいつ、重力ってものを受けていないのか!)

五月がそう思っても仕方ないくらい、ハルの動きは常人離れしていた。

「はあ！」

左手を地面について倒れ込むのを防いだ五月は、間髪いれずに背後に刀を振った。

だが、ハルを一瞬でも見失ったのが痛く、すぐさま攻撃に転じたのもマイナスになった。

「っ！？」

その五月の一撃を簡単に避けたハルは、体勢を低くしたて五月の懐に潜り込み、

「だらあ！！！」

氣を溜めに溜めた右拳を、五月の腹目掛けて放った。

「ぐ！！ っ！？」

その一撃が腹に当たる直前、五月は左手で何とかその拳を防いだが、脚まで氣を回すことが出来なかったので踏ん張りがきかず、後方に大きく吹き飛ばされた。

「ふう……………」

五月が遙か先まで飛ばされたのを見届けることはせず、ハルは魔力剣を精製し始めた。

逃げる、という選択肢も浮かんだが、まだ逃げ切れるほどのダメージを五月に与えたとは思えなかった。

(背中を見せるのは危険すぎる……………)

「……………よし、出来た」

数秒後、ハルの右手には一本の魔力剣が握られていた。それには申し分ない魔力が圧縮されている。

「さて、っ！」

ハルは息つく間もなく、反射的に魔力剣を横に振った。

直後、五月の刀とハルの魔力剣が交錯した。

「左手はこの闘いの間、使いものになりそうにない……………だが、それでいい。そっちの方が、燃える！」

「っ……………たく……………あなたも俺と負けず劣らずの、馬鹿、ですね」

二人はそう言葉を交わし、ほほ笑んだのだった。

〈第34話〉

遡ること、二週間近く前。

ハルが>レイグレス<と闘った時の傷も癒えておらず、まだグループに関しての噂が流れていない、穏やかな午後。

玲奈とハルはいつぞやの大部屋にいた。

「武器職人が一生を費やして完成させた名刀。それを魔力剣で両断出来ると思うか？」

唐突に玲奈がこんな問題をハルに投げ掛けた。

「え……どうでしょう……多分、出来ないと思います」

「そう、出来ないんだ。その刀の素材が普通の鉄だとしても、魔力剣でその刀は斬れない。どれだけ魔力を圧縮させた魔力剣でも、だ。なら、何故斬れないのか、わかるか？」

「？ ……いえ」

「『心』が籠ってるからだ」

「『心』……？」

「『魂』と言ってもいい。名刀や名剣と言われているものには、必ずその作り手の魂が宿っている。魔力剣は、魔力を圧縮しただけ、どんな堅い物も斬ることが出来るが、魂は絶対に斬れない」

刀や剣、その他の武器を職人が鍛える時に、彼等は文字通り『心血』を注いでいる。そんな職人の魂が練り込まれた武器を、ただ魔力を圧縮した、だけ、の魔力剣が斬れるわけないのだ。

逆に言えば、大量生産を目的として作られた武器やレプリカなんかは、魂なんて籠っていないただの素材の塊なので、魔力剣でも両断出来る。

「それと、使う武器が何の名もない刀や剣だとしても、それを何年、何十年も使い続けければ、魔力剣に両断されることはなくなる。何故だかわかるよな？」

「……その使用者の魂が宿るから？」

「そうだ。その武器に職人の魂が宿っていなくとも、使用者が武器を一振りする度に魂が宿り、やがて名刀と遜色ない武器になる。一球入魂、一刀入魂、とはよく言ったものだ。ただ、刀や剣を『道具』としか思っていない奴の武器に魂は宿らない。……一つの指標として覚えておけ。お前の魔力剣でも斬れない武器は、紛れもない『本物』だ、つてな」

(やっぱり……本物だったな)

ハルの魔力剣と迫り合っている五月の刀が両断される気配はない。名のある名刀か、彼女の魂が宿っているのだろう。

(まあ、この人は自分の武器を雑に扱うことはないだろうし……当然か)

「ふっ！」

「っと」

五月の軽い牽制の蹴りをハルが避けると、二人の間に再び距離が空いた。

「やはり左手が使えない分、力勝負では勝てないか」

五月の言う通り、彼女の左手はプランと垂れ下がっていた。見た目にはどの程度の怪我かわからないが、刀が握れないのは確かなようだ。

「それでも、やるんですか？」

「もちろん」

即答する五月に、ハルは内心ため息を吐いた。

(厄介なことになった)

五月はとことんやるつもりである。それは、さっさとこの闘いを終わらせたいハルにとっては、よろしくない。

(左腕が使えないくらいじゃへこたれないか……意外に熱い人だな)
苦笑し、剣を構えるハル。

「楽しもうじゃないか」

それを見た五月も、片手で刀を構えた。追い込まれているにも関わらず、その雰囲気にはどこかゆとりがある。

(その余裕の笑みを崩してやる……とりあえず、攻める！)

「はあ！」

ハル五月の左手側に回り込んで剣を振るった。

左手側に移動した理由は、もちろん五月が左手を使えないから。遠慮なんかしていられる状況ではない。

「甘い」

そんなハルの攻撃を、身体の向きを変えて正面で防御する五月。力勝負で勝てないことはわかっているのに、弾くようにハルの攻撃を防ぐことも忘れない。

「ちっ！」

舌打ちをしながらも、ハルは再度五月の左手側に回り込んだ。

「ふふ」

余裕の笑顔をみせる五月も、先程と同じようにハルの攻撃を防ぐ。自然と、二人は高速で横に移動しながら刃を交える形になった。ちなみに、刀と剣がぶつかり合った時に発せられる、キーン、という甲高い音は一切鳴っていない。あれは、鉄と鉄が打ち合う時に鳴るものなので、魔力の塊である魔力剣と刀がぶつかり合っても鳴らないのだ。

聞こえるのは、二人が移動する音と空気を斬る音だけ。なので、二人が激しい剣戟を繰り返しているのにも関わらず、辺りは異様に静まりかえっている。

「その剣がどんなものかわからないが……音の鳴らない剣戟の応酬、というのも風情があるな」

「くっ！ 静かすぎる気もしますけど、ねっ！」

慣れていない剣を振りながら、なんとか軽口を返すハル。可能な

限り攻めるているのだが、五月をこれ以上追い込むことが出来ずにいた。

(くそ！ 自分の弱さが露見されてるみたいで嫌になる！)
それどころか、この状況で切迫し始めたのは圧倒的有利なはずのハル自身だった。

闘いに関しては素人に毛が生えた程度のハルに対し、五月は色々な事情から少なくともハルの十倍は経験を積んでいる。なので、ハルと五月では総合的な強さに圧倒的な差がある。五月が片腕を使えなくなつて初めて、二人は対等と闘えるようになったのだ。

今までハルが五月と渡り合えたのは、その柔軟な思考と天才的なバトルセンスがあつたからである。ハルが努力しているのと同じくらい、五月も努力しているのだから、いくら天才的な才能があろうと、今のハルが真正面から五月とやり合つて勝てるはずがないのだ。だが、今は二人の実力は対等であり、ハルがそろそろ五月を追い込めても不思議ではない。

ハルがそうは出来ない要因が他にあつたのだ。

(腕が……重い)

ハルは自分の腕が思い通り動かないことに、ついさつき気付いた。痛みや疲れで鈍くなっているわけではなく、その理由も何となくわかつていた。

(……何で)

しかし、何故 身体が剣を振ることを拒否しているのか、ハルには全くわからなかつたのだ。

と、そこで、横に移動している最中、二人は一瞬だけ街灯を挟んだ。

「っっ！！」

その街灯は大きさも形も普通で、二人の視界が暗くなつたのは本当に一瞬だった。コンマ一秒にも満たないかもしれない。

だが、その一瞬で二人の攻撃がリセットされたのは間違いないかつた。

そして、二人はこう考えた。

((次の一撃を確実に当てる!!))

その一瞬後、再び二人は視界に相手を捉え、

「はぁー!」

「らぁー!」

五月は右手に持った刀を上から、ハルは下から、それぞれ振り抜くと、

ブシュッ!!

と、二人の左肩から血が噴出した。

「ちっ!」

五月は舌打ちして後ろに跳び、

「……………」

その場に留まったハルは呆然と右手に持った、五月の血がついた魔力剣を見つめていた。

「いつかと同じ痛み分けだな……………その剣が地面を音もなく斬り裂くとは思いもしなかった」

魔力や魔法について疎い五月にとって、ハルの魔力剣の切れ味のよさは想定外だった。

「……………」

だが、ハルは何も言葉を返さない。それどころか、血の流れ出る左肩を気にしている様子もない。

(何だ……………今の)

ハルが五月を斬る時に感じたものは 恐怖 だった。 >レイグレ
スくと敵対した時に経験したものはまた違う、 恐怖 。

(何を恐がってた……………俺)

わけがわからない、それが今のハルの心境の大半を占めている。

「どうした、天城。もうギブアップか？」

「っ……ま、まさか、まだまだこれからですよ」

答えるハルは、動揺を隠し切れていない。

「？」

ハルの態度に違和感を感じながらも、五月は刀を構え直した。

「く……」

ハルも同じように構えるが、どう考えても今の心理状態で五月と闘うことなど到底出来ない。

(どうしちまつたんだよ、俺……)

思わず歯を噛み締めるハル。

「行くぞ」

そう言い、五月がハルに迫った。

「く……っそ！」

それでも、ハルは 覚悟 を決めることが出来なかった。

(……かく……「く……?」)

と、ハルの中にその言葉が思い浮かんだ瞬間、

「豪炎球」（うしんたき）！！

炎の球が二人の間に落ちてきた。

「っ!?!」

五月は思わず足を止め、ハルは反射的にその場から飛び退いた。

その炎の球はそれなりの威力で、爆発した後、地面にクレーターを作った。

「ちっ！ 次は外さないぜ！」

と、叫ぶのは、近くのビルの三階から顔と手だけを出している二年の魔法使いだった。

「おい！ 邪魔するな！」

五月にとっては闘いの邪魔をした空気の読めない先輩だが、
(チャンス！)

ハルにしてみればこの状況を打開してくれた救世主である。

「そんな魔法には当たりませんよ！」

頭の中のゴチャゴチャを一旦取り除き、ハルはその先輩を大声で挑発し、わざとゆっくり移動し始めた。

「この、一年の分際で！」

貶された二年は当然怒り、ハルに向けて「豪炎球」を連続して発動させた。なまじ、ハルの動きが遅いだけに、精度より数を優先させたのだ。

「待て、天城！」

五月がハルを追うが、連発される炎の球に阻まれて中々距離を縮めることが出来ない。

「くそ！ おい、止める！」

二年に向けて叫ぶが、もちろん止めるわけもない。

その内、この衝撃音を聞き付けて、他の参加者達もこの場に集まり始め、遂に辺りは騒然とし始めた。これでは、気配を消すのが上手いハルを追うのは難しい。

「……くそ」

最後にそう呟いた五月はハルを追うのを諦め、近くの建物の壁に背をつけて腰を降ろした。

（また……決着を付けられなかった……あの臆病者め……）

心中では悪態をつくが、逃げたハルへの怒りは不思議と少ない。その理由としては、ハルが最後見せた表情にあるのだろう。

（戸惑い……哀しみ……恐怖……色んなのが混ざってたな）

まるで、赤子のようであった。

そんな表情を見せられては、五月も怒ることが出来ない。

（何であいつがあんなに感情を揺らしたのかわからないが……今回だけだぞ）

「次こそ決着をつけようか……師匠」

五月のその呟きは、参加者達の喧騒の中に消えていった。

〈第35話〉

「っ、ぶは！ はあ、はあ……」

五月と闘っていた場所から出来る限り離れた建物の屋上で、ようやく息を吐くハル。筋肉の緊張が緩み

、肩と腹から血が流れ出る。

「とりあえず……治療しとくか」

ハルは服を破り、慣れた手つきで傷口を縛り始めた。

（はあ……何なんだよ）

縛りながら、自分のおかしな心境にため息を吐く。

（あんなに腕が重く感じたのは初めてだ）

まるで、自分の腕ではないかのようにだった。

（人を斬るのが……あれほど難しいとは、な）

とりあえずの応急処置を終え、ハルは雲一つない空を見上げた。

（覚悟、か……）

ゆっくりと目を閉じるが、心のざわつきは収まらない。

（こんなにも……重い）

そのまま目を堅く瞑って苦い顔をしていると、

ズドオン！！

と、大きな爆発音が響き渡り、周囲一帯が大きく揺れた。

（これは……さっきの先輩のじゃないよな……って事は）

自分が関わっていない戦闘には、里奈が関係している可能性大である。

（今の俺があの人の前に出るのは自殺行為な気もするけど……）

だが、それが最終目標なのだから行かないわけにはいかなかった。

ハルは何とか立ち上がり、今も断続的に響く爆発音の方へと移動を始めた。

「ぜえ、ぜえ……この、クソがあ」

「よし！ よーやくボスが弱ってきた」

肩で息をする三年のスキンヘッドの男と、携帯ゲーム機を片手にガッツポーズしている里奈。

「……??」

壮絶な闘いが繰り広げられていると思っていたハルはその光景に首を傾げた。

二人の周囲はどこもかしこもズタズタに壊れており、何人もの生徒が倒れていて殺伐としているが、どうも里奈だけがその光景から浮いている。

(何で……ゲームやってんだ?)

それが最大の謎だった。

「ぜあぁー!!」

里奈に迫った男が拳を振り下ろす。

(速い!)

と、ハルは思ったのだが、

「回復、回復」

里奈は画面から目を離すことなく、それを避けた。

「こ、のおー!」

避けた里奈に、横殴りの殴打を繰り出す男。

「甘い、甘い」

ゲームの話か男のことかわからないが、そんなことを言って男の攻撃を身を屈めて避ける里奈。

(……圧倒的だ)

まさしく、圧倒的である。男が一人なら、里奈は百。ハルから見

も、二人はそれぐらいの力の差がある。

(それでも……あの男の先輩は俺より遥かに実力が上だ)

その男が攻撃を繰り出す速さ、タイミング、強さ、どれをとっても、ハルは敵わない。

(生徒会長はそんな弱い俺との勝負を望んでいる)

それを名譽に思うべきか、滑稽に思うべきか、今のハルでは判断することが出来なかった。

「よし、勝ったあ！」

里奈がヒラリヒラリと男の攻撃を避けながら、空高く手を突き出した。

「さて……ん？」

と、そこで、百メートル近く離れたハルと目が合う。

「……………」

里奈は一瞬だけほほ笑んで、ゲーム機を上着のポケットしまった。

(……そんなに俺と闘うのが待ち遠しかったんですか……) 思わず堅く手を握るハル。

里奈は何も言わなかったが、その鋭い目はこう言っていた

『よつやく来たか』

と。

「さて、そろそろお前の相手も飽きてきたし……終わらせるぞ」

「っ！？」

里奈が男に目を向けた一瞬後、彼女は男の懐深くまで接近していた。

「い、何時の間、につ！？」

男が何か反応をみせる前に、里奈は右拳を男の鳩尾へと放った。

「ぐっ、が、ああ……………」

男は鳩尾をおさえ、その場に倒れ込んだ。

一撃、一瞬の出来事。

(拳の軌道すら見えなかった)

特入試験の時の玲奈と同程度の速さ、ということだ。

「……………」

里奈は倒れ込んだ男に目を向けることもせず、じっとハルを見つめている。

(…………腹を括るか)

ハルは一度建物と建物の間の路地に入り、目を閉じて魔力剣を精製した。

「…………重いな」

その魔力剣は今まで精製したものと何ら変わりないはずなのに、何十倍も重く感じた。

(生徒会長と闘う覚悟は決めただけ…………人を斬る覚悟はまだ、か…………)

それは、これから剣を携えて闘おうとしているハルが抱えるには、大きすぎる欠点だ。だが、その覚悟が決まるのを悠長に待つてはいられない。

(剣を使わなければいい話だけど…………こんな所で俺の負けず嫌いが発揮されるとは、ね)

剣を使うのが辛い、とは思って、だからと言って使わないのは何か違う。そんな矛盾した気持ちで、ハルの中に入った。

「だから…………やるしかない」

そう口に出し、ハルは路地から出る。

里奈はその場から一步も動いていなかった。

(優しい人、って考えていいのかな)

ゆっくりと、ハルは里奈のいる場所まで近付いた。

「なんだ…………もうボロボロじゃないか」

「苦労したんですよ」

苦笑しながらそう言い、二人の距離が二十メートル程度になった所でハルは歩みを止めた。

「一ついいですか？」

「ん？」

「この三年の先輩は何でこのイベントに参加したんですか？」

ハルはうつ伏せに倒れている三年の男を見ながら尋ねた。三年にもなつてグループもクソもないだろう。

「大方、前に私にやられた腹いせだろう」

興味なさそうに答える里奈。

「覚えてるんですか？」

「いや、全く」

「……………」

即答だった。

「……………綱紀肅正のためにも必要だったんだ」

思い出したように言う里奈だが、もちろん全く覚えていない。

「生徒会長なんてやってると、色々と恨みをかうんだよ。今回みたいに何かと理由をつけて襲ってくるなんてざらにある……………まあ、それが面白いんだけどな」

そう言つて、里奈は口の端を上げてほほ笑んだ。

「そうですね……………でも、俺はこの人より弱いですよ？ そんな奴を相手にして、会長は面白いんですか？」

「ああ。もちろん」

こちらも、即答だった。

「お前は確かにこいつらより弱い。だが、あの神崎玲奈すら認めただ底の見えない才能を持つお前との闘いが……………つまらないわけないだろう」

空気が一気に張りつめる。

「……………光荣です」

ハルの額から汗が垂れ、里奈は更に笑みを深めて、言った。

「足掻いてみせろ、天城ハル」

〈第36話〉

「足掻いてみせろ、天城ハル」

直後、里奈はハルの右手側に回り込み、右拳を一気に振り抜いた。
「くっ!!」

ハルは右腕を曲げ、その攻撃を防ぐ。

鈍い音が響き、ハルの身体が空中に浮いて、横に飛んだ。

(重っ！)

まるで、巨大な鉄球が直撃したような衝撃に身体全体が震える。
しかし、完璧に防御したので、ダメージは少ない。

(護りは意味がない！)

数メートル横に飛ばされたハルは、着地すると同時に里奈に迫った。

「ほっ」

と、思わず声を漏らす里奈。ハルのこの行動が意外だったのだ。

(もう少し慎重に来るかと思ったが……ん?)

自分に迫るハルを見て、気付く。ハルが何かに追い立てられているような目をしていることに。

(何を焦っている……まあ、もう少し様子見だな)

「はあ!!」

ハルは右手に持った 重い 魔力剣を、気合いで横に振り切った。
それを屈んで避けた里奈が、右手に氣を溜める。

(させるかっ！)

その里奈の右手目掛けて、ハルは左脚を蹴り上げた。

「っつ」

その蹴りを里奈が右手で受け止めた瞬間、

「っ、らぁー!!」

左手を地面につけて身体を半回転させ、右脚の踵を里奈の右こめかみに向けて振りぬいた。

「おお」

里奈は身体を引いてその蹴りを避けた。

ハルは勢いのまま左手を中心に身体をもう半回転させ、両脚を地面につけて再度里奈に迫った。

（成程、確かに面白い闘いをする）

迫るハルからバックステップで逃げながら、里奈は感心する。

（まさしく、バトルの天才だな……ふむ）

そこで、里奈の悪戯心に火がついた。

（さて、こいつはどこまでやれるかな）

「この！」

バックステップの里奈にも追い付けない自分の遅さに歯痒さを感じるハル。段々とイライラも募ってきた時、

「っ！？」

里奈が両腕に氣を溜めているのに気付いた。

（来る！ でも、チャンスだ！）

相手の攻撃は脅威だが、逆にカウンター出来る機会が生まれた、とハルは考えた。

（問題は……避けられる速さかどうか、だよな……正直、自信はない）

だが、やれなければ、負ける。

（意地でもやってやる！）

ハルが決意すると殆ど同時に、里奈は一際大きく後ろに跳んだ。二人の間に二十メートル程距離が開くが、この程度なら数秒も経たずに埋まる。

（その時が、勝負の時だ）

と、思っていたハルは、次の里奈の行動を理解出来なかった。

「さて、と」

呟いた里奈は、あろうことかその両腕を地面に強引に突き刺した。

「……へ？」

ハルがその行動の意味を考えようとする前に、里奈は腕を上げた。直後、ハルの脚元が揺れ、いきなり視界が高くなった。

「え、ちょ、何で!？」

狼狽するハルは、

「っ……おいおい……嘘、だろ」

里奈を見てようやく状況を理解した。

「意外と上手くいくもんだな」

なんて言う里奈が、ハルの立っている地面を持ち上げていた

のだ。縦、三十メートル、横二十メートルほどの地面を強引にくり抜いて、である。

「あ、ありえないだろ」

その、持ち上げられて斜めに傾いた地面の上で呆然と呟くハル。

竜ではあるまいし、いくら普通の人より力の強い 獣人 とは言え、こんな事出来るはずないからだ。

(力がある、ない、の問題じゃない……物理的に不可能だ)

もちろん、ハルの思っている通り、里奈は力だけでこんなことをしたわけではない。彼女の 魔術 がこの嘘みたいな事を可能にしているのだ。

魔術 とは、言ってしまうえば 未知なる力 である。現代の科学をもつてしても、それがなんなのか、全くわかっていない。

火を操る、水を操る などが、魔術の一例であるが、自分の魔力を消費して火や水を発生させる魔法とは違い、魔術は元からある火や水を意のままに操ることが出来るのだ。この他にも、身体が変化する魔術 や 心理的な作用を及ぼす魔術 など、魔術の種類は数えられないほど多岐に渡り、今現在も新たな魔術が発見されているかもしれない。

どのようにして人がこの未知の力、魔術、を会得するのも全くわかっておらず、生まれた瞬間に魔術を使える者もいれば、遊んでる最中に突然魔術が使えるようになったり、と人によって様々であ

る。

あらゆる不可能を可能にする力として、魔術を 神から授かった奇跡の力 と呼ぶ者もいる。

その奇跡の力を使えば、里奈がこんな大きな地面を持ち上げることも可能なのだ。

(会長の魔術か!?)

ハルもようやくそう思い至ったが、それが分かった所でどうしようもない状況だった。

「よつと」

里奈はいとも簡単にその巨大な地面を 自分の立っている地面と垂直になるように、横に持ち変えた。

「わっ」

その里奈の持ち上げている地面が垂直になったのだから、当然足場も垂直になり、ハルは空中に放り出された。

それだけなら何の問題もなかったが、

「そら」

と、軽い一声とともに、里奈はその持ち上げた地面を思いっきり真横に投げ飛ばした。

「なっ!?!」

驚愕するハルをも巻き込み、その地面は高速でビルに直撃し、とんでもない轟音をたてながらビルを破壊して砕け散った。

「ちよつとやり過ぎたな」

大きな砂煙をたてて崩れ落ちるビルを前にそんなことを呟く里奈。彼女にとってこの大惨事は ちよつとやり過ぎた 程度だった。

その後、十秒も経たない内にビルも跡形もなく崩れた。

「あー……天城の奴、死んじゃったかな？」

言いながら、里奈が瓦礫の山に足を踏み入れた瞬間、

「もらったあー!?!」

近くの瓦礫の一角から飛び出した殆ど無傷のハルが、上から下へと魔力剣を振った。

「っ!？」

その攻撃には流石の里奈も息をのむが、

(っ! また!)

ハルの腕が鎖に縛られたように動かなくなり、

「? っと」

その一撃はあっけなく避けられてしまった。

「くっ、そ!」

ハルは次の攻撃は仕掛けず、里奈と距離をとった。

(駄目だ……いくら押さえつけても……手が)

剣を持つハルの両手は不自然にプルプルと震えていた。

そして、その違和感の正体には里奈も気付いた。

(気のせいだと思ってたが……天城の奴、剣を振れないのか?)

俯くハルの表情には、迷い、焦り、恐怖、など様々な感情が混ざり合っていた。

(……ああ。成程、な)

その表情を見た里奈は、全てを理解した。

ハルが剣を振れない理由、そして、なぜ、玲奈が簡単に生徒会の要求を受け入れ、他の生徒達も参加させ、わざわざ里奈を代表として指名してこのイベントを許可した理由も。

(全部……こいつのためか)

今も懸命に剣を握っているハルを見る。

「……ったく」

まんまと玲奈に一杯喰わされたことを知った里奈は頭をかいた。

その心境は色々複雑で、ハルに八つ当たりをしても不思議ではなかったが、

(……仕方ない。付き合ってやるか)

何故か、そう思った。

(千や蓮華、神崎玲奈だけじゃなく、私もこいつに感化されたか…

… 迷惑な奴だ)

里奈は気付いていなかった。

自分がとても楽しそうに笑っていることに。

〈第37話〉

「ぐあっ！」

ハルと里奈が闘っている場所付近のビルの屋上で、五月は二年の先輩を峰打ちで気絶させた。

「まったく、これから面白くなりそうだと言うのに、邪魔をするな」
五月がこの二年生を倒した理由は、ハルと里奈の闘いに横やりを刺そうとしていたから、である。

「さて……」

五月は屋上の端へと歩き、眼下へと目を向ける。そこでは、ハルと五月が相對している。

「これからどうなるか……見物ですね、師匠」

そう呟く五月の背後には、十数人ほどの参加者が倒れていた。

（まずは……時間をくれてやるか）

そう考えた里奈が目を付けたのは、等間隔で立ち並ぶ街灯だった。
（私がサービスしてやるんだ……少しぐらい痛い思いをしてもらおうぞ、天城）

「っ……っ？」

歩きだした里奈に警戒するハルだが、里奈はハルには目もくれずに、近くの街灯に向かっていた。

（何だ……？）

ハルが首を傾げていると、

「よっと」

里奈はその街灯を片手で根本からもぎ取った。まるで、地中に埋

まる野菜を引っっこ抜くかのように。

(ま……またかよ)

里奈の突飛な破壊行動にいよいよ混乱し始めるハル。

一方の里奈は、

「お……中々いいな」

そのもぎ取った全長十メートルはある街灯を右に左に、ヒュンヒュン、と綺麗に振りまわしていた。

(……武器にするのか?)

「……よし」

やがて、里奈はそれを片手に持ってハルに顔を向け、

「行くぞ、天城」

一気に距離を詰めた。

(やっぱり武器か!)

ハルは手の震えを何とか鎮め、里奈の動きに神経を集中させた

「そら」

長い街灯を武器にした里奈のリーチは広く、ハルの攻撃が届かない場所から縦横無尽に攻撃を繰り出している。

だが、

(厄介……では、ない)

「桜舞」

ハルはその暴風のような攻撃を焦ることもなく確実に避けていく。

避けるだけなら、身体に何の違和感も感じないのだ。

「それか……成程、確かに攻撃が当たらない」

そう言う里奈だが、この攻撃を止める気配はない。

(……考えが読めない)

この街灯を武器にした理由も、その攻撃が避けられているにも関わらず止めない理由も、わからない。

(楽しんでるのか……馬鹿にされてるのかもな)

だが、今の自分は馬鹿にされても仕方ない、とハル自身も思っている。

(でも、いつまでも遊んでたら……)

「痛い目見ますよ!」

ハルは「桜舞」で攻撃を避けながら、瞬時に距離を詰めていく。

「ほお、そんな事も出来るのか」

感心し、里奈が距離をとるために動こうとした瞬間、

「っ!?!」

街灯が、里奈の持っている箇所以外、全てバラバラに刻まれた

ハルは攻撃を紙一重で避ける度に、街灯を両断していったのだ。

その際の斬る動きは必要なく、ただ街灯の通り道に魔力剣を構えておくだけで、あとは勝手に街灯のほうから斬れていく。そして、里奈が動こうとしてその攻撃のスピードを緩めた瞬間、一気にバラけたのだ。

(もらった!)

里奈の懐近くまで移動したハルが剣を振るう。しかし、やはりいきなり腕が動かなくなってしまった。

(このっ! いい加減に!)

「腕が動かないんだろう?」

「え……っ!?!」

思わず声を漏らして顔を上げたハルは、全身の血の気が引くのを肌で感じた。

「それは、お前の『覚悟』が足りないんだ」

(やばい! あの『左』はヤバイ!)

本能で感じ取った。

「この一撃で、教えてやる」

里奈の振りがぶつている左拳。それが直撃したらただでは済まないことを、ハルは本能で感じ取ったのだ。

(か……カウンター!)

咄嗟に思い浮かべ、ハルは右手を動かそうとするが、動かない。

(こんな……時まで！)

「お前が克服しなきゃいけない『覚悟』を」

「あ……」

その一撃が放たれる前にハルが見たのは、里奈の真つすぐな、迷いのない、『覚悟』を決めている瞳だ。

「虎砲」

直後、里奈の容赦ない左ストレートが炸裂した。

「がつー！」

ハルに直撃した瞬間、その速さと威力で辺りに衝撃波が撒き散らされた。

「つー！！！」

ハルは痛みやらを感じる前に、おおよそ二百メートルほど離れた場所に建つ大きなビルの一階に、ノーバウンドで突っ込んだ。

「あー……」

(ちよっと……やりすぎたかな)

今度こそ死んでもおかしくないかもしれない。

(それは……面倒なことになるな)

苦笑して頬をかくが、

「……………」

何も起きない。

(……おかしいな)

このイベントでは常に小型のカメラが里奈とハルを追っているの
で、そんな事態になったらどこかにいる教員が駆けつけるはずであ
る。

(死んでなくても、イベント終了の連絡が入るはずなんだけどな……)

だが、いくら待ってもそんな連絡もない。

そうならない理由は一つだけ、致命傷ですらない、のだ。

(まさか……あいつ、私の「虎砲」を食らって意識も失っていないか……)

心底驚愕する里奈。利き腕ではない、とは言え、完全に本気の一発だったからだ。

(はは、本当に驚かしてくれる……一応、様子みるか)

里奈はハルの吹き飛ばされたビルに向かって歩き始めた。

一方のハルは、

「が……はっ」

瓦礫に埋もれ、血を吐き出しながらも意識は失っていない状態だった。里奈も、ハル自身すら気付いていないが、ハルは当たる直前、衝撃の逃げる方向に無意識に跳んでいたのだ。

それでも、致命傷の一步手前。もう少し跳ぶタイミングが遅かったら、里奈の勝利で幕が閉じていただろう。

(よく……内臓無事だったな)

血を吐き出してはいるが、内臓破裂、とまではいかなかった。

(玲奈さんといい、生徒会長といい……本当に容赦しないな)

「……………」

仰向けに倒れているハルの目には、薄汚れた建物の天井が映っている。だが、その網膜には先程の里奈の瞳が焼きついていていた。

(……格好よかったな)

子供じみた感想だが、そうとしか思えなかった。

迷いのない綺麗な、何者にも捉われない瞳。

(あれが……『覚悟』を決めた人の目か……)

先程の「虎砲」を食らい、里奈の瞳を間近で見たハルは、どうして自分が人を斬れないのか、ようやくわかった。

「馬鹿だな……俺」

左手で顔を覆うハル。

人を斬る覚悟、それはすなわち、自分も斬られる覚悟を決める、ということだ。>レイグレスくのように存在が不確かなもの相手にその覚悟はあまり必要ない。相手と自分の立場が違いすぎるからだ。

しかし、人と闘う場合は違う。相手と自分は根本が同じ存在であり、相手に起こりうることは、自分にも起こる。剣、という明確な武器を人に向けたことによって、無意識の内にハルはそれを理解したのだろう。

（結局……俺は自分が斬られるのを恐がっていた、臆病者、ってわけだ）

そんなハルの弱い心、子供のような臆病な心が、彼の動きを鈍くしていたのだ。

（はあ……五月さんも、生徒会長も、格好いいわけだ……）

自分と相手の存在を全て請け負うプレッシャーが押し掛かっているにも関わらず、あんなにも堂々としている。彼女達は恐らく、自分が死ぬことすら覚悟しているのだろう。

（俺も……あんな風になりたい）

ハルは堅く、堅く、拳を握った。

（>レイグレスくとの闘いで死の恐怖を学んで、スタートラインに立った……今回でその最初の一步を踏み出す）

ハルは両拳の力を抜き、ゆっくりと目を閉じ、ほほ笑んだ。

「……………ん？」

里奈が、ハルの吹き飛ばされたビル三十メートル付近まで近付いた時、中からボロボロのハルが出て来た。両手に 二本 の魔力剣を持って。

「……………いい顔になったな」

そのボロボロのハルを見て、里奈は口の端を上げて尖った犬歯をみせながら呟いた。

見た目はボロボロのハルだが、その顔つきはまるで別人だ。

「ありがとうございます、風谷会長。俺に時間をくださったんですね。本当に……神崎先生とあなたには頭が上がりません」

「何のことかわからないが……もったいいの？」

「はい…… 覚悟 は、出来ましたから」

満面の笑みで答えるハル。

「そうか……ふふ」

里奈は釣られてほほ笑み、このイベントで初めて構えをとって、言った。

「なら、あと少し、付き合ってもらおうか？」

ハルも二刀の魔力剣を構えて、言う。

「望むところです」

こうして、二人の一切遠慮なしの勝負が始まった。

〈第38話〉

「はぁ！」

ハルは左手に持った魔力剣を左斜め上から下へと、振り抜く。その動きは今までのが嘘のように、軽い。

「ふっ」

その一閃を、右に身体を逸らして避けた里奈が、右の拳をハルの左顔面に放とうとする。

だが、その前に、

「っらぁ！」

里奈の行動を予測していたハルが、背中を地面に向けるように半回転して、右手に持つ魔力剣を里奈の上から振り下ろした。

「ちっ」

深追いはせずにその場から後ろに跳ぶ里奈。

すかさずハルは、

（いっけ！）

新たな魔力剣を三本作り、里奈に向けて射出させた。

「っ！」

その攻撃に里奈は目を見開き、空歩速で上空に跳んで避けた。

「っ、と」

ハルもその後を追うように、空に跳ぶ。

（魔力剣か……魔力の応用がここまで厄介だとはな）

今まで魔力の応用を使う者と闘ったことなど、里奈は一度もない。教員にも魔力の応用を満足に使える者がいないのだ。

（あの切れ味は脅威だな、しかも）

ハルは空中に跳び上がりながらまた新たな魔力剣を三本作り、自分の周囲に浮遊させている。

（あそこまで量産出来るとはな）

里奈は魔力の応用が普及していない理由を、もちろん知っている。

なので、ハルがこんなにも魔力剣を作れることですでに驚いている。それに加え、魔力の拡張をも成功させているのだ。

（確か、魔力の応用と拡張は成功するのに『三か月』はかかるって聞いたが）

ハルが桜楼に入ってから二週間ちよつとしか経っていない。

（特入試験では使わなかったから、恐らく元々出来る能力ではなさそうだし……）

「デタラメな奴め」

「よく言われます、よ！」

浮遊させていた魔力剣の一つを射出させるハル。集中して精製させたわけではないので、両手に持つ二刀の魔力剣より遙かに切れ味は劣るが、それでも木は斬り裂くので人の身体もバツサリいくだろ

う。

「つと」

それを横に 空歩速 で跳んで避ける里奈。

ハルも同じように跳び、二人の距離が狭まった。

「それでいて、氣の量も常人より多い……羨ましいな」

「その代わり、魔法の才能が一切ないですけどね！」

ハルは両手に持つ魔力剣と浮遊させた魔力剣を操って同時に里奈を攻める。

魔力の拡張下にある圧縮された魔力は自由に操ることが出来るので、上から下から、右から左から、と多方面から攻撃することが可能になる。ただ、その操る数が増えれば増えるほど、尋常ではない集中力が必要になる。

今のハルが操れる限界は、両手に二本と浮遊させて二本の計四本この数をたったの二週間足らずで操れるハルはやはり天才である。

だが、それでも、

（全然、当たらない！）

里奈に一撃も与えることはできないでいた。

「お前のように上手くはいかないか」

ハルのあらゆる攻撃を 空中 で掠ることなく避ける里奈が、気落ちした様子で呟く。

本人の言うように、里奈はハルの桜舞のようにあらゆる感覚を使って避けているのではなく、ただ一つ、経験の差、でハルの攻撃を予測して攻撃を避けているのだ。

(俺に剣の腕がないのも避けられる原因だろうけど……空中でこゝまでやるか)

驚愕に値する運動能力である。

里奈にとってハルの魔力剣そのものは脅威だが、避ければいいだけの話なのだ。

「さて、空中戦も飽きてきたな」

「っ!?!?」

いとも簡単に高速で魔力剣を振るうハルの両手を掴んだ里奈は、ハルが浮遊させている二つの魔力剣を動かす前に、

「そらっ」

ドムツ!!!

「がつ!?!?」

右脚の蹴りをハルの腹に叩き込み、

「地上戦に戻るうじゃないか」

その身体を地面に思いつきり投げつけた。

「ぐっ、ああ!!」

為す術もなく地面に叩きつけられたハルは、両手に持った魔力剣を手放してしまった。

「くっそ!」

そして、痛みを堪えて起き上がるハルに里奈は、

「これは、避けられるか?」

自然落下しながら力と氣を溜めた右腕を思いつきり振った。

「虎砲弾」

その腕の速度と威力は空気を押し込み、衝撃波を発生させた。この、圧縮された衝撃の塊を生身で受けたらひとたまりもないだろう。「くっ……そんなの」

だが、ハルは自分目掛けて迫りくる衝撃波を、

「避けるまでもありませんよ！」

避ける素振りも見せず、全ての氣と力を込めた右腕で真っ向から迎え撃った。

「っ!？」

「くっ! ああー!！」

一瞬衝撃波が制止した後、ハルの右腕は振り切られ、衝撃波は霧散した。

「はあ、はあ……やろうと思えばやれるもんですね!」
すかさず、地上に降り立った里奈に迫るハル。

(……その瞳)

ハルの、綺麗で豪胆な瞳を目にした里奈の心に、ある変化が訪れた。

「はあ!！」

ハルは一気に近付いて右脚の蹴りを放った。

「……………」

それを左に避けてハルの顔面に右拳のカウンターを仕掛ける里奈。
「っ!」

その拳をハルもギリギリで避ける。

その瞬間、二人の視線が交錯した。

一方は威厳のある鋭い瞳、もう一方は未熟だが怖れを知らない強い瞳。

(……素晴らしい)

ハルの瞳を間近で見た里奈は、先程ハルが里奈の瞳を見た時と同じような感想を抱いた。

（たったあれだけで、ここまで変わるものなのか……才能に、自信に溢れている）

二人の視線が交錯したのは本当に一瞬だが、その間に里奈はハルの瞳に心を奪われてしまった。

（神崎先生、あなたの動きを真似させてもらいます！）

ハルは自分の右腕で里奈の右腕を挟んで動きを制限させ、
「う、りゃあー！」

身体を半回転させて左の肘を里奈の腹に打ち込んだ。

「ぐっ！」

直後、右腕を離し、

「吹っ、飛べー！！！」

もう一度半回転して、右脚を里奈の左のわき腹へと振り抜いた。

「っ！」

その攻撃をモロに受けた里奈の身体が吹き飛ぶ。

（でも……駄目だ）

壁をぶち破って建物の中に飛ばされた里奈は、

（お前の才能は私の『本能』を沸き立たせる……お前を）

いつしか生徒会室でみせた凶暴な笑みを浮かべた。

（殺してしまう）

「ふう……」

ハルは一度息を吐き、里奈を吹き飛ばした建物に目を向ける。

（今のでやれた……なんて甘い事態にはならないよな）

その推測は正しく、

「……………」

それからすぐに、里奈は姿を現した。

「ん……っ！？」

里奈の姿を目にしたハルは、彼女から発せられる雰囲気は今までと違うことにすぐに気付いた。

(これ、は……)

獣のような雰囲気醸し出す里奈の、薄く笑う唇から覗く犬歯は、どういふ訳か長く鋭く尖り、その目は獲物を前にした時の獣のように鋭く細められ、長い髪の毛と獣耳も逆立っている。

ハルはそんな里奈に恐怖と、場違いだと思いつつも 懐かしさを感じていた。

(ミキさん…… 竜の皆と、同じだ)

彼女のその雰囲気は戦闘時の竜と酷似していたのだ。

(獣人の闘争本能に火を付けちゃったのか…… ヤバイなあ)

だが、時が経つほど重くハルに押し掛かる>レイグレス<戦以来の 死 のプレッシャーは、懐かしさなんてものとは無縁だった。

(多分…… 次に勝負をつけないと、この闘いは止められる)

このイベントをどこかで見守っている教員が介入しない、ということは、まだ許容範囲内なのだろうが、これ以上事態が悪化すれば確実に止められる。

「そんな中途半端な結果…… 俺も会長も望んでませんよね」

言いながら、輝く魔力剣を右手に一本だけ精製し、

「決着をつけましょう…… 風谷会長！」

全速で里奈に向かって駆け出した。

(もう、余計なことを考える必要はない…… 次の一振りです最後だ！)

「ふん……」

そんなハルを一瞥した里奈が右拳を強く握ると、凄まじい量の気が瞬時に蓄えられた。この氣から繰り出される攻撃は、とても真正面から受け止めきれものではないだろう。

だが、それでもハルは臆することなく里奈を見据え、魔力剣を構えた。

(死線を乗り越え、人を、自分を斬る覚悟もした！ 次の一步を踏み出すために…… この攻撃から目を逸らすわけにはいかない！)

二人の距離は一瞬で縮まり、

「はぁー！！！」

「おぉー！！！」

お互いの拳と剣が交錯した。

はずなのだが、その後を訪れたのはまるで二人の気迫が嘘だったかのような、奇妙なまでの静寂だった。

「ふう、あやうく殺される所だったな」

そんな中、特に変わった様子もなく呟く里奈。その首元には魔力剣が突き付けられている。

「それは……こっちの台詞ですよ」

苦笑の混じった声で呟くハル。こちらも、顔面に当たる直前で拳が寸止めされていた。

「ふむ……引き分け、だな」

「かなり譲歩してもらったら……そうなりますね」

やはり苦笑気味にハルは言った。

最後の形だけ見れば確かに引き分けだが、内容としてはハルの完敗であるからだ。

「私相手にここまでやったんだ。これ以上を望まれたら、私の立つ瀬がない」

「そう……ですかね」

「おっと」

力なく倒れ込もうとしたハルを里奈が抱き止める。

「す、すみません。緊張が解けたら……力が……」

「気にするな……私が言うのも変だが……よく頑張ったな」

里奈はハルの背中を優しく叩いた。

こうして、ハルに大きな成長を促したグループ試験はあっけなく幕を閉じた。

〈第39話〉

「ごめんなさい」

「許しません」

「……………」

(これは…………)

ハルは目の前の光景に苦笑いするしかなかった。
場所は保健室。

そこには、

「本当にごめんなさい」

「絶対に許しません」

桜楼学園生の頂点に君臨する里奈が、何の変哲もない一年生の蓮華に 土下座 するという、今後絶対見ることが出来ないであろう光景があった。しかも、未だに許して貰えずにいる。

「何か…………シユールな光景ね」

「あ、ああ…………」

付き添いに来た絵梨とアベルも、呆れ半分驚き半分、といった様子である。

「しかし…………何で蓮華はあんなに怒ってるんだ？」

左手に包帯を巻いた五月が首を傾げる。

ちなみに、五月の怪我は、今も黙々とハルの治療を行っている保健医の【リーナ】によってあっという間に完治した。包帯は一応、である。

「そりゃあ、里奈が無茶苦茶したからだよ」

腕組みをした健吾が答える。彼も絵梨達と同じく付き添いに来ていた。

保健室にいるのはこの八人だけで、その全員がこの光景に一樣に苦笑いしている。

「無茶苦茶は…………確かにしてましたけど」

ハルは里奈がビル一つ簡単に崩壊させたのを思い浮かべ、
(でも……多分、蓮華さんは俺のことで怒ってくれてるんだよな)
それと同時に、ついさっき、蓮華が涙目で自分の元に駆け寄って
きた姿を思い出していた。

(まあ、クラスメイトがあそこまでスタボロにされたら、不安にも
なるか)

蓮華もだが、ハルも微妙に分かっていなかった。

「はい。終わったわよ」

そこで、今まで黙って治療していたリーナが口を開いた。

「今回は前と違って複雑な怪我はなかったから完治したはずよ。ど
う?」

「ん、ん……はい、大丈夫です。全然痛くないです」

「そう。それじゃ、早速だけどあの娘達を何とかしてくれない?」

仕事が出来ないわ、と言って、リーナは里奈と蓮華を指差した。

「やっぱり……俺が止めるべきですか?」

「多分ね。勘だけど」

適当な理由だが、この保健室にいる誰もがそう思っていた。

「はあ……はい」

ハルもそれが分からないほど馬鹿ではないので、ため息をついて
椅子から立ち、二人の元に向かった。

「聞いてくれ、蓮華。私は天城を殺すつもりはなかった。これは信
じてくれ」

「殺す殺さないじゃありません。あそこまでやる必要はなかった、
って言ってるんです」

「いや、それは」

「それに……最後の里奈さんは『暴走』しかけてました」

「……気付いてたのか?」

「何年の付き合いだと思ってるんですか……私も、いつまでも子供
じゃないんです」

「そう……だな」

蓮華は悲しげな表情になり、里奈は顔を伏せた。

(な……なんか……入りづらくなった)

少し今までと違う雰囲気戸惑うハルだが、いつまでも黙って立っているわけにもいかないの、勇気を振り絞って二人に声をかけた。

「れ、蓮華さん、会長」

「あ……天城さん」

「もう大丈夫なのか？」

「は、はい」

正座中の人に心配されたことにハルは思わず笑いそうになってしまったが、何とか堪えて真面目な顔を保ち、話を続けた。

「蓮華さん、そんなに会長のことを怒らないであげて下さい」

「え……でも」

「間違つてたら凄く恥ずかしいんですけど……蓮華さんは俺のために怒ってくれてるんです、よね？」

「っ……は、はい」

蓮華の顔が一気に真っ赤になった。しかし、すぐに何かに思い至り、一転して不安そうな表情に切り替わった。

「もしかして……迷惑、でしたか」

「そんな訳ないよ。すっごい嬉しい」

満面の笑みを見せてハルは言った。

「そう、ですか」

ホツと息を吐く蓮華。

「でも、俺が怪我をしたのは、風谷会長のせいじゃない。確かに殺されそうにはなったけど、風谷会長はそれを帳消しにしても足りない、大切なことを教えてくれたんだ。だから……ね？」

「……わかりました」

ハルが思っていたよりあっさりと、蓮華は頷いた。

「天城さんがそこまで言っているのに、私が里奈さんのことを怒るのはお門違いですから……でも、里奈さん。今度はちゃんと約束を

守って下さいね」

「ああ、分かっている。次から、緊急事態以外の時はちゃんと我慢するぞ」

里奈が力強く頷いてほほ笑むと、蓮華も、やれやれ、といった雰囲気醸し出しながらもほほ笑んだ。

「一件落着、だな」

安堵の表情を浮かべるハルの肩に手を置く健吾。

「ですね……蓮華さん、かなり怒ってたみたいですから、二人の仲が悪くなるんじゃないか、って心配してたんですけど……大丈夫そうですね」

「里奈が蓮華を溺愛してるのと同じくらい、蓮華も里奈にべったりだからな。余程のことがない限り、あいつらが仲互いすることはない」

「へえ……」

すでに里奈と蓮華は楽しそうに喋っている。喧嘩の後に尾を引かないのは、長年一緒に過ごしてきた幼馴染だから出来ることなのだろう。

「あなた達、用が終わったなら出なさいよ。こっちは今のイベントのお陰で猫の手も借りたい状況なのよ」

リーナがそんな事を言う程度に、保健室が通常の空気に戻った時、失礼するぞ」

突然、玲奈が保健室に来た。

「あ、神崎先生」

「天城、もう怪我は治ったか？」

「はい。前と違って完全に完治しました。痛みもありません」

「そうか。なら、大丈夫だな」

玲奈は視線をハルから里奈へと移した。

「風谷、イベントの結果はどうなった？」

「……参加者で条件を満たした者はいません。あなたのグループに押し寄せる生徒もいなくなるでしょう」

「それはどうでもいい。私が聞いているのは、天城とお前の闘いだ。結果は引き分けになっただが、どうする？」

(そう言えば……引き分けの時はどうなるのか、聞いてなかったな) なんて、ハルが思っていると、

「そんなの、考えるまでもありません。私の負けですよ」と、里奈が即答した。

「負け、って……引き分けだったじゃないですか」

「私は自分が絶対に勝つと思ってたんだぞ？ その私とお前は引き分けた。入学したての新生が、だ。そんなの、私の負けに決まってるだろう」

「でも、風谷会長が最初から俺を倒す気で来れば、一瞬で勝負はついてましたよ？」

「それを差し引いても、私は勝てるかと確信してたんだ」

里奈は玲奈の目を真つすぐ見つめた。

「あの闘いは私の負けです。天城を生徒会に誘うのは諦めます……それで、神崎先生は私達生徒会に何をさせますか？」

「……私は特に勝った時のことは言わなかったが？」

「言ってませんが……あなたがこのままなんの条件も出さない事のほうの不気味です。『罰ゲーム』はここで決めて下さい」

「……ふん。そこまで言うなら、好きにさせてもらおうか」保健室に異様な緊張が訪れる。

(さて、どんな罰ゲームか……魔物千体討伐、とかならまだ楽なんだが……騎士団の本拠地に闇打ち、なんてのは勘弁だな)

里奈は内心冷や汗をかいていた。玲奈ならそんな事も言いかねないからだ。

「……よし」

玲奈が頷き、周りを見渡して口を開いた。

全員が硬直している中、玲奈が口にした言葉は、

「天城を私のグループと生徒会グループの両方に入ること許可し

てもらった」

『……………』
『そんな、ある意味耳を疑うものだった。』

〈第40話〉

「……今、なんて？」

全員が目丸くして呆けている中、一番の当事者と言えるハルが最初に反応した。聞き返したただけだが。

「だから、お前はこれから私のグループと生徒会グループ、両方の活動に加わるんだ。いいな、風谷？」

「それは……別に構いませんけど」

腑に落ちない、といった顔をする里奈。玲奈がそんな事を言ってしまうたら、そもそもこのイベントが意味を為さないからだ。

「何だ、不満か？」

「いえ……神埼先生はそれでいいんですか？ 天城をこんなどつちつかずな状況に置いて」

「お前達が何を勘違いしてるか知らないが、私は最初からそれでも構わないと思ってる。どつちつかずになるかどうかは、天城が決めることだからな。もっとも、この『ヘタレ』が、私か生徒会のどちらかのグループ活動の手を抜く、なんてこと出来るとは思えないがな」

「へ、ヘタレって、もうちょっとマシな言い方あるでしょう！」

「お前はどうなんだ？ 私の予想では、お前の方がそういう、どつちつかず、を嫌うと思っただが？」

ハルの抗議を無視して、玲奈は今も訝しんでいる里奈に尋ねた。

「私は……」

里奈は玲奈から視線を外し、『む、無視された……』とうな垂れてアベルと絵梨に慰められているハルに目を向けた。

「……あいつの才を私だけで御しきれとは思えません。多分、あなたの元で指導を受けるのが一番です」

「そうか」

「ただ、あなたが天城を生徒会グループに入れろとおっしゃるなら、

喜んで迎え入れましょう。いい刺激にもなりますし……まあ、色々
と無駄になりましたけど」

「意図的に噂を流したことか？ あれもお前らしくなかったな。恐
らく、桐野宮あたりの入れ知恵だろう」

「やっぱり気付いてましたか。それであなたをイライラさせて、こ
のイベントを許可して貰ったつもりだったんですが……掌の上で踊
らされてただけでしたね」

「まあ、イライラしたのは本当だし、あいつの成長のためにもいい
機会だったからな」

「一つ聞きたかったんですが……あの状況で私が天城を本気で倒し
にかかってたらどうしたんですか？」

「さあな。それは、その時考えるしかないだろう。……お前には感
謝してるよ。天城の成長に一役買ってくれたからな」

「……驚くほど天城に心酔してますね」
「お前もな」

玲奈がそう言うと、里奈は一瞬目を丸くし、
「そうですね」

と、呟いてほほ笑んだ。

「あの……それで、どうになりました？」

何とか立ち直ったハルが、恐る恐る二人の話に入る。

「お前は今日から生徒会と私のグループ掛け持ちだ。モテモテだな」
「は、はあ……」

(俺の意思は確認しないのか)

と、ハルは思ったが、よく考えたら中々理想に近い結果なので黙
っていた。

(まあ、かなり疲れるだろうけど)

「それで、生徒会は天城をどう使っていいんですか？」

「基本はそつちでいい。私のグループ活動は週一・二回ぐらいだ」
「いいんですか？」

「こいつに必要なのは経験だ。それは生徒会にいたほうが養える」

「まあ、そうですね」

桜楼学園に来る 世界機構 の依頼で、急を要するものは全て生徒会に任される。生徒会の実力が保証されているからだ。だから、生徒会は教員グループを含めた他のグループより、依頼をこなす数
が大幅に多くなる。

「じゃあ、俺はこれから午後は生徒会室に行けばいいんですね？」

「ああ。私のグループ活動の時は事前に知らせる」

「わかりました」

ハルは頷き、里奈に顔を向けた。

「これからよろしくお願いしますね、風谷会長」

「ああ。よろしくな」

「健吾さんも、よろしくお願いします」

「おう。他の奴らもお前を歓迎するだろう。あんまり気負うなよ」

「はい……それと、蓮華さん」

「は、はい」

事態を完全に把握出来ていない蓮華はおっかなびっくり返事をした。

「この前と言ってる事が逆になっちゃったけど……精一杯頑張るから、これから生徒会でもよろしくね」

「は……はい！」

だが、ハルの言葉でようやくこの話が紛うことなき現実だとわかり、蓮華は喜びを噛み締めた。

（天城さんと……一緒に……ふふ）

一度は諦めていたことなので、その喜びは半端ではなかった。

「なんだか色々タイキナリ過ぎて、正直ついていけないが、とりあえず頑張れ」

「私も全然意味がわからないけど、頑張ってるね、天城君」

「あ、あはは……ありがと、アベル、堂島さん」

ハルが苦笑して頬をかいていると、

「大変だろうが、頑張れ」

クラスメイトで唯一この事態を理解しており、今のところ一番のライバルと言える五月にその声をかけられた。

自然と、ハルの表情も引き締まる。

「はい……次に冬樹さんと闘う時までには、信じられない成長を遂げてみせます。覚悟しておいて下さい」

「へえ、それは楽しみだな。だが、私もそれまでにはお前を圧倒出来るまでに強くなってるだろう。覚悟するのはお前のほうかもな」
五月とハルは互いの強い瞳を見て、

((負けてたまるか))

と、闘志を燃やしたのだった。

「風谷」

そんなこんなで保健室の空気がほんわりし、いよいよリーナが怒りそうになったところで、玲奈が手に持った紙を里奈に渡した。

「? なんですか? ……っ」

紙を受け取り、ざっと読んだ里奈は息を飲んで玲奈を見た。

「それに天城も同行させる」

「これを今持つてきた、ということは、私があなたにあんな事を言うと予想してたんですか?」

「どうだかな」

玲奈は意味深にほほ笑み、里奈はため息をついた。

「あなたには敵いませんね……健吾、蓮華、天城」

「……?」

里奈に名前を呼ばれた三人が近くに寄る。

「生徒会に依頼が来た」

「っ、世界機構からか。内容は?」

いち早く状況を理解した健吾が険しい顔になった。

他の二人もその空気を察し、緊張した面持ちになる。

『ルクセール』に「クロプス」が押し寄せているようだ。その数

はおよそ五百。気付いたのが早く、まだ距離があるから攻め込まれるのは明日の午後らしい。で、依頼内容は当然ルクセールの騎士団の援軍」

「五百の「クロプス」か……中々多いな」

（『ルクセール』？「クロプス」？）

聞いた事の無い言葉が飛び交い、混乱するハル。

「それ、俺達だけじゃ少し面倒じゃないか？ 他のグループにも助けてもらおうのか？」

「いや。他の学園との共同依頼だからグループの手助けはいらない」

「へえ、珍しいな。それで、どこの学園だ？」

「それは……」

里奈は一度言葉を止め、ハルをチラッと見た。

（……もしかして）

その視線に気付いたハルの頭に、同居人の一人の顔がよぎったのと殆ど同時に、

「天楼学園の生徒会だ」

と、里奈が言った。

（天楼の生徒会……千さん）

ハルは思わず苦笑した。あまりにも出来過ぎていたからだ。

そして、ハルはこの人生初めての世界機構からの依頼で、謎の同居人【御柳千】の恐ろしいまでの実力の一端を垣間見ることになるのだった。

〜幕間?〜

天楼学園の生徒会室。そこは桜楼の生徒会室の倍は大きく、無駄に豪華絢爛な部屋だった。桜楼が貧相なのではなく、天楼が無駄に豪華なのだ。

そんな広い部屋にいるのは、たったの四人だけ。会議にも使う部屋なのでこの広さは無駄ではないが、四人で活動している時には広すぎる。

天楼の生徒会は六人だが、今日は二人が所用で欠席していた。

「ふう、終わった」

褐色の肌に短髪の少女はペンを置き、軽く身体を解した。見た目はボーイッシュだが均整のとれた身体つきをしており、ハルの担任の【真里奈】と近い健康的な美女である。

「ん〜、ん? ……音、鈴を起こせ」

「ん…………」

その褐色の少女の斜め前に座る、左だけ髪を留めた少女は頷き、手に持つペンを左隣に座る少女の頭に容赦なくぶつ刺した。

「っ!?! いったあ〜!! な、何するのよ、音!」

頭を刺された、右だけ髪を留めた少女は、自分の右隣りに座る左髪留め少女の襟を掴んでガクガクと前後に揺さぶった。

その二人の少女は全く瓜二つの容姿をしている。学園二年生とは思えない低身長も、声も一緒であり、片方が右、片方が左、に髪留めをしていなければ殆どの者は見分けることが出来ない。

「鈴、お前が悪いんだぞ」

褐色の女性が右髪留めの少女をジト目で睨む。

「何回も言ってるが、書類仕事の時に寝るな」

「う…………ばれてた」

右髪留めの少女は顔を引き攣らせた。

「ノルマ果たさないと帰れないぞ」

「うゝ、わかってますよゝ」

渋々ペンを持ち、書類に向かう右髪留めの少女。

「……………」
そんな少女を、左髪留めの少女は見守っている。

「音は終わったのか。相変わらず仕事が速いな」

「……………」
頷く左髪留めの少女。

この二人、見た目はそっくりだが、性格は全くの逆だった。片方は見た目のまま騒がしい少女で、もう片方は千以上に寡黙な少女。

(どういふ環境で育ったら、双子がこんなに似なくなるんだ)

と、褐色の女性は常々思っていた。

「……………」
終わった

そこで、彼女等の、天楼生の頂点、天楼学園生徒会長の御柳千がペンを置いた。彼女は他の三人より遥かに多い書類を任されているのだが、いつも終わる時間はあまり変わらない。とんでもないスベツクの持ち主なのだ。

「お疲れ、千」

「ん……………」
疲れた

褐色の女性に言葉を返しながら、千は首を左右に動かす。表情には表れないが、言葉通り大分疲れたようだ。

「……………」
そんな千に、いつの間にか席を離れていた左髪留めの少女がお茶を差し出した。

「ありがとう、音」

湯のみを受け取り、少女の頭を撫でる千。

「……………」
少女は顔を綻ばせ、千にすり寄った。この少女がこんな事をするのは千だけである。

「あー！ 音ずるい！」

それを見た右髪留めの少女も席を立とうとするが、仕事の終わっ

ていない状態では千が甘えさせてくれないのを思い出し、座りなおして猛然と書類を片付け始めた。

(最初からやれよ)

右髪留めの少女にそんなことを思いながらも、褐色の少女の視線は千達に向いている。

「……………」

左髪留めの少女はさつきからずっと、年相応ではないが見た目相応に千に甘えている。

「? どうしたの?」

千は少女に尋ねた。いつもの少女なら惜しみながらもすぐに離れるのだが、今回は離れる気配がないからだ。

「寂しかったんだろ。最近のお前は仕事が終わったらすぐに帰っちゃうから」

「そう……………」

千は特にそれ以上何かを言うでもなく、少女の頭を撫でた。

(やっぱり……………変わったな)

その姿を見ながら、褐色の女性は改めて思った。

(二週間とちよっと前ぐらいからか。こいつの表情が豊かになったのは)

まだ普通の人ほどではないが、長く一緒にいる褐色の女性や他の役員は千の変化に速い段階から気付いていた。

(何があつたのかね)

それは、誰にもわからない。千が何も話さないからだ。

(まあ、いい傾向だな。誰かさんは『覇気がない』って怒ってたが)

「ミリヤ」

「ん?」

褐色の女性は千から一枚の紙を受けとり、軽く流し読んだ

「へえ、珍しいな。桜楼学園との共同依頼か」

「それ、行ってくれる?」

「もちろん。久しぶりにサティの奴と話せるしな……………千は来れない

のか？」

「うん。先生達と会議」

「そうか。なら、明日は一人暇そうなのを連れていく」

「ありがとう」

ついでにこの双子の遊び相手にでもなっただけあげよう、と千は考えていた。

だが、この時の判断を千は今日の夕食時に悔やむことになるのだった。

そして、その日の夕食時。

「明日、世界機構の依頼を受けて東京の外に行くことになったんですよ」

そんな事をハルは言った。

「……………」

と同時に、千の動きが止まった。

「明日？ ……もしかして、『ルクセル』の援護か？」

「あ、はい。それです。って、何で遊佐さんが？」

「その依頼を桜楼に任せたのは私だからだ」

桜楼などに来る依頼は一度騎士団を経由し、そこで学生で対処できる依頼かどうか吟味してから桜楼や他の学園に回される。

ちなみに、一日に騎士団に来る世界機構からの依頼は軽く百を超え、全てを騎士団が対処するのは不可能なので、効率を重視し学生を成長させるため、この様な形態になっている。

「しかし、あれは確か生徒会に頼んだはずだが？」

「実は、今日付けで俺も桜楼の生徒会役員になったんですよ」

「玲奈の指導を受けてるのに、か？」

「はい。神埼先生がそうしろ、って言ってくれて。もちろん、神埼先生はこれからも色々教えてくれるみたいです」

「へえ……あの玲奈がねえ」

意外だ、と呟くシンキ。彼女も里奈やハルと同じように、玲奈はどっちつかずを嫌う、と思っていたのだ。

「玲奈、徹底的にハル君を鍛え上げるつもりね……また、釘をさしておかないと」

ミキが恐い笑みを浮かべて言ったことは聞かなかったことにし、ハルは隣の千に顔を向けた。

「千さんは……って、どうしたんですか？」

千は箸を途中まで上げた状態で固まっている。ハルが話を始めた瞬間から、彼女の時は止まっていた。

「せ、千さん？」

目の前で手を上下に振って初めて、千は動きだした。

「……何？」

何事もなかったかのような無表情のまま、千が口を開いた。

「明日の依頼、天楼の生徒会と一緒にらしいので、千さんも来るのか聞きたかったんですけど」

「行く」

「え？」

「私も、明日行く」

ハルに、というより、自分に言い聞かせるように、千は言う。

「でも、忙しいんじゃない？」

「前も言ったけど、そんな事ない」

実際は仕事が山積みで、明日は会議もある。だから、本当はハル達と一緒に依頼をこなす状況ではないのだが、

「そうですね……本当の事言うと、千さんと一緒に行けたらいいな、って思っていましたから、明日凄く楽しみになりました」

そんな事を照れながら言うハルを前にしては、仕事なんかはどうでもよくなってしまうた。

「そう……私も、楽しみ」

自分はどうにかかってしまった、とわかっていながらも、千は心中の喜びを隠しきれずにいた。

「言っておくが、遊びじゃないんだぞ。まあ、千が行くなら万がーにも危険なことはないだろうが」

「そうね。千ちゃんが一緒なら、安心してハル君を任せられるわ。

あつ、明日二人にお弁当作ってあげよっか？」

「ピクニックじゃないんですから」

ハルの呆れた声を聞きながら、明日なんて言い訳しよう、と千は考えていたのだった。

〜幕間?〜 (後書き)

今回の物語で主人公の精神的な成長は一旦終わります。次からは段々とストーリーを進めることになると思います。

次回の更新が早くなるか遅くなるかわかりませんが、これからもこの物語を読んでもらえたら幸いです。

〈第41話〉（前書き）

今回は前回よりも短いですが、かなり遅くなってしまいました。申し訳ありません。

色々と新しいことだらけの毎日で、これからもこのぐらいの更新速度になってしまっても思いますが。

それでは、作品を楽しんでもらえたら幸いです。

〈第41話〉

この世界は 無数の魔物 が闊歩しているとは思えないほど美しい自然で覆われている。人が住む都市は、東京のような世界に十程度しかない 大都市 を中心に、その自然の中に何百と点在している。

都市間の距離は地域によってまちまちだが、平均二百〜三百キロ程度だと言われており、都市同士の交流は容易ではなく、素人がその身一つで都市を出るにはそれなりの覚悟が必要になる。ただ、都市はそれぞれが完全に独立していて、その都市で需要・供給・生産の全てを賄っているので、生活面に関しては他の都市の助けは必要ない。もちろん東京もその例に漏れない。

とは言え、都市間の交流が全くないわけではない。それこそ、八路のクラスメイトでアイドルの『エリ』のファンは東京以外の都市にも多くいる。それは、彼女の歌が収録された CD などが他の都市にも出回っているからこそその結果である。

ちなみに、ネット回線や電波を他の都市と繋ぐことは不可能なので、都市によってテレビやインターネットで流すものが違うのはもちろん、電話や携帯などは都市内にいる者にしか掛けられない。都市外の者と直接連絡をとる方法はいくつかあるが、どれも簡単に出てくるものではない。

それぞれの都市の近辺に魔物はあまりいないが、それでもゼロではないし、都市から離れるほど魔物との遭遇率も上がる。そんな危険に囲まれた中でも人々は遠く離れた都市と有友好関係を持ち、他の都市へ移動出来る。

それらを可能にしているのが 科学 と 魔法 を組み合わせで作られた 飛空艇^{ひくうてい} である。

「でっかいなあ……」

停泊されている 飛空艇 を前に半ば呆然と呟くハル。

場所は、桜楼学園からそれほど遠くない場所にある飛空艇の停泊所。

広さも高さも申し分ないそこには、現在三つの飛空艇が停泊されている。その中でも、ハルが見上げている 蒼の騎士団のシンボルが船頭に描かれた飛空艇は群を抜いて巨大だった。

「ハルは飛空艇初めて？」

と、声をかけたのは今回ハルと一緒に 世界機構 の依頼を、強引に、受けた千である。

「いえ、何度か乗ったことはあります。でも……こんな大きいの見たのは初めてです」

答えながらも、ハルの目は飛空艇に釘づけだった。

「そう」

そんな子供のような反応をみせるハルを慈しむように見守る千。

「……………」

そして、そんな二人を遠巻きに見つめる数人。

「あれは……誰だ？」

その中の一人、天楼学園生徒会の副会長で褐色の美少女【ミリヤ・レイガーニ】が、ポツリと呟いた。

いつも悪戯っぽい笑みを浮かべている彼女の顔が、さっきからずっと引き攣ったまま戻っていない。

「見た通り、あんたの所の会長とこっちの新人だが？」

そんなミリヤの呟きに、特に変わった様子のない里奈が答える。

もうこの程度のことでは彼女は驚かなくなっていた。

「いやいやいや。私達の会長はあんな優しい視線を誰かに向ける奴じゃないですよ。もっと、こっつ、冷めた……いや、最近はよく感情

を表に出すようになったが……それでも、あんな……いやいやいや
いやいやいや、と独り言を始めるミリヤ。

「落ち着きなさい、ミリヤ」

そんなミリヤを 同郷 の桜楼生徒会副会長である【サティ】が
宥める。

「……あの新入生、何者なんです？」

サティに宥められたミリヤは若干冷静さを取り戻し、改めて里奈
に尋ねる。

「こつちが知りたい」

里奈はその豊満な胸を支えるように腕組みし、ふん、と一つ鼻を
鳴らす。

「千があいつの影響を受けた、って事だけは言えるな」

「でしようね……」

冷静になつて千を見たミリヤは、その変わりように改めて驚愕し
た。

(私達に向けるのとは全然違う……まるで……恋慕の……)

そこまで考えて頭を振る。

(このまま憶測でものを考えるのはマズイわね……今わかるのは、
ここ最近の千を変えたのがあの少年だつてことか……)

完全に普段の調子を取り戻したミリヤは、その顔にほほ笑みを携
えていた。

「感謝しないとな」

「感謝？ お前はあの状態の千に憤りを感じてたんじゃないのか？」

「憤り？ まさか。あんな楽しそうな千を見て、私が怒るわけない
じゃないですか」

と、快活な笑みをみせるミリヤ。

「そんなものか……」

あの千をどう捉えるのかは人それぞれか、と里奈はいつしか桜楼
の屋上で今の千に対して 腑抜けた と感じた自分を思い出してい
た。

「会長！」

「ん？」

里奈の見上げた先、飛空艇の甲板からは同じ生徒会役員の彩夏、蓮華、健吾が身を乗り出していた。

「点検は終わったか？」

「はい。いつでも出発できます」

「わかった。三人とも降りてこい……さて、あとは騎士団の担当者が来るのを待つだけか」

「風谷会長」

と、里奈に声をかけたのは、いつの間にか傍に寄っていたハル。

「何だ、天城？」

「飛空艇の点検って普通騎士団の人がやるものなんじゃ？」

「普通はそうだが、彩夏が同行する場合は別だ」

「別？」

「あいつは二年にしてすでに騎士団の技術開発部への所属が確定してる。機械いじりに関してあいつの右に出る奴はいない。だから、特例として認められてるんだ」

「へえ……」

(騎士団に入るのが決まってる、って……凄いな)

ハルが感心していると、

「機械いじり、という言い方は止めて下さいと言ったじゃないですか」

不機嫌そうな彩夏が後ろに苦笑気味の蓮華と健吾を伴って近付いてきた。

「せめて、メンテナンス、と言って下さい」

「悪い、悪い。つい、な」

「全く……天城君」

「は、はい」

「私は戦闘はからつきしでこの程度のことしか出来ませんが、機械のことに困ったことがあったら何でも言って下さい。可能な

限り手助けしますので」

と言つて、手を差し出す彩夏。

それから直ぐに自分の手が薄汚れているのに気付कि、苦笑して手を引つ込めようとしたが、

「俺、機械下手なので凄く助かります。それと、自分の好きなことをこの程度つて言わない方がいいですよ」

ハルはその手を迷うことなく握り返した。

「……ふふ」

その行動と言葉に彩夏は一瞬目を丸くし、ほほ笑んだ。

「あなたは優しい人ですね……ありがとうございます」

その笑みは事務的なものではない、彼女の自然な笑顔だった。

「しかし……高いなあ」

甲板に登ったハルの一声は、そんな当たり前の言葉だった。

「天城、そんなに身を乗り出してたら落ちるぞ」

下を覗いていたハルに健吾が呆れ気味に声をかけた。

「す、すみません。つい、珍しくて」

「まあ、気持ちにはわからないでもない。こんな大きい飛空艇は東京にもあまりないからな」

「そもそも、こんな大きい飛空艇で行く必要があるんですか？ た

かだか八人を他の都市に送るだけなのに」

「今回は特別だ。それなりの緊急事態だから、騎士団が機動力の高いやつを貸してくれたらしい」

「緊急事態つて……そんなに危険な状況なんですか？」

「情報が錯綜してるからよくわかってないが、急いで損はないだろう、って判断だ……」つと、里奈が来た。里奈！」

健吾が呼ぶと、里奈は手に持った紙に目を向けながら二人の近くにきた。

「現在の状況はどうだった？」

「まだ詳しくはわかってないが……出来るだけ急いでくれ、だと。彩夏にも連絡したから、そろそろ動き始め、つと」

里奈の言葉の途中で、飛空艇が一瞬動き、続いて彩夏の声で放送が入った。

『これから浮遊、発進します。多少揺れますので、手すりなどに捕まってお下さい』

言い終わるや否や、巨大な飛空艇が浮遊し、

「つと、と」

ハルが甲板の手すりに手をついた直後、一気に飛空艇が停泊所から大空へと飛び出た。

軌道に乗った飛空艇はそのまま上昇を続け、雲の中に突っ込み、一瞬で抜け出てようやく、地面と平行に飛行を始めた。

「……………」

半ば呆然と手すりにもたれかかるハル。殆ど一瞬の出来事に頭と身体が付いていけてない。

「全く、あいつは本当に機械が関わりと大胆になるな」

「最近飛空艇飛ばしてなかったらしいからな」

里奈は乱れた髪を鬱陶しそうに後ろに流し、健吾は苦笑しながら服を整えている。

「……………」

未だに呆然としているハルに比べて、二人はかなり冷静だった。

「大丈夫か、天城？」

「……は、はい」

何とか立ち上がるハルの髪も服もボサボサである。

「あの……飛空艇って出発する時あんなでしたっけ？」

「いや。この飛空艇『シエル』って名前なんだが、これはちょっとじゃじゃ馬でな。ちゃんと扱える奴が彩夏を含めて数人しかいない

らしい。あ、それも今回の依頼にこの飛空艇を使わせてもらえた理由だな」

「は、はあ」

ハルが微妙に納得していると、

「すみません、健吾先輩、里奈会長。今ので蓮華さんが軽く目を回してしまって……第二廊下付近にいますので介抱してもらえませんか？」

との放送が流れた。

「ったく、ちゃんと気をつけろって言ったのに……しょうがない、私が付きつきりで介抱を」

「おい待て、里奈。お前が行くと蓮華の貞操が危ない気がする。俺も行くぞ」

そんなこんなで、二人はワイワイと言いいいながら甲板を後にした。

一人甲板に残ったハルは、

「生徒会って……凄いなあ」

と、しみじみ思ったのだった。

〈第42話〉

「それじゃ、私からもう一度この依頼の詳しい説明をさせてもらおうわね」

サテイが会議室を見渡して口を開く。

飛空艇 シエル 内に備え付けられた会議室には、運転中の彩夏を除いた桜楼学園生徒会全員に天楼学園生徒会二人、の計七人の姿があつた。

ちなみに、蓮華は気分悪そうにしながらも何とか参加している。

「まず、これから私達が向かう『ルクセール』という都市だけど、これはどこにでもある大都市よ。騎士団ももちろんあるし、悪い噂も聞かない。ただ、今回は魔物の数が多くて向こうの騎士団だけじゃ対処出来ない可能性が高いから、こつちまで要請がきたみたいね」

どれだけ小さい都市にでも、騎士団はある。彼等がこなす仕事は都市によって変わるが、大体がその都市の治安を護ることである。

「場所は東京から三百キロぐらい離れてるから、着くまであと二時間ちよつとね。向こうの住人の『飛空艇』への避難も済んでるし、『防御壁』も作動してるらしいから、戦闘場所は都市の外つてことになるわ」

そして、どれだけ小さい都市でも、そこに住む住人全員が乗り込むめるだけの大きさ、数、の緊急避難用の飛空艇を保有している。

「次に、そこに押し寄せてる魔物「クロプス」のこと。これは説明の必要はないかもしれないけど、新人さんもいるから、一応ね。「クロプス」は顔に一つの巨大な目と口しかついていない、体躯が大人の二倍近くの人型の魔物よ。二足歩行で移動するからシルエツトは人間とあんまり変わりないわ。そこそこ知能が高くて、人が作った武器を使ったり自分達で武器を作る。けど、個々の戦闘力はそれほどでもない。今回みたいに群れをなすと厄介になるけど」

「その群れの数に変更は？」

「今のところ、五百『以上』としか言えないわ。退屈する依頼じゃないことは確かよ、ミリヤ」

「そーかい」

「他に質問は？ …… ないみたいね。じゃ、私からは以上です」

サテイが座り、入れ替わる様に里奈が立った。

「では、到着するまで各自自由に待機しろ。この飛空艇には大抵の物が揃ってるから、多分不自由することはないだろう。ただ、適当に弄くり回すと彩夏のやつがキレるから気をつけるよ」

「どうした、健吾？ なまってるんじゃないのか？」

「ふん…… まだまだこれからだろ」

シエル 内の錬武場で里奈と健吾は拳の応酬を繰り広げている。これからの依頼に向けての軽い準備運動。

なのだが、

「わあ……」

二人のやり取りを邪魔にならない場所で見学しているハルは目を見開いていた。

「全然見えない……」

拳の軌道が、である。

二人はその場から一步も動いていないが、その両腕は絶え間なく相手の拳をいなし、攻撃している。だが、速過ぎてその動きが見えないのだ。

とてもじゃないが、軽い 準備運動には見えない。

「お、ようやく調子出てきたな」

「最近なまってるから…… 好き勝手やれるお前と違って」

こんな二人の会話と空気を切る音は聞こえるが、やはり二人の両

腕の動きは全く見えない。

(健吾さんも……里奈さん並に凄いな)

中途半端な強さでは、あの風谷里奈の幼馴染など出来ないのだから。

(おお、また速くなった)

なんて、驚愕しているハルの隣りでは、

「すう……すう」

と、ハルの肩に頭を乗つけた千が寝息を立てている。

(……こっちは緊張感ゼロだな)

思わず苦笑していると、

「おい、天城」

健吾と拳の応酬をしている里奈に声をかけられた。

「何です、風谷会長？　と言うより……喋ってる余裕なんてあるんですか？」

「準備運動をそんなに真剣にやる奴はいないだろ。それより、何か話をしろ。暇だ」

「……その言葉で俺が傷ついたのには気付いてるか？」

何て言う健吾だが、こちらも汗はかいているもののそれ程必死にやっているわけではなさそうである。

(それあの動きか……ありえないだろ)

とは、言葉に出さずに、じゃあ、と里奈にとある疑問をなげかけた。

「昨日、俺と闘ってた時に地面を持ち上げたじゃないですか？　あれって、やっぱり会長の『魔術』ですよね？」

言いながら、何て現実離れた質問だろう、と思っている。

「そうだ。そう言えば……お前には私の魔術を教えてなかったな。

これからは一緒に闘う『仲間』なんだし、一応教えておくか」

「仲間……」

その言葉にハルの頬が緩む。

(いい響きだなあ)

「さて、それじゃあ……健吾、実験台よろしくな」

「は！？ ちょっと待て！ お前もしかして！」

焦る健吾のことなどお構いなしに、里奈は健吾の両腕を掴んだ。
直後、

「ぐっ！」

健吾が前のめりに倒れた。

上半身が今にも崩れ落ちてしまいそうなほどプルプルしている。

「てっ……めえ。ちょっとは……手加減しろよ」

憎々しげに里奈を見上げる健吾。

「十分したさ。それにしても……いい眺めだ」

対する里奈は、健吾を見下ろしながらニヤニヤと笑みを浮かべていた。

「??? あの……何が？」

ハルの目には、健吾が里奈に土下座しているように見えている。

「これが、私の魔術だ」

地に這いつくばる健吾を指差す里奈。

「???？」

ハルは何が何だかわからずに首を傾げた。

「私は『手で触れた物体の重さを自由に変える』ことが出来るんだ。

まあ、他のに比べると滅茶苦茶地味な魔術だな」

そう言って、里奈は自嘲気味に笑った。

「手で触れた物体の重さを……あ」

健吾が倒れる寸前、里奈が健吾の両腕、つまり、
上着 を掴ん

でいたのを、ハルは思い出した。

「じゃあ、今健吾さんが来ている服って……」

「ああ。軽く三百キロ近くある」

「さ、三百……」

一瞬で服をそんな重さにされてしまったら、ああなるのも当然だ。

「おい！ 速く……俺の服の重さを戻せ」

「今戻してやる」

仕方がない、といった感じで里奈は健吾の服に触れた。

「ったく……っと」

健吾はすぐに立ちあがり、肩をグルグルと回し始めた。

「ああ、もう一回触れると元に戻せるんですね」

「そう。それと、時間が経てばいずれ戻る。昨日は地面の重さを『羽毛布団』並にしたんだが、実を言うと私もあそこまで上手くいくとは思わなかった。あの三年の不良達と闘った後だったから、地面が丁度いい感じで痛んでたんだな」

「何か……魔術ってすごいですね」

改めてそう思うハル。

この世の常識や摂理を全てひっくり返す力を、魔術は持っている。「そうだな。これとは比較にならない、とんでもない魔術を持った奴は確かにいる。それこそ、お前の近くにも、世界でも類を見ない魔術を持った奴がいるんだぞ」

「え……俺の近くに？」

ハルが里奈の顔を見返していると、

「天城さん、こんな所にいたんですか」

錬武場に蓮華がやってきて、

「ちよつと手伝って欲しいこと……と……が……」

ハルの肩を枕にして眠る千を見て笑顔のまま固まった。

「ん？ どうしたの、蓮華さん？」

そんな蓮華に首を傾げるハル。

そうすると、いい感じにハルと千の頭が接近し、

「は、破廉恥ですよ……!!」

蓮華が顔を真っ赤にして二人の間に割って入ったのだった。

〈第43話〉

彩夏にちよつとした仕事を頼まれた蓮華とハルは、大きな箱を両手に持ってシエル内の廊下を歩いていた。

「年頃の男の人と女の人が……あ、あんなことしてちゃ駄目ですよ」「その言い方は誤解を生む気がするけど……千さんが気持ちよさそうに寝てたから、起こすのも可哀そうかな、って思ってた」

「それでも駄目ですよ、天城さん」

「う……ごめんなさい」

蓮華に睨まれて頭を下げるハル。

「大体……何故、御柳さんと天城さんはあんなにも仲がいいんですか？ 下の名前でも呼んでますし」

「まあ、一緒に住んでもう数週間経つし、千さん優しいからつい気を許しちゃうんだよね」

「許し過ぎです……って、え？ 今……一緒に住んでるって言いませんでした？」

「え……言っただけど……もしかして、知らなかった？」

「し、知りませんよ！ ど、どういう事ですか!？」

両手に持った箱を投げ出しかねない勢いでハルに詰め寄る蓮華。

このままでは箱を落として彩夏に怒られてしまふ、と思ったハルは一息に説明した。

「お、俺と千さんは寮みたいなところに住んでるから、別に二人だけという訳でもないし、一緒に食事をするぐらいで、それ以上は何もないよ」

「む、む……」

ハルの必死さが伝わったのか、蓮華は段々と冷静になっていった。「りよ、寮なら仕方ないです……こ、これからも何も無い生活を続けて下さい」

「は、はい……はあ」

どつと疲れたハルが密かにため息を吐く。

(日に日に蓮華さんがアグレッシブになってるような……でも、健吾さんとか里奈さんと話してる時はこんな感じか)

これが本来の蓮華さんなのかな、と思っていると、

「あ、ありがとうございます、健吾先輩」

なんて言う声が、少し先の部屋から聞こえてきた。

「今の……桐野宮先輩の声ですよね？」

「うん……そう、だけど」

(何か……少し違うような)

今までの彩夏のととは違う、喜色が全面に押し出されたような声だった。

「別に気にするな。これは、彩夏じゃ無理そうだからな」

ハルがコツソリと部屋を除くと、健吾が大きな箱を棚の上から降ろしながらそう言っていた。

「す、すみません」

何度も頭を下げる彩夏。その仕草はいつもの事務的なものとはかけ離れていた。

そして、

(うわ……桐野宮先輩、顔真っ赤)

頭を下げる彩夏の顔は湯でダコのように真っ赤に染まっていた。

(羞恥半分、嬉しさ半分、ってところか……成程ね)

この状況だけで、ハルが色々と気付くには十分だった。と言うより、彩夏の恥ずかしそうにしながらも嬉しそうな顔を見れば、恐らく誰でもわかる。

(つまり……桐野宮先輩は健吾先輩に恋心を抱いている、と)

「よっ、と……これでいいのか？」

健吾が降ろした箱の中身を彩夏に見せると、

「だ、大丈夫です。ありがとうございました」

顔が赤いのを悟らせないためか、彩夏は俯き気味に頷いた。

「よし。じゃあ、ここに置くぞ」

「は、はい」

「っと……他に力仕事はあるか？」

「え……い、いえ。今の所は……ない、です」

「そうか。じゃあ、また何かあったらいつでも呼んでくれ」

「あ……ま、待って下さい！ 健吾先輩！」

部屋を出ようとする健吾を呼び止める彩夏。

「？ どうした？」

「えっ……え、っと……ち、力仕事はないんですけど……し、仕分けを手伝ってもらえませんか？ 色々とごつちゃになっちゃって……」

「別に構わないが……俺は何もわからないぞ？ それでも大丈夫か？」

「は、はい！ 全然大丈夫です！ あ、あの、これを着けて下さい。

す、凄い汚れてますから」

「ん、ありがとうございます……よし、ちゃっちやとやるか」

軍手を受け取った健吾はそれを着けて彩夏の隣に座った。

「っ……」

彩夏の顔が一際赤くなるのは当然だった。

(……入りづらくなった)

そのやり取りを、悪いと思いつつも、一部始終見ていたハル。

(あんまり意識しすぎるのも、下種の勘ぐりなんだけど……それでまあ)

この雰囲気割って入る勇氣はなかった。

「天城さん……」

一緒にコッソリと彩夏達の様子を見守っていた蓮華が、いつの間にかハルを見上げていた。

どうしましょう、や、ちょっと時間潰しましょうか、などと言うのだらうな、と思っていたハルは、

「何で、私達は隠れてるんですか？」

と言う蓮華の言葉を聞いて、驚愕した。

「え……何で、って……霧困気？」

答えに困窮したハルはそう聞き返してしまった。

「霧困気、ですか？ ……よく、わかりません」

蓮華は再度彩夏達に目を向け、首を傾げた。

（もしかして……蓮華さん、気付いてない？）

蓮華の一連の反応を見る限りだと、そうとしか思えなかった。

（鈍感と言うか、何と言うか……）

まるで、恋、というものを全く知らない子供のようである。

「お前達……何してんだ？」

そんな怪しい二人に声をかけたのは、首からタオルを垂らした里奈だった。

シャワーを浴びたすぐ後なのだろう、ラフな格好で若干髪を濡らした彼女は微妙にいつもと霧困気が違っていた。

「あ、あはは」

だが、またもどう答えていいかわからずに曖昧に笑うハルは、そんな霧困気の違いには気付いていない。

「？」

ハルを訝しみながら、里奈も蓮華の覗いている部屋を同じように覗く。

「これは？」

「あ、それはまだ使えるので残しておいて下さい」

「了解……これは？」

「それは……残念ですが、もう寿命ですね」

部屋では彩夏と健吾が機械の部品の仕分けをしている。

「……そう言う事か」

里奈はそれだけで全て理解し、蓮華とハルに目を向け、もう一度

部屋を見て、

「……はあ」

とても面倒くさそうにため息をついた。

(あ……会長も苦労してたんだな)

そのため息でハルも里奈の心境を理解し、軽く同情した。

「????」

未だに首を傾げている蓮華を無視して、里奈はハルの耳元に口を寄せ、

「とりあえず、今は普通に接しろ。それが……彩夏のためでもある」と、耳打ちした。

「? わかりました」

ハルはとりあえずその言葉に従うことにし、困惑している蓮華を連れだつて部屋に入った。

「桐野宮先輩、頼まれていたものを持ってきました」

「え……あ、天城君と蓮華さん、それに里奈会長まで……い、いつからそこに?」

「今さつきですよ。これが以外に重いので時間がかつちゃいました」しれつと嘘をつくハル。

蓮華はハルの言葉に首を傾げていたが、何も言わなかった。

「そ、そうですね。お二人とも、ありがとございます。そこに置いておいて下さい」

彩夏は普段の事務的な自分を何とか演じているが、所々綻びが見えている。

「天城、ちよつと来い。蓮華は彩夏と健吾の手伝いだ」

「あ、はい」

イマイチ状況を理解していないながらも、蓮華は健吾と彩夏の間に来て手伝いを始めた。

「天城、出るぞ」

「はい……」

部屋から出る際、ハルの視界に彩夏の顔がチラッと映り込んだ。

「…………ふう」

（あれ？）

残念がってると思っていたハルは、彩夏が密かに安堵していることに驚く。

（……………そっか……………桐野宮先輩、緊張もしてたんだ）

好きな人と一緒にいて嬉しかったが、それ以上に不安だったのだろう。

（難しいものだな……………）

先程里奈が言っていた、彩夏のためにもなる、という言葉の意味を理解したハルは、里奈の後を追って部屋を出た。

「彩夏は健吾のことが好きだ」

先程の部屋から大分離れた廊下で、里奈は口を開いた。

「まあ、そうでしょうね……………ちなみに、この事を知ってるのは？」

「私とサテイ、それとお前だ」

「蓮華さんはやっぱり気付いてないんですね」

「ああ。あいつはそういう感情を知らないんだと思う」

「感情を……………」

ハルが深刻な顔になるのを見て、里奈が、勘違いするな、と呆れ気味にはほほ笑みながら言った。

「昔のショックで、とかシリアスな話じゃない。あいつは究極に純粹だから、本当にそれが何なのかわからないんだ」

「……………この年になってもですか？」

「それがあいつの凄い所だ。言葉や意味は知ってるんだろうが、それが自分の中のどの感情かわからないみたいだな」

里奈の説明にハルは唸った。

「わかるような……わからないような」

「まあ、蓮華のことは今は置いておこう。それより、彩夏のことだが……あいつらに関しては気を使わなくていいぞ。それを彩夏も望んでる」

「健吾さんは彩夏さんの想いに気付いてるんですか？」

「気付いてない」

即答する里奈。

「……呆れた兄妹ですね」

「……そうだな」

(お前も同じっぽいかな)

と、里奈は思ったが口には出さない。

「ライナさんは何て言ってるんです？」

「あいつは『初々しいわね』って言いながら、見守ってる……あいつも当事者の一人なんだがな」

「はい？」

「何でもない……私が言うのもなんだが、こういう事に関してはこの生徒会は中々厄介だ。人の恋路をとやかく言う気はないが、面倒事に巻き込まれなくなかったら変な気は使わないことだな」

(厄介？……あ)

その瞬間、ハルの頭にとある推測が浮かんだ。それは、とてもあり得る話で、ただの興味本位で軽々しく里奈に尋ねていいようなものではない。

だが、ハルはつい口を開いてしまった。

「もしかして……会長も健吾先輩のことが好きなんですか」

「……そう来たか」

ハルの言葉に里奈は目を見開いて驚いた。

まさか、そんな直球で来るとは思わなかったのだろう。

「あ……」「ごめんなさい！ 余計なことでした」

慌てて頭を下げるハル。

冷静になって、かなり踏み込んだことを尋ねたと気付いたのだ。

(これこそ下種の勘ぐりじゃないか……)
後悔先に立たず。

怒られるの覚悟で頭を下げたハルだったが、
「気にするな。私の言い方が悪かった」

里奈の口調は思ったより柔らかかった。

「そうだな……」

と、里奈は顎に手を添えてしばらく思索し、

「健吾と私は長い事一緒にいるからわかるが……あいつはいい男だ。
彩夏が惚れるのも無理ない」

それはどつちとも取れる言葉だったが、里奈はこう続けた。

「だが、私の好みではない」

明確な否定である。

「あいつも私のことをどうとも思っていないだろうな。良き親友、つて所だ……幼馴染なんてそんなもんだ」

「そんなもん……ですか」

「だから」

里奈はハルの顔をじっと見て、悪戯っぽくほほ笑み、言った。

「お前にも私を口説くチャンスはあるぞ。お前は中々私の好みに近いから、もしかしたらオーケーを出すかもな」

「なっ!?!」

ハルの顔が一瞬で真っ赤になる。

「冗談だ」

里奈はそんなハルを可笑しそうに笑い、

「まあ、この厄介さはその内にわかるさ。嫌でも、な」と言つて、その場を去った。

「はあ……全く」

ハルは火照った頬を手で煽ぎ、考える。

(会長に健吾さんへの好意がないのはわかった。まあ、物凄く上手く嘘をついてたら話は別だけど)

だが、恐らくそんなことはない。里奈にとって健吾は、彼女が言

つてた通り、大事な親友、なのだろう。

（厄介なことか……：つきり会長・桐野宮先輩・健吾先輩の三角関係かと思ってたけど）

そこまで考えて、ハルは思いつきり首を横に振った。

（これ以上は失礼だな……）

今は桐野宮先輩のことを陰ながら応援しよう、とハルは決めた。

近い未来、自分がその厄介な輪に入ることになるとも知らずに、ハルはそう決めたのだった。

〈第44話〉

『そろそろ『ルクセル』に到着します。この飛空艇の真下付近の地面に「クロプス」のものと思わしき足跡が見受けられましたので、すでに「クロプス」とルクセル騎士団が防御壁の外で接触している可能性が高いです。そのまま戦闘に入るかもしれないので、準備を怠らないようにして下さい』

この放送から五分後。

彩夏を除いた七人が飛空艇 シエル の甲板へと来ていた。

「時間は……十時ジャストか。予定より大分早いな」

ミリヤが腕時計を見ながら呟く。

事前の予側では、「クロプス」がルクセルに到着するのは正午だった。

「余程腹が減ってたんだろうな」

屈伸したり、腕を解したり、と軽い運動をする健吾。その両手にはすでに金属製の手甲装備されている。

（健吾先輩はやっぱり肉弾戦か……レイガー二さんのは凄いな）

ミリヤが褐色の指に嵌めている武器から出現させたのは、持ち手が長く、刃が美しい曲線を描いている、えんげつとう 偃月刀 と呼ばれるものだった。大きな刃の部分に 龍 が描かれている、見るからに匠が鍛えた武器である。

（あれは俺の魔力剣じゃ斬れそうにない。流石だなあ。……でも、一番驚いたのは……千さんのだ）

ハルは自分の左隣でボーっとしている千に目を向けた。

その両手に持つのは二本の刀。しかし、ただの刀ではない。精巧に鍛えられているのももちろん、驚くべきはその刀身の長さだ。二本とも軽く、普通の刀の 倍以上 はある。

（こんな長いのが扱えるのか？）

長い刀には、リーチが広くなる、という利点があるが、それを帳消しにしてしまう、懐に入られたら為す術が無くなる、という最大の弱点がある。しかも、千は両手にその刀を携えている。相手が肉を切らせて骨を断たつて懐に入ったら、一巻の終わりだ。

（まあ、俺が心配しても仕方ないか）

ハルは千から視線を外し、里奈とサティを見た。

里奈は健吾と同じ肉弾派だが武器は装備せず、サティも特に武器を用意している様子はない。

（風谷会長はいいとして……ライナ先輩は？）

里奈と同じように身体一つで敵に向かっていく、とは思えない。

ハルが首を傾げていると、その視線に気付いたのか、サティがほほ笑みながら近付いてきた。

「天城君も魔力剣を精製しておいたほうがいいわよ」

「あ、はい……ちなみに、ライナ先輩は？」

「私？ 私は魔法が主体だから、武器は使わないわ」

「あ、成程」

言われてみれば、とハルは手を打った。

（確かにライナ先輩は魔法使いっぱい……知的だし）

頭がいいから魔法が強力、というわけではないが、名立たる魔法使いは大体頭がとてつもない。何百という魔法とその理論を頭に叩き込んでいるのだから、当たり前と言えばそうである。

「天城君？ どうかした？」

「あ、いえ。なんでもないです……俺も、武器用意しますね」

ハルが目目を閉じて意識を集中させると、その右腕から輝くオーラが現れ、瞬時に形を変えて魔力剣になった。

一つの魔力剣を精製するのに、もう一秒もかからなくなっていた。（昨日の会長との闘いから、大分調子がよくなったな）

右手の魔力剣に目を向けながら嬉しそうにほほ笑んでいると、

「凄い」

と、サティが呟いた。

「この魔力剣だけで……魔法三百……まさか」
いつもは優しくほほ笑んでいる彼女の顔を、今は驚きだけが全て支配している。

「あの……ライナ先輩？」

「しかも……それでいてこの子はこの余裕……冗談でしょう」
ブツブツと呟くサティの綺麗な指がハルの頬に添えられた。

「ラ、ライナ先輩!？」

ハルが身を引くとサティは我に返り、自分の頬に手を添えて苦笑した。

「ご、ごめんなさいね。あまりにも珍しくて」

つい、と言うサティの視線は、未だにハルの魔力剣に向いている。
(この魔力剣ってそんなに凄いものなのか?)

ハルが疑問に思っていると、

『ルクセル』に到着しました。降下しますので気をつけて下さい」

との放送が流れ、出発時と違ってゆっくりと高度が下がり、雲の中に入る。

甲板が緊張に包まれ、やがて、シエルはその分厚い雲を抜けた。

「……うわぁ」

雲の抜けた先、シエルの遙か下を見て思わず声を漏らすハル。

まず目に飛び込んできたのは、大きな壁に囲まれた都市。

この都市を囲む壁こそ、緊急時に都市を護るために作動される

防御壁であり、普段は都市の端の地面に収納されている。高さは八十メートル近くあり、半端な攻撃では傷一つつけることが出来ない。

「やはり、もう接触してたか」

同じように下を見ながら呟く里奈。

防御壁の外側の荒野では、今まさに「クロプス」と騎士団が激しい闘いを繰り広げている。その怒号や爆発音は甲板にも聞こえてきた。

騎士団が都市の唯一の入り口を護るように横一列に展開しているのに対し、「クロプス」は荒野を縦横無尽に全て埋めつくしていた。まさに、大群である。

「あの「クロプス」の数、五百なんてもんじゃないぞ」

『今、魔物の数を調べましたが……報告の四倍、およそ』二千』の「クロプス」が押し寄せています』

「二千か……途中でいくつかの群れと合流したな」

『蒼の騎士団に援軍を要請しますか？』

二千の魔物を相手にするような依頼は、本来東京の 蒼の騎士団が対処する。この依頼は学園生が行うようなものではなくなっていた。

(……燃えてくるじゃないか)

だが、その状況が里奈の闘争心に火をつけた。

「援軍要請はしなくていい。予定通り、私達だけで依頼を遂行する。ただ、一応報告だけはしておいてくれ」

『わかりました』

放送が切れるのと同時に、里奈はサティと蓮華に目を向けた。

「シエルの護りはサティに任せる。頼んだぞ」

「了解しました。後ろは気にしないで、存分に暴れてください」

「蓮華はサティの補助。絶対に下に降りるなよ」

「は、はい!!」

力強く頷く蓮華を見てから、里奈は甲板の先頭に立って残りの四人を見渡した。

「お前達には特に言うことはない………適当に暴れる」

「そんな適当な」

というハルの言葉と共にシエルは着陸し、

「行くぞ」

里奈は躊躇することなく、そこから外に跳び下りたのだった。

シエルが降り立った場所は、戦闘を行う騎士団と>クロプス<から百メートルほど離れた平地。もちろん、シエルの存在には両者とも気付いている。

騎士団は援軍の到着に落ち込み気味だった士気が上がり、>クロプス<達はシエルを遠巻きに観察している。

「っと……さて」

シエルから跳び降りた里奈は戦場に目を向けた。彼女はこれからルクセル騎士団の総隊長の元に向かって、援軍が来た旨を伝えなければいけない。

「まあ、その前に……一発かましておくか」

右腕を回転させながら楽しそうに口の端をつり上げる里奈は、

「ふっ」

一息で凄まじい氣を右腕に溜めた。

この時の里奈から醸し出されたオーラには、遠く離れた>クロプス<ですら震え上がった。自分達より強い捕食者がいる、と本能で感じ取ったのだ。

だが、気付いた時にはすでに遅い。

「「豪・虎砲弾」」

里奈はその右腕を>クロプス<の大群の横つばらに向けて、一気に振り抜いた。

ゴウウ！！

と、大地を揺るがす音が響く。

互いの距離は百メートル以上あった。にも拘らず、グループ試

験でハルに放った「虎砲弾」とは比べ物にならない威力の「豪・虎砲弾」は数瞬で>クロプス<の大群の中腹を抉った。

『グオオオー!?!?』

>クロプス<の断末魔すら飲み込み、「豪・虎砲弾」はその行く手のあるものを破壊し続ける。

地面を削り、無数の>クロプス<を潰し、壊し、塵にしながらも、威力が衰える様子はない。

二百メートル近くはあった>クロプス<の大群を大きく分断してようやく、衝撃波は霧散したのだった。

「ふむ……こんなもんか」

たったの一撃で二百以上の>クロプス<を蹴散らしたとは思えない口調で里奈が呟く。

一瞬、戦場を静寂が包み込み、

『オ、オオオオー!?!?!』

仲間意識の強い>クロプス<は怒りの雄叫びをあげて、

「つと、あいつら、こっちに狙いを定めたか」

大群の半分が進行方向をルクセルからシエルへと変えた。

「イキナリやり過ぎだ、里奈」

「健吾、ここはお前達に任せる。私は騎士団の隊長の所に行かなければいけないからな」

「あ、ちよつと待て! …… ったく、あいつ自分だけやりたい放題やりやがって」

振り返りもせず走り去る里奈のマイペースぶりに、健吾は呆れ気味にため息をついた。

「あの……健吾さん」

「ん? 何だ、天城?」

「これ、風谷会長一人でも楽にやれる依頼なんじゃ？」

シエルから跳び降りている最中に里奈の「豪・虎砲弾」の威力を見たハルは心の底から思った。

（俺達、必要ないだろう）と。

「いや、あれを使うのにかなり体力いるみたいで、乱発出来ないらしい」

「元気いっぱいに見えましたけど……」

颯爽とこの場を去った里奈の姿を思い返すハル。

健吾も苦笑気味に口を開く。

「それはそうだが……まあ、俺達もいい経験になるし。っと、奴らが来たぞ。里奈は簡単にぶっ飛ばしたが、奴ら数が多いから油断するなよ」

「は、はい」

はぐらかされた、と思っただったが、迫りくる>クロプスくを見て雑念を振り払い、

（確かに……いい経験にはなりそうだな）

魔力剣を構えた。

〈第45話〉

「あなたがルクセル騎士団の総隊長ですか？」

里奈が声をかけたのは、周囲に指示を出している壮年の男性。その雰囲気や格好に威厳が満ち溢れている。

「そうだが……君が東京からの援軍の者か？」

「はい。風谷里奈と申します」

「私は【ルイス・ベルナイ】だ。援軍、感謝する。……もしや、先程の広範囲魔法も君が？」

「……はい」

広範囲魔法ではない、と訂正しようとしたが、面倒なので止めた。「そうか。あの魔法を見て騎士団の皆も士気があがった。これなら持ちこたえられるだろう」

「そうですか……ちなみに、死傷者？」

「死傷者はゼロだ。重傷者は何人かいるが、命に別状は無い」

「そうですか」

ホツと息を吐く里奈。

この質問をしたのは、もちろん人道的な理由が大本だが、魔墮ち する可能性の者がいないかを心配をすること、と言っても間違いではない。

人が魔物になる現象 魔墮ち。

色々と謎の多い魔墮ちで唯一わかっていることは、力に魅せられた時か、負のエネルギーを心にため込むことによって魔墮ちする、ということだけだ。

この様な状況で一番気をつけなければいけないのが、その魔墮ちである。

たった一人が魔墮ちしただけで、魔物と騎士団や都市を滅ぼしてしまう可能性もゼロとは言い切れないからだ。

「では、騎士団は護りに徹して下さい。>クロプス<の撃退は我々が致します」

「了解した。そちらに頼りきりになってしまっただけで申し訳ない」

「構いませんよ」

里奈は戦場に向き直り、小さく呟いた。

「面白いですから」

『オオウー!!』

右手に持った棍棒を上から下に振り下ろす>クロプス<。

「つと」

ハルはそれを右に避けて、懐に潜り込む。

(でかいなあ、こいつ)

二倍近く体格差があるため、自然と見上げる形になり、大きな壁が迫ってくるような圧迫感がハルを襲う。

だが、その程度のことでは怯えもしない。

(こいつより恐いやつとっぴい闘ってきたし、な！)

魔力剣を左手に持ち替え、下から上に振り抜く。

『アアー！！』

魔力剣は難なく>クロプス<の右脚と右腕を両断した。

「吹っ飛べ」

バランスを崩して倒れ込もうとする>クロプス<の腹を蹴って、その背後にいる他の>クロプス<を牽制させる。

(えっと……こういう状況で気をつけないといけないことは……)

いつか玲奈に教わった事を記憶から引っ張り出す。

(まず『絶対に囲まれるな。一つは退路を確保しておけ』か)
ハルは一旦後ろに跳んだ。

『ウオウ!!!』

その最中、右手側からクロプスの素手攻撃を仕掛けられる。

(『一匹に時間をかけずに、体力を温存しろ』つと)

その攻撃をそのまま魔力剣で受けると、

『ガアー!?!』

その巨大な手が裂け、赤い体液が吹き出た。

カウンターではない。ハルはただ魔力剣を構えただけである。

(こつという時に、この魔力剣の切れ味のよさに驚くな)

悶える>クロプス<を斬り捨て、すぐに魔力剣を構えた。

(『護るな、攻める』で最後だったっけか……難しいこと言うなあ)

前方から>クロプス<が迫る。

「ふっ」

ハルはその>クロプス<より速く移動し、

『ガア!?!』

すれ違いざまに一閃して地に倒した。

「でも……やってやる!」

その後も、ハルは踊る様に周囲の>クロプス<を切り倒していった。

「本当、よくやるわねあの子」

シエルの甲板でハルの闘いを始終見ていたサティが呟く。

「堂々としてるわ。新生生とは思えない、つと」

ハルが倒し損ねた何匹かの>クロプス<がシエルに近付いていることに気付く。

「でも、まだちょっと甘いのね」
ほほ笑み、

「「ダークアロー」」
と呟く。

すると、サティの周囲に黒い巨大な棘のようなものが、その近付いてくる>クロプス<の数だけ現れた。

「まあ、可愛い後輩の失敗の後処理も、先輩の仕事よね」

サティが軽く手を動かすと、「ダークアロー」が一斉に魔物に向かって放たれ、

『? ガ』

ブシュッ!!

と、全て寸分変わらず>クロプス<の頭に直撃し、雄叫びをあげさせる暇も与えずに倒してしまった。

>クロプス<は塵になり、その場には地面に深く突き刺さった「ダークアロー」だけが残る。

(他愛無いわね……ん?)

そこで、サティは十メートル程離れた場所に立っている蓮華が震えているのに気付いた。

(まあ……無理もない、か)

殺し合いなどとかけ離れた生活をしてきた蓮華にとって、この光景は耐えられるものではないかもしれない。

>クロプス<の見た目が人に近いことも、彼女を恐がらせている要因の一つだろう。

「蓮華ちゃん。無理にここにいらなくてもいいのよ? 中で待ってればすぐに終わるわよ」

サティがその声をかけると、蓮華はその震えを押さえつけるように身体を抱き、首を横に振った。

「なにも出来ないかもしれないかもしれませんが……私だけが甘えるわけには

「いかないんです」

未だに震える蓮華だが、その瞳には強い決意が秘められていた。

「……そう。なら、気を強く持ちなさい」

そんな瞳を見てしまっただけは、サティも野暮なことは言えなくなる。

（芯の強い娘……流石、会長の幼馴染ってところかしら）

「ありがとうございます、サティ先輩。わざわざ心配して下さい、助けるのも、先輩の役目なのよ。もちろんあなただけじゃなく、彼のものね」

サティが指差した先では、今もハルが演武のような闘いを繰り返している。

「天城君も頑張ってるんだし、あなたも最後まで頑張りなさいね」

「はい」

と、答える蓮華の表情は柔らかい。

ハルの名前が出た瞬間から、彼女の無駄な緊張は解けており、身体の震えも止まっていた。

思わず、クスツ、と笑うサティ。

「？ 私、何か変なこと言いました？」

「そうじゃないわ。私が天城君の名前を出してから、あなたまるで別人になったから。身体の震えが止まったの、気付いてる？」

「え……そう言えば」

心中の恐怖心が消え去ったことに、自分でも気付いていなかったようだ。

「名前を聞いただけで、知らず知らずの内に心が安らぐなんて、蓮華ちゃんよっぽど天城君のことが『好き』なのね。本当、あなた達は初々しいわね」

「……え」

「……と、今度は結構多いわね。「ダークアロー」」

「眩き、すかさず「ダークアロー」を射出させると、
『グ』

ブシュッ!!

先程と同じように、全て>クロプス<の頭部に命中した。

「ふう……まだまだ多いわね……広範囲魔法で一気にやっちゃおうかしら」

里奈の「豪・虎砲弾」やハル達によって>クロプス<の数は確実に減っているのだが、まだ相手は大群のままである。

(まあ、会長の指示を持ちましようか)

「そう言えば……蓮華ちゃん、あなたの魔術って……って、どうしたの?」

再び蓮華に目を移して、サティは初めて気付いた。

「……………」

蓮華が目を見開いて呆然としていることに。

「おーい、蓮華ちゃん?」

サティが肩を揺さぶると、錆び付いた機械のような動きで蓮華の首が動いた。

「さ、さ、サティ先輩……わ、私、あ、天城さんのことが……す、す、好き、なんですか?」

「??? ……あ」

どもり過ぎて最初蓮華が何て言ったかわからなかったサティだが、頭でゆつくりと解読してようやく理解した。

「え……好きじゃないの? もしかして……私の早とちり?」

「え、いや、それは……え? え?」

混乱の極致に達する蓮華。

(天城さんのことが……好き?)

自分がハルに感じていたものが、里奈や兄の健吾に対する尊敬・親愛の情とは違うものだということには、彼女も気付いていた。だ

が、それが何のかわからなかった。

(これが……好きってことなの?)

半信半疑だったが、恋慕 という言葉が今の感情にしっくりくることを、蓮華は本能的に感じ取った。

「……ほわぁ」

間の抜けた声を出した蓮華の顔が未だかつてないほど赤く染まる。

(ど、ど……どうしよう)

改めてそう認識した蓮華に、今までとは格の違う心の乱れが生じ、それと共にハルへの愛しさが堪らなく溢れだした。

(こ、これが……恋、なんだ……何も……考えられなくなっちゃった……)

「……………」

顔を真っ赤にし、頬に手を添えて俯いた蓮華にサティは首を傾げた。

今までの緊迫した雰囲気、嘘のような微笑ましい光景が、シエルの甲板にはあったのだった。

〜第46話〜

闘いに参加している六人の中で唯一役割が与えられたのは、里奈から シエル を護るように言われているサティぐらいであり、他の五人は思い思いに動いている。

真面目で堅実な健吾は、常に周囲の戦況に目を向けながら騎士団寄りの戦線で確実に>クロプス<を倒し続けている。

リーダーの里奈も、騎士団の総隊長への挨拶を終えてからは「豪・虎砲弾」のような目立つ攻撃をしておらず、最前線で騎士団をフォローしながら戦闘を行っている。

ハルはどちらかと言えば健吾や里奈より>クロプス<の大群の深いところで闘ってはいるが、その割に倒した数は少ない。そもそも、ハルの戦闘スタイルは一对多数に向いていないし、広範囲を攻撃出来る能力もないので、当たり前といえは当たり前である。サティが感心したように、新入生とは思えない動きを見せてはいるが、今のところ目立った動きはない。

桜楼の生徒会陣がこの様に一匹一匹を確実に倒しているのに対し、天楼の生徒会二人は豪快だった。

「ほっ、と」

左手に持った魔力剣を振るって一匹の>クロプス<を倒し、体勢を整えるハル。

『グオオ!!!』

「っ! はあ!」

右手側から迫る>クロプス<が両手を振りかぶるのを見て、すぐ

さまその>クロプス<の懐に入り、右手の魔力剣でその両脚を両断し、

『オオー！！？』

「よい、しょ！」

前のめりに倒れ込む>クロプス<を魔力剣で真つ二つにした。

(はぁ……これで何匹目だ……途中で数えるの面倒になってきたからな)

額に浮かんだ汗を拭い、シエルの甲板で精製したものと、闘っている間に精製した二つの魔力剣を構える。

『グウ……』

>クロプス<はすぐには襲ってこずに、ハルとの距離を少しずつ詰めるように移動している。

(……こいつら、学習してきてるからなあ)

無理に攻撃を仕掛けてくることは少なくなり、こちらの体力を削ることを重視し始めていた。

(流石、知能の高い魔物だけあるな……まだ体力は大丈夫だけど……どうするか)

なんてハルが考えていると、

ドンッ！

と、ハルの前に立つ>クロプス<の背中に、他の>クロプス<がぶつかった。

『グ、ガ、ガア！』

その>クロプス<は怯えた子供のように錯乱している。

(何……？)

こっと思ったのはハルだけでなく、その>クロプス<にぶつかられた>クロプス<もだった。

『ガア！』

『グ……ガア』

『ゴオー!』

見ると、その周辺には他の錯乱した>クロプス<が集まっていた。どうやら、何かから逃げ出した>クロプス<達がこの場に集まり、ハルと慎重に距離をとっていた>クロプス<とぶつかって渋滞状態に陥ったようだった。

(何だかわからないけど……これはチャンスだな)

ハルは両手に持った魔力剣を地面と水平に構え、腰を落として一気に駆け出した。

『グ、ガアー!』

それに気付いた>クロプス<がハルを迎え撃とうと腕を振り上げるが、逃げて来た>クロプス<が邪魔になって思うように動けない。

そんな>クロプス<の間を縫うように駆けるハルは数秒もしない内にその渋滞を抜けた。

「ふう」

止まり、息をついてから両手の剣を振ると、

『ガアー!?!』

>クロプス<達の脚が綺麗に両断された。

(こいつら、何に怯えてたんだろ)

砂埃を上げ、地響きをたてて地に伏す十数匹の>クロプス<をよそにその原因を探していると、ある人物が目に入った。

(あれは……千さん?)

戦場に一人佇む千だ。

(これは……どういう状況だ?)

千は>クロプス<の大群のど真ん中にも関わらず、一人佇んでいるのだ。

>クロプス<達はというと、

『グウ……』

千と二十メートル程距離を開けたところで様子を見ている。と言うより、手が出せないで様子を見ることしか出来ない、といった

状況である。

「……………」

その異様な状況の中、ボーっと空を見上げていた千が

(っ!?)

一瞬にして消えた。

(速過ぎて見失った! どこに)

ハルが周囲を探索しようとした時、

『ガアー!?!』

と、>クロプス<の雄叫びが耳に入った。

(あそこか)

ハルが目を向けた先では、おおよそ 数十匹 の>クロプス<
だったもの がバラバラに刻まれていた。

そして、その中心には、

「……………」

無表情の千が立っている。ポーズは先程と同じで、何の構えもと
っていない。

(何が)

状況を理解しようとするハルだが、その前にまた千が消えた。

(右か!?)

今度はおぼろげながら千の姿を捉えたハルが右に目を向けると、
丁度千が>クロプス<の大群のど真ん中に紛れ込んでいたところだ
った。その周囲の>クロプス<は千がいることなどまるで気付いて
いない。

(何て速さだよ!)

驚愕するハルは、次の瞬間に更に驚愕することになる。

(な……………)

千を中心に十メートルほどの位置にいた>クロプス<が、先程と
同じようにバラバラに切り刻まれたのだ。

『ゴオーー!!』

そうしてやっと、周りの>クロプス<が千の存在に気付き、戸惑いの雄叫びをあげた。

(嘘だろ……)

だが、ハルが驚いたのはそれだけではない。

>クロプス<が刻まれた時、それをしているはずの千の刀が、全く動いていなかったのだ。

(いや、動いてはいるんだろうけど……速過ぎて……俺じゃ認識出来ないんだ)

ハルが目を見開いている間に、千は再度消えた。

千の姿を目で追うハルは周りの事など忘れて、全神経を千の動きに注いだ。

だが、

(全然……見えない)

ハルの目では>クロプス<が一人でに切り刻まれているようにしか見えなかった。

(軌道が見えないならまだしも……動いてることすらわからない攻撃なんて……)

同時に、>クロプス<が錯乱していた理由も理解した。

目の前にいた相手が消え、いつの間にか自分の背後の仲間がやられ、その一瞬後には遠くの仲間がやられる光景を見ては、流石の魔物でも逃げることを選ぶだろう。

(正直……怖い)

汗一つかいていない千を見て、ついそう思ってしまう。彼女はこの調子で、恐らくハルの何倍もの>クロプス<を倒しているだろう。無表情のまま、一度も攻撃を受けずに、一度も反撃を許さずに。

「どうした、天城？ もうギブアップか？」

いつの間にか、ハルの隣にはミリヤがいた。彼女も多くの>クロプス<を倒しているが、汗一つかいていない。

ミリヤの闘い方は千とは真逆のかなり激しいものである。

偃月刀を手に戦場の中を駆け巡り、行く手を阻む>クロプス<を全てなぎ倒している彼女の姿は鬼神のようであった。

「あ、いえ……千さんを見てまして」

「千を？ ……ああ、成程な」

今も>クロプス<を切り刻む千を見て、ミリヤが納得する。

「お前は千の「閃界」せんかいをみるのは初めてなんだな」

「「閃界」ですか？」

「そう。あいつの刀を振る速さは光にも到達している、なんて言われてるからな。もちろん、誇張されてるけど」

だが、そう思っても仕方ないほど、千の刀を振る速さは常人離れしている。

「あの速さを正面から止められるのは、恐らく世界にもあまりいな
いぞ」

「でしょうね……」

ハルはもう一度千に目を向けた。

「……………」

偶然、千もこちらを見ていたので、二人の視線が交錯する。

(っ！ ……面白い)

ふと、ハルはほほ笑んだ。

互いが顔を合わせた時間は一瞬にも満たなかったし、千は無表情のままだったが、彼女の目は語りかけていた。

『ここまで来れる、ハル？』

と。

「っと、でかいのが来たな」

他の>クロプス<より二回りほど大きい、リーダー格の>リネル・クロプス<が、ハルとミリヤに迫っていた。

「…………レイガーニさん。ここは俺が」

「大丈夫なのか？ 疲れてるんなら休んでいいぞ」

「オオーー!!」

その>リネル・クロプスくは二人から十メートルほど離れた場所で雄叫びをあげ、巨大な棍棒を持った右腕を大きく振りかぶり、

「ガアーー!!」

そのまま思いつき二人に向けて振り下ろした。

「休むなんてあり得ませんよ……これからが」

ハルは右手に大量の氣を瞬時に溜め、

「燃える所ですから!!」

手の甲を上にして、迫る>リネル・クロプスくの棍棒に合わせる形で勢いよく右腕を振り上げた。

ドゴオン!!

と、激しい音が響き、

「オオ!?!」

大きさや重量で勝るはずの>リネル・クロプスくの棍棒が、空高くへと吹き飛んだ。

「へえ……私も負けてられないな」

今の一撃で対抗心に火が付いたミリヤは偃月刀を構え、頑張れよ、と言いついて戦場のただ中へと身を投げ出した。

「どれだけ時間がかかるかわかりませんが」

ハルも二本の魔力剣を構え、

「絶対に隣に立ってみますよ、千さん！」

>リネル・クロプスくに向かって駆けだした。

〜第47話〜

所変わって、東京の雲月荘。

「今頃、ハル君達は依頼の真つ最中かしらね」「居間を掃除しながら呟く家主のミキ。

「うーん……私も行こうかしら」

もちろん冗談だが、ミキの場合は本気で行くことも出来る。それも、その身一つで、『一時間』もかからず。

「早く二人とも帰ってこないかしらね」

なんて言いながら手を動かしていると、

「あら？」

プルルル、と普段あまり鳴ることのない雲月荘の電話が鳴った。

「つ、とと」

一旦掃除の手を止め、廊下に置いてある電話の受話器をとる。

「もしもし？」

「私だ」

「名前言ってくれないとわかりませんよ？」

『……神崎玲奈だ』

「知ってる」

『……………』

押し黙る玲奈は、怒りに身を任せて携帯をへし折ってやるうか、と真剣に葛藤していた。

(こつこつとちよつとした冗談が一番玲奈の勘に障るのよねえ)

ほほ笑み、口を開くミキ。

「ごめん、ごめん。謝るわ、玲奈。わざわざ玲奈からかけてくれたのに、悪ふざけがすぎたわね」

『休憩中で暇だったから気まぐれにかけたただけなんだが……今は心底後悔してる』

「あらら。それは本当に悪い事したわ。でも……そんな理由で私に

電話するなんて珍しいわね。何かあったの？」

『まあ、なくもないが……今、天城が『世界機構』の依頼をやっているのは知ってるか？』

「ええ。ルクセールに行ってるんでしよう。それが、どうかしたの？」

『事前の情報ではおよそ五百の>クロプス<が相手だったんだが、ついさつき入った連絡によると、その数が約四倍の二千になったらしい』

「あらあら、それは大変ね」

と、全然大変そうに感じない口調で言うミキ。

『焦らないのか？ 二千の>クロプス<は中々だぞ？』

「千ちゃんがいるから大丈夫よ」

「千？ ……天楼の生徒会長か？」

「そ あの娘がいれば大抵の事はどうとでもなるわ。二千の>クロプス<を蹴散らすことも朝飯前よ」

『……そう言えば、お前達は一緒に住んでるんだっただ……つまりん』

ミキが取り乱すと思っていた玲奈は拍子抜けした。実際に取り乱して、今から向かう、と言われても困るが。

「玲奈がそんな暇そうにしてるって事は、あなたもそう思ってるんでしょ？」

『……どうかな』

何て答える玲奈だが、里奈も同行していることを知っている彼女は、この依頼でハルを含めた誰かが危険な目に会うことはない、と確信している。

『まあ、死ぬことはないだろうが、あいつがショックを受けることはあるだろうな』

「？ 何に？」

『天楼の生徒会長や他のメンバーとの実力差に、だ。今回の依頼では実力の差が如実に表れる。負手腐らなければいいがな』

倒した魔物の数を律儀に数える者はいないだろうが、誰が今回の依頼で一番役に立たなかったかは、その者自身が一番わかる。

それは、誰かと一対一で闘って負けるより、精神的にくるものがある。

「……………」

玲奈の言葉をミキはしばらく考え、やがて、クス、と笑った。

「まだまだハル君のことをわかってないのね、玲奈は」

「……………どういう事だ？」

「そんな実力差を見せられたハル君がただ黙ってるわけないわ」

ミキは遠くの空を見上げながら、言った。

「あの子……………すごい、負けず嫌いなものよ」

「オ……………オオー！！！」

自分の武器を吹き飛ばされた>リネル・クロプス<は一瞬面食らったが、その後すぐにハルに攻撃を繰り返した。

>リネル・クロプス<の巨大な岩石のような両拳が幾度も振り下ろされる。

「ほつ、と」

ハルはそれらの攻撃を難なく避け、相手の右拳が地面を大きく叩いたところで、

「でかければいってもんじゃないぞ、つと」

その右腕に乗り、>リネル・クロプス<の頭部目指してその上を駆けた。

「ゴアアー！！！」

>リネル・クロプス<がハルを叩き落そうと、左手を右腕の上を

滑らせるように水平に振る。

「よっ」

それを軽くジャンプして避けるハル。

その際、魔力剣を左手の軌道上に構えていたので、

『グ、アアー！！』

>リネル・クロプス<の左腕の肘から先がバツサリと両断された。

「ご愁傷様」

もがく>クロプス<の頭部に着いたハルは上手くバランスをとり、

「ふっ！」

二本の魔力剣を天辺から突き刺した。

『ガ……』

>クロプス<は一瞬その場に静止し、ゆっくりと力なく倒れ出す。

「おっと……らっ！」

その巨体が完全に倒れ出す前にハルは脚に気を溜め、空高く跳び上がった。

(今の俺の闘い方じゃ、明らかに効率が悪い)

空を切りながら、ハルは考える。

(かと言って、千さんやレイガー二さんの真似をするわけにはいかない)

千のようなスピードや、ミリヤのような攻撃力を持っていないことは、ハルが一番よく知っている。

(でも……この魔力剣……魔力の応用にはそれに匹敵する一つの『特性』がある)

戦場を一望できる高さまで跳び上がったハルは目を閉じ、両手に持った魔力剣を 消し、再度右手に意識を集中させた。

(使用者のイメージをそのまま反映させる、という特性が)

たっぷり数秒経った後のハルの右手には、一振りの 刀 が握られていた。

それも、普通の刀ではない。

刀身の長さが千の使用する刀の さらに倍以上 はある、とんで

もない長さの長刀だ。

(成功したけど……すごい時間がかっちゃった)
切れ味そのままに、今までより遥かに大きなものを精製したのだから、時間がかかって当然だ。

ちなみに、形状が 剣 でなく 刀 なのは、事前に千の長刀を見ていたのでイメージし易かったからである。

「さて……」

魔力刀を構えたハルは自由落下に任せていた身体をうまい具合に動かして脚に気を溜め、

「行くぞ！」

空歩速 で一気に下降した。

向かう先は、>クロプス<の大群のど真ん中。

(他の人を斬っちゃうわけにはいかないからな)

それから数秒も経たずに、クロプスの大群の間近まで迫る。

『グオオー!!!』

自分達に向かって急降下してくるハルに気付いた>クロプス<達は空を見上げ、各々の武器を構えた。

「食らえ！」

ハルもしっかりと魔力刀を握り、

「百花繚乱」!!!」

空中から降下先の>クロプス<達に向けて縦横無尽に振りまわした。

ヒュヒュヒュン!!!

と、空気を斬る音が辺りに流れ、

「っ、とと」

ズザザ、とハルは砂埃をあげて着地した。

『……………』

周囲の>クロプス<達は空を見上げたまま微動だにしない。

「ん……………」

ハルは一度その>クロプス<達を見やり、右手に持った魔力剣を勢いよく横に振った。

直後、身体のあるゆる場所を斬り刻まれた数十の>クロプス<が塵になって消え失せた。

「ふう……………成功、つと」

ポツカリと開いた>クロプス<の大群の中心で満足そうに呟くハル。

「本来の俺の戦闘スタイルとは違うけど……………これはこれで」

『ガ……………ガアー！！！！』

突然の出来事に困惑していた、ハルの魔力刀の届かなかった場所にいた>クロプス<達が雄叫びをあげながらハルに迫る。

「よし……………」

ハルはそんな>クロプス<を一瞥し、長刀を構えた。

「かかって来い！」

〈第48話〉

「やるなあ、あいつ」

遠くで魔力刀を振りまわすハルの姿を見て、健吾が呟く。

ハルが「百花繚乱」で>クロプス<を一掃した時には、彼も思わず身震いした。

「あんなの見たら、俺も一発でかいのを叩き込みたくなるじゃないか、よ！」

迫る>クロプス<を蹴りで勢いよく吹き飛ばし、言葉と行動とは裏腹に猛る心を必死に鎮める健吾。

（待て待て……俺がそんなことになったら、熱くなりがちなあいつらを誰が止めるんだよ……落ち着け）

『オオウ！』

「とりあえず……天城もあんな感じだし、もうすぐ終わるだろうか……今は我慢だな」

クロプスの攻撃を避けてすかさずカウンターを浴びせる。

（それに……クールな男がタイプって『あいつ』も言ってたし）

健吾は 思い人 のいるシエルに目を向けた。

「健吾」

「っ!?!? ……里奈か……何だ? 今、見ての通り忙しいんだが?」
心中の動揺を悟られないように、努めて冷静に言う健吾。

「……>クロプス<の数が半分近くまで減った、という連絡が彩夏からあった」

そんな健吾の心中を察したのかどうかかわからないが、里奈は変わった様子もなく話を続ける。

「天城も中々豪快な状態になってるし、このままだと恐らくあと十五分ぐらいで>クロプス<を掃討出来る」

「そうかい。それじゃ、ゆっくり待つか」

「だが……まだ終わりそうにはない」

「……………何言つてんだ？」

意味がわからん、と健吾が言うと、里奈は厚い雲のかかった空を見上げながら呟いた。

「次のが来る」

「次？ ……根拠は？」

「勘だ」

「……………」

健吾はジト目で里奈を見るが、彼女の勘が馬鹿にならないことを思い出し、頭をかいた。

「……………わかった。お前の『野生の勘』の的中率は今の所百発百中だからな。しばらくは気を抜かないようにしてる」

「そうしておけ」

里奈は再度空を見つめ、

(さて……………何が来るやら)
ほほ笑んだ。

「もう、終わりそうですね」

シエル内の操縦室で一人呟く彩夏。

操縦室には多くのモニターが設置されており、戦場の様子や周囲の状況がリアルタイムで確認出来る。

(数が二千に増えていた時は正直ちょっと焦ったけど……………流石、桜楼・天楼の共同戦線と言ったところね。彼も……………とてもじゃないけど新入生とは思えないし)

彩夏がカーソルを打つと、魔力刀を振りまわすハルが一つのモニターに大きく映し出された。

>クロプスくを斬り倒すその姿は恐くもあり、華麗でもある。

(強くて、優しい……あの人と同じ)

再びカーソルを叩くと、他のモニターに今度は健吾の姿が映った。

「……健吾先輩」

頬を若干染めた彼女の声色には、若干の弱々しさが混じっている。

(私が初めて恋い焦がれた人……)

両手を胸の前で堅く結んだ彩夏は、健吾と初めて会った時のことを思い浮かべた。

一年近く前、彩夏が桜楼学園に入学してしばらく経った頃、彼女は心無い女生徒数人から嫌がらせを受けていた。

今以上に無口で、全ての対応が機械的だった彩夏が彼女達は気にいらなかったのだ。また、魔法・体術両方の才能があまりない彩夏が、『メカの天才』と持てはやされていたのも原因の一つだろう。

嫌がらせは日に日に激しくなり、遂には『鍛練だ』と言って全く戦闘の出来ない彩夏に暴力を振るい始めた。

彩夏は歯を食いしばりながらそんな日々を、誰にも助けを求めずに、耐えた。ここで折れることは彼女のプライドが許さなかったし、心の奥底では、罪滅ぼし、とも思っていたのだ。

彩夏の家系は代々戦闘を主とする者の集まりで、彼女の兄姉も全員騎士団に属している。もちろん、戦闘関連の部隊にである。彩夏は末っ子なので、戦闘が出来なくともそれほど風当たりは強くなかったが、それでも家では肩身の狭い思いをしてきた。

機械と触れ合うのが心の底から好きでな彩夏は、機械を馬鹿にしている女生徒達にいつも怒りを覚えていたが、それでもここで問題を起こして家に迷惑をかける訳にはいかなかった。

彩夏のそんな地獄の日々を終わらせたのが、健吾だった。

健吾は女生徒達をたった一度の一喝で黙らせ、二度と彩夏に手を出さない事を誓わせた。そして、健吾は彩夏にも怒った。

『自分の好きなものを馬鹿にされて黙ってる奴は、本当の馬鹿だ。君にどんな事情があるか知らないが、好きなら死ぬ気で護れ。周り

が何と言おうと、その好きな気持ちは君だけのものだ。決して卑下してみるな』

それから健吾は彩夏を生徒会に誘った。

『そこでなら君は思う存分好きなことを出来る。誰かを見返すことも……誰かに認めてもらうことも、な』

(生徒会に入った私は里奈さんやサティ先輩と出会って自信をもつことが出来た。まだ、家の皆に胸を張って言えるわけじゃないけど……自信を持つことが出来たのは本当に嬉しかった)

そのキツカケを作ったのが、健吾だ。

(単純だ、って笑う人もいるかもしれないけど……私はあの人の強さそして優しさを好きになった。初めて、男の人を好きになった) ほほ笑む彩夏。

(……でも)

だが、途端にその顔が曇った。

暗い表情のまま、ハルと健吾が映っているのと違う、他のモニターに目を向ける。

(健吾先輩には……他に好きな人がいる。言及したわけではないけど……間違いない。その人は私なんかとは比較にならないくらい綺麗で、優しくて、気立てがよくて……完璧だ)

その相手 が健吾のことをどう思っているかはわからないが、二人はとても似合う、と彩夏は思ってしまう。

「はあ……」

思わずため息をつき、背もたれに寄りかかって操縦室の天井を見上げる。

(どうすればいいんだろう……)

勝ち目はない諦める、と言われても諦めきれないほど、彩夏は健吾のことを好きになってしまっている。

「……はあ」

もう一度深いため息をつき、目を閉じる。心が落ち着くまでこの

ままでいよう、と決めた。
だが、そうはいかなかった。

ピー！ ピー！ ピー！

「っ！？」

けたたましい 警告音 が操縦室に響き渡ったのだ。

(何が！？)

先程までの憂いを心中の奥深くまで強引にしまい、カーソルを叩く。この警告音が鳴る、ということは、それなりの緊急事態だった。

「これは……熱源反応！？ 場所は……南西上空」

すぐさま船体に取り付けてあるいくつかのカメラをそちらに向けて。しかし、雲が分厚過ぎて上手く向こう側を判別出来なかった。

「ちっ！ ん……っ！？ 熱源反応が、二つに！？」

突然現れた二つ目の熱源反応。

(ヤバイ！ 二つの熱量が段々上がってきてる！)

彩夏は相手の判別を早々に諦め、マイクに向かって叫んだ。

「サテイ先輩！ 今すぐに南西斜め上に魔法障壁を張って下さい！
大きいのを、至急！」

〈第49話〉

「実を言うと、私最初はこの気持ちがわからなかったんです。お兄ちゃんや里奈さんを感じてるものとは違うなあ、とは思ってたんですけど……天城さんと話してるだけで心がポワポワして……友達は『やっと蓮華も女の子らしくなった』って言って……やっぱりあれって……こ、恋のこと言ってたんですよね」

「でしょうねえ」

シエルの甲板で、サティは落ち着きを取り戻した蓮華の相談を受けていた。殆どが蓮華の独白だが。

（本当にわかってなかったのね）

ハルと同じ 他人の色恋沙汰 に鋭いサティは、ハルと蓮華が生徒会室に一緒に来た時から、蓮華はハルに恋をしている、と気付いていた。だが、まさか本人が気付いていないとは思わなかった。

（純粹、と言うより、そっちの感情だけが赤ちゃんみたいなのね）

初恋を知った 娘 の話を聞く母親ってこんな感じなんでしょうね、とサティは学生にしてそんな事を悟った。

「ど、どうしましょう。私、最近ようやく天城さんと普通に話せると思ってたのに……つ、次から天城さんの顔をまともに……み、見れませんか！」

顔を真っ赤にして頬に両手を当てる蓮華。

（ああ……可愛い）

そんな蓮華を恍惚の表情でみつめるサティ。

ミキの時もそうだったが、蓮華には年上の女性の心をくすぐる何かを持っているようだった。

コホン、とサティは一つ咳払いをし、諭すように口を開いた。

「まあ、そんなに深刻に考えなくていいんじゃないかしら？ ポジティブに考えましょう、蓮華ちゃん」

「ポジティブに、ですか？」

「そう。これからもっと親しくなるこの時期に気付いてよかった、
って考えれば、いくらでもアピールの仕方が生まれるものよ」

「そ、そんなものですか？」

「ええ」

頷きながら、蓮華ちゃんは茨の道を歩むことになるわね、とサテ
イは思っていた。

（天城君、優しいし、気が利きそうだし、見た目はちょっと頼りな
いけど実は物凄く強い、っていうギャップがあるし……これからも
っとライバル増えるでしょうね）

蓮華も可愛さでは学園で一・二をとれるが、その競争に勝てるか
どうかは流石にわからない。

それでも、蓮華は言った。

「私……頑張ります！ 難しいかもしれませんが……天城さんに
振り向いてもらえるように一生懸命努力します！」

近い内にハルの人気が急上昇するのは、今のところ一番近くに
いる蓮華が一番わかっていることだろうが、それでも彼女はハルを健
気に好きであり続けることを選んだ。

（彩夏ちゃんといい、この娘といい。本当、眩しい娘達。私も二人
みたいに青春を謳歌したいわ）

そんな事を密かに思う彼女はすでにとある色恋沙汰の渦中にある
のだが、

（似合わないことはわかってるけど……私、卒業までに恋が出来る
かしら）

全く気付いていない。

甲板に流れる何とも言えない、青春くさい空気。その空気は、次
の放送で一瞬にして払拭されることになった。

『サテイ先輩！ 今すぐに南西斜め上に魔法障壁を張って下さい！
大きいのを、至急！』

「え？」

蓮華はその突然の放送に困惑し、

「っ！ 了解っ」

南西に意識を集中させたサティは一瞬で現状を理解し、両手をそのまま上空へと差し出した。直後、巨大な魔法障壁が四つ、飛空艇を護るよう出現した。

「医療魔法」と同じで魔法障壁に言霊は必要なく、障壁に込めた魔力の量で強度が決まる。

ちなみに、魔法障壁は会得するのがかなり難しく、生半可な努力では使う事すら難しい。なので、魔法を主に扱う者は、相手の攻撃を避ける修練をひたすら積むことになる。

「バアーン！！」

と、サティが障壁を展開した数瞬後、厚い雲を突き抜けた二つの火球が障壁に激突し、爆発した。

障壁は破壊されこそしなかったが、その際に発生した衝撃は飛空艇を揺るがす程のものだった。

「きゃあ！」

揺れる飛空艇に脚をとられ、体勢を崩す蓮華。

「っと。大丈夫、蓮華ちゃん？」

「は、はい。ありがとうございます、サティ先輩」

蓮華を抱き止めながら、サティは南西斜め上へと顔を向ける。

爆煙の向こう側、穴の開いた厚い雲からは二匹の魔物が姿を現していた。

「……竜？」

その魔物を見たハルは思わず呟くが、すぐに首を横に振った。

(全体的な形は似てるけど……よく見ると全然違う)

大きな体躯に大きな翼、その身体に合った大きさの手足があり、パツと見は竜と酷似しているが、やはり違う。その魔物は異様に首が長く、口の両端が首に届くまで裂けている。そして、長い首とは逆に尻尾が極端に短い。

完璧に均整のとれた、見る者を魅了する竜とは比べるまでもない、言ってしまうえば、かなり不細工な魔物だった。

「新手的魔物、だよな……？」

(どうしよう……)

このまま>クロプス<との戦闘を続けるべきか、それともあの>竜もどき<との戦闘に備えるべきか。

(……一旦、会長の指示を仰ぐか)

そう決めたハルは後退しようとして、気付いた。

>クロプス<達が慌ただしくこの場を離れようとしていることに。

「？」

ハルが首を傾げていると、

『ガギャー！！』

と、奇声をあげた二匹の>竜もどき<が空を滑空し、逃げまどう

>クロプス<の元に向かった。

『ゴアア！』

>クロプス<はさらに混乱し、散り散りに走りだす。

だが、大きさと速さの両方で遥かに勝る>竜もどき<は>クロプス<の行く手を阻み、その大きな体躯を使って、>クロプス<を攻撃し始めた。

「さ、サティ先輩……あ、あの魔物って？」

飛空艇から数百メートル離れた場所で>クロプス<を攻撃する>竜もどき<を見て、顔を青くする蓮華。

「>ルーラレイズ<よ。本当はもつと山奥にいる魔物なんだけど、偶然出くわしちゃったみたいね」

（あるいは、住む場所を追われた>クロプス<がここまで来て、それを>ルーラレイズ<が追いかけて来たか……どっちにしろ、迷惑な話ね。私達はキチンと住む場所を特定してるのに）

はあ、とため息をつくサティ。

「大丈夫……何ですか？」

「ん……まあ、二匹ぐらいならどうってこと」

『ギギヤーー!!』

「ない……ん……だけ……ど」

計ったように聞こえる特徴的な>ルーライズ<の鳴き声。

（まさか……）

嫌な予感しかしなかった。

その鳴き声は、先程現れた二匹の>ル・ラレイズ<がいる場所とは違う所から聞こえてきたのだ。

（と言う事は……）

鳴き声の聞こえた、その最初の二匹の>ルーラレイズ<の真上に目を向ける。

そこには、

『ギギヤーー!!』

新たに現れた>ルーラレイズ<がいた。

しかも、一匹だけではない。

その数、八匹。地上にいる二匹を合わせると、計十匹になる。

「……はあ」

その数を、そして、その中に混じる 親玉 の>リネル・ルーラ
レイズくを見て、驚きを通り越して呆れるサティ。

(本当……イレギュラーな依頼ね)

再度遠くの空を見る。

ここでは七匹の>ルーラレイズくと、他のより一回り以上も大
きい>リネル・ルーラレイズくが翼をはためかせながらこちらを睨
んでいた。

〈第50話〉

「何か……凄いことになりましたよ？」

合計十匹になったことと、明らかに他とは格の違う>リネル・ルーレイズ<が現れたことに驚きを隠せないハル。

その隣では、里奈が腕を組んで立っている。

「驚いたな」

「……全然驚いてませんね」

「驚いてるさ、十分な」

絶対に嘘だ、と思ったハルだが、今はそれどころではないので話を進めることにした。

「あの大きいのはあいつらのボスですか？」

「少し違うが、簡単に言うとそうなる。>クロプス<の中にも一際大きいのいただろ？ あいつらは周りとは少し異なった成長を遂げた『上位種』、一般的に『リネル』と呼ばれてる」

「リネル……>リネル・クロプス<……>リネル・ルーレイズ<か……」

呟き、遠くに集まる>ルーレイズ<の群れへと目を向ける。

他の>ルーレイズ<が翼を動かしながら空中でこちらの様子を窺っているのに対し、>リネル・ルーレイズ<は地面に脚をつけ、最初の二匹の>ルーレイズ<が半殺しにした>クロプス<を貪り喰っていた。

（成程。自分達で喰ってなかったのは、あいつに献上するためか。上下関係もハッキリしてるし……そこところは、こっちと変わらないんだな。と言うより、すぐに塵になる魔物を食べて栄養を摂取できるのか？ ……謎だ）

「それにしても、初っ端の依頼で二種類のリネルと遭遇するとは……お前も蓮華も中々運がいいな」

「……そもそも、こんなイキナリ他の魔物が乱入することなんてあ

るんですか？」

里奈の皮肉を無視し、ハルは話を続ける。

「普通はない。多分……『あれ』が近いんだろう」

「『あれ』……？」

里奈の意味深な言葉に首を傾げていると、

「何か、意外な展開になつたな」

ミリヤと千が駆け寄ってきた。

「どうするの、里奈？」

千の問いに里奈は獰猛な笑みを浮かべて答える。

「もちろん、あいつらとやり合っさ。>クロプス<を喰ってくれた礼をしなくちゃな」

「また暴れるなよ、里奈」

そこに健吾も駆け付け、下で闘っていた全員が里奈の元に集合した。

「騎士団の総隊長に避難指示を仰いでもらった。エライ心配されたけど、適当にごまかしておいた」

「ご苦労さん。ハツキリ言っただけからの闘いでは騎士団は邪魔なだけだからな」

「本当にハツキリ言いますね」

苦笑するハル。

ルクセールの騎士団が役に立たない、というわけではなく、時と場合によるが、相手が少数の場合はこちらも少数であたるほうが効率がいい。今回は里奈や千のようなレベルの高い実力者が集まっているので、尚更である。

「さて、それじゃ、やるか……向こうも準備万端らしいしな」

見ると、>クロプス<をたいらげた>リネル・ルーレイズ<はこちらを睨んでおり、地上の二匹は首をタマゴを飲みこんだ蛇のように丸く膨らませ、空中の八匹は体勢を低くして今にもこちらに向けて飛空しようとしていた。

「やる気満々だな……っ」と

そこで、里奈のポケットから味気ない音が流れる。

里奈はポケットからシンプルな携帯電話を取り出し、ボタンの一つを押して耳に当てた。

「サテイか？」

『はい』

雑音混じりに、サテイの声が電話口から聞こえる。

二人が使っているのは、電波の代わりに魔力を飛ばす特殊な携帯電話で、電波の届かない都市外でも使える。有効範囲は互いの魔力量にもよるが、大体一キロ程度が限度である。

『すみませんが、誰かをこっちの援護に回して下さい。私一人でも大丈夫だとは思いますが……一応』

「わかった。すぐに寄越す」

『ありがとうございます』

「ああ」

里奈は携帯を戻しながら三人に目を向けた。

「って訳だ。健吾がシエルの救援に、千とレイガー二は天城の援護をしてくれ」

「……俺？」

と、一瞬の間の後、自分を指差すハル。

「お前にはあの>リネル・ルーラレイズ<の相手をしてもらう。それを使うお前が一番最適だからな」

ハルが右手に持つ魔力刀を指差す里奈。

ちなみに、ハルは魔力刀を地面に深く突き刺し、最低限刀身を露出させないようにしている。

「そう……なんですかね？」

>リネル・ルーラレイズ<の実力をよく知らないハルは首を傾げた。

「それに、そっちのほう効率もいい。その武器、他の奴と共闘するには少し難しいだろう？」

「まあ……そうですね」

「なるべく早く終わらせるよ、天城。そろそろ、この殺風景な風景にも飽きてきた」

(……飽きっぽい人だなあ)

ハルが何とも言えずに苦笑していると、

「来るぞ！」

身構えた健吾が叫んだ。

それと同時に、

『ゴギャー！！！』

>リネル・ルーラレイズくが大きな雄叫びをあげ、地上の二匹は口を大きく開けて巨大な火球を吐き出し、空中の八匹は、三匹がシエルに、残りがハル達に向かって飛空を始めた。

「よし……行け！」

里奈の号令と共に、

「そつちは頼んだぞ！」

健吾はシエルの方向に走り、

「私達が道を作ってやるから、天城は他を無視してリネルに突撃していいぞ」

「ハルの背中、護つてあげる」

「は、はい！ よろしくお願いします！」

ミリヤ・千・ハルの三人も、こちらに向けて飛空する>ルーラレイズくと真つ向から対峙すべく、走りだした。

「お前達の取りこぼしは私が処理してやる。好き勝手に暴れていいぞ」

その三人の背中に声をかける里奈はその場に留まっていた。

「さつきから意外に思ってたんだが……あの会長さんは真つ先に敵に向かうタイプだよな？ 今回は最初の一撃以外大人しくないか？」

「里奈はマイペースだから」

「お前が言うか」

「ちよ、ちよっと！ 二人とも、今の状況わかってますか！？ 前、前！」

全く緊張感のない会話をするミリヤと千とは反対に、かなり焦っているハル。

>ルーラレイズくと距離がかなり空いていたとはいえ、お互いかなりの速度で接近しているので、接触まで後十秒もかからない。

「とりあえず、あれを何とかしないと！」

ハルが指差した先には、今も>リネル・ルーラレイズくを守護している二匹の>ルーラレイズくが吐き出した二つの火球が、後に続く>ルーラレイズくを先導する形でハル達に迫っていた。

「んー……どうする、千？」

「私がやる」

そう答えた千は無謀にも移動速度を速めて二人より前にとび出した。

「千さん!？」

ハルが叫ぶのもお構いなしに千は迫る火球に自ら近付き、いよいよ接触しそうになった直後、地面に両刀を突き刺し、

「ひょうへきじゅう「氷碧渡」」

と、呟いた。

直後、突き刺した刀の地面が凍結した。かと思えば、そこから巨大な分厚い 氷の壁 が突き出た。

「す、す……」

ハルが目を見開いている間に、二つの火球は「氷碧渡」に衝突し、

ピキン

と、一瞬で内部までも冷やされて固まった。大きな氷の球になった火球は爆発することもなく「氷碧渡」にくっついてしまったのだ。

「……………」

予想以上の効力に絶句するハル。

(ぶ、分厚いだけの壁じゃないのか)

「『砕』^{さい}」

千が続けてそう呟くと、その氷の壁もろとも氷球が粉々に砕け散った。

「魔法つて……やっぱり凄いな」

そんな言葉がハルの口から漏れてしまうのも無理はない。

「天城、感心してる場合じゃないぞ」

「え……っ!？」

我に返って初めて、一匹の>ルーラレイズ<が自分のすぐ近くまで接近していることに気付く。

『ギギヤヤー!』

地面ギリギリを滑空する>ルーラレイズ<は器用に下顎を地面につけないように雄叫びをあげた。

身体の大きさを活かした体当たりを食らわすつもりか、もしくはそのままハルを喰おうとしているのか、スピードを緩める気配はない。

「っ!」

ハルは咄嗟に勢いそのままにジャンプし、>ルーラレイズ<の上をまたぐように跳んだ。

(あつ、ぶねえ!)

かなりギリギリのタイミングだったが、なんとか掠ることなく避けきった。

『……………』

>ルーラレイズ<は大きく口を開けたまま、しかし、声をあげることなくそのまま滑空し、

「つと」

ハルが着地した直後、

ズバツ！

と、その大きな体躯が丁度真ん中から真っ二つに両断され、轟音をたてて墜ちた。

〈第51話〉

「へえ、やるなあ」

口笛を吹くミリヤ。

(避ける時にあの馬鹿でかい魔力刀で斬った……いや、ただ進行方向に『置いた』だけか。あの力……魔物にとっては最大の脅威だな)『ギギヤァー!!』

息を吐く暇もなく、他の>ルーラレイズ<ハル達に迫る。

「よし……来い」

と、魔力剣を構えたハルを、

「馬鹿。お前の相手はこいつらじゃないだろうが」

「え？ わぁ!？」

首根っこを掴んだミリヤが投げ飛ばす。

「れ、レイガーニさん！ イキナリ止めて下さい！ 手元が狂ったらどうするんですか!？」

刀身を地面に突き刺し、抗議するハル。

そんな抗議を無視して、ミリヤは偃月刀をブンブンと振りまわす。

「千、天城を連れて>リネル・ルーラレイズ<の所に行け。こいつらは私が相手をする」

「ん……」

頷いた千はハルの手を取って走り出した。

「え、あ。ちよ、ちよっと待って下さい！ あ、あの数をレイガー」

ニさん一人でやるんですか?」

「ミリヤなら、問題ない」

「問題ない、って……」

千に手を引かれながら、ハルは背後に目を向けた。

『ガギャー！！』

「よっ、と」

突進してくる>ルーラレイズくを跳んで避けたミリヤはその背に乗り、

「そらっ！」

勢いよく偃月刀を突き立てた。

その刃が深く刺さり、血が吹き出る。

『ギギャー！！』

>ルーラレイズくは暴れるが、致命傷ではない。精々皮膚の少し奥を斬り裂いた程度である。

「でかすぎるんだよ！」

何て言いながら偃月刀を抜きとり、上下左右に暴れる>ルーラレイズくの背から振り落とされないように上手くバランスをとり、その傷口に今度は左手を刺し込み、口を開く。

「「ログスパーク」！」

『ガ、ギャー！！？』

強力な電流を体内に直接流された>ルーラレイズくは頭から尻尾の先がズタズタになり、痙攣が数秒続いた後、ゆっくりと地面に落下し始めた。

「よっ、と」

その背から跳び、空中で次の攻撃に備えるミリヤ。

そんな彼女目掛けて、

『グギャー！！』

一匹の>ルーラレイズくが火球を放ち、

『ガギャー！！』

更にもう一匹、口を大きく開けた>ルーラレイズ<が背後から迫った。

「ふん」

そんな状況でもミリヤが焦ることはなく、偃月刀を武器器にしまい、両手を火球と迫る>ルーラレイズ<に向け、呟く。

「スパークロード」

その両手から雷の数倍も大きな電流が迸り、一方は火球を貫いてから、もう一方は直接、二匹の>ルーラレイズ<の口を通して体内を破壊しつくした。

「馬鹿みたいに口を開けてると、火傷するぞ」

「すっげ……」

ミリヤの豪快な闘いぶりにハルはまたも驚いていた。

「ハル、準備いい？」

「え、あ、はい！」

ミリヤが三匹の>ルーラレイズ<を瞬殺している間に、千とハルは>リネル・ルーラレイズ<と、それを守護する二匹の>ルーラレイズ<のすぐ近くまで接近していた。

『ゲギャー！！』

その二匹の>ルーラレイズ<がハルと千を迎え撃とうと動き出す。「あの二匹は私がやるから……ハルはよそ見しないで真つすぐりネルまで行って」

「は、はい……」

頷くハルを見た千は刀を構えて呟く。

「『氷結閃』……『装填』」

『ギギヤヤー！！』

一匹の>ルーラレイズくが千達の前に立ちはだかり、右腕を思いつきり上から下へ振った。

「ふっ」

「っつ」

スピードを上げた千とハルはその攻撃を難なく避け、

「任せます！」

ハルはスピードを落とさずに直進して>リネル・ルーラレイズくの元に向かい、

「任された」

千は攻撃を仕掛けて来た>ルーラレイズくの懐に入り込み、両刀を腹部に突き刺した。

ブスリ、と両刀身が深く刺し込まれる。

『ガギヤヤー！！』

叫ぶ>ルーラレイズくの腹から血が吹き出るが、ミリヤの時と同じくやはり致命傷には至らない。

いくら千が普通より刀身の長い武器を使っているとはいえ、やはり>ルーラレイズくの身体は大きすぎる。

『グ、ギヤヤー！！』

>ルーラレイズくは距離をとるようなことはせず、そのまま千を押し潰そうと前に倒れ込んだ。自らの物量を使った、肉を斬って骨を断つこの対応は中々理に敵った行動であった。

相手が千のような実力者でなければ、だが。

無表情のまま千は呟く。

「『発』」

ピキッ

と、両刀が突き刺さった傷口が凍り、そこを中心に周囲も凍結し始めた。それも、物凄いスピードで。

『ガッ！ ギ、ギ』

半分ほど凍り漬けになってようやく、自分の身に何が起きたかを理解する。>ルーラレイズ<。

『ガアア！』

火球を放とうと首を膨らませる。

しかし、

『ガッ』

その頃には凍結の侵食も首にまで及んでおり、

「……………おやすみ」

>ルーラレイズ<は首を膨らませ、口を開いた状態のまま凍りついた。

荒野の真ん中に>ルーラレイズ<の氷の彫像が出来るのに、数秒もかからなかった。

「……………」

刀を抜き取り、そのある意味芸術的な氷の彫像を一瞥する千。が、すぐに興味を無くし、無表情のままもう一匹の>ルーラレイズ<に目を向けた。

『グ……………ギイ……………』

その時の千の目は、相対する>ルーラレイズ<が尻込みしてしまっただけでなく、冷酷なものだった。

「暇そうだな……>リネル・ルーラレイズ<」

ハルがそう声をかけると、>リネル・ルーラレイズ<は意味が分かっているのかいないのか、

『ガ、ギイー！！』

空に向けて咆哮し、威嚇するように二本足で立った。

体躯が>ルーラレイズ<より遥かに大きい>リネル・ルーラレイズ<がそうすると、かなりの圧迫感がハルを襲う。

(竜の皆と同じくらいか……久しぶりだと、かなりでかく感じるな)
「でも、でかければいい、ってもんじゃないぞ。特に……俺を相手にする場合は、な」

ハルが魔力剣を片手で軽く構えると、

『ギイー！！』

邪魔な虫を振り払うように、>リネル・ルーラレイズ<が右手を振った。

巨腕から繰り出されるその攻撃は、一度当たっただけで荒野の果てまで飛ばされてしまいそんな威力、勢いである。

「悪いけど」

ハルはその攻撃を勢いよくジャンプして避け、

「会長命令で、さっさとお前を倒すように言われてるんだ」

魔力刀を思いっきり地面に向けて横に振った。

結果、

『グ……ギイー！？』

ハルの魔力刀は地面に深い切れ込みを作り、>リネル・ルーラレイズ<の右腕の半分を両断した。

>リネル・ルーラレイズ<の腕が吹っ飛ぶ中、ハルは魔力刀を構え直して言った。

「さっさと終わらせてもらぞ」

〈第52話〉

『ガギャー!!』

右腕を斬り落とされ、悶え苦しむ>リネル・ルーラレイズ<。
ハルは空中で脚に気を溜め、

(このまま真つ二つだ!)

空歩速で>リネル・ルーラレイズ<の懐まで跳び込んだ。

『グ、ガァー!!』

「はあ!」

ハルが魔力刀を横に振る直前、>リネル・ルーラレイズ<は空に飛び、ハルの魔力刀をギリギリやり過ごした。

「ちっ! 大人しくやられてれば、苦しまなくてすむのに……」

(つて……これ、悪役の言う台詞だよな)

何てことを考え、苦笑しながら地面に着地したハルが視線を上げて見たものは、

『グウウ』

くぐもった声を漏らす>リネル・ルーラレイズ<が首を膨らませている光景だった。

「やっべ」

顔を引き攣らせた直後、

『ギイー!!』

>リネル・ルーラレイズ<はその首に溜めた火球を一気に吐き出した。しかも、大きいのを一発ではなく、直径五メートルほどの火球を無数に、である。

「そんなことも出来るのかよ!」

(ここは「桜舞」で……)

と、そこで>ルーラレイズ<の放った火球が爆発していたことを思い出すハル。

(つてことは、これも爆発するか)

紙一重で攻撃を避ける事の出来る「桜舞」だが、避けた後の爆発までは対処できない。

(だったら……前進あるのみ、だな)

ハルは脚と腕に気を溜め、

「百花繚乱」

降り注ぐ火球の中に跳び込み、縦横無尽に魔力刀を振り抜いた。

その刀身に触れた火球は例外なく真つ二つにされ、爆発した。

「くっ」

その爆風と衝撃波が容赦なくハルを襲うが、攻撃の手は休めない。

(この程度の攻撃、生徒会長と神埼先生のに比べたら……どうってことない！)

「はあああ!!」

魔力刀を強く握り直したハルは「百花繚乱」と空歩速を駆使してその爆発の嵐の中を掻い潜り、

「っ、よし！ 抜けた！」

それから数秒もかからずに無数の火球の中を突破した。無傷、とまではいかないが、軽い火傷程度の傷しか負っていない。

「グギイ！」

首を先程以上に膨らませている>リネル・ルーラレイズくがハルを見て驚きの声を漏らす。

「あれで足止めしてる間にでかいのを食らわすつもりだったのか。思ってたより危ない状況だったんだな」

あの火球の嵐を地上で防いでいたら、恐らくこの一発はハルでは対処できなかった。

「運がいい」

とハルは呟き、右手に持つ魔力刀に意識を集中させた。

半端ではない魔力が圧縮された魔力刀を精製し、>クロプスくとの闘いでかなり体力を消費し、今も無茶な闘いをしているハル。

にも関わらず、

(身体が……軽い)

その心と身体は未だかつてないほど高揚していた。

(何でだろ……)

戸惑いながらも、ハルは笑みを浮かべる。

(今なら……何だって出来る)

『ゲギイー!!』

苦し紛れに火球を放とうとした>リネル・ルーラレイズくが自分より高く跳びあがったハルに向けて口を開いた頃には、

「よし……上出来だ」

ハルの魔力刀は更に長く、鋭くなっていた。

その刀身の長さは、優に>リネル・ルーラレイズくの全長を越す。恐らく、この世界にこれ以上の長さを持つ武器は存在しない。

美しい造形を保つその魔力刀は、内包される魔力にもむらがなく、刀身のどの部分も等しく 絶対の斬れ味 をもっている。

そして、その魔力刀に籠められた魔力を感じ取った>リネル・ルーラレイズくは、

『ギ……ガァー!!』

火球で攻撃をすることもなく、全力で逃げ出した。

リネル級が敵前逃亡など、殆どあり得ないことであるが、>リネル・ルーラレイズくは脇目も振らずにこの場から、ハルから、逃げている。

「……悪いけど」

逃げる>リネル・ルーラレイズくの背中を一瞥してから、ハルはその後を追った。

普段だったら追い付けるはずもないのだが、

「お前を逃がしたら、面倒なことになりそうなんだ」

あるうことか、ハルは逃げることに全ての力を注いでいる>リネル・ルーラレイズくの隣に数瞬もかからずに並んでしまった。

そして、

「だから……ここで楽になってくれ」

そのまま、身体ごと超長刀の魔力刀を一回転させた。

ヒュンー！

『ギッ』

>リネル・ルーラレイズ<の巨大な身体は空中で真つ二つになり、一瞬静止してから地面に落ちた。>ルーラレイズ<の上位種とは思えない、呆気ない最期だった。

「……………」

息絶えた>リネル・ルーラレイズ<と一緒に降下しながら、ハルは思った。

(本当……悪役みたいだなあ)
と。

「終わったか」

ハルが>リネル・ルーラレイズ<を遠くの空で両断したのを見て、里奈は肩の力を抜いた。と、同時にポケットの特別製携帯が鳴る。

『終わりましたね』

「そうだな。そっちもか？」

『はい。もちろん、シエルも皆も無事です。健吾君、凄い頑張りましたから。相変わらず蓮華ちゃんのこと大好きなんですな』

(あいつが頑張ったのは蓮華のためだけじゃないけどな)

「わかった。なら、その場で待機、って健吾に言っておいてくれ」
『了解しました……見ましたけど、天城君やっぱり凄いですね。あんなこと出来るの、多分昔もこれからもあの子だけですよ』

「…………私から言わせれば、まだまだ、だ」

『まあ、会長から見るとそうかもしれませんが』

「それより、彩夏に出発準備をさせておけ。三十分後に出るぞ」
『わかりました。それでは』

「ああ」

通話を切り、ふと里奈は思った。

（最後の天城……あれは、確かに凄かったな）

無数の火球を避けきった後から>リネル・ルーレイズくを両断した時までのハルは、里奈の目から見ても別人のようだった。

異常な魔力が圧縮された魔力刀を精製し、あのリネル級を脅えさせ、一刀のもとにたたっ斬ったハル。しかし、それでも疲労している様子はなかった。

（闘いの連続でテンションが上がった……と言うより、何か『タガ』が外れたみたいだったな。多分、あいつ自身もその理由はわかってないだろうが……ふふ）

ほほ笑み、

（まだまだ楽しませてくれる）

防御壁の内側で遅ればせながら歓喜している騎士団の元に向かった里奈だった。

ハルが>リネル・ルーレイズくを倒してから十五分後、里奈以外の全員がシエルの甲板に集まっていた。

「あ、あ、あ、天城さん！こ、こ、これ使って下さい！」

「？あ、ありがと、蓮華さん」

蓮華からタオルを受け取りながら首を傾げるハル。

（何で蓮華さんこんなに拳動が……）

「……っ！う、うう」

ハルの顔をチラッと見て、すぐに俯く蓮華。

「??？」

ハルは益々首を傾げた。

ちなみに、ハルは気付いていないが、今の蓮華は顔が滅茶苦茶赤い。

(ど、どうしよう…… やっぱり…… 天城さんのこと、まともに見れない！ わ、私天城さんに変なこととしてなかったよね…… してなかった…… よね?)

今現在かなり変に思われているのだが、そんなことには気付かないほど動揺している蓮華だった。

(どっか怪我でもしたのかな？ それとも、鬨の刺激が強すぎたとか……?)

だが、どれもピンとこないことはわかる。

「蓮華さん？」

「は、はい!？」

名前を呼ばれて思わず顔を上げてしまった蓮華。もちろん、顔は真っ赤なまま。

「れ、蓮華さん顔真っ赤！ だ、大丈夫!? 熱あるんじゃない!？」

あまりの顔の赤さに動揺したハルは思わず蓮華の額に手を当てていた。

「へ……… つ！ つ！」

そのハルの行動を数秒かかって理解した蓮華は、

「ち、知恵熱です〜！」

と、訳のわからないことを叫び、そのまま脱兎の如く駆けだして甲板を後にした。

「知恵……熱？」

全く意味が分からずに？を浮かべるハル。

(……元気そうだから大丈夫……か？……一応、健吾さんに)

健吾のいる方に顔を向けたハルの目に映ったものは、

「そうね。あの時の健吾君、結構ヤバかったかわよ」

「そのヤバイ状況を作った張本人が何言ってるんだよ」

楽しそうに談笑するサティと、普段とどこか雰囲気の違い健吾。

そして、

「……………」

その二人を複雑な表情で見つめる、片手に真っ白なタオルを持った彩夏だった。

(……これは……)

他人の色恋には鋭いハルはその光景を一目見ただけで全て理解した。この闘いが始まる前に里奈が言っていた言葉の意味も全て、である。

(つまり……桐野宮先輩は健吾先輩を。健吾先輩はライナ先輩を…

…)

「うわぁ」

思わずそんな声を漏らしてしまうハル。

(これは……確かに厄介だ)

依頼の達成感や疲れがどこかに吹き飛んでしまったのを如実に感じたハル。それほどまでに、桜楼生徒会の状況は衝撃的だった。

(どっちも応援したいけど、それは無理だし……それに、蓮華さんのこともあるし……なんだかなあ)

はぁ、とため息をつくハル。

珍しいことに、この時のハルは何となく予期していた。

自分がこのゴチャゴチャの恋愛模様に近いうちに巻き込まれることになる、と。

〜幕間?〜

「神埼先生」

「ん……風谷か」

顔を上げ、里奈の姿を認めた玲奈は手に持っていた資料を机に置いた。

場所は桜楼学園の教員室。

夕日が差し込む教員室には二人と少しの教員しかいない。

「いつ帰って来たんだ？」

「ついさつきです。他のは帰らせましたが、大丈夫でしたか？」

「ああ。もう時間が時間だしな」

腕時計に目を向けて頷く玲奈。

「そうですね。では、手取り早く依頼報告を」

そう言って、里奈は数枚の用紙玲奈に渡した。

「ルクセール騎士団は、重傷者五十三名・軽傷者三百余名・死者なし。重傷者もいずれも命には別状ありませんでした。私達のほうも天城が軽傷を負っただけで特にこれといった怪我はしませんでした」

「上々の結果だな……っと……これは」

報告書に書かれた>ルーラレイズ<と>リネル・ルーラレイズ<の文字を見て玲奈は手を止めた。

「>ルーラレイズ<と……リネル級も来たのか。最終的に、中々面白い依頼になったな」

「ちなみに、リネルをやったのは天城です」

「へえ……詳しく聞きたい、が……今は時間がないから後で本人にでも聞いておこう」

机に置いていたカップの中身を口に含み、もう一度報告書に目を向ける玲奈。

「>クロボスクの数が増えたのもこいつらのせいか。迷惑な奴らだ」

「『あれ』が近いんでしょうね」

「だろうな……もうすぐ春も終わるし……あいつら、また来るんだろ」

面倒な、と呟いて玲奈は用紙を机に置いた。

「どうするんですか？」

「どうも出来ないことはお前もわかってるだろ？　ただ座して待つだけだ。さて……お前ももう帰っていいぞ。学園長と騎士団の上には私から報告しておく」

「わかりました。失礼します」

頭を下げて職員室を出ようする里奈。が、ふとある事を思い立ち、振り返って口を開いた。

「天城は……『あれ』に参加させるんですか？」

「……させない。そもそも、あいつはまだ一年だ。『あれ』は二年以上が参加することも、わかってるだろ？」

「……そうですね。失礼しました」

里奈はそれ以上何かを言うでもなく、教員室を出た。

「……何だかんだ言って、あいつももう相当天城にのめり込んでるな」

玲奈の呟きが誰かの耳に入ることはなかった。

天楼学園の寮は学園内にあり、殆どの生徒がそこから通っている。千のように、学園の外から通う者はかなり珍しい。

そんな寮も学園と同じくかなり豪華で、高価な名画が所狭しと並べられる廊下や、フカフカのソファアの置かれた五十畳はある談話室、露天風呂、プール、などなど、一流のホテルと遜色ない豪華さである。

「ミリヤ！」

そんな寮の談話室に怒声が響き渡ったのは、時計が八時を差した頃だった。

外はすでに暗く、談話室には風呂上がりの女生徒が学年問わずかなりの数集まっていたが、その全員が会話を止め、その怒声を放った人物と放たれた人物に目を向けた。

「煩いぞ、ソレイユ」

名を呼ばれた天楼学園生徒会副会長のミリヤが雑誌から目を逸らすことなく言うと、その隣に立った長髪を一つの大きな三つ編みにした少女が苛立たしげに声を張り上げた。

「お前、今日桜楼の奴らと『世界機構』の依頼をやりに行っただんなら、どうしてアタシを連れて行かなかった！」

「……連れて行ったらどうしてた？」

「あの桜楼のクソ会長をぶっ飛ばす！」
と、即答する三つ編み少女。

「だからだ。わかりきってることだろう」

こちらもやはり雑誌から目を離さずに答える。

「てめえ」

そのミリヤの態度が三つ編み少女の堪忍袋の緒を切った。

「こつちを……向け！」

三つ編み少女がミリヤの持つ雑誌に右手を向けると、何か強力な力に引っ張られたように雑誌がミリヤの手を離れ、バサッ、と三つ編み少女の右手に収まった。

「はあ……返せ」

ため息をつき、ソファから立ち上がったミリヤがそう言うと、
「嫌だ」

三つ編み少女は笑みを浮かべ、雑誌を上投げて飛ばした。

雑誌は談話室の高い天井まで届き、落下する途中で電灯の一つに引っかかった。

「続きが読みたいなら、あそこまで取りに行けばいい」

「……………はあ」

ミリヤがもう一度深いため息をついた瞬間、

『っー!?!』

談話室にいた、三つ編み少女とミリヤ以外、全員がその場を飛び退き、壁や二階の手すりに張り付いた。

戦闘の英才教育を受けている少女達は一瞬で察したのだ。

二人の 化け物 が戦闘態勢に入ったことを。

「心を落ち着かせるために読んでたんだが……………どうやら、お前をボコボコにして鎮めるしかなかったようだ」

「やれるならやってみろ……………千の金魚のフンが」

ほほ笑み、構えをとる二人はもう相手を ぶっ飛ばす ことしか考えていない。何かキツカケがあれば、すぐに戦闘を始めるだろう。

「二人とも、こんな所で何をするつもりよ!?!」

と、声をかけたのは、その様子を遠巻きに見ていた三年の女生徒だった。

「喧嘩なら余所でやりなさい!」

この女生徒は二人と顔見知りで、それなりに仲が良い。

それでも、

「……………」

女生徒の声は睨みあう二人の耳には届かなかった。

「あの、馬鹿達」

唇を噛む女生徒に、隣で身構える後輩が声を抑えて話かける。

「せ、先輩。このままじゃヤバイですよ」

「ヤバイのはわかってるわよ! 今のあの二人がここで闘ったらこの部屋……………いえ、寮が一瞬で吹き飛ぶわ」

そんなことになったら、どれだけの怪我人が出るか想像も出来ない。

「で、でも……この寮は物理・魔法攻撃の耐性があるんじゃない？」

「内側からの攻撃なんて想定されていないわよ」

「……………」

サーツ、と青ざめる二年の女生徒を横目に見ながら、三年の女生徒はこの談話室にいる他の三年とアイコンタクトをとっていた。

（ここにいる三年は七人か……後輩達じゃ荷が重いし……あの二人を止めるには、あと五人は欲しいところね。）

だが、他の三年が来るのを悠長に待っているわけにはいかなかった。

（仕方ない……私達だけであの馬鹿達を止める）

他の三年を見ると、全員が同じことを考えていたらしく、それぞれゆっくりと戦闘態勢をとっていた。

「……………」

普段は女生徒が楽しく喋っている談話室に異様な空気が流れる。

やがて、三つ編み少女が投げたミリヤの雑誌が電灯から滑り落ち、睨みあう二人の間に落ちた。

直後、

「おおー！！！」

「はぁー！！！」

三つ編み少女とミリヤは本気の拳を相手の顔面向けて放った。
『っー！！』

それからコンマ一秒遅れて、周囲で機を窺っていた三年が飛び出る。

談話室が混乱に包まれるのに、あと一秒もかからないだろう。

とてつとてつとて、

「薄氷絶壁」

落ちていた美声が一瞬の静寂に包まれていた談話室を支配し、すぐ後に、

ガアアン！！

という音が響いた。

「っ！？」

驚愕する三つ編み少女とミリヤが殴ったものは、部屋の中央、二人の間に一瞬にして現れた薄い氷の壁だった。

その氷の壁は向こう側が透けて見えるほど薄いにも関わらず、どこにもヒビ一つ入っていない。

「あ……っ！ そこまでだ！ ミリヤ、ソレイユ！」

飛び出た三年達も思わず動きを止めていたが、すぐに駆けだして三つ編み少女とミリヤの兩人を抑え込んだ。

「い、痛い！ 痛い！ そんな腕を捻るな！」

「離せ、お前達！」

数人の三年生に背後から抑えられては、いくら二人でも抜けだすことは難しかった。

「全く……助かったよ、会長」

三年の一人がそう声をかけたのは、入り口付近の床に二つある愛刀の一つを突き刺した少女、天楼学園の生徒会長御柳千だった

「二人……落ち着いた？」

千が首を傾げながらミリヤと三つ編み少女に尋ねると、

「ああ。千の顔を見たらかなり落ち着いたよ、」

「……ふん。もう興が冷めた」

どちらも素直に頷いた。

「ん」

二人の態度に満足した千が刀を床から抜くと、氷の壁も粉々に碎

け散った。

「もう、離していいよ」

「……大丈夫か？」

「大丈夫」

少し躊躇する三年達だったが、千の前で騒ぎを起こすことはないだろう、と思い二人の拘束を解く。

「それで……何で喧嘩してたの？」

千が腕をさする二人に問いかけると、三つ編み少女がミリヤを睨みながら口を開いた。

「こいつが今日の依頼にアタシを連れて行かなかったからだ」

「だから、お前を連れて行ったらややこしくなるだろうが。特に、今日は」

「アタシに一言もなし、つてのも許せない」

「いや、だから」

と、二人は言い争いを始めた。

「……あ」

それを聞いていた千がポツリと呟く。

「ソレイユ……寂しかったの？」

「なっ!？ ば、馬鹿なこと言うな! そんな訳ないだろう!」

顔を真っ赤にして否定する三つ編み少女。

その動揺ぶりにミリヤがニヤニヤと笑みを浮かべる。

「何だ、だったら素直にそう言えばよかったじゃないか」

「ち、違っつて言っつてんだだろうがぁー!!」

叫ぶ三つ編みの少女。

先程までの緊張が嘘のようなやり取りを繰り返す二人に、周囲の少女達が苦笑する。

場がグダグダになったところで千が口を開いた。

「ソレイユも一緒に連れて行けばよかった」

「いやいや。それはそれで面倒なことになるから……そもそも、何でお前ここにいるんだ? 帰ったんじゃないのか?」

「今日のこと怒られてた」

「……やっぱり会議を無断で休んだのか」

「はあ、とため息をつくミリヤ。」

そこで、ちよつと待て、と二人の会話に三つ編み少女が口を挟んだ。

「もしかして、千も行ったのか？」

「うん」

「……そんなに、ヤバイ依頼だったか？」

「まあ、結果的にはそこそこだったけど、それほどヤバくはなかったぞ」

「それなのに……千が？」

「ん……ああ、そういう事か」

「ほん、とミリヤが手を打った。」

「こいつが今回の依頼に行った理由はごく個人的なものでぞ。お前が考えてるようなものじゃない」

「個人的？」

「そう。天城ハルと一緒に依頼を受けたい、っていうかなり個人的な理由だ」

「天城……ハル？」

聞き慣れない名前に三つ編み少女が首を傾げていると、

「あなた達ー、もう談話室閉めるわよー」

と、エプロン姿の若い寮母が入ってきた。

「つと、もうそんな時間か……まあ、悪かったなソレイユ。次の依頼はお前も誘うから、機嫌戻せ」

「ん……ああ」

「じゃ、また明日な」

「またね」

三つ編み少女は談話室を出る千とミリヤの背を見つめながら、もう一度呟いた。

「天城ハル……か」

〜幕間?〜 (後書き)

ここまで物語に付き合っていたいただき、本当にありがとうございました、す。

作者の文章力どこまで出来るかわかりませんが、これからは語彙を増やして同じような展開が続かないように努力しますので、今後この物語を読んでもらえたらとても嬉しいです。

それでは、次回の更新まで失礼します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3590r/>

～ 竜と世界と少年と～

2011年4月27日02時10分発行